昭和日本語の方言　第1巻

昭和日本語方言の記述

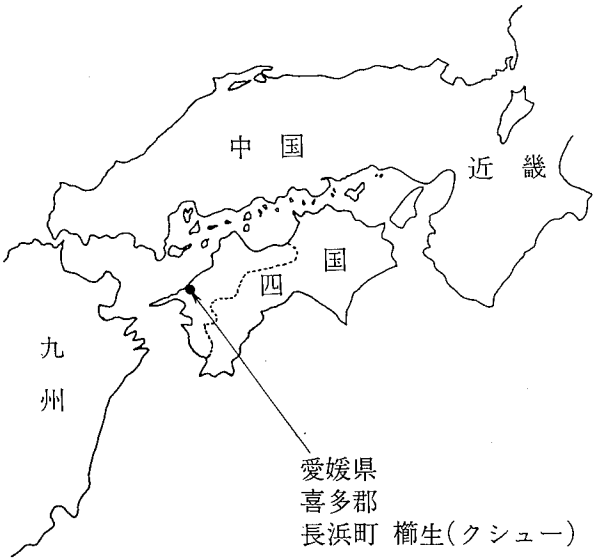
——愛媛県喜多郡長浜町櫛生の方言——

藤　原　与　一

広島大学
図
87756
図書

三　弥　井　書　店

愛媛県　調査地



『昭和日本語の方言』　全二十一巻

刊行の心

一、私

私が一人の方言研究者として出発したのは、昭和三年であった。それから今日まで、世の方言研究はどのような道をたどったか。私はその道にそってどんな生きかたをしてきたか。回想して、感慨にたえぬものがある。

私も、一学徒として、およぶかぎり、この道の開拓につとめてきたつもりである。しかしながら、今日、確乎として言いうることは、なおはなはだすくない。道の遠いのを思うことしきりである。

それにしても、この期に一つのしめくくりをつけることが肝要であることも、またしきりに思われる。方言研究の目的、意義、方法に関して、己がどのように考究につとめてきたかも、みずから確認しておきたいのである。

このとき、三弥井書店主、吉田栄治氏の殊遇があって、私は、所業の一部門につき、大きな整理を成しうることになった。過分の光栄である。吉田氏に深く感謝する。こうして発表しうるものは、全国五十余の重要諸方言を総合的に調査した結果にもとづく「昭和日本語生活」記録である。

二、ソシュールと私

思えば青年書生の当時、方言研究に理論を求める私をつよくとらえたのは、小林英夫先生訳、ソシュール『言語学原論』であった。この書は、まず共時論の沃野を展望せしめて私に方言研究の大道を考えさせ、つぎにその外的言語学の方言観をもって私の思考を混乱させた。橋本進吉先生の研究室に参上して、なぜソシュールは方言研究を外的言語学の中にだけおくのでしょうか

と、愚問をくりかえしたことを思いだす。

ともあれソシュールは、方言研究の二途を私に教えた。共時方言学のみちと、通時方言学のみちと。(言語地理学は通時言語学に属するものであった。)やがて私は、ソシュールにかかわりなく、内的言語学としての方言研究を重視するようになったのである。

この共時論的な方言研究をささえる私の根本観念は、「方言は生活語」という観念である。この観念はやがて私の思想となり、研究理念となった。

生活語は、国語現実とも言いかえることのできるものである。国語現実に、国語の歴史的実体を見る。この意味で、共時観は通時観を含むものとされる。このような共時論を私は高次共時論とする。高次共時論的自覚のもとで、私は、方言研究を、生活語の学、国語現実の学と唱えるようになったのである。

ラングとパロールとは、また、一如一即のものとしてとらえた。私には、ラングの言語学、パロールの言語学という分別はない。ラングとパロールとを分析して言語を考えることはできるけれども、ラングの学を、パロールのとりあつかいを抜きにして成立させることはできない。パロールの言語学を、パロールだけで成立させることはできない。私は、共時論の方向で方言の体系的存在をとらえるのにも、方言という統一体を生活語体系と見、方言生活と見て、文表現本位にこれをとらえてきた。こうしてじっさいに手にしたものは、パロールの文表現、連文表現である。これらについて、その要素を分析してラングを問い、また大きく文のラングを認める。パロール即ラング、ラング即パロールと見る方言研究がここにある。

＜今、言語地理学的研究の方向については、何も言わない。それは場を改めて言うべきことである。＞

三、全国的視野

以上のような共時論的研究を、全日本語現実としての昭和の全国方言状態——そういう統一共時態——に加えるようになった。計画がしだいに盛りあ

がって、いわゆる「全国五十余地点方言精査」の企画が成立した。このような考えかたでの日本語把握が、私の高次共時論的追求だったのである。

これを、頭初、多くの人たちの協力を得て短期間にやりおおせようとした。が、調査上の諸問題に逢着することになって、このことは実現不可能となった。その時、私は、「一人五十要地」というような着想に到達したのである。これの実行の背後には、柳田国男先生のおことばのあったことを、私は今ここに銘記する。先生は、小著『伊予大三島北部方言集』へのご序文で、

> その上に＜藤原は＞この全国方言記録の実現するよりも前から既に私の計画を知り且つ賛成して居る。念を押しては見たことも無いけれども、もしも此計画が不幸にして中絶するようなことがあったら、必ず志を嗣いで再興してくれるのも斯ういふ人であらうとさへ私は期待して居る。

とおっしゃって下さったのである。

四、一人のしごと

十年間を期して始めたしごとは、じつに十九年間におよんだ。（昭和二十五年九月から同四十四年八月までのことである。）このため、作業結果の均質性をきびしく要求する自身の声は多少とも抑えねばならぬことになったが、それにしても、一人の討究者が全部のしごとを一定方針によってしはたしたところには、得がたい均質性が認められもすることだと思う。

今、私には、全調査を完遂したことの喜びがある。一種の安心感がある。今の段階では、かなりはっきりと、昭和日本語の歴史的な方言状態を、心に思いうかべることができる。同時に、研究はいよいよこれからだとも思う。

五、昭和日本語の記録

私は、この調査の全結果を統一的に修録して、昭和日本語の一記録を成就していきたい。私としては、これが、国語史の今日に生きる者としての、国

語研究の責任のはたしかただと考えている。

――国語教育上でも、この統一記録は、一つの重要な拠点となるものであろう。

今後は、別記「刊行編目」の順序にしたがって、逐次、刊行の作業を進めていきたい。

国語を研究せられ、国語を愛される多くのかたがたの、きびしいご教導とあたたかいご鞭韃とを忝くすることができるならば大幸である。

昭和四十六年五月二十日

藤　原　与　一

『昭和日本語の方言』　全二十一巻

刊行編目

第一巻　四国要地方言編　一

愛媛県喜多郡長浜町櫛生の方言

第二巻　四国要地方言編　二

高知県高岡郡浦の内村の方言

徳島県那賀郡平谷村の方言

香川県綾歌郡滝の宮村の方言

第三巻　瀬戸内海要地方言編

山口県熊毛郡祝島の方言

岡山県笠岡市真鍋島の方言

兵庫県淡路島北淡町畑の方言

第四巻　中国要地方言編　一

山口県大津郡通村の方言

広島県山県郡八幡村の方言

岡山県真庭郡二川村の方言

第五巻　中国要地方言編　二

島根県仁多郡馬木村の方言

鳥取県八頭郡旧大江村の方言

第六巻　九州要地方言編　一

大分県東国東郡旧朝来村の方言

宮崎県児湯郡西米良村村所の方言

鹿児島県肝属郡内之浦町の方言

第七巻　九州要地方言編　二

福岡県糸島郡旧桜井村の方言

熊本県阿蘇郡白水村の方言

同　　天草下島大江の方言

第八巻　九州要地方言編　三

佐賀県杵島郡旧須古村の方言

長崎県西彼杵郡亀岳村の方言

同　　五島列島福江島大宝の方言

第九巻　近畿要地方言編　一

兵庫県養父郡旧西谷村の方言

京都府与謝郡世屋村の方言

＊福井県小浜市堅海の方言

第十巻　近畿要地方言編　二

大阪府南河内郡河内村の方言

和歌山県西牟婁郡
中辺路町栗栖川の方言

奈良県吉野郡川上村上多古の方言

第十一巻　近畿要地方言編　三

三重県南牟婁郡相野谷村の方言

同　　鳥羽市国崎町の方言

同　　名張市滝之原の方言

第十二巻　中部要地方言編　一

愛知県渥美郡赤羽根町の方言

＊滋賀県高島郡朽木村の方言

岐阜県郡上郡奥明方村畑佐の方言

第十三巻　中部要地方言編　二

福井県丹生郡織田町織田の方言

石川県石川郡白峰村の方言

同　　羽咋郡富来町の方言

第十四巻　中部要地方言編　三

富山県射水郡下村三箇の方言

新潟県東頸城郡大島村大島の方言

長野県北安曇郡
八坂村宮の尾の方言
＋東筑摩郡朝日村御馬越の方言

第十五巻　中部要地方言編　四

山梨県南巨摩郡
鰍沢町十谷の方言

静岡県榛原郡相良町地頭方の方言

同　賀茂郡南伊豆町入間の方言

第十六巻　関東要地方言編　一

神奈川県秦野市大倉の方言

旧東京市の方言

埼玉県北葛飾郡
幸手町旧幸手の方言

群馬県勢多郡富士見村田島の方言

第十七巻　関東要地方言編　二

千葉県君津郡天羽町山中の方言

栃木県那須郡黒磯町高林の方言

茨城県北茨城市磯原町の方言

第十八巻　奥羽要地方言編　一

福島県耶麻郡
山都町一ノ木本村の方言

山形県上山市狸森の方言

宮城県宮城郡松島町磯崎の方言

第十九巻　奥羽要地方言編　二

岩手県下閉伊郡岩泉町門の方言

秋田県仙北郡
田沢湖町生保内の方言

第二十巻　奥羽要地方言編　三

青森県三戸郡南郷村島守の方言

同　西津軽郡旧木造町の方言

第二十一巻　資料索引

……＊……

調査方法の大様

現地の日常生活の中に早くはいる。

土地の各年層・各地域の中にはいっていく。

ごくうちわの生活面から、会同などの公的な生活面にわたる。

要するに、土地のあらゆる生活場面を求める。

晴雨の中を行き、山野にもあそび、夜分も調査場に出かける。

相手がたの単複・男女・老若の変化を目ざしつつ、調査場面の取得にあたる。

つねに自然の文表現に着目する。

方言文法体系・方言音状況の探査を内面の欲求とする。

日常生活語彙の流露をねらう。

造語法に注意する。

相手を重んじつつ、できるだけ全的に、調査をカード化する。

以上、計画を内に用意した、自然傍受法の調査である。

＜作業日数は約一週間とする。＞

第一巻のはじめに

第一巻では、記述体系の定礎に意を用いることもあって、一地点、愛媛県喜多郡長浜町櫛生（クシュー）の方言の記述をこととした。

（第二巻で、四国の、残る三県三地点の、三方言の比較記述をおこなってみたい。）

五十余地点の調査の最初のしごとが櫛生方言調査であった。かなり前のしごとではあったが、記述して、ほぼ、一小方言の生態を明らかにすることができたかと思う。初期の調査にしては、かなりよく、資料を充足させていたと思いたい。「一事三十例」の趣旨から言えば、いまだしいものであるけれども。

（――‘好例を多くとらえ得ている。’と、みずからほほえみたくなるような調査成果を手にしたいものだと、つくづく思う。）

「五十余地点」の総合調査を実行しはじめた時、恩師 東条 操先生は、五十地点の精査の悲願を成就することを切望する、とおっしゃって下さった。また、

そこから新しい方言学の光明のかがやき出ることを期待する。

ともおっしゃって下さった。旧のご高信を前にして、感恩の念、新たなものがある。第一巻の小冊を、つつしんで先生のご霊前にお供えしたい。

あけくれご教導をたまわる土井忠生先生には、いよいよおさかんに、高いご専門の作業を進めていらっしゃる。ご高庇のもとで、私も、たゆまずしごとをおし進めて、すこしでも先生におよろこびいただけるようになりたいと思う。

校正のことでは、佐々木 峻氏のご援助を得た。記して謝意を表する。

目　次

総　記　P. 15

a ）　櫛生に入る　〃

b ）　櫛生の方言　16

I　発　音　19

a ）　当方言「音声生活」上に見られる特色音節　〃

1．「ニャ」音　20

2．「クヮ」音　〃

3．「イェ」〔je〕音　21

4．「ウォ」〔wo〕音　〃

5．「ツァ」〔tsa〕音　〃

6．鼻にかかる母音——鼻母音——のある音節　22

b ）　当方言「音声生活」上のおもな音変化　24

1．連語音上の音変化　〃

2．一語音上での音節融合　28

3．語音上での音節省略　29

4．語音上での音節添加　33

5．語音上での音節交替　35

b′）　当方言「音声生活」上のおもな音変化　38

——音節の母音の注目されるもの——

1．語音の連音節上での母音の同化融合　39

2．語音上での母音音節省略　41

3．語音上のナ行音音節での母音省略　〃

4．語音上の音節での母音交替　44

b″）　当方言「音声生活」上のおもな音変化　52

——音節の子音の注目されるもの——
1．語音上の音節での子音省略 52
2．語音上の音節での子音添加 53
3．語音上の音節での子音交替 〃
c ） 文アクセント 56
1．高音連続の文アクセント傾向 57
2．きょくたんなあと上げの文アクセント傾向 64
2′．文の末尾だけを特立させる文アクセント傾向 67
3．文の部分でその末尾をきょくたんに上げる文アクセント傾向 68
4．文の部分でその末尾と頭部とを特立させる文アクセント傾向 71
5．文の部分できょくたんなあと下がりを見せる文アクセント傾向 72
6．中国山陽式の文アクセント傾向 74
c′） 語アクセント 76
1．65歳の菊池鶴雄氏の語アクセント 77
1′．65歳の酒井 親氏の語アクセント 81
2．43歳の神内 登氏の語アクセント 84
3．12歳の谷井 司君の語アクセント 89
4．語アクセントと文アクセント 92

Ⅱ 文 法 94
a ） 日々の表現の生活 〃
——文表現の諸相とその表現法——
1．呼びかけの表現 95
2．挨拶の表現 96
3．応答の表現 98

4．説明の表現　100
5．判断の表現　104
6．所懐の表現　109
7．意志の表現　111
8．抗弁の表現　112
9．想像の表現　113
10．問尋の表現　115
11．勧誘の表現　119
12．命令の表現　120
13．勧奨の表現　121
14．依頼の表現　122
15．制止の表現　124
16．感嘆の表現　125
b ）　連文表現とその構造　126
1．反転性の連文で、第二文が、語としては副詞であるもの　127
2．第二文が、「体言＋助詞」でできているもの　〃
3．第二文が2の場合と同様で、しかもこれが、第一文に対して、主部的な役わりを演じるもの　128
4．第二文の形の比較的複雑なもの　〃
5．直流性の連文で、第一文が、「呼びかけ文」という特殊文であるもの　129
6．第一文が、語としては感動詞またはそれに近いものであるもの　130
7．第一文は複雑で、第二文が特殊文であるもの　〃
8．第一文第二文、ともに複雑であるもの　〃
c ）　文構造の成分とその機能　133

1．特定文末部とその機能 134
2．間投部のはたらき 156
3．感声部のはたらき 157
4．提示部のはたらき 159
5．接続部のはたらき 〃
6¹．述部とその機能……（助動詞一般について） 160
6²．述部とその機能……（待遇表現用特定助動詞） 168
6³．述部とその機能……（敬語法動詞について） 171
6⁴．述部とその機能……（動詞連用形尊敬法） 175
6⁵．述部とその機能……（述部の存在態） 178
6⁶．述部とその機能……（述部の進行態） 〃
6⁷．述部とその機能……（余説） 179
7．主部とその機能 181
8．修飾部（その一、動作修飾部）のはたらき 186
9．修飾部（その二、状態修飾部）のはたらき 206
d ） 品　詞 211
1．諸品詞 〃
2．名詞・数詞・代名詞――体言――について 212
3．動詞・形容詞・形容動詞――用言――について 217
4．助詞・助動詞――助辞――について 221
5¹．連体詞・副詞・接続詞・感動詞について 223
5²．間投詞・文末詞について<以上六者、独立詞> 〃

Ⅲ　語　彙 225
a ） 生活一般語彙 226
1．助辞語彙 〃
2．独立詞語彙 〃
2′．副詞語彙 〃

3．名詞語彙　231
4．数詞（→助数詞）語彙　〃
5．代名詞語彙　〃
6．動詞語彙　233
7．形容詞語彙　234
8．形容動詞語彙　235
b ）生業語彙　〃
1．農業語彙　〃
2．漁業語彙　241
3．副業商業語彙　242
c ）衣食住語彙　243
1．住の語彙　〃
2．食の語彙　244
3．衣の語彙　247
d ）家庭族縁語彙　249
1．家庭語彙　〃
2．族縁語彙　251
e ）村落社会語彙　252
1．人間語彙　〃
2．交際語彙　265
3．冠婚葬祭語彙　266
4．年中行事語彙　269
5．公的生活語彙　271
f ）生活環境語彙　272
1．自然環境語彙　〃
2．天文気象暦時語彙　274
3．動植物語彙　275
□ ）造語法総収　276

結　語　278

付　録　関係文献目録　279

索　引　283

総　記

a）櫛生に入る

全国五十余の要地について、一定計画の統一調査をしようとして、最初に選んだのが、愛媛県下の喜多郡櫛生（クシュー）である。

長大な作業を発願しての第一作業では、なんとしても、無事に、所期の目的を達成しなくてはならない。祈るようなここちで、私は櫛生に出むいた。昭和25年9月16日のことである。

待っていてくれたのは、旧友の平井太源（タカモト）君であった。むかし、松山の師範学校で机を並べた親友であり、この時は櫛生小学校の校長であった。私は、彼の下宿、土地っ子の藤本ミツカさんのうちに泊めてもらった。

他地に出むいての要地調査の難作業に無事、成功するがためには、初発の段階としては、ことに親近の地方を選ばなくてはならない。私はまず愛媛県下を考えた。ここからはじめて、四国四県のまとまりを早くものにしてみることも、その後の作業のためによかろうと考えた。

愛媛県下のことは、かなりわかっていた。中の、もっともユニークな一地点におり立ってみたいと考えた。伊予の方言が東予・中予・南予の三地域に見わけられる中で、中予方言域に接する、南予北部の喜多郡地方域の方言は、南予方言中でもやや異色の、注目すべきものである。この方言の中にはいろうと考えた。喜多郡下でも、孤立した海辺農村を選びたい。——郡内も大洲市内外その他のあたりは、土地相互の関係がより複雑だから。調べて櫛生を選んだ。そこには平井君がいた。

喜多郡下のいく人かの識者が、櫛生を選んだことを、その時もその後も、妥当・適切としてくれた。

櫛生は、国鉄の長浜駅から西南9キロのところにある。うしろはやま地で、すこし入りこんだところを中心に集落ができており、見るからにまとまった一農村である。（ただし、そうとうに漁業もおこなわれている。）

すぐ海に面しているけれども、付近の海上に島はなく、時に遠望しうる（双眼鏡で）のは山口県下の島であるという。特立した地点であることが、行ってすぐわかった。

ここに笠つくりの家内副業がある。むかしはさかんだったらしく、

クシューム スメワ　ドコデモ　ワカル。

カサデ　タタイタ　コブガ　アル。

（櫛生むすめはどこでもわかる。笠でたたいたこぶがある。）

“と言われたほどに、笠つくりがさかんであった”という。他隣村にこの副業はない。生活の一特異性が、ここにはあったのだ。

戸数430。村役場があり、小学校があった。今は、長浜町の櫛生である。

b） 櫛生の方言

隔絶性の認められるのが櫛生ではあるけれども、ここのことばが一々変わっているのではない。さきに言う喜多郡地方域の中の櫛生である。当方言も、おのずから、喜多郡地方域の方言の中で、一方言となっている。むかしの藩から言っても、“櫛生・長浜は大洲藩”である。（ちなみに、櫛生の西南隣の出海（イズミ）は、新谷（ニーヤ）藩下だったという。）

櫛生の山うらの豊茂（トヨシゲ）の産、平井君も、“豊茂のことばも櫛生のとあまりちがわぬ。”と言った。じじつそのように私にも思えた。調査期間中、平井君のことばにもつねに注意し、カードにそれらを写しとることもしたのだった。

それにしても、櫛生方言のまとまりはよくて、特性があるらしく、識者は、私の調査成果の全カードを検閲してくれたさいにも、“櫛生言葉”とか、“櫛生特有の言葉”とか、しばしば注記してくれている。（――ただ私は、すぐ

に櫛生特有とは考えないように、用心してきたけれども。）喜多郡地方域の方言の中でも、当地方言が、一個のユニークな方言であることは、認めてよいのかと思う。調査中も、喜多郡経験のもとでそう思ったし、今もそう思う。

櫛生に七つの小字・小集落がある。ややはなれたものもあるけれど、全体が等しく櫛生弁である。記述上、集落別は論じない。

土地人には、“櫛生でも、ミネ（峰）のことばとサトのことばとはちがう。”という人があったが、その差別らしいものをとらえることは容易でなかった。“山うえの方に、方言がむかしのままに残っている。”という人もあった。私はその気づきにも敬意をはらって、発掘にもつとめたが、さしてのことはなかった。上といっても下といっても、歩いて15分20分のことである。

一方、ややはなれている須沢について、“スサワもクシュー（小字名）も同じジャロー。”“同じだ。”と、人々が言ってくれたりもした。

私としては、要するに、旧櫛生村地域で、一体の方言、方言生活を観察し得たつもりである。——（調査の方法については前に述べた。）

調査結果の全カードは、さきにもふれたように、土地の有識者に通検していただいた。そのさい、各カードに、記載方言事象に関して、

一、使用者階層のこと

二、使用頻度のこと

三、そのことばの品位のこと

四、その他

を、略記方式などで注記してもらった。これによって、私のあげ得た資料は、確実に客観化されたわけである。

私は、私の調査カードを、永久保存の良識に訴えたく思う。これは、「全国五十余地点方言」調査の計画頭初からの本願である。（——このために、私は、調査にあたって、記録上、万全の配意につとめてもいる。この委細については、拙著『方言学』の中で述べてみた。）

当方言調査　要記

愛媛県喜多郡長浜町櫛生（クシュー）<戸数 430、人口 2150>の方言

調査　　昭和25年９月16日（土）夕～９月23日（土）朝

<以下の記述は、この時現在のものである>

成果カード数　　1074枚

調査カード検閲者　兵頭　尚氏（ヒサシ）（当時26歳、土地の人、櫛生小学校教師）

ほかに二氏のご援助があった。以下、検閲者を「識者」と呼ぶ。

★昭和47年１月４日（火）　再訪

語アクセント調査

補足調査

にしたがった。

さすがに、村情の推移は、目を見はるものがあった。しかし、藤本ミツカさんの家の屋根はすぐにわかった。残念なことに、老いたミツカさんは、平井君と私とを、容易には思い出してくれなかった。

この再訪時、おせわ下さったのは、谷井 裕さん光恵さん ご夫婦である。

I　発　音

櫛生方言の人たちはどのような発音の生活をしているか。

日々の方言の生活は、音声の生活、発音の生活でもある。土地の方言生活を描き叙べるのに、私はまず発音面からはいっていく。

a）当方言「音声生活」上に見られる特色音節

人々の音声生活は、つねに、あるまとまりを持った音声表現の生活――という「ことばの生活」になっている。が、そのまとまりは、直接の要素に見わけられる。第一には、文表現（センテンス）というまとまりの音声表現要素、音声表現単位が見てとられる。第二には、その文表現の音声相のうちに、通常、二つ以上の小要素が見わけられる。この小要素は、連語形としてとらえられることもあり、一語形としてとらえうることもある。語形をなす音形態を語音と呼ぶことにしよう。人の音声生活、音声表現の生活は、この語音にしたがってこまかに観察することができる。

ものを総体的に見ているだけでは、それの特色を言うことが困難である。もののありさまを正確にとらえようとすれば、いきおい、ものの細部にはいっていく必要がある。音声表現の生活を、文表現本位にとらえたとしても、発音のありさまを言おうとしたら、なお、文表現の音声の細部にはいっていかなくてはならない。けっきょく、私どもは、方言の発音を見ようとすれば、語音の世界に観察の目を向けなくてはならないことになる。

日本語の方言の語音の世界では、観察要素として、一語一語の語音を形成する一音一音が注目される。一音一音は、五十音図やいろは歌に見られる、日本語流の一音一音である。これは、一般に頭子音と尾母音との結合体とも見られ、CVとも表記されて、音節（拍）と呼ばれる。

人は音節本位に語音の形成を意識する。ある音節が異様だと、人は早くもそれに気づき、長い文表現音声の中でも、ただちに異様と思う音節を問題にする。

このようであるので、今、方言の音声生活を描くにあたっても、私は、まず、目だたしい音節を求めようとするのである。当方言下の人々の、方言生活としての音声生活には、語音にしたがって見ていって、どのような特色音節が指摘されるか。

1. 「ニャ」音

子ども同士が、たがいに相手に呼びかけるのに、

○ニャー。ニャー。

ねえ。ねえ。

と言う。猫のようにと、おとなは言う。この発音習慣は比較的新しいか。

2. 「クゥ」音

「ケンクゥシテ」（けんか――喧嘩――して）など、老年層では、時に「クゥ」音を出す。

○マー　ニクゥイジャ　ナー。

まあ二回だな。

など、男子が「クゥ」を言いがちである。識者はこれを下品な発音とはしていない。

中年人の談話では、えびすさまのことをおもしろく語っての、

○チッタ　カエッテ　ユカイシナハラント。

すこしは帰って愉快しなさらないと。

のような言いかたが聞かれた。「ユカイ」とある。

○イッカンメタ　イワン。

一貫目よりは多い。

の「イッカン」など、各年層一般には、「クゥ」ではない「カ」がおこなわ

れている。

当方言で、「クォ」は聞くことができなかった。「クヮ」に対する「グヮ」も聞かれなかったのである。

だいたい、当方言に「クヮ」音節はまれであり、かつ、「シェ」「ジェ」の特殊音節も聞かれない。

3. 「イェ」〔je〕音

○イェー　ガヨー。

いいのよ。

のように、〔je〕音節の発音をすることがある。

○ユーワユーモンノ、……。

言うは言うものの、……。

など、「言う」も、「イウ」ではなくて、ヤ行音の「ユー」である。

4. 「ウォ」〔wo〕音

家屋新築の時の「棟上げ」祝いには、餅がまかれる。はじめに、大きい餅が、東西南北の四方にまかれる。この「四方がため」を「シヲ〔wo〕ガタメ」と言う。この語の時、老人層で、「ウォ」（＝ヲ）の音が出る。

他では、つよい「ウォ」はだいたい出ない。「何々を」という時の「を」は、「サケオ　ノム」「タバコオ　ノム」など、みな、「オ」と発音する。

5. 「ツァ」〔tsa〕音

父おやを言う「オトッツァン」がある。“これが最古”の言いかたで、“むかしはこればかり”だったという。今は「トッツァン」がおもにおこなわれている。ともあれ、これらの言いかたに、「ツァ」〔tsa〕の音がある。

母や祖父母を言う時に「ツァ」を用いることはない。

「コイツ」（「これ」の卑称）や「アイツ」に助詞「は」がつづく時には、「コイツァ」などと、「ツァ」音が出る。このさい、「ツァー」と伸びるこ

とはない。

○アイツァ　ハチモンジャ。

あいつは八文（足らず者）だ。

のように言う。

「ごちそう」のことは「ゴッツォー」と言う。

○ゴッツォーデス　ライナー。

ごちそうですわね。

（方言によっては、「ゴッツォ」がならわしになっていることもある。）

6.　鼻にかかる母音——鼻母音——のある音節

老人の男子が、

○タダソノ　……。

ただその、……。

と話すと、「タダ」の発音が、〔tãda〕と表記したいような発音になる。（〔ã〕は、母音の〔a〕に鼻音のひびきがあることを意味する。）人々には、——どちらかというと年輩の人々に、このような、鼻にかかる鼻母音を持った音節を発音する習慣がいくらかある。上の〔tã〕は、さきの「ニャ」や「ツァ」とはちがって、聞くからに特色の明らかな音節というようなものではない。しかし、〔tã〕式のものは、その微妙な鼻ひびきで、たしかに、独特の効果を見せている。これ式のものはこれで、注意すべき特色音節とされるのである。

「タダ」のように、次の音節がダ行音である場合に、鼻母音の音節が出やすい。つぎの例は、「デ」の前の「ハ」〔ha〕が〔hã〕になっているものである。

○モチマキデ　イチバン　ハンデナ　コトオ　シダノワ、……。

餅まきでいちばんはでなことをしたのは、……。

「兄弟」の意の「オトドイ」は、〔otõdoi〕と発音されている。

つぎに、ガ行音の前での鼻母音、それのある音節が見いだされる。

○スル　シゴトニ　ヨッテ、……。

するしごとによって、……。

これの、「シゴト」の「ゴ」の前の「シ」が、〔ʃi〕と発音されているのである。「ぶらんこ」のことを言うことばも、「スンガリコ」であった。もっともこれを、「スンガリコ」（アクセント不詳）と言う人もあるという。こうなると、小さな「ン」の鼻ひびきは、大きな、ひとりまえの「ン」鼻音になったわけで、もと一音節（一拍）の「スン」も、二拍二音節にかぞえられることになる。ちなみに、「スンガリコ」なり「スンガリコ」なりは、今日、廃語に近いという。

以上のダ行音・ガ行音では、その母音が比較的大きい場合に、その前の音節が鼻母音を見せることになりやすいようであろうか。

さて、鼻母音を持った音節の、その鼻母音から「ン」音が分立独立したものなら、つぎのような例がある。

○オトーフ　ウレンノンデショー。

おとうふは売れないんでしょう？

「〜ので」が「ノンデ」となっている。おそらく、「デ」の前の「ノ」が、「ノン」〔nõ〕であったのが、やがて「ン」を大きくして、「ノン」となったのであろう。

「もぐらもち」のことを言う「オンゴロ」にも、「ゴ」の前に、問題の「ン」が認められるかと思う。

「方向も見ンズニ」とあるのにも、同じく、問題の「ン」を認めることができよう。この場合は、ザ行音の「ズ」の前で「ン」が大きくなったか。祖父のことを言うものに「ジンジ」がある。祖母についても「バンバ」「クソバンバ」の言いかたができている。バ行音の前でも、鼻母音の発音はおこりうることである。

○ニンゲノ　テンカンボシ

人間のテンカン干し（天日の直射にさらすこと、さらされること）の「テンカンボシ」というのにも、注意すべきものがあるか。——鼻母音関係のものが認められるのかどうかわからないけれども、参考例として、これをあげる。

ついでながら、「コンマイ　トキホド」（こまい時ほど）とか、「カンナラズヤ」（かならずや）とかの言いかたにも、「ン」のしぜんな成立が認められる。――下に「マ」〔ma〕や「ナ」〔na〕がある。

b）当方言「音声生活」上のおもな音変化

語音にしたがって観察していって、当方言上では、どのような音変化が見られるか。

音変化の結果でも、そこそこにやはり音節（拍）上の特色が認められる。

そこに、音声生活上の特色音節があるとすることができる。が、上のaでは、ものとして本来そのように特殊的である音節をとりあげた。ここでは、音変化の結果として注目されるものを見ようとするのである。

1.　連語音上の音変化

はじめに、あいならぶ二つまたは三つ以上の語音――連語音――のうえにおきている、音節相互上の音変化をとりあげる。

〜とは＞タ

当方言では、「何々とは」と、助詞の「と」「は」が重用される時に、両者を融合させて「タ」と発音する。

○クツモ　サンゾクタ　ユーマイ。

靴も三足よりは多いだろう。

この「タ」が人々に常用されて例外がない。したがってこれがよく調査者の耳につく。文中では、「タ」と短く発音されるのがつねである。文末では、

○スモター。

すもうとは？

などと、長呼形になる。

〜のは＞ナー

○ユーハンガ　スムナー　ジキ　ヨ。

夕飯がすむのはすぐだよ。

助詞「の」「は」の融合の時は、文中でも、「ナー」と、長呼形になる。

〜には>ニャ

助詞の「に」と「は」との重用では「ニャ」「ニャー」の音ができている。

○ソーリョーニャ　オヤン　オル。

総領にはおやがいる。

代名詞＋は>拗音

「には」が「ニャ」になれば、これは拗音と呼ばれる。ねじれたような音との感じが先だっての命名であろう。拗音の名は古いけれども、人々のこの音感に立ってものを考える気もちは、今もつよい。代名詞、「これ」や「それ」に関して、「コリャ」「ソリャ」と言ったりしていることも、これらがきわめて日常的なことばづかいでもあるだけに、いよいよ、人々の拗音感覚をつよめていよう。

当方言で、「コレ」と助詞「は」とを融合させては、

○コリャ　フトリスギルヤラ　シレン。

これはふとりすぎるかもしれない。

などと言っている。「ソレは」は「ソリャ」、「アレは」は「アリャ」になる。

○ソリャ　ヨー　ゴザイマシツロ。

それはようございましたでしょう。

○アリャ　アメスギタンデス　ライ。

あれは雨が多すぎたんですよ。　（作物のこと）

「ワシ（自称）＋は」は「ワシャ」と言っている。

○ワシャ　コノ　ハエヌキデス　ライ。

わたしはこの土地のはえぬきですよ。

以上、どの場合にも、連音節融合同化の結果が、長呼形にはならない点が注意される。

動詞＋は>拗音

○行こうと思っても　ヨー　イキャー　セズ、……。

行こうと思ってもよう行きはせず、……。

「行きは」が「イキャー」になっている。

○タベリャ　シマスガ　ノー。

たべはしますがね。

これでは、動詞「タベル」と「は」との融合が見られる。それにしては、「リャ」拗音節のできかたが異様である。「タビャー」（たべ＋は）ではないので、ここには、「タベレは」を想像することができようか。ことによると、「行きャー」の「キャ」音などへの類推で、「タベ」に「リャ」をむぞうさに付けることがあったかもしれない。

助動詞「ね」＋ば＞ニャ

○ススマサニャ　ナラン　アタマガ　ススマン。

進ませなくちゃならないあたまが進まない。

○キサヤ　セニャー　ヨカロー。

来さえせねばよかろう。

こうして、さまざまの場合に、拗音節があらわれる。音声生活上では、それらの拗音節が一連一体になって、拗音の聞こえの効果を大にしている。

なんと……＞ナンチャ

当方言にきわだつ一特色に、「ナンチャ」の言いかたがある。たとえば、

○ムカシノ　ヒトワ　ナンチャ　シランノジャ　モン。

昔の人はなんにも知らないんだもの。

などという。また、

○ナンチャ　ゴター　アリマセン　ワイ。

これといったことはありませんよ。

のような言いかたもしている。この「ナンチャ」は、定かにはわからないけれども、いくつかの語音の連なったものに、はなはだしい融合の音変化のおこってできたものと思われる。できた結果では、また、「チャ」の拗音節が耳だたしい。当方言音声生活での拗音群は、きわだたしいこの「チャ」にひきいられるありさまであるかのようにも、見て見られぬことはない。

非拗音の、はなはだしい音節融合

連語音上の音変化で、拗音節はひきおこさないけれども、なお、音節融合のはなはだしさを示すものがある。

○ニネングライワ　カンマイ　ゼー。

二年ぐらいはかまうまいよ。

では、「カマウマイ」が「カンマイ」になっている。

文末詞関係の音節融合

「ゾ」という文末詞（文末の訴えことば）がある。これがその前の「〜ます」の「す」と融合する。

○イットキ　オイテ　ハエルノモ　アリマッ　ソー。

いっときおいてはえるのもありますよ。

二音節融合の結果の「ソ」音がつよくひびく。——これはこれとして、文末詞の効果を呈する。「ソ」音になった方が、いくらか軽い感じをひきおこす。

文末詞は、文法上では遊離孤立の成分になるものであるけれども、一文の表現が一つづきの音声形態をとる時、一連の音相そのもののうえでは、こうして、文末詞に関しても、前後関係による音節相互の融合がおきている。

○オジャマ　シマス　ライ。

おじゃましますわね。

これでは、「しマスル」と、文末詞「ワイ」との間に、「ル」と「ワ」との融合がおこっていて、「〜マス　ライ」ができている。

○スワッタラ　ミエマセナイ。

すわったら見えませんよ。

これでは、「見えませヌ」と、文末詞「ワイ」との間に、「ヌ」と「ワ」との融合がおこっていて、「〜セナイ」ができている。（文表現上では、「ライ」の場合は、その前が「マス」なので、「ライ」が遊離成分としてひびきやすい。人もまたこれを区分して受けとりがちである。「ナイ」の場合は、これがあってはじめて、否定の表現が完結するので、「ナイ」が遊離成分としてひびくこと、受けとられることはない。）

2.　一語音上での音節融合

「年寄り」という一語音では、つぎのような音変化ができている。

○トッショリワ　……。

年寄りは……。

「トショリ」とも言う。

○バカシテ　トショリワ　イケン　モンジャ　ワイ。

ばかなことをして、年寄りはどうもつまらないものですよ。

「とし」の「シ」と「より」の「ヨ」からなら、「ショ」ができて当然であるが、単純な「トショリ」の方が、やや特異とされるものになっている。

つぎに、祭事の「牛鬼」（うしおに）（P.270参照）のことは、

○ウショーニン

と言っている。

「おえびすさま」は、

○オエブッサマ

である。

「オリャーキナ」ということばがある。「居り飽きな」からきたものといい、居って飽きのくること、いやらしいことを言うものという。主として女がこのことばをつかうそうである。この語も音節融合の例とされる。

形容詞「はずかしい」を「て」につづけては、

○ナニサマ　ハズカシューテ。

なにしろはずかしくて。

などと、「ハズカシュー」と言っている。「はずかしく」＞「はずかしう」からすれば、ここにも二音節融合の「シュー」音が見られることになる。

○オシューテ　ヤスム　キニ　ナラン。

惜しくて、休む気になれない。

とも言う。「オーキュー　ゴザイマス」などとも言う。一般に、形容詞の連用形は、この種の融合音をとるようである。

3.　語音上での音節省略

一語の語音のうえで、音節の省略されているものがある。このような音変化も、音声生活の中で、特異な聞こえの効果を発揮する。

省略は、「変化」との言いかたに合わせて言えば、脱落と言うことができる。人はしぜんに脱落させているのでもある。

連音節の融合のさいも、「シヨ」>「ショ」(〔ʃijo〕>〔ʃo〕) などと、二音節の一音節化がおこりもする。これも、聞こえのうえでは、すぐに音節省略と受けとられるものである。が、今は、語音上で単純に音節が脱落しているものを問題にする。

促音節省略

はじめに、促音節——という一拍——の単純に脱落している事実、他から見ればそう見られる事実をとりあげる。当方言の人々と会話していると、人人が、「言ったって」を「ユータテ」としきりに言うのにすぐ気づく。たとえば、

○ユータテ　イナカノ　モノワ　ナー。

言ったって、いなかの者はね。

などと、よく言っている。

○コイ　ユータテ　ヨー　イカン。

来いと言ったってよう行かない。

のようにも言う。「タテ」が、「タッテ」との対比において注意される。あるいは、「〜たトテ」の「ト」が単純に省略されたのでもあるか。しかし、その証跡をとらえることは、いま、できない。ともあれ「〜タテ」が慣用されており、

○ヤッタテ　……。

やったって……。

○ナンボ　シケタテ、……。

いくらしけたって、……。

○ドガイ　ヒタテ　……。

どんなにしたって……。

○ミタテ　シランノデス。

見たって知らないんです。

などと、諸動詞にわたって、「〜タテ」の言いかたがおこっている。「ユータテ」は「ユタテ」ともなっている。

○ナンボ　フサクジャ　ユタテ、……。

いくら不作だといったって、……。

この例の場合などは、「ユタテ」に「言う」の意味がうすれており、「ユタテ」全体が接続助詞風のはたらきをしている。じつは、上の最初の例の、文冒頭の「ユータテ」も、もはやこれ全体が、接続詞風のはたらきをしているともとれる。

このように、「〜タテ」は、用法のはばも広く、よくおこなわれており、老若男女の各階層にこれが見られ、要するに、外見上の促音節省略が、ここにさかんなありさまである。「タテ」は、すでに単純に一体化している。つぎのようにもつかわれている。

○カトータテ　カマンノジャ　ガノー。

かたくったってかまわないんだがね。

関連してであるが、「行って」「行った」も、当方言では、

○イテ　コイ。

行ってこい。

○イタトコロガ、ナンジャッタワイ、……。

行ったところが、あれだったよ、……。

のように、「イテ」「イタ」と言っている。促音節一拍の省略がここに聞かれる。

「持つ」に関しても、

○タコワ　モテカイデモ　エーガ、……。

たこ（章魚）は持っていかなくてもいいが、……。

のように言っている。

「もちっと」は、「モチート」でもなくて「モチト」である。

○モチトラシー　カンガエノ　人が　……。

もうすこしましな考えの人が……。

「切って」などを「キテ」と言うことはない。

母音音節の省略

母音だけで成る音節を省略したものがあり、この種のものが、音声生活上で、耳だたしいひびきかたをする。

第一にあげたいものに、「オヨブ」（及ぶ）の「オ」を落とした言いかたがある。

○カネ　タタクニャ　ヨバン　ト。

かねをたたくにはおよばない（かねをたたくことはいらない）よ。

○イラン　コトー　ユーニャー　ヨバン。

よけいなことを言うにはおよばない。

打消形がみな「ヨバン」と発音されている。「およぶ」の語を用いる表現法がすでに特異であるが、その発音が、このようにきょくたんな語頭音節省略であるのは、なおのこと、他からの聞き手に、省略の異様さを感ぜしめる。「どうどうするに　ヨブ　カイ。」（どうどうする必要はないよ。）など、「ヨブ」もふつうにつかわれている。

「……　ヨブ　カイ。」とともに注意されるのが「カモ　カイ。」である。方言上では「かまう」が「カモウ」となっているが、その「カモウ」の「ウ」を省略している。

○ヒノラ

家のおもて　＜物を干すような所を言うという。＞

この一語は、「日の浦」の合成語であると、土地の識者は言う。ともかくその言にしたがうとすれば、この合成過程についても、「ウラ」の語頭の、単純母音音節の脱落を認めることができる。

以上の例では、「オ」〔o〕や「ウ」〔u〕の母音音節の脱落しているの

が注目される。

○コンドワ　コレ　コナニ　シテ　……。

こんどはこれをこんなにして……。

の「コナニ」では、前身として、「コンナニ」よりも「コナイニ」が考えられるかと思う。四国方言では、中国方言・九州方言でとともに、「コンナニ」「ソンナニ」「アンナニ」を言うことがまずない。すくなくとも、これらは土地の通常語ではない。四国方言では、「コナイニ」「ソナイニ」「アナイニ」や「コガイニ」「ソガイニ」「アガイニ」を言う。上の例の「コナニ」も、「コナイニ」からのものととれば、ここには「イ」〔i〕母音音節の省略が認められることになる。

どのような母音音節が省略されやすいか。ものに限りがあることのように思われる。落ちる母音音節の位置についても、限定があろう。

○ハブン　キッテ　……。

半分切って……。

この「ハブン」では、漢字二字の漢字ことば（漢語）の、第一字末の「ン」音が落ちている。母音音節にならぶ「ン」音節についても、このような省略事例が見られる。

ラ行音節省略　「ハ」音省略

○ヤッパ　カラダワ　きたえた方が　ゲンキン　ナリマス　ナー。

やっぱりからだはきたえた方が元気になりますな。

これでは、「リ」の省略が見られる。

○チヤハルサン、イモノツベ　ヤンナン　カ。　<アクセント失>

「イモノツベ」は、さつまいものしりのことである。これや、むいた皮などを、牛の飼料にする。「チヤハル」さん（家の主婦の名）のうちへ、親類の子どもが「イモノツベ」をもらいに来て、上のように言った。「ヤンナン」に該当するものは「ヤンナハラン」（やりナサラん）、または「ヤンナラン」である。後者からすれば、「ヤンナン」は「ラ」略とされる。

「ヤンナハラン」からすれば、「ヤンナン」には、「ハ」の省略も認めら

れる。

○シテ　ヤンナイ　ヤ。

　　しておくれね。

の例でも、「ヤンナイ」のところに、「やりナハイ」からの「ハ」略が見られる。（当方言では、助動詞「なさる」は、「ナハル」形を通常とする。）

はなはだしい音節省略

○アトデ　ジキニ　モンテ　トー。

　　あとでじきにもどってってよ。

のような「モンて」は、「モドッて」からきたものであろう。ここでは、〔modot:e〕＞〔monte〕について、単純に音節省略を言うことはできないけれども、できた〔monte〕には〔do〕が聞こえないので、その点で、明らかな音節省略の聞こえが耳にひびく。

○ゴアンシンデ　ゴザンス　ライ。

　　ご安心でございますわね。

この、「ゴザイマス」からの「ゴザンス」についても、音節省略に近い聞こえが指摘される。

4.　語音上での音節添加

○ノンダリ　キータリ　……。

　　飲んだり着たり……。

などと、当方言では、「着（キ）ー」の言いかたをしている。「長音」節という一拍一音節の添加である。「着た」は「キータ」となる。土地人も、「キタ」と言ったら「来た」で、「キータ」は「着た」か「聞いた」かであると言う。まことに、土地では、「着る」に関する「キータ」「キーテ」がよくおこなわれている。一音節の語幹の動詞「着る」に、このようなことがある。名詞の一音節語には、一般に、長呼のことがすくない。さて動詞にも、一音節語幹の「寝る」下一段活用動詞には、「ネーテ」などの言いかたがないのである。ひとり、「着る」動詞にだけ、いわゆる長呼の習慣ができているので、

これは特色視せられる。子どもたちも、

○ハンチャ　キータ。

はんちゃ（はおりの一種）を着た。

などと言っているのである。

なお、「ひどい」を言う形容動詞「ガイナ」を、

○ガーイナ　ビョーキワ　シマヘナンダ　ゼー。

ひどい病気はしませんでしたよ。

のようにもつかっている。「ガイナ」の「ガ」に、長音の音節一拍を添えている。上の例文の場合、これはかならずしも特別の強調表現ではなかったのである。

つぎに、促音の音節一拍の添加がある。

○オットロシ　ヤ。……。

○オットロシ　ヤ。……。

まあまあ、これはおどろいた。……。

この言いかたも、当方言で慣用されている。「オットロシ　ヤ。」は、特定第一文になるものである。（かならず、第二文が次下にくる。）したがって、「オットロシ　ヤ。」は感動表現用の特定句（文）として、かなり機械化してもおり、「まあなんと」といったような、感動詞相当のものともなろうとしている。このような「オットロシ　ヤ。」では、「オッ」のところの促音節添加が、もはやかなり単純なこととして認められもするのである。

「どこも」を「ドッコモ」、「よほど」を「ヨッポド」と言うのも、今は促音節添加とされる。

最後に、「イ」音節添加の例をあげることができる。

○ヘッチバーイ　ヒトル。

まちがいばかりしてる。

「何々ばかり」の「バー」を、「バーイ」と言っている。特異なことではあるが、これはあまり目だっていない。使用頻度にもよることか。

5.　語音上での音節交替

ここでは、語音内部での音節の入れかわり――転倒――を見るのではなく、その語音の外から来た音節と、その語音の一音節とが交替したと、言えば言えるものを見る。

音節交替の見かたは、結果論的な見かたである。その語音に即応して言えば、当の音節が他の音節と交替したということは、当の音節が他の音節に変化したということである。その音変化を、今、音節本位にとりあつかってことの特にはっきりするものについて、かりに交替と見るのである。

「リ」が「ン」に変化した、「リ」が「ン」と交替した、と見うるものがある。――その「ン」音節になっているところが、すぐに人の注意をひくのである。

○ヨンデ　ヤンナイ。

読んでおくれな。

「やリナイ」が「ヤンナイ」になっている。

○……　シヨンナル。

……してらっしゃる。

「しヨリナル」という「しヨリ」（しおり）の、進行態の言いかたが、「シヨン」になっている。

○アノ　ヒトワ　ヨー　シットンナハル　ナー。

あの人はよく知ってらっしゃるねえ。

「知っトリ」が「シットン」になっている。

○カミサマ　モドンナハッタ。

神さまがお帰りになった。

「モドリ」が「モドン」になっている。

○ハヨ　オハマンナサイ。

早くおはいりなさい。

「オハマリ」が「オハマン」になっている。諸例を見てわかるように、「ナ」音の前の「リ」が、すべて「ン」になる。「おりナハル」も「オンナハル」

であり、「やりなさった」も「ヤンナッタ」である。こうなると、「ン」音のひびきはぬきんでたものになる。それはまさに、そこへ「ン」音が来たとも感じられるありさまである。

○センセガ　ソレ　シンナハランヨーナ　コッテ　イケル　カイ。

先生がそれを知ってらっしゃらないようなことでどうしますか。

の、「シリナハラン」が「シン〜」となったものなどになると、ことに、「ン」の効果が耳だたしい。「知り」は「シン」となって、外来者には異様にも感じられる。

「ナ」の前の「レ」も「ン」になることがある。たとえば、

○オハギ　ヨバンナハイ。

おはぎをいただきなさい。

と言う。「ヨバレナハイ」が「ヨバンナハイ」になっている。ここの「レ」が「ン」になっているのはやはり耳だたしい。

「ナ」の前の「ル」もまた「ン」になることがある。たとえば、

○……　ヨメニ　トンナ。

……よめにとるな。

と言う。「トルナ」が「トンナ」になっている。

以上はラ行音一類の「ン」転化であったが、もう一つ、注目すべき「ン」音転化（——と仮定しうるもの）がある。当方言では、文表現構造の主部を示す格助詞「が」相当のものが、多く「ン」になっている。たとえば、たこ（章魚）がいたことを言うのには、

○タコン　オッタ。

と言う。土地人も、これは「たこがおった。」というのであると思っている。「座がきまらない」ことを言うのには、人々が、「ザン　……」と言う。

○先生、アッチエ　イテ　モラワニャ　ザン　キマリマセン。

先生、あちらへ行っていただかなくては座がきまりません。

のとおりである。格助詞の内在、または格助詞意識という点では、「ン」のところに、たしかに「が」を想像しうる。この想定にしたがえば、上の「ン」

は、可能態としての「が」がこのように転化したものと、言って言えないことはない。ともかく、ここには、現実態としての「ン」音が、共通語法上の「ガ」を類想せしめつつひびいているのである。結果としては、これが、さきの「ン」音化のいきおいとその聞こえとを、増強するものになっている。以下になお、主部表示に当たる格助詞「が」にちなむ「ン」の例をかかげてみよう。

○フロン　ワイタケン　イリン　キナイ　ヤー。

ふろがわいたから、いりにきなさいよお。

○ランプーン　ヒーン　キエタ。

ランプの火が消えた。

○ヒン　ナイ。

火がない。

○キョーワ　サカナン　ナカッタ。

きょうは魚がなかった。

同じく、格助詞の「ン」化とすればしうるものに、つぎの場合がある。

○タネン　シラナンダ。

たねを知らなかった。

「を」格のところが「ン」になっている。ただし土地の識者は、“「ン」は発音しないと思う。”と、私の調査カードに注してくれた。「タネー、シラナンダ」と言うという。私はたしかに、人が、話しのたねを知らなかったことを言うのに、この言いかたをしたのを聞いた。

つぎに、文末の訴えことば（文末詞）の「ナー」が「ナン」ともなっている。

○ドコイ　イトッタラ　ナン。

どこへ行ってたの？

「ノー」が「ノン」ともなっている。

○イフーナ　ヤツデ　ノン。

異風な（“すねくれた”）やつでねえ。

これらは、長音の音節の「ン」音化と見ることができようか。

上述のものは、みな「ン」を見せる点で共通する。かれこれあい応じて、当方言上では、「ン」化音が目だつ。

加えて、やはり音節交替としうるものに、「レ」の「長音」節化がある。「コレ」を「コー」と言った例があった。

○トーチャン、オビ、コー。

とうちゃん、おび、これ。

もっともこれは、三歳の女児がその父おやに言ったものであった。

つぎの「アオビ」では、「ワ」＞「オ」の変化交替が見られる。

○アオビトワ　カエラレマセン。

ほかの何がおいしいといっても、あわびとはかえられません。

b′）当方言「音声生活」上のおもな音変化

——音節の母音の注目されるもの——

音変化とは言うけれども、それは、人が、音声生活上で、音をそのように変化させているのである。変化の諸相は、人々の音声生活の発音行動の実践の結果にほかならない。この意味で、私どもは、方言の生活の描写叙述にあたり、よく、音変化の事実を、生活の場にもとづけて受けとるところがなくてはならない。

人々の音声生活の実践の中では、音節（CV）がつねに基本の分節単位とされている。それゆえ、以上でも、音節本位の見かたをしてきた。音節そのままを単位に見て解しうる音変化を、逐次とらえてきた。——そうすることによって、当方言での音声生活の個性と特色とを明らかにしてきたのである。

音変化の事実をさらに微視する時、音節内の、特に母音について、音変化の指摘されるものが多いのを知る。この領域も、方言上でのだいじな音変化領域となっている。ここを、以下に、整理してとらえる。

もとより、音節の母音は、音節あっての母音であって、母音変化も、音節変化の概念のもとで観察され把握されるべきものである。母音単独でも音節を成すことからも知られるとおり、CVの音節も、その —V（尾母音）が音節の本体を成す。（C—はCVの装飾者・修飾者にほかならない。）母音変化も、「そうした過程をとる音節変化」と解されるのである。

1.　語音の連音節上での母音の同化融合

たとえば「アカイ」〔akai〕という語音では、「カイ」とならぶ二音節（二拍）、この連音節上に、母音の〔a〕と〔i〕とのならぶのが見られる。このようなのを連母音と言う。本来は〔ka〕というCV形の音節と、〔i〕という—V形の音節とがならんでいるものであるけれども、そこに、連母音の事実がある。一般には、この連母音のうえに、同化融合がおこりがちである。

方言によっては、連母音上の同化融合がいちじるしい。が、当方言では、この種のことがほとんどない。「アカイ」〔akai〕にしても、〔ai〕はこのままに発音される。つまり、「カ」「イ」の各音節が、それぞれにそのすがたを保って動かないのである。

四国地方は、中国地方とはちがって、いったいに、連母音上の変化を示さない。（——このことは、アクセントの傾向と関連があると、私は考えている。早く、「国語方音に於ける〔ai〕連母音の諸相」<『国文学攷』第三巻第二輯　昭和十三年二月>の中で、この考えを述べた。）当地もまた、その例外ではない。

むし器の「せいろ」も、当方言では「セイ$\overline{ロ}$」〔sei$\overline{ro}$〕と言う。〔ei〕の連母音をくっきりとこのままに発音する。「先生」も、「センセイ」〔sensei〕と発音して、

○$\overline{コノ　センセイワ}$　ナニ$\overline{ダイガク}$デスリャー。

この先生はなに大学の人ですか。

などと言う。「たいてい」も〔taitei〕である。

○オンナ$\overline{ハ}$ル。タイ$\overline{テイ}$。

いなさる。たいてい。　　（返事）

これは学童の発言であった。総じて、〔ei〕>〔e:〕は、当方言におこっていない。このことは、特筆されるべきだと考えるのである。

さて、

○デキマスロー　カ。

できますでしょうか。

などの「ロー」の言いかたが、当方言におこっている。起原上、「ロー」には「らう」を想定することができよう。それにしたがえば、ここには、〔au〕>〔o:〕の連母音相互同化が認められることになる。

○ワシ、モータンデス　ライ。

わたしが村うちをまわってふれたんですよ。

初老の男子などが、こんなことを言う。

○ワシガ　ムラジュー　モーテデモ　ヨッテ　モラウ。　<アクセント失>

わたしが村じゅうをまわってふれてでも、みんなに寄ってもらう。

などとも言う。「モーテ」「モータ」は、「舞う」を思わせるものであろう。「ワタシモ　ダイブ　マイマシタケン　ナー。」（わたしもだいぶん方々をあるき――世間し――ましたからね。）のような言いかたもある。「マウ」〔mau〕にしたがって考えれば、「モー」〔mo:〕とあるのは、やはり〔au〕>〔o:〕の同化を思わせるものである。しかし、この種の事例は特例とされる。一般には、当方言に〔au〕>〔o:〕の通用はない。

○ナンニモ　タローター　クニジャケネ。

何もみなたりた国だから。　　（米国のこと）

の「タローター」にしても、「たらう」の用法などはなくて、ひとり「タローター」の慣用形がおこなわれているのである。ここになまなましい連母音同化を認めることはできない。（識者は、「タローター」を、特別な老人のつかうことば、まれなことばとしている。）

以上のような、特例的な一、二の事象の見られるほかは、当方言に、連音節上での母音の同化融合の、見るべきものはない。当方言の人たちは、他の

四国地方の人々と同じく、通例、いわゆる連母音を変化させる音声生活はしていない。

「モーテ」「モータ」などは、語としては、連語である。これらの「モー」〔mo:〕の成立には、連語関係も一要因となっていることであろう。その点では、上のことは、二語音上でのこととともされる。連語音上で、他に、〔au〕>〔o:〕の現実が見られるかというのに、何も見られないありさまなのである。

2.　語音上での母音音節省略

「センセイ」が、時に「センセ」とも言われる。

○コノ　センセワ　何々サン　カナ。

この先生は何々さんなのですか。

「イ」〔i〕が落とされている。

○アー　コワー。

ああくるしい！　（コワイ＝“きつい”）

○アー　シンドー。

ああなんぎだ！

と、人々がよく言う、この「コワー」「シンドー」は、「こわい」「しんどい」（辛労い）を「こわ！」「しんど！」と、感動して短く言い切ったものを、やがて長呼するようになったものか。その、言い切ったところには、特殊ながら、「イ」〔i〕音節の省略が認められる。

3.　語音上のナ行音音節での母音省略

○コトンナル　モンジャ　ナイト　ワシャー　オモートル。

今ごろの若い者は、役にたつものじゃないとわたしは思ってる。

老人の男子たちが、こう言って、世をなげく。この言いかたのはじめを見ると、「ことに」が「コトン」とある。ここに「ニ」〔ni〕>「ン」〔n〕の変化が見られる。「こと・に　なる」という前後関係のうえでおこっているこ

とではあるけれども、結果では、「ことニ」の「ニ」は、要するに「ン」になっている。この種のことは現に多い。「ゲンキニ　ナル」も「ゲンキン　ナル」となっている。「ナル」の「ナ」〔na〕の前で、「ニ」〔ni〕が「ン」〔n〕になる。〔ni〕音節の〔i〕母音がしぜんに省略されているのである。

○アン　ノー。

あのね。

小男などもよく言うこの言いかたでは、「アノ」の「ノ」の「ン」化が見られる。この場合は、等しくナ行音の「ノ」〔no〕の前で、「アノ」の「ノ」〔no〕が、〔o〕母音を落としている。

○シヤクション　ネキジャ　ケン。

市役所のそばだから。

この場合は、等しくナ行音の「ネ」（「ネキ」は、そば・近くの意）の前で、「市役所ノ」の「ノ」〔no〕が、〔o〕母音を落としている。

前後関係によるとはいえ、こうして「ン」がだんだんにできている。こうなってまた、――（他の場合の「ン」化、「リ」＞「ン」などと関連して）、当音声生活上の「ン」化が、いよいよ注目されるわけである。

「ン」化事実はなおさらに認められる。

○ゼニン　ナイニ、……。

ぜにのないのに、……。

この例でも、「ナ」の前に「ン」が出ている。さて、この「ゼニン」が、「ゼニノ」からきたものとすれば、「ノ」が「ン」化したと、また言えることになる。上文は、「ぜにが　ないのに、……。」の意ととってもよかろう。そこであらためて問題とすべきなのが、さきの36頁の、格助詞「が」に関する「ン」音である。あの「ン」は、格助詞「ノ」〔no〕の母音省略によってできたものではないか。

○フロン　ワイタケン　イリン　キナイ　ヤー。　（P.37）

の、文中の従属節「フロン　ワイタケン」の中の「フロン」のごときは、上

の「ゼニン　ナイニ」の「ゼニン」(「ぜにノ」と、人にも説かれたもの）と、まったく地位・形態を等しくする。「フロン」は「ふろノ」ととってもよかろう。

九州地方では、主部表示の格助詞「ノ」〔no〕が、広くかつさかんにつかわれている。愛媛県西部は、九州に関連する現象を示すことがすくなくない。ことによると、問題の格助詞の場合も、愛媛県西部に位する当方言が、他の諸事象においてと同様に、九州につながる色彩を示して、「ノ」格助詞をよく保有したのかもしれない。それが、「ノ」〔no〕>「ン」の転化を見せているわけか。

「ン」化の母音脱落事実を上来3の項で指摘したのは、すべてナ行音の前におこっているのが認められるものであった。ここになお、ナ行音の前ではないけれども、そこに「ノ」の「ン」化がおこっているのが一、二、見いだされる。

○ツーチガ　アッタ　ンカイ。

通知があったのかい。

これでは、「カイ」の「カ」の前で、「ノ」が「ン」になっている。

○スグ　イクケン　マチヨレ　ヤー。

すぐ行くから待ってろよ。

では、「ケン」が問題になる。当方言で、「ケン」を「ケネ」とも言う。識者は、「ケネ」について、「老」「稀」「中」（中等程度の品位との意）と、調査カードに注してくれた。もし、この「ケネ」に対せしめて「ケン」を見るとすれば、ここに「ネ」>「ン」の転化を認めうることになる。「ケネ」とともには、「ケニ」を考えることができる。「ケン」とあって、「ン」をとったものは、おそらく、転化結果にほかなるまい。当方言に、「キン」もある。

○イケンキン、……。

いけないから、……。

などと言う。

4.　語音上の音節での母音交替

音声生活上、人々は、語音上の音節を動かし、その尾母音を変えている。つまり、そういう、特定の音節変化をひきおこしている。

この母音変化は、できたものを見れば、在った母音と他の母音との交替である。

人は、しぜんのうちに、音節の母音の入れかえをして、そこに、方言の特異な音感、――「音節のねいろ」をひびかせがちである。

事象を順に見ていこう。

〔i〕＞〔a〕

人々は、音節の〔i〕母音を動かして、〔a〕母音にしている。とりあげるべき例は、「日にち」の「ヒナチ」である。土地人は一般に、この言いかたをする。「何々の　ヒナチが　きたら」などと言う。「ヒニチ」は〔çinitʃi〕なので、人はしぜんに、中の音節の母音を変えたか。それにしても、〔ni〕の〔i〕母音を〔a〕母音に変えたのは、大きな動かしかたである。「ヒナチ」となって、「ナ」はまさに異様にひびく。外来者は、ここに土地弁の大きな特色を認めざるを得ない。

四国一般では、「日にち」を「ヒナチ」と言うことが、まずないありさまである。ひとり、伊予南部のうちにこれがある。（当方言にはかぎらないで、かなり広くにこれがおこなわれている。が、当櫛生の所属する喜多郡と、西隣の西宇和郡とに、これがよくおこなわれていようか。）松山市方面で人に会っても、「ヒナチ」と言う人があったら、それは南予の人である。

広島で私が経験したことであるが、三十歳台の紳士で、共通語によっての会話の自由な人があった。外国生活の経験もあって、ことばは洗練されていた。会同の席で、しばしばその人の発言を聞いたのであるが、どうしてもその人の生国がつかめなかった。（多くの場合、人の話しぶりで、どの地方の方言に育った人であるかがおよそわかるのであるが。）私はしばらくその人の生国探索をあきらめていた。ところがある日のこと、その人が、ふと「ヒナチ」と言ったのである。そうか！と気づいて、笑いながら、“伊予南部の

ご出身ですか？”と聞くと、“西宇和郡です。”と答えてくれた。持ちまえの方言の、おおかたのことばがかげをひそめても、なお、最後的にも顔を出すのが「ヒナチ」であった。私はこの時、土地ことばの「ヒナチ」の根づよさをしみじみと思った。

当地方の人々は、なぜか、〔ｉ〕を大広母音の〔ａ〕にまで持っていって、「日にち」という平凡なことばを、異様なものとしてひびかせている。（〔CiCiCi〕の、〔ｉ〕母音の三つのならびからすれば、中の母音を異化するにあたり、〔ａ〕母音に持っていくのは、あってよい、しぜんの手つづきのようにも思われる。それにしても、できた〔ａ〕は、〔ｉ〕に対する対比的特徴が大きい。）

「ヒナチ」が、特色の大きい、かくべつの転化語であるせいでであろうか。土地人も、これを「ヒニチ」に直しにくがっているようである。

つぎの一語も、〔ｉ〕＞〔ａ〕を示すものか。

○ヤッシャラ

“「スンヤリ」（すんなり）”

「ヤッシャラ」とともに、「ヤッシャリ」を言っている。（後者の方をより多く言うか。）

○ヤッシャリ　ヒトル（してる）。

○スンヤリ　ヒトル。

＜ともに女の細がたを言う。＞

などと言う。「ヤッシャリ」＞「ヤッシャラ」とすれば、これは、〔jaʃ:aɾi〕＞〔jaʃ:aɾa〕の転であって、三音節の母音が〔ａ〕にそろうことになる。

あるいは、そろっている母音を異化させ（――それは狭母音上でのことであったが）、あるいは、異なっている母音を同化させる（――これは広母音でのことであった）。みな、方言の音声生活上での、人々のしぜんの好みである。そこでできた「ヒナチ」「ヤッシャラ」が、両者あい応じて、特異な〔ａ〕母音効果を示す。

○シャッテニワ　オヨビマセン。

“ぜひともとは言いません。”

○シャッテジャ　ナカッテモ　カマワン　ゼー。

“しいてでなくても”かまわないよ。

○シャッテ　買えと　言う。

○男の　ない　うちでは、シャッテ　こんなに　笠を　作って　暮らさねばなりません。

などの言いかたがある。これらに出ている「シャッテ」は何か。土地っ子は、「ぜひともとは」とか「しいて」とか説明している。「しいて」などを思う時は、「シャッテ」の「シャ」〔Ca〕とあるのが、上述の点から注目される。

〔i〕＞〔o〕

「支那」を「ショナ」と言う人があった。

〔i〕＞〔e〕

「かに」は「ガネ」と言う。「かび」は「カベ」と言う。

○タネゴ

これは「谷川」のことであるという。

「えびす」は「エベス」となっている。(〔bi〕>〔be〕)

「何々だから」の「から」にあたる「ケニ」が「ケネ」になったとしたら、ここにも〔i〕>〔e〕が見いだされることになる。

「できる」の「デケル」にも、「キ」＞「ケ」（〔i〕>〔e〕）が見られる。

○ヨー　オムカエガ　デケマシタ　ナー。

よくまあお迎えができましたね。

○コレ　ドコマリ　デケマセン　ゼ。

“このとうもろこしは、どこまりではできませんゼ。”

これらの「デケ」を見ていると、「デケ」〔deke〕の〔ke〕（〔e〕母音化）が、「デ」〔de〕からの同化によったらしいものであることがわかる。

「そば、近く」を言う「ネキ」は、「ネキ」形が慣用であるが、他方言を参照すれば、「ネキ」と「ニキ」とをひきくらべることができる。ここにも

「ネ」と「ニ」との関係がある。

〔i〕＞〔u〕

「にわ」（家の中の土間のこと）を「ヌア」「ヌワ」と言うのは、もっとも単純に〔ni〕＞〔nu〕の変化を見せたものである。

○ヌア　ハケ。

にわを掃け。

などと言う。

○スルビ

まっち

老人が一般に、この言いかたをしている。識者は、“多くつかわれ”ると言う。「スリビ」と言う人も、老年層にかなりある。「スリビ」から見れば、「スルビ」は、「リ」＞「ル」、〔i〕＞〔u〕の母音転化を示したものと言える。しかし、「スル」には、「まっちを　する」との民間語源があったかもしれない。

○サブシューテ　シヨー　ナイヨーニ　ナル。

さびしくてしようがないようになる。

この「サブ」とあるのにも、「ビ」＞「ブ」（〔i〕＞〔u〕）の変化が見られる。この「ブ」も、つぎの「シュ」〔Cu〕からの逆影響――逆行同化――によって成ったものか。

○何々しヌクイ

この「ニクイ」＞「ヌクイ」の「ニ」〔i〕＞「ヌ」〔u〕の変化は、「何々し」の「シ」から言えば、「シ」の〔i〕母音とのならびをさけたものであり、かつは、次下の「ク」〔Cu〕に同調したものであると見られよう。

以上は、〔i〕母音の他母音への変化（他母音との交替）であった。つぎには、同じく狭母音の〔u〕母音を見る。これがまた、他の母音といろいろに交替している。

〔u〕＞〔a〕

○ワシラガ　シランノジャケン　シラマイ　ゾイ。

わたしらが知らないんだから知るまいよ。

「知ルマイ」とも言う。これに対しては、「シラマイ」は、「ル」＞「ラ」——〔u〕＞〔a〕——の変化を示している。「マ」の前の「ル」は、しぜんに「ラ」になりやすかったろう。

〔u〕＞〔o〕

「てんぷら」は「テンポ〔o〕ラ」と言う。「プ」〔u〕＞「ポ」〔o〕は、やはり「ラ」の広母音に引かれてのことであろう。

〔u〕＞〔e〕

「すくない」は「スケナイ」と言われている。老人層に一般的な言いかたである。「すくない」の「スク」は、〔u〕母音の重複をやめて、「スケ〔e〕」とされている。できた「ケ」は、母音が、つぎの「ナ」の〔a〕母音により近いものになっている。

〔u〕＞〔i〕

「むしろ」は「ミシロ」と言う。ここに「ム」＞「ミ」（〔u〕＞〔i〕）の転化がある。このさいは、はじめの〔u〕母音が、つぎの「シ」音節の〔i〕母音に同化している。

○ワカイシ

若い衆、青年たち

「シュー」は「シュ」になり「シ」になっている。

○マツリワ、ヨバレシデス　ワイ。

祭りは、よばれ衆（招かれ客）ですよ。

この例の「ヨバレシ」という名詞にも、「シュ」の「シ」化が見られる。「シュ」は〔ʃu〕で、ただに聞こえのうえの“拗音”であるが、じじつ、私どもの耳には、その拗音効果がつよくひびく。「シ」〔ʃi〕は、〔ʃu〕と似た音節構造のものにほかならないけれども、直音効果にひびく。このさいの母音変化、〔u〕と〔i〕との交替は、影響するところが大きい。

○シリガルーニ　ヨー　イコイタリ、……。

しりがるくよくうごいたり、……。

ここには、「ウゴク」の「イゴク」が見える。

つぎには、〔e〕母音の、他母音への転化が見られる。

〔e〕＞〔a〕

すべて、〔a〕母音に転じているのは、母音変化中、特に注目せられる。〔e〕＞〔a〕の転も、聞こえのうえに大きな変動をもたらし、注目される。

○ウエサヤ　アガッタラ　エー　ワイ。

上へさえあがったらいいよ。

この「サヤ」（さえ）が、各年層にわたって、ふつうにおこなわれている。耳だたしいことばである。

○カザアテ

風あて

のようなのは、「カゼ」〔e〕が「カザ」〔a〕とあっても、さほど特異にはひびかない。変動が、つぎの「アテ」との連接の関係でおこった、しぜんのものだからだろう。

〔e〕＞〔o〕

○キノ

「きね」の「ネ」が「ノ」になっている。ただし、老人層においてのことである。

〔e〕＞〔u〕

このような変化もある。

○ナガイキ　スニャ　イケン。コリャ。

長いきをしなくちゃいけない。これは。

と言う。「スニャ」（せねば）も、老年者の言いかたのようである。

〔e〕＞〔i〕

これは、

○テマガイ　　テマガイモドシ

手まがえ　　手まがえもどし

のような場合だと、まず機械的な音変化と言えよう。

○ムネ　ハッチ、……。

胸を張って、……。

○ヤッチ　ヒチ、……。

やってして、……。　＜ただしこれは西南隣方言での例＞

のように、「て」の「チ」音を見せるとなると、この場合の〔e〕＞〔i〕は、まことに耳だたしいものになる。ちなみに、この種の変化事象は、東九州についで、このように四国西部に（南部の土佐にも）見いだされるものである。櫛生方言下では、漁家集落部で、「て」の「チ」を言うという。

つぎには、〔o〕母音に関して、他母音との交替が見られる。

〔o〕＞〔a〕

○チョードナ　ヒニ　雨が　降りましたケン、……。

ちょうどの日に雨が降りましたから、……。

成人一般に、このような言いかたをよくしている。「ノ」が「ナ」になっている。「ナ」〔na〕は直前の「ド」〔do〕から言えば異化であるが、つぎの「ヒ」〔çi〕に対しては、「ナ」〔na〕はどういう地位に立つものであろうか。「ヒ」と「ナ」との対応は顕著である。それだけに、この「ナ」音がくっきりとひびく。

○ナンゾ　オモシライ　コト　ヒテ　アソボー　ヤー。

何かおもしろいことをして遊ぼうよお。

の場合にしても、「オモシライ」の「ラ」がよくひびく。

○オハヤ　ゴザイマス。

お早うございます。

というのもある。

○ヒョカット　来て、……。

ひょこっと来て、……。

この場合も、「ヒョコット」からすると、〔o〕＞〔a〕の転化が注目される。「ヒョカーット」などとも言う。

〔o〕＞〔u〕

「こよみ」を「コユミ」と言う。「あんのじょう」は「アンヌジュー」である。後者では、「ノ〔o〕」「ジョ〔o〕」の、ならぶ二つの〔o〕を、ともに〔u〕にしている。(識者は、ただし、“「アンノジョー」をよく聞く。”と、調査カードに注してくれた。)

○ダルゴエモ　カローテ　行きヨッタ。

だるごえ（下肥）も背おって行ってた。

この「カローテ」についても、一方で、「カルーテ」のよくおこなわれているのを見ることができる。

つぎには、〔a〕母音の他母音への変化がある。

〔a〕＞〔o〕

「たばこ」を「タボコ」と言う。(「タブコ」とも言う。)「笑う」の「ワロウ」もある。

○コレ　ヒトノ　ワロウ　ジブンニ　ウエタンジャガ　ノー。

これは人が笑う時分に植えたんだけどねえ。

「ワラウ」〔warau〕＞「ワロウ」〔warou〕での、「ラ」の〔a〕母音の〔o〕母音化は、しぜんの移行であったか。〔o〕に置き替えられた結果を見ると、ここに〔a〕—〔o〕—〔u〕のきれいなならび、——美しい変化相ができている。

○オルケ。

これは牛を追ってあるかせる時のことばで、「左に行け。」との意のものであると言う。追いづなを利かせつつ、こう言うのである。(「右に行け。」は「ヒヨセ。」であるという。)牛をあやつるための独特のことばなので、特別視すべきものかもしれないが、識者が調査カードに注してくれたように、「オルケ。」が「あるけ！」であるならば、ここにも、〔a〕＞〔o〕の転化が見られることになる。「あるけ」の「オルケ」は、ずいぶん変わっていよう。

○これは　何々と　ニコセテ　オリャ　セン　カ　ト　思うんですが。

これは何々と似ていやしないかと思うんですが。

これの「ニコセテ」が「似て」の意であるとすると、「ニコ」の「コ」は何であろうか。「ニコセトル」(似ている) などとも言う。「コ」がもし、「似カセテ」などの「カ」に関係のあるものでもあったらと、思われぬでもないが、定かでない。

さて、〔a〕母音に関しては、変化・交替が、〔o〕になる場合の一種しか見られない。ついで〔o〕母音に関しても、他母音と交替する種別が、多くは見られない。どちらかというと、狭い母音に関して、問題の交替事実が、多く見わたされる。これも当然の傾向であろう。ともあれ、母音交替に関しても、方言上、特色の分野が見わけられる。

b″) 当方言「音声生活」上のおもな音変化

——音節の子音の注目されるもの——

音変化の事実を微視する時は、また、音節内の、特に子音について、音変化の指摘されるものが多いのを知る。この領域もまた、方言上で、だいじな音変化領域となっている。以下、この方面を見よう。

このさいもまた、子音変化を、音節での子音変化、つまりは音節変化と見る。音節は、そのように、CV 形態の頭子音装飾を変容させるのである。

1. 語音上の音節での子音省略

○ドガイゾ　ワケニャ　イカン。

どのようにか分けなくちゃいけない。

この「ドガイ」の「イ」〔i〕は「ニ」〔ni〕からきている。〔n〕省略である。「ミー　キトル」(見に来てる) の「ミー」では、「ミニ」の「ニ」〔ni〕の頭子音省略を認めることができようか。

○ソーデ　ゴアンス　ナー。

そうでございますねえ。

この「ゴアンス」には、「ザ」〔za〕の頭子音の省略が見られる。

○犬が　わんわん　ホエマール。

犬がわんわんほえまわる。

この「ホエマール」という成語のうえには、「マワル」の「マール」、すなわち〔wa〕の頭子音省略が認められる。

「ヒューキダケ」（火吹き竹）は、「ヒュー」に、「ヒフ」二音節の融合を示すものでもあるけれども、「フ」〔Fu〕に即して言えば、その頭子音が省略されたものである。

2.　語音上の音節での子音添加

「オリヤキナ」（前掲の「オリャーキナ」<P.28>に同じ）が「居り飽きな」からのものとすれば、ここには「ア」〔a〕>「ヤ」〔ja〕の子音添加があるとされる。「イヤゲテ　クル」（言いあげてくる）の「イヤゲ」にも、「ア」>「ヤ」が見られる。「オワン」（お庵）には「ア」>「ワ」〔wa〕が見られる。

「アサブラ」とは、例の麻うらのぞうりのことである。「ウ〔u〕ラ」が「ブ〔bu〕ラ」になっている。〔b〕子音の添加がある。

3.　語音上の音節での子音交替

子音交替はさきの母音交替に対応する事実である。人々は、方言上、しぜんのうちに音節の頭子音の入れかえをしており、この音節装定部の変更によって、さまざまの、特色ある音節をひびかせている。

〔s〕>〔h〕

はじめに特色視されるのがこの変化・交替である。「だれだれさん」の「サ〔sa〕ン」は「ハ〔ha〕ン」と言う。「よめさん」も、多く「ヨメハン」と言う。「だんなさん」も「ダンナハン」であり、「ばあさん」も「バーハン」である。

○サイトーハン、イキナハラン　カ。

斎藤さん、行きなさいませんか。

このように、「ナサル」は多く「ナハル」になっている。「どうどうしナハイ　ヤ。」と、「ナハイ」命令形どめを「ヤ」で受ける言いかたは、この地の、しぜんでおちつきのよい言いかたになっている。

「セ」〔se〕はまた「ヘ」〔he〕と発音される。（当方言に、「セ」に近い〔ʃe〕、「ゼ」に近い〔ʒe〕はない。P.21参照。）

○ドッコイモ　イキナハラ　ヘン　ノトー。

どこへも行きなさりはしないんだってよ。

などと言う。「〜ません」も「〜マヘン」である。「なぜ」は「ナヘ」とある。――「ナセ」からきている。

「ソ」〔so〕もまた「ホ」〔ho〕と発音される。「ホジャケン」（それだから）、「ホイタラ」（そうしたら）などと言う。

〔〔ʃ〕＞〔ç〕〕

ついで注目されるのがこの変化である。「どうどうシて、シた」などの「シ」〔ʃi〕は「ヒ」〔çi〕になる。

○ジャマヒタ　ノー。

じゃましたね。

など。文頭では、「シタラ（したら）　……。」などと、「シ」のままのこともある。

「シ」＞「ヒ」はさかんで、「あした」も「アヒタ」と言っている。「どうしても」は「ドヒテモ」、「すてる」も「す」の「シ」を「ヒ」にして「ヒテル」と言っている。「聞かせ（シ）て」にあたるものも「キカヒテ」である。

○ナヒタ　モンナラ。

なした（どうした）ものなんだ。

などとも言っている。要するに「シ」の「ヒ」化はつよい。「シ」が出そうな所にはたいてい「ヒ」が出ていると言ってもよい。

これと、前の〔s〕＞〔h〕とでは、子音そのものはちがっているけれども、音節本位に、サ行音・ハ行音ということを言えば、前後両者は、一系の、

同じ聞こえの、「サ行音」>「ハ行音」の変化・交替である。これの、当音声生活上での勢力は大きい。

つぎにきわだたしく思われるのは、いわゆる濁音化である。

濁音化

「おへつ言い」のことを「キンダマガキ」と言う。このさい、「カキ」の「カ」は「ガ」〔ga〕になっている。これは、「カ」〔ka〕から言えば、〔k〕>〔g〕の子音交替である。（当方言には、〔ŋ〕はおこなわれていない。）

動物の「かに」も、「ガニ」「ガネ」と言う。

「ク」>「グ」もある。「クツイ」を「グツイ」とも言っている。

櫛生の地名で、濁音化の注目されるものには、

○原保＝ワラボ　　「ホ」〔ho〕>「ボ」〔bo〕

○常水＝ジョーズイ　　「ス」〔su〕>「ズ」〔zu〕

がある。

ちなみに、「むず（づ）かしい」は「ムツカシー」と言う。

最後に、語頭濁音の例をあげておこう。

○ドバ　　かえる

○ガンギ　　石段

○ガセイナ　　精を出してよくはたらく<形容動詞>

○ギスイ　　きつい（性向に言う。）

以下、略。

〔〔z〕>〔d〕〕

○オドガマシー

“オゾガマシー（ひじょうにぞっとする）”

○ホデリダス

“ほぜり出す”（ほじくり出す）

「シンダイ」（信頼）、これは〔ɾ〕>〔d〕の例である。結果は等しく〔d〕子音になっているので、これもここに合わせて見ることができる。

〔m〕＞〔b〕

「漏る」が「ボル」になっている。

「寒い」は「サブイ」である。

一方、「さびしい」の「サムシー」もある。

〔b〕＞〔z〕

「つぶ」を「ツズ」と言う。

〔s〕＞〔ʃ〕

「菜園」は「シャエン」と言われてもいる。

一方、「しゅろ」は「シロ」である。（このさいは、「シ」も〔ʃi〕で、子音に変化はないけれども、聞こえのうえでは、いわゆる直音化の変化が感ぜられて、これは、「サ」＞「シャ」とは反対風の事例とされる。）

〔z〕＞〔ʒ〕

「ぞうり」は「ジョーリ」と言われる。

「しろしょうぞく」は「シロショージョク」である。

〔t〕＞〔s〕

「きたない」は「キサナイ」と言う。

ついでながら、

○オー、チンチン　ナッタ。

　　おお、きれいになった。

と、おとな（おもに老年者）が、幼い者に言う。「きれい」の「キ」に関する「チ」は、まさに東北地方などのなまりにあるもののとおりである。

C）文アクセント

文でのアクセント——文のイントネーション——。

音声言語の表現生活は、個々のセンテンス（文）の音声形を表現していく生活であり、この個々の「文表現」音声が、それとしてのアクセント、現場

のアクセントを持つ。これを文アクセントと言う。イントネーション(抑揚)という術語は、一文に関しても二文以上から成る連文（文章）に関しても用いることができ、用いてまた適当である。それゆえ私は、イントネーションの語を、「文」の抑揚――高低アクセント――に限って用いることはしない。アクセントの概念も、また、広汎に活用することのできるものであろう。ところで語に関しては、早くからアクセントという用語が固定している。そこで、語に対応する文に関しても、同律に、アクセントの語を用いれば、文・語、両者での、アクセント事実の関係・対応が、つねにはっきりと理解せられることになると、私は考えるのである。

文の音声表現は、最後的に、その抑揚でしめくくられる。文アクセントが、文の音声表現のきめ手になる。――表現者の表現心意も、まさに、その内面の動きのままが、文アクセントの音抑揚にうち出される。文アクセントは、人間の生活感情をさながらに表示するものとも言える。方言生活を音声面から見ていくにあたっては、この、生活感情曲線ともいうべき文アクセントを重視しなくてはならない。

当方言の人たちは、文アクセントに、どのような傾向・特色――習慣上の特色――を見せているであろうか。これに関しては、かつて、「方言『文アクセント』の研究――愛媛県喜多郡櫛生村の方言生活のアクセントについて――」(『国語アクセント論叢』<昭和二十六年>）を発表したことがある。

1.　高音連続の文アクセント傾向

当方言アクセント生活での文アクセントでは、第一に、高音を連続させる傾向が、当方言「文アクセント」の習慣上の大きい特色としてとりあげられる。（全部の調査カードを通観して、文アクセントのありさまを、高低アクセント波形を吟味しつつ類別すると、いくらかのおもな傾向、類型が帰納され、それらにまた、勢力の大小が認められる。）当方言調査の全期間を通じて、たえず私がつよく印象づけられたのは、人々が、とかく高音の調子を長くつづけるということであった。

高音をつづける文アクセント傾向は、近畿内でも見られる。目だたない形ででは、山陽地方にもこれが存している。が、当方言（のみならず、当櫛生の所属する喜多郡の地方）では、異常とも言えるほどに、以下のように、高音連続の調子が慣用されている。人々は、この調子を、生活表現のための不可欠のものとしているようである。

○ランプーン　ヒーン　キエタ。

ランプの火が消えた。

まず、このような、一文全高の言いかたをする。これは、近畿にも、習慣としては、ほとんどないことであろう。

○オリヤケ　ヤ。

“いやらしや。”　（友だち同士）

○ボイ　ヨ　ボイ　ヨ。

（小さい牛をこう言ってなでてやる。）

などと言う。

○コーチョセンセ、ドコニ　オンナハル。

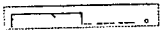
校長先生、どこにいらっしゃる？

○ヨーコチャン、オロシー　ヤ。

陽子ちゃん、せなかの子をおおろしよ。

このように呼びかける場合は、その呼びかけことばが、時には独立の一文になり、時にはこのように「文の部分」になる。部分にはなっても、独立性がつよいので、今は、上のような場合の、呼びかけことばの全高アクセントも、一文全高の類に入れて見ることができる。

一文全高の文アクセントに関連して、一語全高の語アクセントが注意される。「チンチマンマ」（米のめし）「チンチバッポ」（米のもち）「カンナベ」（“小さなニュームのなべ”）「ハンボ」（めしおけ）「バーハン」（ばあさん）「ギョーサンナ」（おおげさな）「ヤンチャナ」（めんどうな）「ボイナ」（牛のおとなしいこと）などがある。



つぎに、このような、文の最初からのいく音節かがつづけて高音に発音されるものがある。一文全高ではないけれども、初から長く高音がつづくので、この場合にも、一文全高形式に近い効果がもたらされる。

○セイシンガ　アワンニャ、コイツァ　ツゲン　カイ。

精神が合わなくちゃ、これはつげないよ。　（つぎ木）

○ソーリョーニャ　オヤン　オル。

総領にはおやがいる。

○チンオ　ダイブ　トルノガ　ホコリデ　アルガジャケン。

賃をたくさんとるのが誇りなんだから。

などと、この傾向はつよい。

助詞の「は」まで高音なのが一つ注目される。

○トッショリワ　大きいのを　コートリマスケン。

年寄りは大きいのを買っていますから。

○キョーワ　サカナン　ナカッタ。

きょうは魚がなかった。

「も」の場合も注目される。

○ダルゴエモ　カローテ　行きヨッタ。

だるごえ（下肥）も背おって行ってた。

「でも」の場合は、

○キリモノデモ　イッテニ　キメテ、……。

きものでも一手にきめて、……。

となっているが、これも上のと同類のものとされる。

○エー　フー　ヒトリマスケン。

こんないいかっこうをしてますから。

これは、「いい風を」の「を」を内在させたものである。とかく、助詞のところまでが、問題の箇所になる。

その他、動詞関係のものの場合でも、

○ナイ　ユータラ　ムテツ　ナイデス　ライ。

ないといったら、ちっともないんですよ。

○ノンダリ　キータリ　……。

飲んだり着たり……。

○ヤッテ　ヤンナサイ　ヤ。

して下さいよ。

○ボリマスケン、……。

漏りますから、……。

のようである。

○ナンゾ　イーサイシタラ、……。

何かを言いさえしたら、……。

○カマイマセナイ。イズレデスケン。

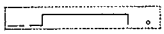
かまいませんよ。いずれですから。

○マコト　ヨ。

ほんとよね。

などと、表現のいろいろの場合に、自由自在にこの形式をとる。

関連の語アクセントを見れば、「イカノシタ」(床の下)「オイキル」(行きなさる)「メンドシー」("「ゲサクナ」のよそいきことば。ずぼんのぼたんをはずしていたりするのに言う。")「シンドイ」("坂みちなどをあがるのに、つかれて息ぐるしい、など")などがある。



つぎに、このような、――(文のはじめの方はともかくとして)――、一音節か二音節ほどを低くしたあとで、高音を最後まで連続させるタイプがある。この傾向もじつにつよく、人は表現法の差別をこえて、この調子をよく出している。

○コリャ　フトリスギルヤラ　シレン。

これはふとりすぎるかもしれない。

というような調子である。高音連続の文アクセント特徴がよくひびく。

文末の特定詞、文末詞まで、ずっと高音がつづくことも多くて、

○ミセテ　オクレン　カ。

見せて下さらない？

○コレ　タベリー　ヤ。

これをおあがりよ。

○スグ　イクケン　マチョレ　ヤー。

すぐ行くから待ってろよ。

○クサデモ　カルーテ　モドリヨッタ　ゾヨ。

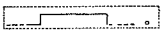
草でも背おってもどってたよ。

○モー　オヒルン　ナットル　ゼー。

もうおひるになってるよ。

というようなありさまである。いかにも高音連続の調子がけざやかである。

関連して、類似形式の語アクセントが、つぎのようにとりあげられる。「テマガイモドシ」（手まがえもどし）「エンコバンテン」（綿いれのはんてん）「オイレマンマ」（雑炊）「アラベル」（荒びる）「ヤゲロシー」（雨が降ってきたならしくうるさい）「テンプナ」（あぶない）「アンヌジュー」（あんのじょう）



このように、文の途中まで高音を連続させることもある。あとには、さまざまの抑揚がくるが、それにはかかわりなく、この場合にも、高音の連続が、特色ゆたかなものとしてひびく。

○ナツワ　トランズク、……。

夏はとらないで、……。

○コノ　カワスジキンペンデ　ヤルノワ、……。

この川すじ近辺でやるのは、……。

高音部のおわりの所をかりにセンテンス末と見れば、この種のものも、前条のタイプにそっくり同じとされる。傾向としては、両者は、同律の文アクセント傾向をとろうとするものと見ることができよう。

○ドッチー　ハイッタラ　ヒクー　ナルカモ　シラン　ノカ。

どっちへはいったら低くなるのかも知らないのか。

小学生男子が、ピアノの腰かけの廻しかたについて言ったこのことばには、問題の高音部形式が二回くりかえされている。当方言で、この種のアクセントのさかんであることを、この例からも察していただきたい。

文中の接続助詞まで高音のつづけられるのが、一つ、注目される。

○ドガイゾ　シテ、……。

どんなにかして、……。

○ナンボ　シケタテ、……。

いくらしけたって、……。

○ドガナ　キカイカ　シランガ、……。

どんな機械かしらないけど、……。

「は」助詞まで高めることも多い。

○イエトユー　モノワ　……。

家というものは、……。

○オナゴノ　コワ　スネクッタリ　イタシマスケン　ナー。

女の子はすねたりいたしますからね。

「も」助詞まで高めるのも注目される。「が」までも高めており、

○イソチャンガ　ガイナ　タイビョーデ、ミマイニ　イキナハッタ　カ。

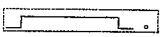
いそちゃんがひどい大病なんで、あなた、見まいにお行きでしたか。

などと言う。

○ソガイナ　コト　スナ　ヤー。

そんなことするなよ。

これは「を」格までを高めている。とかく、文中の助詞の所まで高音を連続させて、ひとまとまりの高音部をきわ立たせる。さて一文全体の文アクセントは、この高音部によって特色づけられるのである。（――その全体相は、性質上、一文全高の文アクセント形式に通うものとされるのである。）



つぎに、このような、一文のはじめとおわりとのすこしを低くした全高形式がある。

○マダ　ヤリヨラン　グライジャー。

まだやっていないくらいだ。

○シズカデ　ゴザイマショー。イナカデ　ゴザイマスケン。

静かでございましょう。いなかでございますから。

○ナオ　ヤリマセナイ。アマエテ。

なおのことやりませんよ。あまえて。

最後の例では、「〜マセナイ」のところに、「ワイ」文末詞の包摂されているのが認められる。

○シンボーナ　コ　ヨ。

よくはたらく子ですよ。

○シゴト　センドコロ　カイ。アンタ。

しごとをしないどころか。あなた。

これらでは、文末詞があらわである。いずれにしても、また、文末詞があってもなくても、ありうる全一文のうえに、問題の全高形式がおこりうる。そこにはつねに、高音連続のひびきが顕著である。

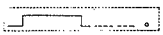
○センセー、マ、ココ　フカヒテ　ツカサイ　ヤ。

先生、まあ、ここを拭かせて下さいよ。

○ヨー　ニトルンデス　ライ。

よく似てるんですよ。

のように、はじめの方に他の抑揚があっても、やがて上のと同律の調子が出れば、この場合にも、一文の文アクセントが、やはり全高の調子を主調としたものになる。



○ナンボ　フサクジャ　ユタテ、……。

いくら不作だといったって、……。

このように、上の形式で文が終止しなくても、文の部分でのこの形式が、上

来のものに準じて見られる。

○ウエサヤ　アガッタラ　エー　ワイ。

上へさえあがったらいいよ。

○ワシラガ　シランノジャケン　シラマイ　ゾイ。

わたしらが知らないんだから知るまいよ。

○ヨメサンノ　ホーガ　シャガレテ、……。

よめさんの方がおしつぶされて、……。

など、やはり問題の部分が、文アクセント全体のうえで、おもくひびく。

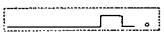
以上、類型を区分して、高音連続をさまざまに見てきた。

一貫して、たしかに、長い高音部の聞こえのつよさが認められる。この種の高音連続の傾向が、当方言文アクセント上の一特質をなしていることは、認めるにかたくない。

これは、もの言い（表現法）のどのような場合にも出やすいようである。——限られた場合にだけ出てくるようなものではない。

2.　きょくたんなあと上げの文アクセント傾向

一文のおわり近くの音節を、ぴょんときょくたんに上げる文アクセントも、人々の中で、かなりいちじるしいものになっている。



まず、このように、まったく一音節だけを端的に特立させるものがある。

○モッタイナイ　コト　ゾイ。

もったいないことだよ。

○ヨー　イーナハライ。

よくおっしゃいますわ。

この種のものも、四周に絶していて、これを言えば、その人は、他地方人から、すぐに、当地方の人と見られる。

高音連続と高音特立とは、あいいれないことのようであるけれども、両者は相補的に両立しており、あい寄って、当方言文アクセント生活の異風を大

にしている。

○ユータ　ガニ。

言ったのに！

○イケン　ガヨー。

いけないのよ。

など、短い文表現のうえにも、問題の高音特立傾向が、よく出る。

○チガウ　ガニ。

ちがうのに！

と、文後方の高音特立のほかに、文前方の高音があっても、文アクセント全体としては、後方の高音特立が、別して効果の大きいものとなる。

○タベヨ　ヤー。

たべようよ。

についても、同様なことが言える。

○オシナ　トー。

なさいますなってば。

○シナ　トー。

しなさんなってば。

の第二文の場合も同様である。

○タスケテ　ツカーサイ　ヤ。

助けて下さいよ。

これのように、上に言う文アクセント形式が、文の、はじめどれだけかを除くあとの部分に出ているものも、ここに合わせ見ることができる。

○マ、ドナタモ　ハヨ　オシマイナサイ。

まあ、どなたも早くおしまいなさい。

○イカナコトー、ノル　レンシュー　セナンダ。

どんなことがあっても、乗る練習をしなかった。

○アー　ソーデス　カー。

ああそうですか。

など、みな、要するに、文アクセントが、問題の形式でむすばれているので、文アクセント全体が、その形式を主調とするものとして注目されるのである。

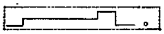
特立高音が、時に二音節にわたることもあるが、この場合も、それを、まず一音節なみのものと見ることができる。

○コレ　ドコマリ　デケマセン　ゼ。

これはそうどこででもはできませんよね。

○サイトーハン、イキナハラン　カ。

斎藤さん、行きなさいませんか。



つぎに、高音特立が、高音連続のあとでおこっているものがある。

○ドコイ　イトッタラ　ナン。

どこへ行ってたの？

○イケンガニー。

いけないのに！

○オアガリ　ヤー。

おあがりよお。

○オアガンナサイ　ヤ。

おあがりなさいよ。

高音連続のあとにではあるが、そこに特立される高音節は、ひときわ高い音のものなので、相対的に、やはりここの高音特立が顕著になる。それゆえ、この形式も、前条のものに準ぜられる。

（高音連続後の一高音節特立なので、その特立高音を高くつよく発音しようとするさい、いきおい、その直前の音節も、上昇ぎみに、あるいはそれまでのよりもやや高く、発音されることがある。

○ナヒタ　モン　ナラー。

どうしたことなんだ！

のように。が、こんなのも、すべて上述の形式のうちのものと見ることができる。）

さて、

○センセ、ドコデ　キキナサッタラ。

先生、どこでお聞きになりましたか。

○イツマデモ　ワライヨラー。

いつまでも笑ってらあ。

○モー　ゴジン　ナッツロ　ガイ。

もう五時になっただろうねえ。

のように、文のはじめの方に他の抑揚のあるものも、また、ここにとり合わせ見ることができる。

特立高音が、

○ドコデ　カイナハッタンジャロー。

どこでお買いになったんだろう。

のように、二音節にわたっているものもあるが、聞こえの効果からしては、やはり、こんなのも一音節高音なみのものと受けとることができる。

以上の、一文アクセント内での、高音連続と高音特立との連接は、まさに、両種傾向の相補的に両立するものであることを示している。両者はあい寄りつつ、しかも自己の特色を顕示しているのである。

2の項に言うきょくたんなあと上げは、たちいって見れば、形式を二つに区別することもできるけれども、けっきょくは、だいたい一音節の特立が注目されるものである。1の傾向といい、2の傾向といい、これらが特異なものであることは、表示の図式を見ても、すぐに了解することができよう。2の場合も、これを、まさに、当方言文アクセントの一特質と認めることができる。

2′. 文の末尾だけを特立させる文アクセント傾向

○オイデナ　ヤ。

来なさんなよ。

○アソビナ　ヨ。

遊びなさんなよ。

○イクン　下。

行くんだって。

のように、一文の最後尾の一音節だけを特立させる文アクセント傾向がある。これも、「きょくたんなあと上げ」の一種にちがいない。のみか、これこそ、きょくたんなあと上げである。

ではあるが、文の抑揚全体の聞こえの効果としては、これには、2のとはちがったものがある。こちらの方は単純な、平凡なあと上げと言えよう。2のは、文尾の前で高音を特立させるので、異様感が大きい。

2′の傾向は、そんなにつよいものではなさそうである。

○オッポ　シテ　ヤ。

おんぶしてちょうだい。

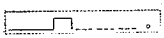
のような、末尾高音の前に、やや高めの調子がくるものもあるが、こんなのも、ここに合わせて見ることができる。

○オイデナ　ヤー。

おいでなさんなよ。

のようなのも、ここに合わせて見ることができなくはない。

3.　文の部分でその末尾をきょくたんに上げる文アクセント傾向



○イヨイヨ　コトクソンナラン。

まったくおまえはつまらないやつだ。

○コガイナ　ハナシワ　メッタニ　キケン。

こんな話しはめったに聞けない。

文の部分でとは言うが、その部分が、上例のように、文冒頭の部分であることが多い。――これが一傾向になっているように思われる。

冒頭から、二回、問題の末尾上げがくりかえされることもある。

○ワタシラ　ノビスギル　オモータラ　切るんです　ワイ。

わたしらは伸びすぎると思ったら切るんですよ。

○オナゴノコト　オトコノコト　マゼー　ヤー。

女の子と男の子とをまぜろよ。

時に、文中でも、

○イマ　ユーヨーニ、だれさんが　ジャマヒテ　ツキサゲサスンデス　ライ。

今言うように、だれさんがじゃまして、値段を安くさせるんですよ。

のように、文部分での末尾上げがおこなわれる。

○ソレ　ツツイテ　クイヨルンジャ　ガナー。

それをつついて食ってるんですよ。

の「ツツイテ」も同例とされる。(「テ」のところで末尾上げになっている。)

どこで、文部分の末尾上げがおこなわれようとも、一文アクセント上にこれが出ると、このものが、文アクセントの全体を、これなりに、ひとつ特色づける。問題の形式の、文アクセント一全体にさしひびく力は大きい。二回もこの形式がくりかえされると、文アクセントは、いよいよこれによってつよくいろどられる。

○ネブカノ　シュンガ　イマジャケン。

ねぎのしゅんが今だから。

のような、文の部分の末尾二音節の高いものも、ここに合わせ見てよかろうか。

○ユーハンガ　スムナー　ジキ　ヨ。

夕飯がすむのはすぐだよ。

このような場合は、「ユーハンガ」と「スムナー」との二部分の一体化したものに末尾高音があると見られる。こんなのでは、末尾特立の効果のいっそう顕著なものが受けとられる。

文の部分の末尾が助詞である場合、そこのところで、末尾上げがおこりがちである。

○オコメモ　アジノ　ワルイ　コメ　アルー。

お米も味のわるい米がある。

○タバコモ　クワエテ　オラン。

たばこもくわえていない。　（すっていないことを言う。）

これらは、「モ」のところで末尾上げのおこっている例である。

○キョネンノ　オマツリジャッタ　カナー。

去年のおまつりだったかねえ。

○モリニ　ヤトワレテ。

子もりにやとわれて。

○チズデ　ミルグライデ、……。

地図で見るくらいで、……。

○ワタシワ　ココデ　キカセテ　ツカーサイ。

わたしはここで聞かせて下さい。

このように、さまざまの助詞の場合が見られる。

○コドモラ　メシニ　ナンボーニモ　クヤ　シマセンケン。

子どもらはめしにしてはどんなことがあったって食いはしませんから。　（とうもろこしのこと）

この「ラ」にも、「は」が内在している。

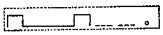
笠の名に「カクリボンチャ」というのがある。（ハチクの皮で作る。）このようなアクセントと上来の ——⌐ とが、つれあうもののように思われる。この種のアクセント傾向は、九州南部地方の、あと上げのつよい傾向と同似的であると見られる。

3の項に言うものは、2の項に言うものと、よく通いあうものと考えられる。2′の文末尾隆起は、いかに特立的でも、それが文の終止点でのことであるゆえに、ややしぜんとも受けとられる。それに対して、文の途中での特立的な高音隆起は、聞くものに、異常感をおぼえさせやすい。3のものも2のものも、文尾ではない文中での少音節高音隆起を本質とする特徴形式なのである。

2のものに関しては、九州西辺の肥前地方の文アクセント傾向の一つが、

すぐに思いあわされる。この場合といい、前述の3の場合といい、当方言文アクセントの傾向については、西方に系脈をたどることができそうなのが、一注意点とされる。

4.　文の部分でその末尾と頭部とを特立させる文アクセント傾向



ここに言うものは、3の類縁のものとも見られる。――文の部分での末尾高音特立に加えて、頭部にも高音を特立させたものだからである。類縁のものではあるが、できた形式の、上図のとおりの全体からは、3の場合のとはちがった、特異な聞こえが得られる。なんといっても、⊓――⊓の音カーブは特異である。これは、――⊓とはちがって、文アクセントの聞こえ全体を、一段と特異にいろどる。

○イモデモ　アゲトケ　ヤ。

いもでもあげておけよ。

○ソガイノワ　ショーコニ　ナラン。

そんなのは証拠にならない。

○ヒマガ　イリマスデス　ライ。

時間がかかりますよ。

これらおのおのの文初に、問題の音カーブがある。それが、一文の文アクセントを特色あるものにしている。

○コナイダ　ヨワッタ　トー。

このあいだはこまったよ。

この例では、問題の音カーブが二回くりかえされている。こうなっては、文アクセント上、⊓――⊓の聞こえがいよいよ大きくなる。

時に文中にも、

○ソガナ　コタ　イヤノガジャケン。

そんなことはいやなんだからね。

のように、問題の音カーブが出る。この場合にも、やはりこれが文アクセン

トを大きく特色づける。

○ノマント　ヨージョースルガ　ホント　ヨ。

酒を飲まないで養生するのがほんとうだよ。

○ヤクバノ　ホーガ　エー。

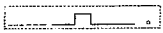
役場の方がいいですよ。

これらは、文の二部分の連結体のうえに問題の音カーブが出ている。こうなっては、なおのこと、この大きい⊓―――⊓が、文アクセントをつよく特色づけることになる。

4の形式の文アクセントは、主として、感情の大きくゆれる場合に出がちである。強調する時にこれが出やすい。わざと大げさに言う時もこれが出やすい。意外という時もこっけい表現の時もこれが出る。

この形式もまた、さきの肥前地方にあるこの種のものとよく似かよっている。転じては、似たものが、近畿南辺方面にも見いだされる。

5.　文の部分できょくたんなあと下がりを見せる文アクセント傾向



文初ではなくて文後方の部分で、きょくたんなあと下がりの抑揚を見せる文アクセント傾向がある。

○アリガトー　ゴザイマシタ。

○アリガト　ゴザイマシタ。

ありがとうございました。

では、後半部分「ゴザイマシタ」に問題の抑揚が出ている。「ゴザイマシタ」とあるので、一文のアクセントは、これにひきしめられ、これなりの特色のものとなっている。

○アタタコー　ゴザイマス。

暖うございます。

○タッシャニ　ゴザンス。

達者でございます。

○アリガト　ゴザンシター。

　　ありがとうございました。

○ソーデ　ゴザイマショー　ナー。

　　そうでございましょうなあ。

などと言う。「ございます」関係の言いかたに、よく、_⎍‾‾の抑揚が出る。このようなことは、全国中でも、特に山口県下にいちじるしいので、私は、この種のアクセント形式を、山口式と称した。山口県下では、「……ゴザイマス。」「オハヨ　アリマス。」など、きょくたんなあと下がりを見せる傾向がつよい。「マス」はかならず低音部にあるということは、「ゴザイマス」や広島県地方の「ゴザイマス」に対しては、ひどく耳だたしいことである。上の「ゴザンシター」にしても、「ター」の高音があるとはいえ、それにもまして、「ゴザンシ」のきょくたんなあと下げが、聞く人に異様感を与えよう。

○ソーデ　ゴザイマス。

とあっても、きょくたんなあと下がりは歴然としている。

ただし、当方言では、この種のことに、多少の浮動があるか。

○オハヤ　ゴザイマス。

　　お早うございます。

○……の方が　ヨー　ゴザイマシタ　ワイ。

　　……の方がようございましたよ。

○ゴアンシンデ　ゴザンス　ライ。

　　ご安心でございますわね。

などとも言っていた。かとおもうと、他語の場合にも、

○ドレグライ　ミエマスリャー。

　　どのくらいに見えますか。　　（年齢のこと）

○スワッタラ　見エマセナイ。

　　すわったら見えませんよ。

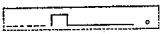
○コッチ　オツメナサイ。

こちらへおつめなさい。　　（座席のこと）

○ハヨ　オハマンナサイ。

早くおはいりなさい。

などとあって、 ⎍⎍ 形式が、一つの傾向として受けとられやすいありさまである。



このような、山口県下の前掲「……　アリマス。」や「ヨー　ワリマス。」（よく降りますね。）と同調のものも、つぎのようにおこなわれている。

○マケタノデ　ゴザイマスケン、シカタガ　アリマセン。

負けたのでございますから、しかたがありません。

○アッチー　マワリー　ヤー。

あっちへおまわりよ。　　（座席のこと）

上の両図式のもの双方が、ならびおこなわれていることは、きょくたんなあと下がりを見せる文アクセントが、一つの習慣になっていることを証するものであろう。よしんばこれが、そんなにつよい傾向とは言えぬことがあったとしても、限られたことばのうえに、きょくたんなあと下がりが出がちでもあるとしたら、これは、一特色傾向とすることができる。

○スミマセン。イソガシー　トコロオ。

すみません。おいそがしいところを。

のように、一文上に問題の形式の見られることもある。

5に言う下降形式は、外形上では、4の ⎍⎍ にいくらか似てもいる。しかし、実質的には、双方はかなりちがう。なんといっても、4のものでのあと上げは、このものの実質を大きく特異化している。

5の文アクセント傾向は、つねに、ていねいな気もちの表現に役だっている。これは、おおよそ女性のやや年のいった人たちに用いられがちである。

6.　中国山陽式の文アクセント傾向

上来、明らかにしたように、当方言の文アクセントは、――当地の属する

喜多郡の一般の文アクセントとともに、異色に富む。四国一般の文アクセント傾向の中にあって、当方言文アクセント（――喜多郡地方文アクセント）の傾向は、異端者的である。

○アメ　フリヨル　カイ。

雨が降ってるかい。

などと言わぬではないけれども、こうした通常の四国調の出ることが、ぞんがいと言うよりもまことにと言ってよいほどに、すくない。

中国山陽地方に一般的である文アクセント傾向によく似たものも見られる。

○ナカナカ　リコーナケン　ノー。イワシデモ。

なかなかかしこいからね。いわしでも。

○アノグライナ　ゴッツォーデ　テオ　キッタラ、テガ　オシーデス　テイ。

あのくらいのごちそうづくりで手を切ったのでは、手がおしいですよ。

というようなありさまである。この種の傾向がかなりつよい。単語アクセントを見ても、ここに、中国地方のに似た「ベロ」（舌）「トーキビ」（とうもろこし）「ゴクドーサレ」（ぼんくら）「イヌル」（帰る）「ホデリダス」（ほぜり出す）「コワイ」　（苦しい、おそろしい、さびしい）「キムツカシー」（気むずかしい）「アンキナ」（のんきな）「ゲサクナ」（下品な）などがある。

伊予の中部・東部では、これらを、四国一般的な調子で、「ベロ」「トーキビ」「ゴクドーサレ」「イヌル」「ホゼリダス」「コワイ」「キムツカシー」「アンキナ」「ゲサクナ」と言う。

中国系文アクセントに似かよう傾向は、喜多郡下にばかりではなくて、南伊予一帯に、どれほどかうかがわれる。つづいて土佐西南部にもうかがわれる。これからすれば、喜多郡地帯の文アクセント状況も、四国アクセントの一般状況の中で、ただ単純に孤立しているものではないことが理解される。そのようであって、なお、中予・東予の地方の汎四国的文アクセント傾向の

ままのものはここにさほど見られず、かえって上述の諸傾向がここの文アクセント生態の主特質をなしているとすれば、ここは、中予東予的文アクセント性質（――汎四国的なもの）と、四国西南部の、中国系文アクセントに通じるものを持つ地域の性質との接衝する地帯と考えることができようか。ここは、アクセント上、混態の地とされるようである。

c′）語アクセント

当方言について語アクセントを調査したのは、昭和四十七年一月四日のことである。（全国五十余要地の調査の初期には、文アクセントの観察に意をそそいでいて、一方の語アクセントの組織的調査のことは、とり立てないでいた。）

語アクセント調査の結果を下にかかげる。

傍線はアクセントの高音部をあらわす。……（語の高低アクセントでの、音の高低相は、その語そのものの内部で判定されるべきものと、私は考える。このさい、けっきょくは、三段観・四段観などよりも、「低」「高」の二段観によることが、未知の諸方言に対する比較論的討究上、穏当であると考えられる。）

調査結果を、符号によって抽象化してかかげることはしない。いつ、だれが見ても、語アクセント事実がすぐにわかるようにしておきたい。下の語掲出順序は、調査順序のままである。――この順序には問題がある。

調査用語の選択にあたっては、先覚のものから多くの教えを受けた。自己の経験をもおりこめている。老年・中年・少年の三世代にわたって調査するため、三層に受けいれられやすい語をえらぶことにつとめたが、中にいくらか特別なものもある。このような、語を多く用意しての、カードを読んでもらう語アクセント調査では、調査の速度に不断の注意をはらうことがたいせつである。早く進めたりすると、応答が機械化する。また、答えが単純な読みことばのアクセントの表明になる。ともかく、一語一語が、前後に関係なく発言されるようにしむけなくてはならない。相手に、つねに語観念のもとで発言してくれるように要請する。原則として、先方の無事の第一回の答えを重んじるが、語観念下でのものなら、必要に応じて、第二回や第三回のものも重視する。（最後的には、一箇の答えに到達しようとするのであるが。）

語アクセント教示者としては、女性をおいて男性をえらんだ。これは、全要地を通じて同一条件下の三世代人を得ることの円滑を考えてのことである。カードを読んでもらうためのことも、語観念を話題にすることの容易さも考えた。

1.　65歳の菊地鶴雄氏の語アクセント

エヒメケン　キタグン　ナガハマチョー　オーアザ　クシュー

キクチ　ツルオ

（今日、櫛生は長浜町に属している。）

1	エ（柄）	カ（蚊）	コ（子）	チ（血）	ト（戸）	ホ（帆）	ミ（実）
2	ミ（身）	ナ（名）	ハ（葉）	ヒ（日）	モ（藻）	ヤ（矢）	エ（絵）
3	オ（尾）	キ（木）	コ（粉）	ス（酢）	タ（田）	テ（手）	ナ（菜）
4	ニ（荷）	ネ（根）	ノ（野）	ヒ（火）	ホ（穂）	メ（目）	ユ（湯）

1	アメ（飴）	ンメ（梅）	イェダ（枝）	カオ（顔）	カゼ（風）	カネ（金）
2	カベ（壁）	カマ（釜）	コレ（此）	サケ（酒）	タケ（竹）	ハコ（箱）
3	ハナ（鼻）	ニワ（庭）	モモ（桃）	ウシ（牛）	カキ（柿）	カニ（蟹）
4	キジ（雉）	キリ（桐）	キリ（霧）	クチ（口）	クビ（首）	コシ（腰）
5	トリ（鳥）	ハシ（端）	ハチ（蜂）	ミズ（水）	ミチ（道）	ムシ（虫）
6	ウタ（歌）	オト（音）	カタ（型）	カワ（川）	クラ（鞍）	シモ（下）
7	テラ（寺）	ハタ（旗）	ヒト（人）	ムネ（胸）	ムラ（村）	イシ（石）
8	カキ（垣）	カミ（紙）	セミ（蟬）	タビ（旅）	ツル（弦）	ナツ（夏）
9	ハシ（橋）	ヒジ（肘）	ヒル（昼）	フユ（冬）	マチ（町）	ユキ（雪）
10	アワ（泡）	イケ（池）	イロ（色）	ウデ（腕）	ウマ（馬）	カワ（皮）
11	クサ（草）	クモ（雲）	クラ（倉）	コト（事）	シマ（島）	タマ（玉）
12	ハナ（花）	ハラ（腹）	ヤマ（山）	アシ（足）	イヌ（犬）	オニ（鬼）
13	カイ（貝）	カミ（神）	カミ（髪）	クツ（靴）	クリ（栗）	スミ（炭）
14	タイ（鯛）	ツキ（月）	トシ（年）	ナミ（波）	ノミ（蚤）	ミミ（耳）
15	アワ（粟）	イト（糸）	イネ（稲）	カサ（笠）	カタ（肩）	カマ（鎌）
16	キョー（今日）	ケサ（今朝）	ゲタ（下駄）	ソラ（空）	タネ（種）	ナカ（中）
17	フネ（船）	イキ（息）	ウス（臼）	ウミ（海）	オビ（帯）	ヌカ（糠）
18	カミ（上）	キリ（錐）	スミ（隅）	チチ（父）	ノミ（鑿）	ハシ（箸）

19ハリ（針）　マツ（松）　ムギ（麦）　アメ（雨）　イド（井戸）　オケ（桶）
20カゲ（蔭）　クモ（蜘蛛）　コエ（声）　コト（琴）　フナ（鮒）　マド（窓）
21ムコ（聟）　アキ（秋）　アユ（鮎）　キビ（黍）　コイ（鯉）　サル（猿）
22ツル（鶴）　ツユ（露）　ハル（春）　ヘビ（蛇）

1 アイダ（間）　アズキ（小豆）　ケヌキ（毛抜）　ツルベ（釣瓶）　トカゲ（蜥蜴）
2 フタツ（二つ）　フタリ（二人）　ユーベ（夕）　アタマ（頭）　イクサ（軍）
3 ウズラ（鶉）　ウラミ（恨）　オーギ（扇）　オトコ（男）　オモイ（思）
4 オモテ（表）　オンナ（女）　カガミ（鏡）　カタキ（敵）　カタナ（刀）
5 コトバ（言葉）　コヨミ（暦）　サカイ（堺）　タカラ（宝）　ツルギ（剣）
6 ハカマ（袴）　ハサミ（鋏）　ヒガシ（東）　ヒカリ（光）　フクロ（袋）
7 ホトケ（仏）　ムシロ（莚）　コガネ（黄金）　コムギ（小麦）　サザエ（栄螺）
8 チカラ（力）　ハタチ（廿歳）　ミサキ（岬）　アサヒ（朝日）　イツツ（五つ）
9 イノチ（命）　カレイ（鰈）　キューリ（胡瓜）　ココロ（心）　スガタ（姿）
10 ナミダ（涙）　ニシキ（錦）　ヒバシ（火箸）　マナコ（眼）　イチゴ（苺）
11 ウシロ（後）　カイコ（蚕）　カブト（兜）　クジラ（鯨）　クスリ（薬）
12 タヨリ（便）　タライ（盥）　ヤマイ（病）　イズレ（孰）　ウサギ（兎）
13 ウナギ（鰻）　カラス（烏）　キツネ（狐）　スズメ（雀）　セナカ（背中）
14 タカサ（高さ）　ネズミ（鼠）　ヒバリ（雲雀）　マコト（誠）　ミサオ（操）
15 ヨモギ（蓬）　イカダ（筏）　イカリ（錨）　ユワシ（鰯）　オノレ（己）
16 カザリ（飾）　カスミ（霞）　カタチ（形）　キモノ（着物）　クツワ（轡）
17 ケムリ（煙）　コウシ（仔牛）　コーリ（氷）　コヤマ（小山）　コロモ（衣）
18 サカナ（魚）　シュート（舅）　シルシ（印）　ツクエ（机）　トナリ（隣）
19 ハジメ（初）　ハナヂ（鼻血）　ヒサシ（庇）　ヒタイ（額）　ヒツジ（羊）
20 ミヤコ（都）　ヤナギ（柳）

1 ウル（売る）　オク（置く）　カウ（買う）　カク（欠く）　キク（聞く）　サク（咲く）
2 チル（散る）　ツク（突く）　ナク（泣く）　ナル（鳴る）　ノル（乗る）　フル（振る）

3 マク(巻く) ヤク(焼く) ユー(言う) イク(行く) ワル(割る) キル(着る)
4 スル(為る) ニル(似る) ネル(寝る) アウ(合う) ウツ(打つ) カウ(飼う)
5 カク(書く) カク(掻く) キル(切る) クウ(食う) サク(裂く) スル(磨る)
6 タツ(立つ) ツク(付く) トル(取る) ナル(成る) ノム(飲む) フク(吹く)
7 フル(降る) マク(蒔く) ヨム(読む) クル(来る) デル(出る) ミル(見る)

1 アガル(上がる) アソブ(遊ぶ) アタル(当たる) アラウ(洗う) ウタウ(歌う)
2 オドル(踊る) カザル(飾る) カタル(語る) カヨウ(通う) カワル(変わる)
3 キザム(刻む) コロス(殺す) サガス(探す) シルス(記す) ススム(進む)
4 タダム(畳む) チガウ(違う) ナラブ(並ぶ) ノボル(登る) ハコブ(運ぶ)
5 ヒロウ(拾う) ワタル(渡る) アケル(開ける) アゲル(上げる) ウエル(植える)
6 カケル(欠ける) カリル(借りる) キエル(消える) ステル(捨てる) ソメル(染める)
7 ツケル(漬ける) ハレル(腫れる) マケル(負ける) マゲル(曲げる) ヤケル(焼ける)
8 ワレル(割れる) アマル(余る) イタム(痛む) イノル(祈る) ウゴク(動く)
9 ウツル(移る) ウラム(恨む) オコス(起こす) オトス(落とす) オモウ(思う)
10 カエル(帰る) カギル(限る) クズス(崩す) クモル(曇る) サガル(下がる)
11 テラス(照らす) タノム(頼む) ツクル(作る) トール(通る) ナラウ(習う)
12 ヒカル(光る) マモル(守る) ワカル(わかる) イキル(生きる) オキル(起きる)
13 オチル(落ちる) サメル(覚める) スギル(過ぎる) タテル(建てる) ツケル(付ける)
14 トケル(溶ける) ナゲル(投げる) ニゲル(逃げる) ノビル(延びる) ハレル(晴れる)
15 ミエル(見える) ワケル(分ける) アルク(歩く) カクス(隠す) ハイル(はいる)
16 マイル(参る)

1 ナイ（無い） ヨイ（良い） アカイ(赤い) アサイ(浅い) アツイ(厚い)
2 アマイ(甘い) アライ(荒い) ウスイ(薄い) オソイ(遅い) オモイ(重い)
3 カタイ(堅い) カルイ(軽い) クライ(暗い) トーイ(遠い) マルイ(丸い)
4 アオイ(青い) アツイ(暑い) カライ(辛い) キヨイ(清い) クロイ(黒い)
5 サムイ(寒い) シロイ(白い) セマイ(狭い) タカイ(高い) チカイ(近い)

6 ツヨイ(強い)　ナガイ(長い)　ハヤイ(早い)　ヒクイ(低い)　ヒロイ(広い)
7 フカイ(深い)　フトイ(太い)　フルイ(古い)　ホソイ(細い)　ヤスイ(安い)
8 ワカイ(若い)　ワルイ(悪い)

1 アザケル　アワレム　ウカガウ　カナシム　シタガウ　ウタガウ　ヤシナウ
2 ムサボル　アツマル　アヤシム　アラワス　イツワル　オドロク　ヨロコブ
3 アタエル　カサネル　トナエル　ナラベル　ハジメル　ホロビル　アツメル
4 イサメル　カズエル　コタエル　シラベル　ナガレル　タスケル　ハナレル
5 ヘダテル　カクレル

1 アヤウイ　トートイ　ムナシー　ヨロシー　イヤシー　クワシー　シタシー
2 スズシー　タダシー　ヒサシー　ヒトシー

この老男では、三音節語動詞に、「○○○」が多く出た。それらの場合に、この人は、たとえば、「ソメル」（染める）と発言して、すぐまた「ソメル」ですねと言うようなことが、しばしばあった。

形容詞の三音節語でも、この人はまた「○○○」をよく見せたが、それらの場合にも、たとえば「ウスイ」（薄い）と発言しておいて、「ウスイ」ですねと言った。

語アクセントの浮動に注目して、私は同似好条件下の老男をさらに求め、比較の心で調査にしたがった。つぎにかかげるのはその調査結果である。

この結果では、三音節動詞に「ソメル」式の「○○○」型式が多くあらわれており、三音節語形容詞にも、「ウスイ」式の「○○○」型式が多くあらわれている。

この結果は、比較的よく、中・少の年層の調査結果と一致する。

1の老男には、三音節語名詞でも、「キモノ」(着物)などと、「○○○」が比較的よく出た。つぎの 1′ の老男になると、それらが「○○○」型式でありがちである。こうなっていよいよ、1′の結果が、のちの2（中年）・3(少年)のとよくつれあう。

1′.　65歳の酒井 親氏の語アクセント

エヒメケン　キタグン　ナガハマチョー　オーアザ　クシュー

サカイ　チカシ

以下、上の1のに同じものの場合は、当該位置に……線を引くことにする。（1のに相違するものだけが明記される。）

1 エーを(柄)　カーが(蚊)　コーを(子)　チーが(血)　トーを(戸)　ホーを(帆)　ミーが(実)

2 ミーを(身)　ナーを(名)　ハーが(葉)　ヒーが(日)　モーを(藻)　ヤーを(矢)　イェーを(絵)

3 オーを(尾)　キーを(木)　コーを(粉)　スーを(酢)　ターを(田)　テーを(手)　ナーを(菜)

4 ニーを(荷)　ネーが(根)　ノーを(野)　ヒーを(火)　ホーが(穂)　メーを(目)　ユーを(湯)

1 ……	……	……	……	……	……
2 ……	……	……	……	……	……
3 ……	……	……	……	……	……
4 ……	……	……	……	……	……
5 ……	……	……	……	……	……
6 ……	……	……	……	……	……
7 ……	……	……	……	……	……
8 ……	……	……	……	……	……
9 ……	……	……	……	マチ（町）	……
10 ……	イケ（池）	イロ（色）	ウデ（腕）	ウマ（馬）	……
11 クサ（草）	クモ（雲）	クラ（倉）	……	……	……
12 ……	……	……	……	……	……
13 ……	……	……	……	……	……
14 ……	ツキ（月）	……	……	……	……
15 ……	……	……	……	……	……
16 ……	……	……	……	……	……

17	イキ（息）	……	……	……	……
18	……	……	チチ（父）	……	……
19	マツ（松）	……	……	イド（井戸）	……
20	……	……	……	フナ（鮒）	……
21	アキ（秋）	……	……	コイ（鯉）	……
22	……	ハル（春）	……		

1	……	アズキ（小豆）	ケヌキ（毛抜）	ツルベ（釣瓶）	トカゲ（蜥蜴）
2	……	……	ユーベ（夕）	アタマ（頭）	……
3	……	ウラミ（恨）	オーギ（扇）	……	……
4	……	オンナ（女）	カガミ（鏡）	……	……
5	……	……	……	……	ツルギ（剣）
6	……	……	……	……	……
7	ホトケ（仏）	ムシロ（蓆）	……	コムギ（小麦）	サザエ（栄螺）
8	……	……	ミサキ（岬）	……	……
9	イノチ（命）	……	……	ココロ（心）	……
10	……	ニシキ（錦）	……	マナコ（眼）	イチゴ（苺）
11	ウシロ（後）	カイコ（蚕）	……	クジラ（鯨）	……
12	タヨリ（便）	……	ヤマイ（病）	イズレ（孰）	……
13	……	……	キツネ（狐）	スズメ（雀）	セナカ（背中）
14	……	ネズミ（鼠）	……	マコト（誠）	……
15	ヨモギ（蓬）	イカダ（筏）	……	イワシ（鰯）	オノレ（己）
16	……	……	……	キモノ（着物）	クツワ（轡）
17	ケムリ（煙）	……	コーリ（氷）	……	コロモ（衣）
18	サカナ（魚）	……	シルシ（印）	ツクエ（机）	トナリ（隣）
19	ハジメ（初）	ハナヂ（鼻血）	……	……	……
20	ミヤコ（都）	ヤナギ（柳）			

1 ……	……	……	……	……	……
2 ……	ツク(突く)	……	……	……	……
3 ……	……	……	……	……	……
4 ……	……	……	……	……	……
5 ……	……	……	……	……	……
6 ……	ツク(付く)	……	……	……	フク(吹く)
7 ……	……	……	……	……	……

1	アガル(上がる)	……	……	アラウ(洗う)	ウタウ(歌う)
2	オドル(踊る)	カザル(飾る)	カタル(語る)	カヨウ(通う)	カワル(変わる)
3	キザム(刻む)	コロス(殺す)	サガス(探す)	シルス(記す)	……
4	タタム(畳む)	……	ナラブ(並ぶ)	ノボル(登る)	……
5	ヒロウ(拾う)	ワタル(渡る)	アケル(開ける)	……	ウエル(植える)
6	……	カリル(借りる)	キイェル(消える)	……	ソメル(染める)
7	……	ハレル(腫れる)	マケル(負ける)	マゲル(曲げる)	……
8	ワレル(割れる)	アマル(余る)	イタム(痛む)	イノル(祈る)	ウゴク(動く)
9	……	ウラム(恨む)	オコス(起とす)	オトス(落とす)	オモウ(思う)
10	カエル(帰る)	カギル(限る)	クズス(崩す)	クモル(曇る)	サガル(下がる)
11	テラス(照らす)	タノム(頼む)	ツクル(作る)	トール(通る)	ナラウ(習う)
12	ヒカル(光る)	マモル(守る)	ワカル(わかる)	……	……
13	……	サメル(覚める)	スギル(過ぎる)	タテル(建てる)	ツケル(付ける)
14	……	ナゲル(投げる)	ニゲル(逃げる)	ノビル(延びる)	ハレル(晴れる)
15	ミエル(見える)	ワケル(分ける)	アルク(歩く)	カクス(隠す)	ハイル(はいる)
16	マイル(参る)				

1	……	……	……	……	……
2	……	アライ(荒い)	ウスイ(薄い)	オソイ(遅い)	オモイ(重い)
3	カタイ(堅い)	カルイ(軽い)	クライ(暗い)	トーイ(遠い)	マルイ(丸い)

4 アオイ(青い)　アツイ(暑い)　カライ(辛い)　キヨイ(清い)　クロイ(黒い)
5 サムイ(寒い)　シロイ(白い)　セマイ(狭い)　タカイ(高い)　チカイ(近い)
6 ツヨイ(強い)　ナガイ(長い)　ハヤイ(早い)　……　ヒロイ(広い)
7 フカイ(深い)　フトイ(太い)　フルイ(古い)　……　……
……　ワルイ(悪い)

1 ……　アワレム　……　カナシム　シタガウ　ウタガウ　ヤシナウ
2 ムサボル　アツマル　アヤシム　アラワス　イツワル　……　ヨロコブ
3 ……　……　トナエル　……　ハジメル　ホロビル　……
4 イサメル　……　コタエル　……　ナガレル　タスケル　ハナレル
5 ヘダテル　……

1 アヤウイ　トートイ　ムナシー　ヨロシー　イヤシー　……　……
2 スズシー　タダシー　……　……

2.　43歳の神内 登氏の語アクセント

エヒメケン　キタグン　ナガハマチョー　クシュー
カミウチ　ノボル

この人の語アクセントは、上の 1′ の語アクセントにくらべる。1′ のに同じものの場合は、当該位置に――線を引く。(1′のに相違するものだけが明記される。)

1 エ(柄)　カ(蚊)　コ(子)　チ(血)　ト(戸)　ホ(帆)　ミ(実)
2 ミ(身)　ナ(名)　ハ(葉)　ヒ(日)　モ(藻)　ヤ(矢)　エ(絵)
3 オ(尾)　キ(木)　コ(粉)　ス(酢)　タ(田)　テ(手)　ナ(菜)
4 ニ(荷)　ネ(根)　ノ(野)　ヒ(火)　ホ(穂)　メ(目)　ユ(湯)

1 ――――　――――　――――　――――　――――　――――

2					
3					
4					
5					
6					
7					
8					
9				マチ（町）	
10	イケ（池）	イロ（色）	ウデ（腕）	ウマ（馬）	
11 クサ（草）	クモ（雲）	クラ（倉）			
12					
13					
14	ツキ（月）				
15					
16					
17	イキ（息）				
18			チチ（父）		
19				イド（井戸）	
20				フナ（鮒）	
21	アキ（秋）			コイ（鯉）	
22		ハル（春）			

1	アズキ（小豆）	ケヌキ（毛抜）	ツルベ（釣瓶）	トカゲ（蜥蜴）
2		ユーベ（夕）	アタマ（頭）	
3	ウラミ（恨）	オーギ（扇）		
4		カガミ（鏡）	カタキ（敵）	
5				
6				

7 ホトケ（仏）	――	――	――	サザエ（栄螺）
8 ――	――	ミサキ（岬）	――	――
9 イノチ（命）	――	キューリ（胡瓜）	ココロ（心）	――
10 ――	ニシキ（錦）	ヒバシ（火箸）	――	イチゴ（苺）
11 ――	――	――	――	――
12 タヨリ（便）	――	――	イズレ（孰）	――
13 ――	――	キツネ（狐）	――	――
14 ――	――	――	マコト（誠）	――
15 ヨモギ（蓬）	――	――	イワシ（鰯）	オノレ（己）
16 ――	――	――	――	――
17 ――	コウシ（仔牛）	――	――	コロモ（衣）
18 ――	シュート（舅）	シルシ（印）	――	――
19 ――	ハナヂ（鼻血）	――	――	――
20 ミヤコ（都）	ヤナギ（柳）			

1 ――	――	――	――	――	――
2 ――	ツク（突く）	――	――	――	――
3 ――	――	――	――	――	――
4 ――	――	――	――	――	――
5 ――	――	――	――	――	――
6 ――	ツク（付く）	――	――	――	フク（吹く）
7 ――	――	――	――	――	――

1 アガル（上がる）	――	――	――	ウタウ（歌う）
2 ――	――	――	カヨウ（通う）	――
3 ――	コロス（殺す）	――	――	ススム（進む）
4 タタム（畳む）	――	――	――	――
5 ヒロウ（拾う）	――	――	――	ウエル（植える）

6 ――	――	――	――	――
7 ――	――	――	――	――
8 ワレル(割れる)	――	――	――	――
9 ――	――	――	オトス(落とす)	オモウ(思う)
10 ――	カギル(限る)	クズス(崩す)	――	サガル(下がる)
11 テラス(照らす)	――	――	――	――
12 ヒカル(光る)	――	ワカル(わかる)	――	――
13 ――	サメル(覚める)	スギル(過ぎる)	――	――
14 ――	ナゲル(投げる)	――	ノビル(延びる)	――
15 ミエル(見える)	ワケル(分ける)	アルク(歩く)	カクス(隠す)	ハイル(はいる)
16 マイル(参る)				

1 ――	――	――	――	――
2 ――	アライ(荒い)	――	――	オモイ(重い)
3 カタイ(堅い)	カルイ(軽い)	クライ(暗い)	トーイ(遠い)	――
4 ――	――	カライ(辛い)	キヨイ(清い)	クロイ(黒い)
5 ――	シロイ(白い)	セマイ(狭い)	――	――
6 ――	――	ハヤイ(早い)	――	――
7 ――	――	フルイ(古い)	――	――
8 ――	――			

1 アザケル	アワレム	ウカガウ	カナシム	シタガウ	ウタガウ	ヤシナウ
2 ムサボル	アツマル	アヤシム	アラワス	イツワル	オドロク	ヨロコブ
3 ――	――	――	ナラベル	――	ホロビル	アツメル
4 イサメル	――	コタエル	――	ナガレル	タスケル	ハナレル
5 ――	――					

1 アヤウイ	トートイ	ムナシー	ヨロシー	――	――	――

2 ——— ——— ——— ———

2の中年男子のでは、全般にわたって、下降調がよく出ている。

一音節語名詞の場合は、かりにこれに「てにをは」をつけて、その準二音節形態を見たところでは、その一音節名詞部分が、みな「$\overline{○}$」になっている。

二音節語の場合は、名詞も動詞も、みな「$\overline{○}$○」である。

三音節語の場合も、名詞には「$\overline{○○}$○」がかなり多く、「○$\overline{○}$○」が多い。動詞にも「○$\overline{○}$○」がじつに多い。(「○$\overline{○}$○」型式は下降調を生命とするものと解せられる。) 三音節語動詞では、1′の老年者の「○$\overline{○}$○」(例、スギル)を、2の中年者は、しばしば「$\overline{○}$○○」にしている。——時に、1′の「○$\overline{○}$○」を「$\overline{○○}$○」(例、カクス)にもしている。こうあって、2の中年者では、高→低の下降調がいよいよけざやかである。三音節語形容詞でも、2の中年者は、「○$\overline{○}$○」を見せるうえに、「$\overline{○}$○○」(例、カルイ)をもよく見せており、すこしは「$\overline{○○}$○」(例、シロイ)も見せている。

四音節語動詞は全部「○$\overline{○}$○○」型式である。四音節語形容詞でも、「○$\overline{○}$○○」がほとんどである。

中年者に見られるこのつよい下降調は、少年者ではどうなっていようか。少年者のが、わりあいよく、中年者のと一致するのを、下表に見ることができる。

すなわち少年者のでも、一音節語名詞はみな「$\overline{○}$」である。

二音節語名詞では「$\overline{○}$○」が大部分であり、ついでかなり「$\overline{○○}$」がある。同動詞でも「$\overline{○}$○」が大部分で、すこし「$\overline{○○}$」などがある。

三音節語名詞では「○$\overline{○}$○」がじつに多い。(中年者の「$\overline{○○}$○」は、少年者ではほとんどみな「○$\overline{○}$○」になっている。) 三音節語動詞は「○$\overline{○}$○」のみである。三音節語形容詞も「○$\overline{○}$○」のみである。

四音節語動詞では、「○$\overline{○}$○○」とともに、「○$\overline{○○}$○」もかなりある。四音節語形容詞は「○$\overline{○}$○○」がほとんどである。

中・少の、ややあい近い世代同士に、かなりよく似た傾向が見られる。

3.　12歳の谷井 司君の語アクセント

エヒメケン　キタグン　ナガハマチョー　クシュー

タニイ　ツカサ

この人の語アクセントを、上の2の語アクセントと比較してかかげる。2のに同じものの場合は、当該位置に═══線を引く。（2のに相違するものだけが明記される。）

1	═══	═══	═══	═══	═══	═══	═══
2	═══	═══	═══	═══	═══	═══	═══
3	═══	═══	═══	═══	═══	═══	═══
4	═══	═══	═══	═══	═══	═══	═══

1	アメ（飴）	ウメ（梅）	═══	═══	カゼ（風）	═══
2	═══	═══	═══	═══	═══	═══
3	═══	═══	═══	ウシ（牛）	カキ（柿）	═══
4	═══	キリ（桐）	═══	═══	═══	═══
5	═══	═══	═══	ミズ（水）	═══	ムシ（虫）
6	═══	オト（音）	カタ（型）	═══	═══	═══
7	═══	═══	═══	═══	ムラ（村）	═══
8	カキ（垣）	═══	═══	═══	═══	═══
9	═══	═══	═══	═══	═══	═══
10	アワ（泡）	═══	═══	ウデ（腕）	ウマ（馬）	═══
11	═══	クモ（雲）	═══	═══	═══	═══
12	═══	═══	═══	═══	═══	═══
13	═══	═══	═══	クツ（靴）	═══	═══
14	═══	═══	═══	═══	═══	═══
15	═══	═══	イネ（稲）	═══	═══	═══

1
2 ツク(突く)　ナク(泣く)　ナル(鳴る)　ノル(乗る)
3
4
5
6
7

1 アガル(上がる)
2
3
4
5
6
7
8
9
10 クズス(崩す)　サガル(下がる)
11 テラス(照らす)
12
13 スギル(過ぎる)
14 ノビル(延びる)
15 ミエル(見える)　ワケル(分ける)　アルク(歩く)　カクス(隠す)　ハイル(はいる)
16 マイル(参る)

1
2 アライ(荒い)

16					
17	イキ（息）			オビ（帯）	
18					
19					
20					
21					
22					

1	アイダ（間）	アズキ(小豆)	ケヌキ(毛抜)	ツルベ(釣瓶)	トカゲ(蜥蜴)
2			ユーベ（夕）		
3			オーギ（扇）		
4		オンナ（女）	カガミ（鏡）	カタキ（敵）	
5					
6					
7					
8					
9			キューリ(胡瓜)		
10			ヒバシ(火箸)		
11					
12					
13					
14					
15					
16					
17		コウシ(仔牛)	コーリ（氷）		
18			シルシ（印）		
19					
20	ミヤコ（都）	ヤナギ（柳）			

3	カタイ(堅い)	カルイ(軽い)	クライ(暗い)	トーイ(遠い)	═══
4	═══	═══	カライ(辛い)	キヨイ(清い)	クロイ(黒い)
5	═══	シロイ(白い)	セマイ(狭い)	═══	═══
6	═══	═══	ハヤイ(早い)	═══	═══
7	═══	═══	フルイ(古い)	═══	═══
8	═══	═══			

1	═══	アワレム	ウカガウ	═══	═══	ウタガウ	═══
2	═══	アツマル	アヤシム	アラワス	イツワル	オドロク	ヨロコブ
3	═══	═══	═══	═══	═══	═══	═══
4	═══	═══	コタエル	═══	═══	タスケル	═══
5	═══	═══					

1	═══	═══	═══	═══	イヤシー	═══	シタシー
2	═══	═══	═══	═══			

調査語の中に、少年に不明のものがあった。このような場合、少年は、応用的にも発言したであろう。
学校ことばの習慣によって発言したものもあるか。
少年者のが中年者のに同じである場合、そのものは同時に老年者のとも同じであることが、そうとうに多い。

4. 語アクセントと文アクセント

以上、語アクセントで、老・中・少を通じ、だいたい、共通の傾向をとらえることができる。おもな傾向は、下降調をとる傾向である。ついでは、高音を「○○」「○○○」などとつづける傾向が注目される。

これらの語アクセント傾向に関係の深い文アクセント傾向としては、さきにとりまとめたもののうちの、どれがとり立てられようか。c）4の傾向とc）5の傾向とがまず注意されよう。ついでは、c）1の傾向がすぐここに思いあわされる。

となると、当方言にいちじるしいｃ）２、２′、３のあと上げ関係の傾向には、直接につながる語アクセント類型がないことになる。なくて、文アクセント上に、このようにあと上げ関係のつよい習慣形式をおこしているのはなぜか。いまだ考えきれていないが、さきにも述べたように、このあたりが、方言上の混質的な地帯でありきたっただけに、ことばの（ことばの生活の）波立ちが激しくて、ｃ）１～６のような、相互関係の複雑な文アクセント諸傾向ができているのかと思われる。

文の状況を語に整理し、語の次元において冷酷に語アクセントを整理して受けとるとなると、文アクセントの生活のうえの、なにがしかの傾向に関連のこいなになにだけが、特に、語アクセントのつよい傾向としてとらえられたりすることにもなるのか。

語アクセントの整理の結果から文アクセントを問題にするよりも、文アクセント傾向の把握につくしたところから、語アクセントの整理そのことと整理の結果とを問題にする方が、いっそう重要であるかと思われる。

いずれにしても、私どもは、音声表現の頂面をなしている、方言生活の現実の文アクセントを、重視しなくてはならない。今、当方言でも、文アクセント上の特質傾向を語アクセント類型に対置して見、その相関に一種のふしぎさを見いだしうるにつけても、私どもは、文アクセントと文アクセント習慣の力づよい特質とを重視しなくてはならないと思う。

Ⅱ　文　　法

櫛生方言の人たちは、毎日の生活の中で、くらしのために、どのようなことばづかいをしているか。

日々の方言の生活は、方言のことばをつかう生活である。文の形でことばがつかわれる。その文は要素（成素）、部分（成分）から成り、個々の要素、成分には語が認められる。語は、文をつづるためのものとして造りだされており、その造出に造語法がある。

a）日々の表現の生活

——文表現の諸相とその表現法——

当方言人たちは、この方言社会の中で、日々の言語表現の生活をしており、それによって、たがいに心を通わしあっている。

言語表現では、つねに「文」の形の表現すなわち文表現がなされており、会話はすべて文形式（またはその発展の連文形式）によっておこなわれる。私どもは、通行の文表現をとらえてそこに諸相を見ることができ、また、その各相につき、文の構造をたしかめて表現の法（表現法——文法）を見ることができる。

櫛生方言では、私の調査によるかぎりのところ、以下に列挙する諸項の文表現相が認められる。

すべてのカードを類別したら、このような結果が得られた。

分類では、もっぱら内面の意味作用に注目した。生きた表現の個々のものを、表現生活の見地で整序していくのだからである。

文表現は意味作用体と見られ、意味作用体の意味作用は、訴えを生命とするものであると考えられる。したがって、今は、文表現の訴え性を分類する

立場で、文表現の類型を得ることにつとめた。（内容本位に、さまざまの表現意図を分類したのである。）

1.　呼びかけの表現

はじめに、特定化している呼びかけの訴えがとりあげられる。（親族を呼ぶ訴えの表現、「オカハン。」<お母さん。>などはとりあげない。）

○ヨー。

人を呼ぶのにこう言う。男子一般でのことである。表現の品位は中の下であるという。「ヨイ。」もある。これについては、“顔を向けあわすかわりのことば。よいことばだ。”とあった。

妻は夫に「アンタ。」と呼びかけることが多い。

○コレ。

○コレ　コレ。

と呼びかけるのは、夫が妻に対してにかぎらない。以上は一単語本位のものである。

悪態の呼びかけでは、

○ポンタレー！

○クソバカー！（クソバカスケー！）

○ナニクソ、トーロヒメノカワ　ガ！

なにくそ、蟷螂姫の皮が！　（女のやせているのに言う。）

○ヘオ　タレナ！

「屁をたれるな。」（ばかすけめ！）

などがある。後二者では、言いかた・言いまわしがやや複雑になっている。

○アノ　ノー。

あのね。

○アン　ノー。

○アノ　ネヤー。

あのねえ。

などは通常の呼びかけである。

○アレワ　ノー。

あれはね。

○アレワ　ネヤ。

あれはねえ。

なども、ここにならべおくことができる。

2.　挨拶の表現

習慣化している挨拶ことばが、特定の訴えの表現として受けとられる。

○インマ　ヨー。　　<男・小人>

○インマ　エー。　　<女・小人>

「さよなら。」を言うこれが、まずとりあげられる。大人は言わないとのこと、小人たちが、おもに途上の別れに言う。「今よ。」などと言うのは、東北地方にあるのとも似かよった表現法で、四国内のものとしては、特に注目される。

○ダンダン。（ダンダン。）（ダンダン。）

「ありがとう。」を言うこれも、今日では、四国でもかなりめずらしいものである。（昭和47年1月の調査時には、"以前は「ダンダン。」を言った。"とあった。）

「ありがとうございました。」の言いかたのものは、すでに他のところ（P. 72、73）であげた。「……　ございます。」式の現在法で言ってもよさそうな場合にも、「ました」と言っているか。

一方、「お早うございます。」類は、中国山陽内でのような「ました」式の言いかたにはしないで、

○オハヨ　ゴザンスー。

などと言っている。

○アタタコー　ゴザイマス。

とも言う。

訪問のさいには、

○カーチャン　オル　カイ。

母ちゃんはいるかい。

など、子どもには、むぞうさな言いかたをする。これがいなかの素朴な愛情表現でもある。

○オジャマシマス　ライ。

おじゃましますわね。

と、これは老年者がよく言う。上品である。

帰る時に、

○ジャマヒタ　ノー。

じゃましたね。

と言うのは、男のつくろわぬ挨拶である。送る方<男>は、答えて、

○アー、ソレドコロカイ。

いや、それどころかい。

と言う。

人のいくたりもが働く所に行けば、

○ドナタモ　ゴクローサンデ　ゴザイマス。

どなたもごくろうさまでございます。

と言う。

○マ、ドナタモ　ハヨ　オシマイナサイ。

まあ、どなたも早くおしまいなさい。

これは、しごとから、先に帰る時の挨拶である。

○ボッボッ　ヤレ。

これは、通りがかりに言う、一般のぞんざいな挨拶である。

結婚式宴に招かれていっての挨拶は、

○マー　キョーワ　オセワヤキオ　モライナサル。オメデトー　ゴザイマス。　<後文アクセント失>

などである。よめさんを「オセワヤキ」と言うのは、若い識者には、さらりとは肯定しかねることのようであった。

昭和47年の調査時に、

○せっかくで　ございますから、オイタダキシマス。

というのを聞いた。頂く気もちが、「お頂きする」ということばであらわされている。

3.　応答の表現　　<応答の挨拶である。>

習慣化した、さまざまな応答のしかたが、応答表現の特殊な訴えとして見わたされる。

返事の応答に「へー。」がある。品のよいものとなる。「オーオー。」とおとなが言うのは、上品でない返事である。私は「アーアー。」の返事を聞いたつもりであるが、土地の識者はこれを疑問視している。

○アー　ソーデス　カー。

これは単純な肯定の応答である。文アクセントがこのようになる点が注目される。「ソー　カー。」も「ソー　デー。」（そうですか。）もある。

「いやだ。」という返事の応答は「イヤ　ゾ。」となる。すこしよいのは「イヤ　ゼー。」である。

○ソーデス　ライ。

○ソーデス　ライ。

は、いさぎよい受けひきの表現である。

○ソイ、キモノ　ホーガ　ナー。

そうですよ、きものの方がねえ。　（らくだというところ。）

という表現があった。これに、「ソイ」が表現部分として存している。

老男に、

○サヨ　サヨ。

○ア、サヨ　サヨ。

の応答表現がある。

○マコト　ヨ。

ほんとよね。

これは一般に広く聞かれる。

○ソー　ヨノー。

は、「そうだわねえ。」に近い。なんとなく受けごたえるのに、

○ソーデ　ゴアンス　ナー。

○ソーデ　ゴザイマショー　ナー。

などと言う。

○ホンマ　ヤー。

これは「ほんとうかい？」と問いかえす応答である。

○ドーデス　カナー。

は、いぶかっている。文アクセントが特異で、いかにも土地風である。

当方の特色をなすものと考えられる、

○カモ　カイ。

かまうものか。かまわないよ（さ）。

がある。文アクセントがまたこの土地風である。

○カマン　ト。

かまわないよ。

○カマン　ト　カマン　ト。

も、「ト」でむすぶ、この地方独自のものである。

○カマン　ゼー。

もある。

「できるさ。」との応答に、「コダワイジャ。」の言いかたができている。

○コタワイジャ→ー。

は、特につよめて言ったものである。文の抑揚づけに、そのことがはっきりと出ている。<「ジャ」はもはや独特の遊離成分と見てよいものかとも思う。P. 134参照>

「なんのなんの、どういたしまして。」というところで、

○ソレ下コロジャ　アリマセン。

と言う。これも習慣化している。

相手の言を受けて、

○ヨー　イーナハライ。

よくおっしゃいますわ。

○ヨー　イーナサライ　ノー。

○ヨー　イーナサル。

○ヨー　イーマス　ライ。

などの言いかたをする。この方式の言いかた、ことに「ライ」の言いかたをするのが、顕著な土地風である。

4.　説明の表現

さまざまの表現意図を、意味作用による訴えの見地で分類すると、大きく、説明・解説の意図の表現類型がとらえられる。

これの範囲は広い。追憶も、説明として訴えられることがあり、推量の説明という訴えもなされる。下には、表現法に注目して、説明の諸分野を見ていこう。

まず、現下の事実をとらえてそのまま言う単純な説明がある。

○協同組合の　工業部アタシデモ　ソーデス　ワイ。

などと言う。「ワイ」がくる。これは自己表白的な訴えことばなので、これにしめくくられて、文の表現は、いよいよ説明の訴えの態の明らかなものになる。説明なので、「デス」の用語のおこることもしぜんとされる。「〜デス　ワイ」とともに「〜デスライ」（〜でするワイ）もよくおこなわれている。

○ヤイタリ　ヒテタリヤ　スルンデス　ライ。

焼いたりすてたりなんかするんですよ。

などと言う。「〜マス　ライ」（〜まするワイ）も言う。

○ハジマリワ　スコシズツ　オチマス　ライ。

はじめはすこしずつ落ちますよ。

のように。

○オチマセナイ。

にも「〜ませぬワイ」が認められる。

○アトイ　モンテ　ハナシナハル。

あとへかえってお話しになる。

このような言いきりの形が、事実説明の単純卒直なものであることは、言うまでもない。

○柳の木は　イガタカイト　ユーテ、ウイェル　モンジャ　ナイ　イーマス。

柳の木は威が高いといって、植えるものじゃないと言います。

などとも言う。

○イットキ　オイテ　ハエルノモ　アリマッ　ソー。

いっときおいて生えるのもありますよ。

は、単純な言いかたに「ぞ」がついている。

○アシモトン　ワルテ　ノー。

足もとがわるくてねえ。

○フシモゲガスルヨーニ　ゴザイマシテ　ナー。

節もげがするようでございましてねえ。　（歌唱のこと）

などは、単純な言いかたながら、「て」でむすぶ中止的な説明になっている。これで、独特の訴えの効果を発揮している。

○シヤグ　ション　ネキジャケン。

市役所のそばだから。

○オナゴノ　コワ　スネクッタリ　イタシマスケン　ナー。

女の子はすねたりいたしますからね。

○……ジャモンデスケン。

……だもんですから。

これらは「ケン」でむすぶ言いかたである。

○タベリャ　シマスガ　ノー。

たべはしますがね。

これは逆接表示の「ガ」でむすばれている。

つぎに、現下のではなくて過去・完了の事実を、回想して訴える説明がある。

○ヒドコイ　メニ　オータ。

ひどいめにあった。

○ダイブ　オッタ　ゾヨー。

だいぶんいたよお。

強調にはおのずからそれにふさわしい訴えことばがつく。

○ミン　カルカッタ　ワイ。

あの人は身が軽かったよ。

など、「ワイ」がくるのも、説明の訴えゆえ、また当然である。

○ダレマリ　ヤラナンダ。

そうそうだれもはしなかった。

と、「ナンダ」が用いられる。

○……　イヨリマシタ　カイナ。

……と言ってましたよ。

のような言いかたは、過去の事実を報告的に説明する訴えである。女性もこの言いかたをする。

○オシニタンデス。

死なれたんです。

「タ」に「デス」がきている。

○ジテンシャワ　マダ　ヨーチナカッタンデス　ワイ。

自転車は当時まだ幼稚だったんですよ。

「タ」→「デス」｝「ワイ」となって、説明の態はくっきりとする。

○アリャ　アメスギタンデス　ライ。

あれは雨が多すぎたんですよ。

このように、「ライ」が見られることにもなっている。

つぎに、観察を訴える説明がある。

○ヤヤモリ　シヨラ。

あかちゃんもりをしてらあ。

○ハタ　モラヨライ。

旗をもらってら。

などと言う。これらにしても、

○イツマデモ　ワライヨラー。

いつまでも笑ってらあ。

にしても、みな「〜ヨル」（〜おる）という進行態の言いかたになっている。

つぎに、追憶を訴える説明がある。これは、

○オリカニ　カタジンガ　タブサ　ユートッタ。

まれに堅人がたぶさをゆってた。

のように、（さきの、回想の訴えになる説明の場合と同様に）、「〜タ」の言いかたにもなる。が、

○コナイダモ　オモシロインデス　ワイ。

こないだもおもしろかったんですよ。

○ソイデモ　ムカシノ　ヒトワ　ナント、オコメオ　クータラ　バチガアタルと　言った　ものだ。

のようにもなり、かならずしも「〜タ」の言いかたを必要としない。追憶・追想の訴えと、回想の訴えとが区別される。

つぎに、推量を訴える説明がある。

○イッポン　アリマスロー。

一本あるでしょう？

○テイト　コシタラ　ゲリシマス　ライナー。

程度を越したら下痢しますよねえ。

などと言う。

さて、断定とか打消とか、可能とか比況とか、さては願望などにしても、これらおのおのを、「説明」の範疇として立てることができなくはない。しかし、当方言についての私の調査では、これらに関して特説すべきものを、得ることができなかった。

文表現は、説明の場合にも、しばしば諧謔味をともなう。これは、方言の表現生活にごくありがちのことである。おとなたち、ことに老人たちは、おりおりの表現で、たがいに諧謔をたのしむ。このことが、日々の生活の中での一種の娯楽でもある。

○ハヨーニ　コシラエトカント、モンテ　ウス　ナデヨンナハル。

おもちを早く作っておかないと、おえびすさまは、帰ってきて、もちをついたかどうかと臼をおなでになる。

老男の言ったこれは、洒脱とも思われた。

○キレーニ　ナニモカモ　ハエテ　シマイヨル。

すっかり、なにもかも生えてしまってる。

これは、芽が出ることを、誇張して表現したものだったと思うが、観察の説明をわざと大げさに言うところに滑稽があり、諧謔味がある。

○エー　フー　ヒトリマスケン。

こんないいかっこうをしてますから。

これはおばさんが自分の身なりのことを説明したものである。

説明の表現の、どのようなものの場合にしても、それが人に対するもの言いであるかぎり、ものはみな、敬卑の待遇の表現になる。「デス」や「マス」が出るのもそのためである。対人的な文表現はすべて待遇文になる、待遇敬卑表現の文になると言える。

5.　判断の表現

説明の意図の表現類型に関連するものとして、判断の訴えの表現類型がある。

この判断の訴えには、現在法をとってするもの、完了法をとってするものなどがある。

現在法をとってするものが、表現法上から、いろいろに見わけられる。はじめに、単純断定の表現法としうるものがある。

○オコメモ　アジノ　ワルイ　コメ　アルー。

お米も、味のわるい米がある。

と、まったく単純である。

○ナンボ　トシヨリニ　ナッテモ　ミナ　コドモノヨーニ　オモイナル。

いくら年寄りになっても、その子を、みなこどものように思いなさる。

などと、特定の敬意表現法があらわになることもある。

○カワモ　ヨー　イタム　ゾー。

川もよくいたむ<堤防がくずれるなど>ぞ。

○コンナー　タカブットル　ナー。

おまえは高ぶってるねえ。

○ヤケルノワ　マコト　フセゲル　ネヤ。

焼けるのはほんとに防げるねえ。

などとなると、訴える気もちがよく出る。「ネヤ」とあるのは、ことに訴えがつよい。さてこのようなのへ、さらに敬意表現形式がそわることもある。

○タイシタ　モンジャ　ナイ。

大したものじゃない。

○コトンナル　モンジャ　ナイ。

役にたつものじゃない。

では、単純断定が、「ナイ」という形容詞で言い定められている。

○ホイタラ　イモ　メズラシー。

そうしたら、いもはめずらしいはずだ。

は、通常の形容詞の場合である。

○イヨイヨ　シンボーナ。

とってもよくはたらく。

は、形容動詞のきたものである。

○ドヒテモ　コトガ　ハヤイデス　ワイ。

どうしてもことが早いですよ。

○チート　ハデナガ　ヨー。

すこしはでだがねえ。

などとなると、形容語での言い定めが、最後的に文末用の特定の訴えことばでしめくくられていて、訴え性が一段とはっきりしている。

単純断定の表現法ではあるが、特に「よい」「わるい」の言い定めかたをするものがある。

○アッタガ　ホーガ　エー。

あった方がいい。

○カドガマシー　コトー　ユワンデモ、オランダラ　エー。

角々しいことを言わなくても、大きい声で近所の人たちを呼んで集めたらいいですよ。

○ミナ　ヤリクチガ　ワルイ。

みな、やりかた（おこない）がわるい。

これらはこれらで、やはり特定の訴えかたになる。「エー」の場合は、「の方がよい」との言いかたか、「なになにしたらいい」との言いかたかになることが多い。

現在法をとってする判断の訴えのうち、つぎには、特に指定の助動詞がつかわれる、指定断定とも言うべきものが、一類として注目される。

○アイツァ　ハチモンジャ。

あいつは八文（足らずもの）だ。

のように、指定して断定する。

○アノ　コワ　ミジオナ　コジャ　ノー。

あの娘は気だてのやさしい、かわいらしい娘だね。

「ノー」などがきて、指定断定の訴えがはっきりとする。

○シミッタレジャ　ネヤ。

しみったれ（“はきはきしていないこと”）だねえ。

のように、「ネヤ」がくると、訴えようがつよくなる。

○ソガイナ　コトー　ユータテ　イケンガジャ　モン。

そんなことを言ったっていけないんだもの。

など、「ジャ」は自由に広く用いられている。

○イフーナ　ヤツデ　ノン。

異風な（“すねくれた”）やつでねえ。

これでは、「ジャ」ではない「デ」が、指定断定の用に立っている。

指定断定と見なしうるものに、なお、つぎの一類がある。

○ノマント　ヨージョースルガ　ホント　ヨ。

酒を飲まないで養生するのがほんとうだよ。

○シンセツブリ　ヨ。

親切ぶりだな。

「ジャ」も「デ」もない。が、指定断定の気もちは出ている。体言による言い定めが、最後的に「ヨ」文末詞で受けられると、全体は、「ジャ」断定の気もちを内在させた判断の訴えになる。

○ソーノ　ガニー。

そうだのに！

の場合も、「ガニ」（のに）が文末に特立しており、上の「ヨ」などに類するものになっており、「ソーノ」の言いかたが、体言による言い定めに近いものになっているので、全体は、上の二例と同じように「だ」断定の意味の出ているものと見ることができる。

現在法をとってする判断の訴えのうち、つぎには、否定の言いかたのとられる、否定断定と言うべきものがある。

○ソノ　ワリアイニ　アタマワ　ススンドラン。

そのわりあいに、あたまは進んでいない。

○イヨイヨ　コトクソンナラン。

まったくおまえはつまらないやつだ<ことにならない>。

のように言う。明確に打消す。——最後に特定の呼びかけことばがくれば、訴えの気もちは濃厚に出る。

○イラン　コトー　ユーニャー　ヨバン。

よけいなことを言うにはおよばない。

○カネ　タタクニャ　ヨバン　ト。

かねをたたくにはおよばないよ。

のように、「ヨバン」が慣用されており、外来者の注意を引く。

○ベツベツデ　ナカラニャ　イケン。

別々でなくてはいけない。

○月に二度も東京へ行くのなら、その人は、エライ　ヒトノ　ウチニ　ハメトカニャ　イケナイ（いけぬワイ）。

……、えらい人のうちに入れておかなくちゃいけないよ。

○イケン　ガヨー。

いけないのよ。　<“やわらかいことば”>

このように、「イケン」もよく用いられている。

○イケル　カヤ。

いけませんよ。

これは「イケル」をつかった反語法の表現である。やはり当方言で人がこれをよく言う。若い女の人たちもこれを言う。

つぎに、――現在法の言いかたに対する、完了法の判断の訴えがある。

○オー、チンチン　ナッタ。

おお、きれいになった。

○オシエムキガ　ヨカッタ　ナー。

教えかたがよかったね。

○コレワ　エー　ヤイトジャッタ　ワイ。

これはいいお灸（いましめ）だったな。

このように言う。

つぎに、推量法の、判断の訴えがある。

○ワシラガ　シランノジャケン　シラマイ　ゾイ。

わたしらが知らないんだから知るまいよ。

6.　所懐の表現

判断の訴えに関係の深いものに、所懐の訴えがある。――所懐の内部にも判断がある。が、5では特に、対他的発言の態度のつよいものを一類型に見て、これを判断の表現の訴えとした。今、自分が思い、自分が考え、自分が感じることを述べる態度をこく出すもの、その種の判断の訴えを別にとり立てて、これを所懐の表現とする。

○ワシャー　ソー　オモウ　カイ。

わたしはそう思いますよ。

○ワタシラノヨーニ　イモダネノ　クサッタヨーナノワ　イケマセン　カイ。

わたしらのように、いもだねのくさったようなのはいけませんわ。

○ウチラ　ネキデ　ヨー　ユワン。

わたしなんかは、近くで言うことができない。

第一人称の代名詞のくるものが、まずここにとり出される。「いけません」「言わン」などと、打消・否定の言いかたをする例が多く見つかる。所懐はこういうかたちに出やすいものでもあるか。

○バカシテ　トショリワ　イケン　モンジャ　ワイ。

ばかなことをして、年寄りはどうもつまらないものですよ。

○ドガイデモ　エー　ワイ。

どんなでもいいさ。

○アノグライナ　ゴッツォーデ　テオ　キッタラ、テガ　オシーデス　ライ。

あのくらいのごちそうづくりで手を切ったのでは、手がおしいですよ。

これらでは、「ワイ」「ライ」が文末にきていて、また、文表現が第一人称者の所懐の訴えであることが明らかである。

つぎには、表現法上の特別の形式はないけれども、第一人称者の所懐の表現であることの明らかなものをとりあげる。

○オシューテ　ヤスム　キニ　ナラン。

おしくて、休む気にならない。

○デンキ　フトカッタラ　ヨル　ネブト　ナイ　ガノー。

電灯が大きかったら、夜、ねむたくないもんだねえ。

○モッタイナイ　コト　ゾイ。

もったいないことだよ。

○ソガナ　コタ　イヤノガジャケン。

そんなことはいやなんだからね。

おのずから、文に、主観表明の語句が出ている。

○ナニサマ　ハズカシューテ。

なにしろはずかしくて。

などと、言いかけて「て」でとめる文表現法もある。独特の所懐表現になる。

さて、所懐は意見ともなる。今は意見の語を広義につかおう。そこに批評意見もあるはずである。感想意見という所見（所懐）もあるはずである。

○ボクワ　チガウ。

ぼくの考えはそれとはちがう。

○ワシノ　イタイ　アシオ　カマレテ　タマル　モノカイ。

わたしの痛い足をかまれてたまるものか。

これらは第一人称での言いかたになっている。

○ミンナ　カラダ　シマワイ。

みんなからだをそこねてしまうよ。

○チンカシタガジャケン、アンマリ　アンシンシテ　オラレナイ。

沈下したのだから、あんまり安心してはいられないよ。

これらは、「ワイ」「ナイ（ぬワイ）」どめの言いかたになっている。

○カヤワ　イラン　ト。

蚊帳はいらないさ。　＜夏の夜＞

これには第一人称者を直接に表示するものはないけれども、「ト」のむすびことばが、この文表現の、第一人称者の所見の表明であることをあらわして

いる。

○シンダイノ　デキル　ヒトニ　ジッサイオ　キカヒテ　モロートイタラエーガ。

信頼のできる人にじっさいを聞かせてもらっておいたらいいんだけど。

「いい」「わるい」の言いかたも、発言者の姿をよくうかばせる。

○マケタノデ　ゴザイマスケン、シカタガ　アリマセン。

負けたのでございますから、しかたがありません。

こうなると、これは、「ゴザイマス」「マス」ゆえに、第一人称者の意見の訴えが明らかである。

○デルカラウイェ　ヨ。

もちろんよく出ますよ。

など、「……から上よ。」という形式の慣用特殊文がある。これはこれで、意見表現の明らかな形である。青年層でよく言われる。

○コタワン。

できないなあ。

というのも慣用の特殊文である。男女ともにこれを言う。

○ソガイナ　コト　アリマス　カヤ。

そんなことがあるものですか。

は反語法になっている。つよい意見の表明である。

同情を表明するのも、所懐の表現の訴えの一種とされる。

○ムシンナ　コトー　シマシタ　ナー。

お気のどくなことでしたねえ。　（くやみの表現）

自分がなにかを領得したことを表明するのも所懐の表現の一種である。

○アンタラガ　オンナハル　ノカナ。

あなたたちがいらしたの。

7.　意志の表現

所懐の表現につらなるものに、意志の表現がある。

○ナマジ　ニゲトコ。

いっそのこと逃げておこう。

このように、はっきり意志を表明するものを、特に意志表現の訴えとしてとり立てる。

○トル　ガゾ。

取るぞ。

○ナニモカモ　センセニ　イヤゲテ　クル　ゾー。

なにもかも先生に言いあげてくるぞ。

○ヨケ　ゴッツォモ　ヒテ　クワサン　ゾ。

ごちそうも、たくさんしては食わさないぞ。

などと、「ゾ」の訴えことばをつかうのは、つよい意志・意向を伝えるものである。冗談に「ゾ」をつかっても、そこにつよめの効果は明らかである。

○ジブンラギリデ　キアンキニ　スミタイ。

自分らだけで、のんきに住みたい。

など、「〜タイ」と希望を言うものが意志の訴えであることは言うまでもない。

○イイェ　タテルナラ　ワシガ　セッケイクンデ　アギョー　ワイ。

家を建てるのならわたしが設計してあげようよ。

このように、「ワシ」⟶「ワイ」も、意志の表現をよくになう。

8.　抗弁の表現

これを一表現類型とすることができよう。

○ナン　ゾー。

なんだい！

と、これはけんかのかまえのことば、慣用文である。積極的態度の表現である。

○シラン　ガニ。

“知りません。”

○ユータ　ガニ。

言ったのに！

○シタ　ガニ。

したのに！

など、「……　ガニ。」形式のつよい抗弁の訴えがある。

○ウケンカッタダケ　ヨー。

受けなかっただけよ。

これも、じっさいに、抗弁のことばであった。「……だけよ。」の言いかたが、つよめの調子にのって、抗弁の表現になる。

○デライジャ。　<「ジャ」は、もはや独特の遊離成分と見てよいものかとも思う。P.134参照>

もちろん出るさ。（出るとも。）

この言いかた（慣用文）は、反発味のつよい抗弁になる。子がおやに対しても、これを言うことがある。

○トテモ　祝いヤナンカ　デキマス　カイ。　<アクセント失>

これは反語法による抗弁である。

9.　想像の表現

抗弁の表現、意志の表現などの、大いに自己を出して相手に訴えていくものと同様、自己を出して相手に訴えていくものに、想像の表現の一類型がある。

○オトーフ　ウレンノンデショー。

お豆腐は売れないんでしょう？

この「〜デショー」は、未来形の言いかたになっている。これがささえになって、想像の表現が成立する。上の例は、文末の声調が上げ調子なので、想像の訴えのさまが明らかである。

○アタマガ　エーンデショー　ゾイ。

あたまがいいんでしょうよ。

このように、文末に「ゾイ」がきても、想像の訴えの気もちはつよく出る。ただし、「ゾイ」でむすぶと、全体はひとりぎめ的な気もちをあらわすものになる。場合によっては、「ゾイ」が、「ゾイ」のアクセントになる。これらのこととともに、表現が、おどけて言うもの、ばかめて言うものなどになる。

○ジッピョータ　ユワングライジャロー。

十俵よりは多いだろう。　（きびの収量）

「ジャロー」とあっても、明らかな想像の表現である。

○ムスメオ　ダイジニシテ　クレヨロー　カ。

娘をだいじにしてくれてるだろうか。

「どうどうしヨル（しおる）」の「ヨロー」も未来形で、ここに想像表現ができる。疑問詞「カ」が、このさい、想像表現を訴えのつよいものにしている。

○ソリャ　ヨー　ゴザイマシツロ。

それはようございましたでしょう。

これには「ましツロ」がきている。なお「カ」などのむすびがくれば、

○モッテテ　クレマヒツロー　カ。

持って行ってくれましたでしょうか。

○モー　ゴジン　ナッツロ　ガイ。

もう五時になっただろうねえ。

などとなる。

打消推量の「マイ」がきても想像の表現になることは、言うまでもない。

○クツモ　サンゾクタ　ユーマイ。

靴も三足よりは多いだろう。

○ニネングライワ　カンマイ　ゼー。

二年くらいはかまうまいよ。

文末詞のむすびのある方が、よりつよい訴えになる。

文末詞の、疑問を訴える特定のことばだけがあらわれ、未来形の言いかたまたは未来表示のことばはなくても、想像の表現の訴えになる場合がある。

○ヤマノ　サクモ　オナシ　コト　カイナー。

山畑の作物も同じことかねえ。

などである。

10.　問尋の表現

想像することのとなりには、問い尋ねることがある。問尋の表現の類型は大きい。以下にそれを分別して見ていく。

想像はまず、自己に問うような問尋になる。これは、いぶかり、疑いでもある。

○ドーヒテ　コドモラー　ツレテ　イカナンズロー。

どうして、話しを聞きに、子どもらをつれて行かなかっただろう。

と、これは自身に問うのである。その訴えがつよければ、悔いも大きいわけである。

○コレワ　マー　ドー　シテジャロー。コシクレトルガ。

これはまあどうしてだろう。変になってるが。　（作物）

ひとりごとである。訴えかけは、自己へではあるけれども、つよい。

○ドコノ　ブラクノ　ウケモチカ　シランガ、……。

どこの部落の受けもちか知らないが、……。

こういう、年寄りの、ひとりがたりふうのものがある。ややよわい調子にはなっているが、これに、やはり問尋の訴えがある。

問いが他に単純にうちかけられると、表現は率直な問尋・質問になる。

○ヨーケ　アッツロー。

たくさんあったでしょう。

このような、いわゆる疑問詞の全然ないものが、まずとりあげられる。それにしても、ものが問いの文である以上、そこに、しかるべき表現法のあることは当然である。上例では、「〜ツロー」との、想像を託した未来の言いかたが見られる。

問いが相手にうちかけられるとなると、表現の訴えのいきおいとして、相

手を呼ぶことばも用いられることになる。

○バーヤン、ゲンキナカッタ　カナー。

ばあさん、元気でしたかね。

○オッサン、カリツケ　ヨカッタ　カナン。

おじさん、刈りつけの作物のできはよかったですか。

などと言う。

通常、対他の（つまり相手への）問いの表現では、文末に、疑問詞としての文末詞がきがちである。これがきて、問尋の訴えははっきりとする。

○ワケンニャ　イカンガジャロー　カー。

分けなくちゃいけないんだろうか。

○ナカッツロー　カ。

なかったろうか。

○キナハロー　カー。

来なさろうか？

など、「カ」がきがちである。上三例には未来形の言いかたがきている。そうでなくてもよい。

○コガイナ　キ　アル　カー。

こんな木があるか。

のように。

○ミチ　カイ。ヒキ　カイ。

満ちかい。引きかい。

○アメ　フリヨル　カイ。

雨が降ってるかい。

このように、「カイ」のむすびになることも、おとなに多い。

○カゼ　フク　トコ　カナ。

あなたの所は、風がよく吹く所ですか。

のように、「カナ」もくる。

○ナオッツロー　ガナー。　<アクセント失>

なおったでしょう？≪下降調≫

と、「ガナ」のむすびになれば、問いはおしつける気味の、訴えのつよいものになる。

○オンナル　デー。

いらっしゃる？

「デー」とあると、やさしい問いになる。以上、種々の文末詞が、問尋の表現にはたらく。そのおのおのの訴えの作用は大きいので、文に呼びかけことばはこなくてもよい。

つぎに、疑問用の文末詞とは別に、特定の疑問詞をとる、問尋の表現の訴えがある。――これにまた、文末詞のむすびもくることになる。

○ナニ　スラー。

何をしようかね。

○ナン　ナラ。

何かいな。

○ナン　ナー。

何です？

○ナニゴト　ナラー。

何ごとなんだい。

○コノ　センセイワ　ナニダイガクデスリャー。

この先生はなに大学の人ですか。

これらは「何」関係の疑問詞のくるものである。（表現法の特色も明らかであろう。）

○ナンカ　コトバニ　チゴータ　トコン　ナイジャロー　カ。

何かことばにちがったところがないだろうか。

では、「カ」の文末詞もきている。

○ドレグライ　ミエマスリャー。

どのくらいに見えますか。　（年齢のこと）

これは「ドレ」のきたもの、

○ドコイ　イキヨル　ガー。

どこへ行ってるの？

○ドコイ　イトッタラ　ナン。

どこへ行ってたの？

○ドッカラ　オイデタラー。

どこからいらっしゃいました？

これらは「ドコ」のきたものである。

○ソリャ　ドーユー　ホーホーデ　ヤッタラ。

それはどんな方法でやったんだい。

○ドガイナ　モンジャロー。

どんなものだろう？

○ドガイ　スル　ヤ。

どんなにする？

○ドガイ　デ。

どんな？

○ドヒテ　オマイラ　モノー　ユワン　ノゾー。

どうしておまえたちはものを言わないんだ。

などなどがある。

○ナセ　ナラ。

なぜなの？

○ナヘ　ナラ。

なぜなんだ？

もよくおこなわれている。婦人は前者の方をよく言うらしい。

さて、問尋は、いざない・勧誘を意図する問いの訴えにもなる。

○オイリン　カイ。

風呂へおはいりになりません？

「カイ」あるいは「カ」と問う。が、中味は単純な問いではなくなっている。

○アソバン　カエー。

遊ばない？

○イナン　カ エー。

帰らない？

○イカン　カ ネヤー。

行かないかね。

これらでは、文末のしめくくりことばのせいで、おのおのの問いの訴えがつよくなっている。それだけに、さそう気もちもつよく出ている。

つぎに、問うて同意を求めるものがある。

○エー　コジャ　ユワイ　ネヤ。

いい娘だって言ってるねえ。

などである。

最後に、問尋の体をなしていて、問いらしくもないものがある。

○ニジューイェン　オツリ　ツカーサル　カイ。

二十円、おつりを下さる？

「カイ」と問うているけれども、問いらしくない、ことのきまっている問いである。

○だれが　ヤクダラン　モノー　ウイェタ　カ。

だれがくだらないものを植えたか。　（五十歳男の言）

も、問うまでもない問いである。否定の意がはっきりしている。——そこで、これが、発言者のひとりがたりのようにもなっている。

11.　勧誘の表現

上の、いざない・勧誘を意図する問尋の表現は、「どうどうしないか。」「しませんか」との、打消法の問いになっていた。そこに、さそいでも問いになる、表現法の特性がある。

いま、勧誘の表現とするものは、肯定法でものを言って、しかもおわりを「ヤ」文末詞でむすぶ特定の表現類型である。

○イノロー　ヤ。

帰ろうよ。　＜「イノー　ヤ。」とも＞

○モー、マンマ　タビョー　ヤ。

もうごはんをたべようよ。

○モー　リンワ　ナオソー　ヤ。

もう鈴はおしまいしようよ。

○ニバンメ　シテ　ミヨー　ヤノー。

二番めにしてみようよねえ。

などと言う。未来形をつかった言いかたないしそれに類するものが見られる。

12.　命令の表現

命令一般の表現類型は優勢である。

（このうちから、いわゆる禁止命令は除く。——それは「制止の表現」に属するものとして別にあつかう。）

○ソコエ　バッテ　コイ。

そこへしてこい。　（小便を）

○ソコイ　ネドコオ　カマエテ　アゲテ　クレ。

そこへねどこをしてあげてくれ。

など、通常、動詞の命令形が文の命令表現をささえがちであるのは言うまでもない。

○アガレー　アガレー。

上がれ上がれ。

など、日常の命令表現に、一つ、重複の言いかたがおりおり出てくる。

命令の訴えに、文末の特定のむすびことばがきやすいのも当然であろう。

○コッチ　ミナ　ツメテ　ミー　ヤ。

こっちへみな座をつめろよ。

当方言では、「ヤ」のくることが多い。男女老若とも、「ヤ」をよくつかう。

○……　ミナハイ　ヤ。

など、敬態にもよく「ヤ」が出る。

命令表現の、単純な言いかたに対して、否定法を用いる言いかたもある。

○ハヨ　オシ　ヤ。

早くおしな。

に対する、

○ハヨ　セン　カー。

早くしないか（しろよ）。

などのように。

特殊な語法も用いられる。

○イトラニャ　イケン。

行ってなくちゃいけない（行ってなさい）。

○サキー　イカニャー　イケン　ト。

先に行かなくちゃいけないよ（先に行きなさい）。

など。

特殊な言いかたしだいによっては、命令が説得などにもなる。

○コオテモ　ヤラニャ　イケン　ノゾヨ。

からだがえらくてもやらなくちゃいけないんだよ（やりなさいよ）。

これはこれで、説得性の命令表現の訴えである。

13.　勧奨の表現

「……　見ナハイ　ヤ。」など、いわゆる敬語法のあるものが命令表現になっている場合は、純内容上からは、字義どおりの命令とはしがたい。今、表現意図のままに意味作用を受けとることにすれば、この種のものの訴えは、むしろ勧奨の表現とされる。（あつらえの表現と言ってもよい。）

ものは要するにていねいな命令表現の訴えである。――「命令」を最広義に理解すれば、勧奨の表現もまた命令表現のうちに入れられる。が、今は訴えの実質を細分し、「命令」から、「勧奨」や「依頼」を分別するのである。

○ナオ　シラネオロヒトンナハイ。

なおおみこしをすえて動かずにいなさい。　<「シラ根」をおろす>

人はこのように、命令ではない意図ですすめる。ていねいに、あるいはやさしくすすめる言いかたに敬語法がともなうのはしぜんである。ただしその敬語法が、「〜なさる」に関しても、「〜ナハイ」となり「〜ナイ」となり、また「〜ナサイ」となる。表現の場面場面によることである。

「……〜ナハイ　ヤ。」は、じつによく用いられている。

○アガンナハイ　ヤマー。

　　お上がりなさいよまあ。

など、例の「ヤ」のむすびのきたうえに、さらに「マー」がくれば、勧奨の訴えの気もちはいよいよつよく出る。

○アガリー　ヤ。

○アガリー　ヤ。

これは、「上がり」と、動詞連用形で言いすえているところに敬語法がある。「アガレ　ヤー。」とは大いにちがう。

○ハヨー　アケリー　ヤ。

　　早くおあけよ。

これでは、「アケル」が五段活用動詞なみにつかわれていて、「アケリ」連用形が出ている。連用形敬語法を「ヤ」でむすぶ言いかたは、女性がわに一般的なもののようである。

○センセ　ドーゾ　オツカミクダサイマセ。

　　先生、どうぞ、もちをおとり下さいませ。

これはごくていねいな勧奨である。

14.　依頼の表現

○ハナシハジメテ　ヤンナハイ　ヤ。

　　話しはじめて下さいよ。

○チャワン　アローテ　ヤンナイ　ヤ。

　　ちゃわんを洗ってちょうだいよ。

と、命令形をもって訴えていても、ものは依頼の表現である。

広義の命令の中の一態に、この依頼という訴えがある。

「やりなさい」<私に>は「下さい」に当たる。したがって、つぎのように、「下さい」の「ツカーサイ」もここに出る。

○センセ　ハナシテ　ツカーサイ　ヤ。

先生、話して下さいよ。

○ミテ　ツカサイ。

見て下さい。

当方言のみならず、南予地方では、「やりなさい」の言いかたがよくおこなわれている。これは四国内で異色と見ることができる。

○ミセテ　オクレ　ヤ。

見せておくれよ。

などと、「オクレ」もつかわれる。

つぎに、否定法を利用する依頼表現がある。

○オシエテ　ヤンナハラン　カ。

教えて下さいません？

○オシエテ　オクレン　カー。

教えて下さらない？

○オシエテ　クレン　カー。

教えてくれない？

などと言う。「アケテン　カ。」も、女子青年層で多く言われているという。

特殊な言いかたとしては、

○マーチョット　ウッタテテ。

もうすこし上へ載せてよ。　（夜具を重ねてもらう。）

○アケテ　ヤー。

明けてよ。

のような、「て」で言いきる表現法がある。やわらかい依頼になる。

依頼が願望の心理をこく含むこともあるのはしぜんであろう。

○オッポシテ　ヤ。

おんぶしてちょうだい。

これは女子学童間でのことばであった。

15. 制止の表現

これは相手に訴えかけることがつよい。

制止に、ゆるやかなものもあればきびしいものもある。きびしいものは、禁止と言うのがふさわしい。

○コモタラン　コトー　ユーナ。

くだらない<“「コモタラン」は「小もとおらん」か。”>ことを言うな。

○ケンカ スナ。

けんかするな。

このような、活用の禁止形のはたらくものは、制止の表現の、単純禁止の訴えである。(「するな」は「スナ」と言う。)

○イキナハンナ。

行きなさんな。

○ヤヤコシー　コト　イーナンナ。

めんどうなことを言わないでよ。

は、敬態の禁止の訴えである。敬態となると、「禁止」と言うよりは制止と言ったのがふさわしい。逆の方向に、悪態の怒罵表現、

○ハナクソ　ヌカスナ！

つまらないことを言うな！

などがあり、このようなのになると、禁止の訴えが露骨である。

敬態の制止に、

○アソビナ　ヤ(ヨ)。　<女ことば>

遊びなさんなね。

のような言いかたがある。「アソブ」に関しては、「アソビナ」で禁止法になり、しかもこれで、「アソブナ」の上位の、よい言いかたになる。

○オシナ　ヤー。

しなさんなよお。

では、この文アクセントゆえに、制止の意が、比較的、受けとりやすかろう。

○オイデナ　ヤー。

おいでなさんなよ。

○キナ　ヤー。

来なさんなよ。

みな同種の制止である。さて、「為ナ」などは、このままを私は活用上の禁止形という一形とする。それと、「シナ　ヤ。」などの「シナ」禁止とを見くらべるのに、後者は動詞連用形に「ナ」がついている。これは、「スナ」に準ぜられる、一種臨時的な敬態禁止形と見ておくことができようか。

つぎには、敬態をとるものではないが、制止の訴えと見るべきものがある。

○シタラ　イケン。

してはいけない。

○キタラ　イケン　ゾー。

来たらいけないぞ。

制止して、命令している。

○ソコ　トーラン　ゼ。

そこを通らないのよ。

こうなると、制止表現の訴えがやさしい。

16.　感嘆の表現

以上の諸類型は、相手への訴えの明らかなものであった。

転じて、自己への訴えとも言うべき感嘆の表現を見ることができる。

○オッチョー。

あら！

まずこの種の感声的なものがある。これらが特殊の習慣文になっている。

○オットロシ　ヤ。（オットロシ　ヤ。）

まあまあ、これはおどろいた！

これもよくつかわれるものである。わざとぎょうさんらしくものを言ったり、おどけてものを言ったりする時にも、おとなの男性が、これをよく言う。

○サブ　ヤ。

やれさむや。　（“ひやかしのことば”――ふたりのいい仲などについて）

○シジマシ　ヤ。

ああなんだか寒くてぞくぞくする！

と、感嘆の表現には、「ヤ」のむすびのくる特色がある。

ほかに、感嘆表現で、

○ナヒタ　モン　ナラ。（ナヒタ　モン　ナラー。）

どうしたことなんだ！

などの、特殊な表現法になるものもある。

×　×　×

上来の1～16のおのおので、表現が、みな、なんらかの待遇敬卑の表現になることは、ここにあらためて述べておかなくてはならない。（P.104参照）表現が対人的（自己に対しても）なものであるかぎり、それは、つねに、人を待遇する、待遇敬卑の効果をあらわす訴えになる。訴えの実質は、本来、そうしたものであるはずである。言いかえれば、そこまでの実質のもり上がりがないと、表現の訴えも訴えにならないのである。

b）　連文表現とその構造

方言上で注目されるのは、前後に必然的に連関する二文の連文である。方言にかぎらず、どんな言語表現の現場でも、前後関係をなす二文は必然的に連関しているが、方言での表現生活上では、わけても、その前後する二文に必然的連関の色あいを出すことが、濃厚でかつ端的である。

当方言での、二文連文の必然的連関の様相は、――私の所定の調査で得た資料によるかぎり、以下のとおりである。

私が「方言文章論試作――連文の類型――」(『国語学』第二十輯) を発表したのは、昭和30年3月である。櫛生方言の調査は昭和25年9月のことである。調査時、連文表現をとらえる努力は十分でなかった。それにしても、二文の連文の必然的連関の考えは、すでに昭和24年の『日本語方言文法の研究』で明らかにしている。

大きく二方向が見わけられる。一つは、上から下へ想をすなおに展開させていく展叙の方向であり、他の一つは、前の想を後で補う補充の方向である。前者の連文を直流性の連文と呼ぼう。後者のは反転性の連文と呼ぶことにする。

まず、「反転性の連文」について。

1.　反転性の連文で、第二文が、語としては副詞であるもの

○アワ　スンダ。ヨーヨー。

　　粟のとりいれがすんだ。やっとのこと。

○オンナハル。タイテイ。

　　いなさる。たいてい。

など。第二文が、もっとも簡潔な修飾文である。(――反転して、第一文を修飾している。)(――第一文内容の補充でもある。)

このように、簡潔な修飾文の後置される場合、連文上では、修飾の表現が、あざやかなつよいものになる。

2.　第二文が、「体言＋助詞」でできているもの

こうであって、第二文が、第一文に対して単純な修飾の文になっているものがある。

○ドヒテ　オマイラ　モノー　ユワン　ノゾー。センセニ。

　　どうしておまえたちはものを言わないんだ。先生に。

この「センセニ。」は、「名詞＋に」から成っている。

○ヤラサイ。コレデ。

　　やらせるよ。これで。　　(中学生男子同士)

などなどがある。2の種類の連文表現は、日常よくおこっている。

この連文表現自体は、簡明なもの言いになる。

3. 第二文が2の場合と同様で、しかもこれが、第一文に対して、主部的な役わりを演じるもの

第二文が簡潔な修飾文であることに変わりはない。それでいて、この場合のは、第二文が、反転的に、第一文に対する主部の意味を発揮するのである。例は、

○アリャリャ、カマイマヘン　ゾー。ワシャー。

あらら、かまいませんわよお。わたしは。　（老女）

○トレン　ノー。コリャー。

とれないねえ。これは。

などである。

この種の連文表現によって、人は、時にとっての卒直な気もちを表現している。

4. 第二文の形の比較的複雑なもの

第二文が修飾文になることは変わりがない。が、上来の諸種のものでの第二文が簡潔形であったのに対して、ここには、第二文のやや複雑なものが見あつめられる。

○チョット　コレ　ミテ　ヤンナン　カ。ワシニャ　ワカランガジャガ。

ちょっとこれを見てくれませんか。わたしにはわからないんだが。

○ナヘ　ゼ。キョー　オショーガツジャニー。

なぜなの？きょうはお正月だのに。

などである。

反転修飾の第二文には、おのずから、修飾文としての特色が出ている。長いセンテンスの場合にもである。

○ワタシワ　イケマス　カイ。グズデスケン。

わたしはそんなによくやることができません。ぐずぐずですから。

○ツイトラン　ムギワ　シヨインジャ。ナンチャ、コレカラ　ミズ　イレテ　ツクンジャケン。

ついていない麦はしやすいんだ。なんでもないことだ、これから水を入れてつくんだから。

これらでは、第二文の末尾に「ケン」（から）が出ている。日常の生活表現では、理由を補説することが多いと見えて、この種の連文表現が、よくなされている。

○ナオ　ヤリマセナイ。アマエテ。

なおのことやりませんよ。あまえて。

○ワヤ　ヨー。モチが手にひっついて。

むちゃなんだよ。もちが手にひっついて。　（初老男）

これらは、第二文末が「て」どめになっているものである。この表現習慣もつよい。

○コレワ　マー　ドー　シテジャロー。コシクレトルガ。

これはまあどうしてだろう。変になってるが。　（作物）

これの第二文は「が」どめになっている。連文表現での、考える姿勢が、こうしてつづけられるわけである。

次下に、「直流性の連文」を見る。

5.　直流性の連文で、第一文が、「呼びかけ文」という特殊文であるもの

○ヨイ。なになにして　ノー。

ねえ。なになにしてねえ。

これは「ヨイ。」という呼びかけ文がきている。

もとより、人の姓名とか、「先生」とか、「バーさん」とかが、そのまま呼びかけ用につかわれて、連文表現の第一文、呼びかけ文ができる。

呼びかけ文が第一文にくれば、連文表現は訴え性のつよいものになる。

6.　第一文が、語としては感動詞またはそれに近いものであるもの

感動詞から成る文も、特殊文と言ってよい。

○マー、アガンナハイ　ヤ。

まあ、お上がりなさいよ。

これでは、「マー」が一文中の冒頭部分になっている。特殊文としての第一文「マー。」は認められない。「マー」のあとの休止が大きいようだと、「マー」は第一文になる。

感動詞に近いものとしては、特定の返事ことばなどがある。

○イーイェ。ソレドコロデス　カイ。

いいえ。それどころではありません。

7.　第一文は複雑で、第二文が特殊文であるもの

○オビオ　セニャ　イカン　ノー。マコト。　<前文アクセント失>

おびをしなくちゃいけないねえ。ほんとに。

副詞が単独で第二文の特殊文になっている。

○ニューガクシキ　イツ　ゾ。オマイ。

入学式はいつだい。ねえ。　(小学六年男⟶中学三年男<兄>)

○シゴト　センドコロカイ。アンタ。

しごとをしないどころか。あなた。

このように、代名詞も、単独で第二文の特殊文になる。

○ドー　ゾ。ヨイ。　イッパイ　ヤロー　ヤ。ヨイ。

どうだ。きみ。一ぱいやろうよ。きみ。

この「ヨイ。」の第二文も、人代名詞からの文に等しいものである。

ここのは、第二文がごく簡潔であるのが特色である。

さてこの種の連文では、総体に、おっとりとした気分、やわらかく持ちかける気分が表現される。連文上での抑揚の下降調であるのが注意される。

8.　第一文第二文、ともに複雑であるもの

ここに、直流性の連文で、第一文も第二文も特殊文ではないものが見あつめられる。（いわば、前後二文とも通常のものである。）

○オハギモ　ヤラン。トリツケモ　ヤラン。

おはぎもたべない。とりつけ<あんでまぶしたもち>もたべない。

これは列叙の連文である。心意を淡々と表現していくものである。

○ダレジャッツロー。ヒトリ　テオ　アゲタ。

だれだったろう。一人、手をあげた。

○コレワ　エー　ヤイトジャッタ　ワイ。ヨー　キカイ。ミソヤイトグライ。

これはいいお灸だったな。よくきくよ。みそ灸ぐらい。　（ある講話についての所感・批評）

これらは、細叙の連文である。よりこまかに、言い進めていく。この種のものでは、多少とも知的な、冷静な思いが表現される。

○モチト　ノー。カンゼンニ　ヤッタラ　エー。

もすこしね。いいぐあいにやったらいいんだ。

これは、表現が、順叙のうちに、二文に細分化されているものである。人は、日常の生活表現で、考えたり言いよどんだりして、この種の連文表現をしがちである。

○コレワ　オイシ　ヤー。オイシー　ノー。

これはおいしいわ。おいしいねえ。　（女子青年同士）

こうして、自己に語りやがて他に語る連文表現も、しぜんのうちによくおこなわれている。

第二文が接続詞ではじまる体の連文もあってよいはずであるが、私の調査結果からは、その事例が出てこない。方言人たちは、通常、さばさばと、あるいはとりつくろわないで、また、よくも考えないで、ものを言う。会話がそこで、無作為的におこなわれる。そのような「ことばのやりとり」の中では、接続詞のある連文などはおこりにくいのか。単純な日常談の中では、接続詞をつかう重い表現が出にくいようである。一人の人が、何かを思いつづ

けつつ語る時などは、連文に、順接・逆接の接続詞も出てくるが、それもすぐに文末詞でむすばれたりする。通常形の二文で、第二文が接続詞ではじまる形態（構造）の二文連文は、どちらかといえば、深い思考の沈着な表現、議論めく表現の場合などに出てきがちのものであろう。

本項に言う連文事象で注目すべきは、二文連文の第一文と第二文とが、各文末部の呼応をよく見せることである。――さればこそ、二文は前後につながる必然的連関の二文なのである。

○アリャ、ヤケヨル　ゾヨー。ヒロシマジャロー　カネヤ。

あら、焼けてるぞお。広島だろうかねえ。

第一文のむすびの「ゾヨー」という、現実を見ての感をあらわすことばと、第二文のむすびの「カネヤ」という、疑問→推想をつよくあらわすことばが、よく対応し、牽引しあっている。呼応している。むすびことばのこの二つのくさびによって、前後二文は、呼応連関の密なものになっている。

○コレ　ヒトツモ　ワカラン　ガー。イケル　カー。

これは何のことかちっともわからないじゃないか。いけないよ。

これには、「ガー」と「カー」との対応・牽引が見られる。

○ドヒテ　ナラー。トロクサイ　ヤツ　ノー。

どうしてなんだ。このとろくさいやつめ。

これには、「ナラー」と「ノー」との呼応が見られる。文末詞相互の呼応が、その二文連関の必然を方向づけ、性格づける。その連文表現の品位品格は、前後に呼応する両文末詞によって最後的に決定されると言っても過言ではない。「ナラー」←→「ノー」によっては、おのずから、品位の低い、野卑というのにも近い連文表現がかもされている。

上のような二文の呼応に関しては、当然、二文連文上の抑揚が注目される。（どんな連文の場合も、すべて、その抑揚が注意されることであるけれども。）前文の文アクセントのありさまと後文の文アクセントのありさまとが、二文呼応の必然さをよく表明している。

必然的連関の前後二文では、文末詞にかぎらず、他の要素についても、対

応・牽引が見られる。たとえば、

○ウズンデ　イケー。ウズメー。

かかえて行け。かかえろ。

では、「ウズンデ」と「ウズメ」との牽引のさまが明らかである。――第二文では、第一文の二分節の言いかたが収約されており、「ウズム」の命令形をつかった一約の表現形が見られる。

一般に、二文連文上、二文呼応のポイントが種々に注目されると言える。それらは総合的に観察されなくてはならないものであるけれども、中で特に、文末のむすびことばでの決定的な相互牽引・呼応が重要視されるしだいである。連文表現の表現性と表現味とは、両文末詞対応の実質によって、支持されかつ左右されている。

×　　×　　×

全国諸要地方言調査での、私の初期初発のやや単純な調査によっても、連文表現に関して、以上の諸様相・諸類型をとらえることができている。まずはこれくらいのものが、出てきがちのものなのか。

櫛生方言の連文表現の生活は、だいたい、以上の傾向のもののようである。

c）　文構造の成分とその機能

文表現の意味作用の展開の方向をたどって、連文表現を見た。

つぎには、文表現自体について、その生態を見、活動の根拠をさぐる。

このさい、文は文構造体と見られる。その文構造は、部分すなわち成分に分けられる。文表現の――つまり表現現実の――次元で分別される文の成分は、スピーチ（表現現実）のパートとして、「話部」と呼ばれる。

話部が、文の構造体にあって、文表現生成の分子――直接的要素――としてはたらき、文の表現活動を可能ならしめる。文表現は、直接要素（＝成素）

の機能のままに息づく（生息する）。――つまりその生態を示す。

以下、当方言の文表現の得られたものを逐一分析して、文構造の成分（話部）一般をたずね、その、文表現の活動・生態に奉仕する機能を追求してみたい。

1.　特定文末部とその機能

文構造を、表現の次元で、表現面に即して分析する時、第一に、重要成分として、文末の、特定文末部と称すべきものがとりあげられる。

ものは、語、文末詞としてとらえられるものである。訴えことばの文末詞なるものが、文表現上、その構造成分として、文構造を統轄する地位に立っており、この成分が、文表現の意味作用を最後的頂点的にしめくくっている。それゆえ、私どもは、文構造諸成分中では、この特定文末部という特定文末成分を、最重要の成分と認めることができる。

当櫛生方言の、特定文末部として立ちはたらく文末詞は、以下のように整理して受けとることができる。――以下では、文末詞という語類の、ものを見ていき、その特定文末部としてはたらく機能を検討する。

ナ、ノ、ネ　　（原生的文末詞のナ行音文末詞）

「ナ」がよくつかわれている。「ます」「です」や「ございます」の出る、ていねいな言いかたの文表現には、「ノ」よりも「ナ」がつかわれる。「ナ」の言いかたは、当方言では、よい言いかたになっている。

○オイデルケン　ナー。

　　来なさるからね。

○ハチジューネンモ　ナリマスケン、チガイマス　ナー。

　　八十年にもなりますから、ちがいますね。

○ウネ　コシマシテ　ナー。

　　うねを越しましてね。

などと言う。（「……　〜デス　ナー。」の言いかたは、私の調査カードにはほとんどない。この言いかたは、多少とも共通語法的なものになるのか。）

「ナ」は長呼形になるのがふつうである。

○ショーチューワ　ナー。

焼酎はね。

○ハラタテン　ナー。

はらをたてないね。

○ヤッパ　コレ　サカナンダラ　ナー。

やっぱりこれを裂かなかったらね。

○クシューコトバ　ユーテ　ナー。

櫛生ことばと言ってね。

など、「ます」などの出ない文表現の場合でも、「ナ」が、その文表現を、やわらかい、あるいは品のよいものにしている。

「ナ」は、他の文末詞とも複合してあらわれる。のちにかかげる「カ」「カイ」「ガ」「ライ」に関連した「カナ」「カイナ」「ガナ」「ライナ」が見られる。

○カゼ　フク　トコ　カナ。

あなたの所は、風がよく吹く所ですか。　（P.116参照）

は「カナ」の例、

○アンタラガ　オンナハル　ノカナ。

あなたたちがいらしたの。

のように、「ノカナ」もある。「カナ」と、おわりを長呼しないで言うものは、複合形の一体性がつよく、これのはたらく特定文末部は、その文の問いの表現を、ごくおだやかなものにする。

○バーヤン、ゲンキナカッタ　カナー。

ばあさん、元気でしたかね。

○ドーデス　カナー。

どうですかね。

これらは、「カナ」の「ナ」の長呼されたものである。この種のものになると、「ナ」の効果の、よりつよいものが認められる。

○……　イーマシタ　カイナ。

……と言いましたよ。

は「カイナ」の例である。

○ヤマノ　サクモ　オナシ　コト　カイナー。

山畑の作物も同じことかねえ。

となると、「ナ」がつよくなる。

○ナオッツロー　ガナー。　<アクセント失>

なおったでしょう？≪下降調≫

は「ガナ」の例である。

○ゴッツォーデス　ライナー。

ごちそうですわね。

は「ライナ」の例である。複合形のどれの場合にも、その文末詞が、みな、文表現の末尾で、その表現をやわらかいもの、あるいはていねいなものにするのに役だっている。

上来の「ナ」にちなむものに「**ナン**」がある。そうとうによくこれが聞かれる。人々も、この「ナン」と、「ノ」にちなむ「ノン」とに気づいている。両者は、櫛生のことばの一特色をなしている。

○ドコイ　イトッタラ　ナン。

どこへ行ってたの？

このように言う。「カナン」も「ゾナン」もある。土地人は、“「ナン」は目上の人に、年寄りに、言う。男女とも言う。”とも言っている。

「ナ」につぐものに「**ノ**」がある。

「ナ」は、当方言で、第一によく通用していよう。その「ナ」に、「ノ」が随伴している。ただし、「ナ」が上述のように、文表現を中以上の品位のものにするのに対して、「ノ」は、文表現を中以下の品位のものにする。

「ノ」による特定文末部は、通常、文のよい言いかたをかもさない。「ます」「です」などの言いかたの時は、「ノ」の出てこないのがふつうである。

「ノ」は、ふだん用の、気らくにものを言うさいにふさわしい、どちらか

というと男性に多く用いられる、老男には比較的よく用いられるもののようである。

○デンキト　ユー　モノワ　イロワレン　ノー。

電灯というものは、さわられないものだね。　（老男→）

○ナミン　アルケン　ノー。

波があるからね。

などとある。時に、

○ヨー　イーナサライ　ノー。

よくおっしゃいますわねえ。　（中年女性→中年男性）

○タベリャ　シマスガ　ノー。

たべはしますがね。

など、ややていねいな言いかたを、「ノ」の特定文末部が、ささえないこともない。

「ノ」はこれ単独でおこなわれることが多く、まれに、「ヤノ」「ヨノ」「ガノ」の複合形になる。（「ヤ」「ヨ」は次項にとり立てるものである。）

○ニバンメ　シテ　ミヨー　ヤノー。

二番めにしてみようよねえ。

「ノ」にちなむ「**ノン**」がある。――「ナン」や「ノン」は、「ナー」「ノー」の長呼形のつよめられた発言のさいに、しぜんにおこったものであろう。派生形と見られる。

○イフーナ　ヤツデ　ノン。

異風な（“すねくれた”）やつでねえ。

などという。児童も、「アノ　ノン。」などと言うらしい。

さて、「**ネ**」は、当方言では、おこなわれていない。「ネ」を地ことばとしてはいない。（これは、四国中国一般がそうである。）ところが、「ネヤ」となった複合形は、この方言で、かなりよくおこなわれている。（「ネヤ」ならおこなわれているという所は、内海島嶼・東予路などにもある。）どうしてこうなったのか。「ネ」的な発想法はむろんあったのだろう。「ナ」「ノ」

の訴えことばがあるのだからである。「ネ」も、あるいは、当地域を含む広い地域に、いくらかはかつて分布したものか。＜この点は、従来、中四国の土地人が、「ネ」をよそことばと見、これを忌避しがちでもあるのからして、どうも了解しがたい。＞分布の可能性がよわければ、「ネ」は、その発想のまにまに、心理上、一挙に「ヤ」と組みあわされてうち出されたものかと考えられる。「ヤ」は当方言にさかんなものである。

○ウマイ　ネヤー。

うまいねえ。

○ボロデ　ネジタ　ネヤ。

朝ぼろぼろと降ってあと晴れたねえ。

など、「ネヤ」は男子一般に多く用いられがちである。子どももこれをよくつかう。「ネヤ」のアクセントは「ネヤー」「ネヤー」などともなっている。

「ネヤ」が「ます」の言いかたの文に出ることはない。「ネヤ」は、とりつくろわぬ、どちらかというと低卑ぎみの表現をみちびきがちである。

「ネヤ」のそういう役わりとも関係のあることか。この複合形は、しぜんのうちに、「ネヤ」「ニャー」ともされている。さきに特色音節を見た時にとりあげた「ニャー。」は、「ネヤ」の転かと思われる。

中学三年の一男子は、昭和47年1月に、“「ノー」も言うが、「ニャー」の方をよく言う。”と説明してくれた。

ヤ、ヨ、ヽ、エ　（原生的文末詞のヤ行音文末詞）

「ヤ」は当方言でよくつかわれている。――文表現上、「ヤ」文末詞は、特定文末部として、よく活動している。

「ヤ」は、かならずしも下品な表現をかもすものではない。「ヤ」の広汎な利用が注目される。

複合形の「ネヤ」のことは上に述べた。これが特定文末部として立つ場合は、例外なしに、訴えの力がつよい。なかんづく、おさえのつよい力を発揮するのが「ネヤ」であろう。

「ヤ」が「カ」とむすんだ複合形に、いわゆる反語の表現の特定文末部と

なる「カヤ」がある。

○ソガイナ　コト　アリマス　カヤ。

そんなことがあるものですか。

「カヤ」のアクセントでおわるのがつねであり、ここに発言のつよさが出る。「カヤ」のむすびの表現は、主として男子に見られるもののようである。

単純感声的な「ヤ」文末詞は、複合形でよりも「ヤ」単独のままでよくおこなわれている。その用途は多岐にわたる。

命令表現の特定文末部として、「ヤ」はよくはたらく。

○コッチノ　ホイ　コイ　ヤー。

こっちの方へ来いよ。

○ソガイナ　コト　ハカラセー　ヤー。

そんなことおよしなさいよ（しない方がいいよ）。

など。多く長呼の「ヤー」になる。

勧奨表現の特定文末部として、「ヤ」はよくはたらく。

○シュンドキ　タベテ　ミナイ　ヤ。

しゅんの時にたべてごらんよ。

など。ていねいな表現の勧奨の言いかたに、「ヤ」の用いられることがさかんである。注目すべき「ヤ」活動の領域である。

依頼表現の特定文末部として、「ヤ」はよくはたらく。

○ハナシテ　ツカサイ　ヤ。

話して下さいよ。

○コレ　オシエテ　ヤー。　<“女子一般”>

これを教えてねえ。

など。この方面でも、「ヤ」はずいぶんよくとり用いられている。

制止表現の特定文末部としては、「ヤ」は、つぎのように用いられている。

○ガイナ　コトー　ユーナ　ヤ。

ひどい（“むりのあたる”）ことを言うなよ。

○オシナ　ヤー。　<女ことば>

しなさんなよお。

○オイデナ　ヤ。

来なさんなよ。

感嘆表現の特定文末部として「ヤ」がはたらくのは、本来的なこととされよう。が、その用法は、つぎのように限られている。

○サブ　ヤ。　（P.126参照）

○オットロシ　ヤ。　（P.125参照）

「ヤ」でむすんだ言いかたは、時にわざとらしい、またかなり大げさな表現になる。

「ヤ」は、勧誘の表現の特定文末部としてもはたらくようになっている。（P.119参照）

○オンラワ　エー　コト　ミツケヨー　ヤ。

ぼくらはいいことを見つけようよ。

など。この分野で「ヤ」のはたらくことはさかんである。

問尋の表現の特定文末部としても、「ヤ」ははたらいている。

○ナンデ　ヤー。

なぜでなの？

など。

つぎには「ヨ」を見る。

「ヨ」は、一つに、呼びかけの表現の特定文末部として用いられる。

○オマサ　ヨ。

おまさや。　（じいさんがそのよめさんを呼ぶ。）

また、応答の表現の特定文末部としても用いられる。

○ウン、マー　ソー　ヨ。

うん、まあそうよ。

「ヨ」は、説明の表現の特定文末部としても用いられる。

○キョーダイ　ヨー。

姉妹よ。わたしは。

また、判断の表現の特定文末部としても用いられ（P.107参照）、所懐や抗弁の表現の特定文末部としても用いられ（P.111、113参照）、制止の表現の特定文末部としても用いられる（P.124参照）。

○アソビナ　ヨ。

遊びなさんなね。

は、「アソビナ　ヤ。」とともに「女ことば」とされている。（この種のていねいな制止表現には、“「ヤ」か「ヨ」かがつくのがきまり”である。）一般の、ぞんざいな言いかたは、

○アソブナ　ヨー。

遊ぶなよ。

などとなる。

「ヨ」も単独で用いられることが多く、そのさい、この特定文末部は、概して淡白な表現効果を呈する。

「ヨ」と他文末詞との複合形には、「ゾヨ」「ノヨ」「ガヨ」がある。

○ダイブ　オッタ　ゾヨー。

だいぶんいたよお。

など、「ゾヨ」での強調表現が、当方言の一つの特色である。男子が特にこの言いかたをよくし、これで、ことを別して力づよく表明する。

○ワシャ　アカイガ　スキナ　ノヨー。

わたしは明るいのがすきなんですよ。　（電灯のこと）

などの「ノヨ」むすびの表現は、説明の表現になる。

「ガヨ」は特殊的で、四国方言中での注意すべきものである。

○イェー　ガヨー。

いいのよ。

などと言う。土地の人は私に、“「ガヨー」「ガニー」は日常のことば。”とも、“近村に行っても、「ガヨー」「ガニー」（P.149）をつかっていれば、櫛生ことばということが、すぐわかる。”とも語ってくれた。

さて、「ヤ」「ヨ」に合わせて「エ」をここに見る。

この「エ」は、たいていア行音に発音されているようであり（〔e〕〔ε〕）、ヤ行音「イェ」〔je〕とはならないようである。今は便宜的に、その「エ」をここでとりあつかう。

「エ」はまず、

○インマ　エー。

○インマ　エー。

さよなら。

<以上二例、小人女子>

という、四国中国では――近畿・九州でも――めずらしい挨拶のことばづかいの中で、つかわれている。

（これに対する「インマ　ヨー。」もあり、これは小人男子用のものであるという。ともに、“おとなは言わぬ。”という。）（P.96参照）

もう一つの「エ」の用法に、「カエ」複合形の用法がある。

○イナン　カエー。

帰らない？

などと言う。これも小女に多い言いかたのようである。やさしい女ことばと言ってよいもののようである。

「エ」の用法は、当方言では、特定化されている。実質上では、「エ」は、「ヤ」や「ヨ」からそうとうに離れたところに存立しているようである。

ゼ、ゾ　（原生的文末詞のザ行音文末詞）

サ行音文末詞はおこなわれていない。

「ゼ」はかなりよくおこなわれている。老若男女にこれがある。

○キタラ　イケン　ゼー。

来たらいけないよ。

は、女性の発言したものである。“年寄りは「ゼ」をよく言う。”と言う人があった。

「ゼ」の特定文末部は、文表現を、いやしからぬ念おしの態にするのに役だっている。

「ゼ」と他のものとの複合形には、つぎの特異なものがある。

○イケン　ガトーゼー。

いけないんだってよ。

これは主として女性におこなわれる言いかたであるという。("男子の場合は「イケン　ガトーゾヨ。」になることがきわめて多い。")「ゼ」が、報告表示の「ト」につづくのはめずらしい。

「ゾ」は、当方言で、さかんにつかわれている。ただし、品位上では、これは、「ゼ」のやや下をいくものとなっている。

○カマイマヘン　ゾー。

かまいませんよ。

は、「カマン　ゼー。」に近かろうか。「ゾ」のむすびが、さしてわるくない品位を伝えうるためには、この特定文末部は、「ます」などの言いかたを受けなくてはならない。ただの言いかたを「ゾ」が受けたら、文表現は、

○イヤ　ゾ。

いやだ。

のような、むきだしのもの、遠慮げのないものになる。だから、「そこを通らないのよ。」とやさしくたしなめる時には、

○ソコ　トーラン　ゼ。

と言う。

「ゾ」が「〜マス」を受けた時、発音が「まッソ」になることもある。

○イットキ　オイテ　ハエルノモ　アリマッ　ソー。

いっときおいて生えるのもありますよ。

など。ただし、このことはまれである。

「ゾ」と他のものとの複合形には「ノゾ」「ガゾ」がある。

○トル　ガゾ。

とるぞ。　　(小学一年男の言)

この言いかたは、"櫛生特有"のものであるという。諸階層人におこなわれはするが、頻度は低く、品位は下品、とのことである。

さて、「ゾ」に隣って「**ゾイ**」がある。

○モッタイナイ　コ下　ゾイ。　　（老女の言）

もったいないことだよ。

などと言う。「ゾイ」の特定文末部がくると、文の表現は、「ゾ」の場合よりもやわらかくやさしくなる。女も「ゾイ」をつかう。――「ゾ」は、男性につかわれがちであるが。

「ゾ」のむすびは断定的で「ゾイ」のむすびは推量的であるとも言うことができようか。「～マイ」や「～デショー」の言いかたを、「ゾイ」は、受けることができるが、「ゾ」は、受けることができない。「ゾ」と「ゾイ」とは、同類のものとは見られるけれども、外形にふさわしく、実質がかなりちがっている。

カ　（原生的非感声文末詞の「カ」類）

――ナ行音文末詞などにくらべて、「カ」を非感声と今は見る。

「**カ**」は広く問いの表現に用いられる。

○ヨミヤニ　イカン　カー。

“宵宮”（“宵まつり”）に行かないか。

これでは、問尋が勧誘にもなっている。

○ミセテ　オクレン　カ。

見せてくださらない？

これでは、問尋が依頼になっている。

○ムスメオ　ダイジニシテ　クレヨロー　カ。

娘をだいじにしてくれてるだろうか。

のような、想像の問いもある。

命令表現になる場合もある。

○ハヨ　セン　カー。

早くしないか。

など。

応答の表現でも「カ」が出る。

○ソー　カー。

そうか。

これは男子のがわでの言いかたとされている。

「カ」が他と複合したものでは、「ノカ」がある。これは問いになる。

「カ」に隣って「**カイ**」がある。

○カーチャン　オル　カイ。

母ちゃんはいるかい。

「カイ」はこのように、まず疑問詞として単純にはたらく。この種の特定文末部は、年輩の男子のことばに出がちである。「カ」に対して、「カイ」の言いかたは、よりおっとりとした気分をかもす。

所懐を述べても、

○……ト　ユーヨーナ　キモ　スル　カイ。

……というような気もするよ。

と、「カイ」はおっとりとした気分をあらわす。ゆったりとした気分もあらわす。やはり主としては年輩の男子のことばである。

問尋も勧誘になると、

○オイリン　カイ。

風呂へおはいりになりません？　　（P.118参照）

など、「カイ」が、さして「カ」とちがわなくなる。しかし、この「カイ」の言いかたも年輩者に多く出る。

「カイ」が年輩者におこなわれがちなことは、応答の表現の場合も同様である。この場合もまた、かくべつおっとりはしていず、むしろ快活調である。

「カイ」に、ゆったりとは反対の、やや急迫調の用法もある。

○センセガ　ソレ　シンナハランヨーナ　コッテ　イケル　カイ。

先生がそれを知ってらっしゃらないようなことでどうしますか。

など。

「カイ」が他と複合したものには「ンカイ」がある。「モノカイ」もある。

○ツーチ　アルノワ、ドコイ　クル　ンカイ。

通知がある場合、それはどこへ来るんだい。

ト、デ、ガニ、ガ、ノ　（転成文末詞の助詞系文末詞）

「ト」文末詞は以下のようにつかわれている。

まず報告用の「ト」がある。

○アトデ　ジキニ　モンテ　トー。

あとでじきにもどってってよ。　（幼男→父）

○オイキタン　ト。

行かれたんですって。　（女）

などである。どちらかというと、女性がわにこの「ト」の用法は多いか。

この「ト」が他と複合したものには、「ノト」「ント」「ガト」がある。

○ドッコイモ　イキナハラ　ヘン　ノトー。

ドッコイモ　イキナハラ　ヘン　ガトー。

どこへも行きなさりはしないんだってよ。

などと言う。これでわかるとおり、「ガ」は「ノ」に相当するものである。「ガト」が一体の文末詞になっており、このままが特定文末詞としておこなわれるのは、当方言の特色である。

○イタ　ガトー。

行ったってよ。

などでは、「ガト」のまとまりとはたらきとが、さっそくに受けとられよう。

さて、以上の報告用の「ト」は、どこにでもおこなわれているものである。つぎの「ト」は異なっている。

○シナ　トー。　<女ことば>

しなさんなってば。

○オシナ　トー。　<女ことば>

なさいますなってば。

このように、面前の人につよく言う「ト」が、当方言におこなわれている。上記二例について、土地人は、“何回もヒツコイ時には「ト」をつける。”と語った。（――面と向かって制止するものである。）

非報告用の「ト」の例を、なおあげてみよう。

○カミニ　ニマイ　アリマス　ト。

紙に二枚ありますのよ。

「〜マス」のとめの言いかたを「ト」がむすんでいる。この文表現は、五十五歳くらいの女性が、私のために方言の語句を書きつけてくれて、みずから述べたものである。識者はこのカードに注して、

ありますのよ!!　強め

とした。ことを報じてはいるとしても、さきの「報告」とはちがう。さきのが、その場合にいあわさない第三者の人間のことを報じ伝えるものであるのに対して、これは第三者にかかわることのないものである。

○カマン　ト　カマン　ト。

かまわないよかまわないよ。

これもたしかに面前の相手に言っている。「カマン」というぞんざいな言いかたを受ける「ト」である。「ト」特定文末部は、おしのつよさをあらわす。

○サキー　イカニャー　イケン　ト。

先に行かなくちゃいけないよ（先に行きなさい）。

と、相手に義務づけて言う時も「ト」を言う。これがていねいに言われると、

○ハヨ　イキナハイ　ト。

早く行きなさいよ。

などとなる。まったく、直接表現の「ト」である。

○キタラ　イケン　トー。

来たらいけないよ。

については、私はこれを記録したカードに、「直接に言う。伝えることばではない。」と記している。——この「トー」文末部では、相手へのいくらかのやさしみが表現されている。識者も、「中品」であると言う。

例は多い。

○コナイダ　ヨワッタ　トー。

このあいだはこまったよ。

これでは、「タ」どめの言いかたを受けて「ト」が来ている。

○サキー　イトルノ　ホントー　ト。

先に行ってるのがほんとうさ。

これでは、名詞どめの言いかたを受けて「ト」が来ている。どのような言いかたに対しても、「ト」特定文末部がはたらきうる。

第三者にはかかわらない、自身直接に自己の意を表明する「ト」が、老若男女によく用いられ、そのさまが、当方言の文末特定表現での一大特色をなしている。

かえりみると、九州方言内に、似た「ト」がある。たとえば薩摩の方言で、

○タチャン　ト。

お立ちよ。

などと言っている。九州にさかんな、

○イク　ト。

行くの？

なども、「ト」が、第三者にはかかわりのない、対者に直接に言うものとなっている。「イク　ト。」の「ト」のような、「の」に該当する「ト」は、九州内でよくつかわれている。「知らないんだもの。」の「シラントジャ　モン。」に見える「ト」にしても「の」相当のものである。櫛生方言をはじめとして、当喜多郡地域などの南伊予方面に見られる、上の「ト」は、「の」相当のものではない。しかし、対者に直接に自己の意を表明するものとしては、「イク　ト。」の「ト」も、「オシナ　トー。」などの「ト」に似ている。もし、「タチャン　ト。」や「ヨカ　ト。」（いいよ。）などの「ト」をとるとなれば、これは南予地方の「ト」とほとんど異なるところがない。ともあれ南予は、今の「ト」の点でも、九州につらねて観察することができる。アクセント上などでのことその他が、ここに思いあわされる。

南予地方の語アクセントが（喜多郡に問題はあるが）——土佐西南部のとともに——、中国地方一般の語アクセント傾向と、おおよそ傾向を等しくすることにちなんで、ここに中国山陽の岡山県のうちの一文末詞「チャ」を見れば、

それが、

○スナ　チャー。

　　するなってば。

などとつかわれている。この例に該当するのが、南予の、

○スナ　ト。

　　するなよ。

　　（たとえば男青年間で）

である。「チャ」（と言ヤー）には「と」の内在が認められる。やはり、南予でも、同じような「ト」が用いられ、しかもそれが、地域差にふさわしく、特殊的な定着を見せたものであろうか。

櫛生方言で（また、南予で）、この「ト」が、「ガ」とも複合している。

○ソレ　ヒタラ　イケン　ガト。

　　それをしてはいけないよ。

「ガト」は、いちだんとつよい言いかたを仕立てるものと思われる。

つぎには、「デ」という助詞系文末詞を見る。これがすこしくおこなわれている。

○ソー　デー。

　　そうですか。

は、肯定の「デ」である。

○オンナル　デー。

　　いらっしゃる？

は、問いの「デ」である。用法は二途になっている。長呼形であらわれることが多い。

この「デ」はまさに四国的なものである。これと同一の「デ」は中国にない。九州にもないと思う。

つぎは「ガニ」である。これはまた南予的なものである。「ガ」ゆえにである。――この「ガ」は、「ノ」相当のものであろう。（P.146参照）

○イケン　ガニ。

いけないんだのに！

○ユータ　ガニ。

言ったのに！

などでは、意味上からも抑揚上からも、「ガ」に「の」のおもむきがつよい。「ガ」が「ノ」に相当することは、「ワケンニャ　イカンガジャロー　カー。」（分けなくちゃいけないんだろうか。）のような事例からも理解することができる。――（「ワシラガ　シランノジャケン」「わたしらが知らないんだから」では、「ワシラガ」ともあるからか、「シランノジャケン」の言いかたが出ている。そして、この「ノジャケン」がまた、「ガジャケン」の「ガ」の「ノ」相当のものであることを思わせている。）

それにしても、

○アソコイ　ミナ　イク　ガニー。

あそこへみな行くのに！（⟶行こうよ。）

○ユータ　ガニー。

言ったのに！

のようになると、もはや、「ガニ」の特定文末部としての一体のはたらきが、外形上でもあらわになってくる。識者も、「ガニー」について、“訴え”とも言っている。

「ガニ」は、「ガヨ」（P.141参照）がやわらかいことば、女のことばとされているのに対して、きついことばとされている。

つぎに、「ガ」文末詞がある。これに三とおりがあろうか。

○ナニクソ、トーロヒメノカワ　ガ。

なにくそ、蟷螂姫の皮が！　（女のやせているのに言う。）

これのむすびの特定文末部「ガ」は、もともと、格助詞の「ガ」ではないか。主格をあらわしうる「ガ」が、ここでは、もはや主部表示の機能をうすくして、呼びかけの用に立っている。このように、悪態の表現に用いられるようになって、「ガ」は文末詞化した。（そういう「ガ」が、上例では、文表現上、特定文末部になっているわけである。）

少女の老女に対することばに、

○ドコイ　イキヨル　ガー。

どこへ行ってるの？

があった。これを聞いた私は、カードに、「『の？』というような意味のようだった。」と注している。識者ののちに加えてくれた注記には、「目上に対する質問」とある。「ガ」の、先のとはちがった一用法がここにあるとされよう。「の」を思わせる「ガ」の、文末詞化したものか。ともかく、上例に与えられた識者注にも、「一、子　二、多し　三、中の上」とあるので、このような「ガ」の言いかたが、子どもたちに多くおこなわれていることが知られる。

つぎの例は、またちがったものである。

○カゴ　トリニ　イツロー　ガ。

かごをとりに行っただろう。

「ガ」が文末詞化していて、ここに特定文末部となっていることはたしかである。「ガ」と言って、相手にものを言いこもうとしている。「ツロ」を受けているのが特色である。男子が、多く、同輩以下に、この「ガ」による言いかたをしているらしい。

この「ガ」に類するものに、「**ガイ**」がある。

○モー　ゴジン　ナッツロ　ガイ。

もう五時になっただろうねえ。

やはり「ツロ」を受けて「ガイ」が出ている。

最後に助詞系の「**ノ**」文末詞をあげる。

○ドヒテ　ナラー。トロクサイ　ヤツ　ノー。

どうしてなんだ。このとろくさいやつめ。

この「ノー」という特定文末部をなしている「ノ」文末詞は、格助詞「ノ」からのものである。上の文では、「ノ」が主部表示の機能をうすくして、呼びかけの用に立っていることが明らかである。さきの「ガ」に似ている。

ナラ　（転成文末詞の助動詞系文末詞）

助動詞「だ」「ジャ」の仮定形としうる「**ナラ**」が文末詞化している。

○ナン　ナラ。

何かいな。

というのが、一つの調査の席で、

○ナン　ナー。

何です？

に対置された。これは、「ナラ」がすでに特定文末部としてはたらくものになっていることを示すものであろう。

モン（もの）　（転成文末詞の名詞系文末詞）

○ソガイナ　コトー　ユータテ　イケンガジャ　モン。

そんなことを言ったっていけないんだもの。

「モン」は「ガジャ」の下に来ている。この言いかたが通用している。

ワレ、ワイ、ライ　（転成文末詞の人代名詞系文末詞）

「**ワレ**」という特殊なものがある。

○コゴト　ヌカスナ　ワレ。

こごとを言やがるな！

などと言う。男のことばである。人は、“「ワレ」がつくとよく感じが出る。”と言う。「ワレ」が上例で特定文末部としてはたらいていることは明らかであろう。もとは、人代名詞の自称のものか対称のものか。「ニューガクシキイツ　ゾ。オマイ。」（P. 130）など、対称代名詞が、文末詞的に、特定文末部のはたらきをしようとしてもいる。

「**ワイ**」（←わたし）は当方言にさかんな文末詞である。これが、さまざまな文表現の特定文末部になっている。（――敬態の文の場合にも常態の文の場合にも。）

○ミミ　スケテ　ミタラ、ジキ　ワカリマス　ワイ。

耳を寄せてみたら、すぐわかりますよ。　（老男）

○シャゲル　モノワ　ヒトリモ　ナイデス　ワイ。

“かがみこむ（つぶれる）者はひとりもないですよ。”　（老男）

男青年たちが米一俵を持ちあげることについて言う。）

○シラヒトル　ワイ。

そりゃ知らせてるよ。　（所思を告げる。）

などの例がある。

「ワイ」はしきりに用いられる。そうして、どの場合にも、これが用いられると、話者の所思が表現されるのである。これによって、「ワイ」が「わたし」的なものであることがよくわかる。

さて、

○ミンナ　カラダ　シマワイ。

みんなからだをそこねてしまうよ。

は、「ワイ」を見せてはいるけれども、これに特定文末部「ワイ」を見わけることはできない。とはいうものの、「シマワイ」は「シマウ・ワイ」からきており、内面に「ワイ」を認めることができる。

「ワイ」の内在する言いかたが、なお、つぎのようにおこなわれている。

○ヤラサイ。

やらせるよ。

これは「ヤラス・ワイ」である。

○ワカラナイ。

わからないよ。

これは「ワカラヌ・ワイ」からのものである。結果は、ちょうど東京弁での「わからない。」のようであるけれども、ものはちがう。上の「ナイ」は「ヌワイ」であって、打消助動詞の「ナイ」ではない。南予では、共通語から言うとやっかいな、こういう「ナイ」がよくおこなわれている。

○ハナシニ　ナラナイ。

これは「話しにならぬワイ。」である。

○十九年には　ウマレナイ。

これは「十九年には生れぬワイ。」である。

○モチート　ハリイキカマエニャ　イケナイ。

これは「もすこし梁行き<建築>をかまえなくちゃいけぬワイ。」である。「イケナイ」を「イケナイ」のアクセントで言うこともある。

○軽労働でも、ヤレナイ。

これは「軽労働でも、やれぬワイ。」である。すべて、「ナイ」は、東京語流の「しナイ」「見ナイ」などの「ナイ」ではない。これが地方的ななまりの「ナイ」であることのよくわかるのは、つぎの「ませナイ」の場合である。

○オチマセナイ（〜ませぬワイ）。　（P.100参照）

落ちませんよ。

○キリカエガ　デキマセナイ。

切りかえができませんよ。

○マダ　アイマセナイ。

まだ私は会いませんよ。

当方言では、人々が、「〜ませナイ」の言いかたをよくしている。その頻度の高いのが注目される。——土地人の、おりおりのていねい心意が、これによってよく表現されているようである。

「ませナイ」同様に、「いけナイ」などの言いかたがなされている。みな、内部に「ワイ」文末詞を認めしめるものである。

そうではあるが、今、これらの文表現形から、「ナイ」文末部をとり立てることはできない。現在では、このような、文末詞「ワイ」の隠在した場合もあることを、一派の表現形式として見ておくことができるばかりである。それにしても、表現効果上では、上の諸例にも、もちろん、「ワイ」特定文末部が明確な形で活動しているのに近い効果が認められる。

「〜でするワイ」からの「〜デスライ」、「〜まするワイ」からの「〜マスライ」、「〜ござんするワイ」からの「〜ゴザンスライ」などの場合は、現実の文形態上、「ライ」が明らかに分かれて存立しているので、さっそくに「ライ」をとりあげることができる。「ます」や「です」や「ござんす」の場合、今日では、「マスル」「デスル」「ゴザンスル」とは言わないで、人は「マス」「デス」「ゴザンス」と言っているので、たまたま、

「ライ」がとり分けられやすいのである。（P.100参照）

上のような「**ライ**」を、結果の特色に注目して、今は「ワイ」に隣る文末詞とする。例は、

○ゴアンシンデ　ゴザンス　ライ。

ご安心でございますわね（ございますよ）。

○ハジマリワ　スコシズツ　オチマス　ライ。

はじめはすこしずつ落ちますよ。

○ヤッパ　テブソクデス　ライ。

やっぱり手不足ですよ。

などである。「ライ」をとりあげても、現実には、おかしくない。のみならず、「です」「ます」などの言いかたの下にだけ「ライ」はあらわれるので、出現の定式から、「ライ」の独立性が、しぜんに人々にも弁別されている。今は、「ライ」をとり立てる方が、処理として適切であると言える。

「〜デス　ライ」は、わけてもよくおこなわれていようか。下降調の文アクセントでもおこなわれていれば、上昇調の文アクセントでも、これがおこなわれている。「デス　ライ」には、当地方人のていねいな言語生活の表情がうかがわれると言っても過言ではない。「ライ」は、いずれにしても、よいことばとされている。

もと、「〜デスル　ワイ」の言いかたをしたかどうか。ともあれ、「デスル」形がなければ「〜デス　ライ」は生じようがなかったのであるから、ここには、「デスル」形を認めておくことが必要である。

ことによっては、「〜マスル　ワイ」からの「〜マス　ライ」などに思いよそえて、類推で、「〜デス」にわけなく「ライ」をつけたりしたか。

かならず、「マス」「デス」の下に「ライ」をおく。（それは、「ます」の場合なら、どうしても「〜マスル　ワイ」形式によらなくてはならなかったのである。）

当方言に、「〜マス　ワイ」からの「〜マサー」、「〜デス　ワイ」からの「〜デサー」などはできていない。

こういうのがある。

○ヨー　イーナハライ。

よくおっしゃいますわ。

○ユービンキョクニ　アライ。

郵便局にあるよ。

これらにも「ライ」は出ている。しかしそれは、切りはなすことのできないものである。「〜ナハル　ワイ」、「アル　ワイ」と、もと「ワイ」文末詞がきたものではあるけれども、熟合がおこって、上に見られるような形ができた。この現実態では、「ライ」をとりはなすと、あとが無意味な形になる。同様の例で、また、

○イツマデモ　ワライヨ　ラー。

いつまでも笑ってらあ。

のように、「ライ」でなくて「ラー」の見えるものもある。

上の例は、「ラー」の文末声調ゆえに、文末での訴えの気味が、いかにもと受けとられる。このきょくたんな例からも察せられるとおり、「……　アライ。」などの場合にも、「ワイ」特定文末部のはたらきに近いものが、文末にたしかに認められる。

［マー］　（転成文末詞の感動詞系文末詞）

「**マー**」が「ヤ」と複合したものが、ここにとりあげられる。

○アガンナハイ　ヤマー。

お上がりなさいよまあ。

当方言になお、「**ダ**」という文末詞があるらしいが、不詳である。（P．162）

2.　間投部のはたらき

第二に、文構造の重要成分としてとりあげられるのは、間投部と称すべき話部である。

ものは、語、間投詞としてとらえられるもの、その他である。間投詞は、文表現上、つねに間投部になるものである。

人代名詞なども、文表現上で、間投部の地位に立つことがある。

何からの間投部であろうとも、現実に間投されている話部は、文表現中でのその遊離独立的地位のゆえに、文の表現を左右し、文表現を情意的に色ど

る。その効果は、特定文末部の効果につぐものである。

当方言では、間投詞として、「ナント」「マコト」がとりあげられる。

○ソイデモ　ムカシノ　ヒトワ　ナント　オコメオ　クータラ　バチガアタルと　言った　ものだ。

「ナント」によって、この文表現は、講釈気分のものにされている。間投部が、文表現の傾斜を決定している。<「マコト」については、P.105参照>

つぎの「ナンジャー」も、文表現で、間投部としてはたらいている。(「ナンジャー」も、語の段階で、もはや間投詞になっているものと見たい。)

○イマ、マコト、ナンジャー、……。

今は、ほんとに、なんだよ、……。

「ナンジャー」がはたらいて、文の表現の調子は、かなりくだけたものになっている。「ナンジャー」をつかう言いかたは、老人に多いらしい。

○イタトコロガ、ナンジャッタワイ、……。

行ったところが、あれだったよ、……。

の「ナンジャッタワイ」も、間投部の作用をしている。ただしこれは、語の面では、連品詞と見られるものであり、文末詞の「ワイ」もきている。

○なになには、ナンジャローガ、……。

の「ナンジャローガ」も間投部である。自分にはわかっていることを人に述べる時に、この間投部が出る。これも、上の間投部も、ともに老男の会話に出がちのものである。

○……と思うタラ　オマイ、……。

と、代名詞「オマイ」が間投部につかわれてもいる。男子一般でのことである。中の下の品位の表現になるという。

特定文末部の場合、間投部の場合、ともにその話部が、文表現の敬卑度・品等を、大きく左右している。

3.　感声部のはたらき

第三に、文構造の重要成分として、感声部がとりあげられる。

ものは、語として感動詞と言いうるものである。感動詞が、文表現上、感声部となり、これが、文冒頭の地位にあって、特定の機能を発揮する。

感声部のはたらきは、特定文末部・間投部のはたらきに深く関連するものである。やはり感声部も、文表現の情調をよく左右する。

感声部「ア」「アー」などとなる「ア」感動詞がまずある。

つぎに「アリャ」「アリャリャ」がある。「アリャリャ」は老年層のものであるという。

「オー」もある。おとなが“目下の者に言う場合”にこれが出る。「オー」は、

○オー、アシコラジャ　ノー。

うん、行くのならあそこらだねえ。

のように、応答詞としても安定している。

応答詞となったものでは、「ウン」もある。

やや特別のものであるが、「オレ」という感動詞も認められるのか。

○オレ　サブ　ヤ。

こしゃくな！（「ひやかしことば」とのことであった。）

識者はこれについて、「オレ」は「マアの意」と注している。（「サブ　ヤ。」の文表現については、P.126参照）

感声部「マ」「マー」などとなる「マ」感動詞も、当方言で、よくつかわれている。

○マー、アガンナハイ　ヤ。

まあ、お上がりなさいよ。

などとも言う。

「ヤー」という感動詞もある。

○ヤー、ソレガ　ノー。

やあ、それがねえ。

主として男子がこのように言う。「ヤー」は「イヤ」に近いもののようである。

「ソイ」という、応答詞になったものが見られる。

○ソイ、キモノ　ホーガ　ナー。

そうですよ、きものの方がねえ。

「オットロシヤ」のことはP.34で述べた。P.150の「ナニクソ」も、いくらか感声部的になっていると、見うるかもしれない。

さて、感動詞が、文冒頭で感声部となるのではなく、文表現そのものとなることもある。「オッチョー。」（あら！）など。「ヨイ。」（P.95参照）という呼びかけのことばも、感動詞が直接に感声部のみの文になっているものと見られよう。返事の「アーアー。」などにしても同様である。

4.　提示部のはたらき

感声部が文冒頭に提置されるのに似て、同じく文初に提示されるものに、提示部がある。

ものは、おおかた体言からなっている。（当方言では、そういうのが多く聞かれた。）

○ヨーコチャン、オロシー　ヤ。

陽子ちゃん、せなかの子をおおろしよ。

提示部に対応して、特定文末部のあらわれることが多い。――場合に応じて、独特の対応・呼応が見られるわけである。

5.　接続部のはたらき

接続詞が、文初で、接続部としてはたらく。

○ホイタラ　イモ　メズラシー。

そうしたら、いもはめずらしいはずだ。

など、「ソ」＞「ホ」の注意される接続詞――→接続部が、当方言上では、やや目だたしいものになっている。

「ホジャケン」も、「だから」の意の接続部としてはたらいている。

「ホジャケンド」は、「だけれども」の意の接続詞である。

6[1]. 述部とその機能……（助動詞一般について）

文表現の述部となってはたらく文構造成分――話部――は、文表現構造中の中枢成分である。この話部、述部では、動詞が、なかんずく重要な分子としてたちはたらいている。

さてその動詞のもとに、複語尾的要素として、現実の文表現では、助動詞が現出している。動詞本位の述部は、じっさいには、助動詞にささえられていると言うことができる。（「体言＋だ」形式の述部は、「だ」相当のものが、「動詞＋助動詞」の役をはたしているとも見ることができる。）

櫛生方言には、どのような助動詞の存立と活動とが見られるか。まず、待遇表現用の特定助動詞を除いて、他の一般の助動詞を見る。

タ （完了の助動詞）

文表現上、助動詞「**タ**」のあらわれることは多い。「タ」は、

○デンキガ　インダ。　　＜老・稀・中品＞

電気が去んだ。　　（停電を言う。）

などのように、「ダ」にもなっている。

「タ」助動詞は、「タ」（ダ）形であらわれるほかに、「タラ」形でもあらわれている。

○ドッカラ　オイデタラー 。

どこからいらっしゃいました？

「〜タラ」が、「タ」助動詞での特色形となっている。「〜タラ」の言いかたは、おとなによくなされている。この言いかたの気分・調子は、なんとなく年寄りじみた、ゆっくりとしたものである。

「〜タラ」の言いかたは、助動詞系文末詞の「ナラ」（P. 151参照）のつかわれる言いかたと、近しい関係にある。

○ソリャ　ドーユー　ホーホーデ　ヤッタラ。

それはどんな方法でやったんだい。

というのは、

○……とは、ドーユー　ソロバン　ナラ。

……とは、どんな計算なんだい。

というのとよくつれあうものである。じじつ、上の二文は、あまりまをおかないで、同一人から出された問いのことばであった。——両種の言いかたは、気分上、よく対応している。

ジャ　（断定の助動詞）

○ソリャ　ヘチジャ。

それはちがいだ。（そりゃちがう！）

「ジャ」助動詞もよくおこなわれている。

「ジャ」と「ジャロー」「ジャッ」と「ナラ」との四形がある。

○ドガイナ　モンジャロー。

どんなものだろう。

は、「ジャロー」の一例である。

「ジャ」が、体言のかわりに「の」（ン）を受けることもあるが、また、「の」相当の「ガ」を受けることもある。

○ワケンニャ　イカンガジャロー　カー。

分けなくちゃいけないんだろうか。

（識者は、私のこのカードに、「いけないのだろーか」と注してくれた。）

「ガ」を受けるものが、特に、土地風として注目される。

「ナラ」仮定形は時につかわれる。

○イイェ　タテルナラ、ワシガ　セッケイクンデ　アギョー　ワイ。

家を建てるのなら、わたしが設計してあげようよ。

この例では、「ナラ」がすぐに「タテル」につづいている。

さて、私は、「ジャ」の仮定形としうる「ナラ」に関して、別に、これの文末詞化しているものを認める。（P.152参照）

○ナニゴト　ナラー。

何ごとなんだい。

など、表現は、「何ごと　カ。」形式のものに近いものである。「ナラ」を文

末詞風につかう習慣はつよまっている。

当方言に、断定助動詞の「**ダ**」そのものはないと言えよう。ただ、私のカードに、一例、

○アンマリジャー。
　　ダー。

があって、いくらかの疑問が残る。

○コガイ　ヒテ　ダー、
　　こんなにしてダー、

としたカードもあるが、この「ダー」は、長呼形であって、しかも、あとにことばがつづくいきおいの中にあるものなので、断定助動詞「ダ」とは区別される。識者がこのカードに注して、「魚はないかダー。」（――「魚はないかヨー。」の意。）とした「ダー」に近いのが、上の「コガイ　ヒテ　ダー、」の「ダー」ではないか。この種の「ダー」は、四国路でも、阿波南部地帯をはじめとして四国東半内にかなりおこなわれており、つづいては、紀州方面にある。こういう「ダー」と区別すべき、断定助動詞である「ダ」終止形は、近畿四国になかろう。櫛生方言でも、「ダ」助動詞終止形は、まず認めがたい。

ン、ニャ、ぬ、ナンダ、イデ、ズ　（打消の助動詞）

○ボクワ　コケン。
　　ぼくはたおれない。

○クチツカンニャー　イカン。
　　口をつかなくちゃ（介入しなくちゃ）いけない。

「コケン」「イカン」などと、ふつうに「**ン**」をつかう。

○サキー　イカニャー　イケン　ト。
　　先に行かなくちゃいけないよ。

など、「イカン」とともに「イケン」を言う。「イケン」の方が、否定味をつよくあらわす。「イケン」に、制止とか非議とか当為の主張とかの気もちがよくあらわれる。人々は、「イケン」をよくつかっている。

「イケン」は一つの成態として熟している。同様に熟しているものに「ヨバン」（およばン）がある。（P.108参照）「ヨバン」はいかにも当地方の人たちのことばであるように思われる。「カマン」（かまわン）もまた、熟しているものである。

上掲諸例の中に、「ニャー」「ンニャー」が見える。「ねば」の「**ニャ**」が当方言にある。「ン」の出る方の例をなおあげてみれば、

○タッタ　イッペンデ　ホームランニャ　ナラン。

たった一ぺんで放らなくちゃならない。　（婚礼衣服のこと）

というのなどがある。

さらに「**ぬ**」の内在の認められるのは、例の文末詞「ワイ」熟合の場合である。（P.153参照）「イケナイ」など、ずいぶん東京語流のもののようであるが、当方言としては、「いけヌ　ワイ」なのである。「ヌ」が内在する。

「ヌ」があらわに出ることはない。

「**〜ナンダ**」という、打消過去の言いかたが一般におこなわれている。

○ヨザンニ　ヤリマセナンダ。

余分にはやりませんでした。

女性もよく「ナンダ」を言う。「〜ナンダ」と言えば、中等品位になる。

「ナンダ」に、「ナンダラ」の形と「ナンズロー」の形とがある。

○ソコイ　イテ　ミナンダラ　いけん。

そこへ行って見なかったらいけない。

○ドーヒテ　コドモラー　ツレテ　イカナンズロー。

どうして、話しを聞きに、子どもらをつれて行かなかっただろう。

「ナンズロー」のつかわれることはまれである。

昭和47年の調査では、小学生から、「〜ンカッタ」を聞いた。（P.113参照）

まれに、「**〜イデ**」の打消表現がおこなわれている。

○タコワ　モテカイデモ　エーガ、……。

たこ<章魚>は持っていかなくてもいいが、……。

打消の「**ズ**」形がある。

○ウチデワ　コメノ　ニゴハンモ　ツカワズニ、結婚式をすませた。

うちでは米の二合半もつかわないで、……。

一つには、こうして、「〜ズニ」の言いかたが比較的よくなされている。

○ミッカニアゲズ、演芸会をやる。

“連日のごとく”、……。

このように、方言成句に、「〜ズ」を見せるものがある。

○行こうと　思っても、ヨー　イキャー　セズ、……。

行こうと思っても、よう行きはせず、……。

この「〜ズ」も、前例のと同様、次下につづくいきおいにある。「ズ」での完全な言いきりはなされていない。さて、上二例のような「〜ズ」の言いかたは、おもに老年層におこなわれるもののようである。

う、ヨー　（未来の助動詞）

未来表示の助動詞「**う**」は、文表現中に内在する。表現形としては、これをとり立てることができない。

○モー　リンワ　ナオソー　ヤ。

もう鈴はおしまいしようよ。

の「ナオソー」で明らかなとおり、「う」を含んだ「ナオソー」（直さう）などの、活用形、「未来形」がとり立てられるばかりである。

（「う」をつかった言いかたは、単純な未来を示さないで、推量や意向を示す。が、ことはみな未来にかかわっているので、私は、これらを一括して、未来と言い、活用形は未来形と言う。）

○イノロー　ヤ。

帰ろうよ。

からも、「ロー」をとり立てることはできない。「帰ろう（カエロー）」に該当するのが「イノロー」である。

「う」と同じく推量や意向を示す「**ヨー**」は、

○タベヨ　ヤー。

たべようよ。

などのように、「ヨ」となってあらわれている。この短呼に特色が認められる。(「行こうヤ。」でも「イコ　ヤ。」となる。) もっとも、

○ニバンメ　シテ　ミヨー　ヤノー。

二番めにしてみようよねえ。

などと、「〜ヨー」も言う。

○モー、マンマ　タビョー　ヤ。

もうごはんをたべようよ。

では、「ヨー」が動詞に複合したと言ってよいかと思われる形が見える。

レル・ラレル　(可能の助動詞)

「**レル・ラレル**」が、不可能表現に用いられている。

○ソノ　ハタデ　オラレングライ　オラビチラカス。

そのそばでいられないくらいにどなりちらす。

○アオビトワ　カエラレマセン。

ほかの何がおいしいといっても、あわびとはかえられません。

ちなみに、可能の意をやどす動詞 (「帰レル」など) もおこなわれている。

○ヌケカクレシテデ　ナケリャ　モッテ　カエレン 。

ぬけかくれてでなくちゃ持って帰れない。

レル・ラレル　(受身の助動詞)

「**レル・ラレル**」が受身につかわれる例を、私はさほどとり得ていない。

○ヨメサンノ　ホーガ　シャガレテ、……。

よめさんの方がおしつぶされて、……。

これは「レル」の例である。

「ヨバレル」ということばは、「ごちそうに招かれる」(時には「ごちそうになる」) という意の、一語の動詞になっている。

ス・サス　(使役の助動詞)

○タナカハンニ　ヌワヒタ。

田中さんに縫わした。

「**ス**」は使役表現につかわれて、連用形では、よく「ヒ」形を見せている。

○ヤラサイ。コレデ。

やらせるよ。これで。

「ヤラサイ」は「やらス　ワイ」である。(P.153参照)

○ナカゴーセン　トッテ、イゴカサンノデス　ライ。

中口銭をとって、動かさないんですよ。

「イゴカサン」の「いごかス」は、すでに一体のサ行五段活用動詞になっているようである。

「**サス**」の例は、つぎの一例を得ているばかりである。

○イマ　ユーヨーニ、ジャマヒテ　ツキサゲサスンデス　ライ。

今言うように、じゃまして、値段を安くさせるんですよ。

ヨーニ、ゴト、、ミタイナ　(比況の助動詞)

すぐ上の例に「**ヨーニ**」がある。

○オシミノ　ナイヨーニ　ヤットカニャ　イケン。

惜しみのないように(惜しげなく)やっておかなくちゃいけない。

などとも言う。

○ワタシラノヨーニ、……。

などとも言う。

「ヨーニ」という活用形が、別してよくおこなわれている。

「**ゴト**」という、古風なものがある。

○……ゴト　アルケン、……。　<アクセント失>

……のようだから、……。

○イヌノゴト　アル。

犬のようだ。

「ゴトアル」は昔からあるという。「ゴト」は、「つくえノゴト　アル。」など、すべてにつかうという。(何にでもつくということか。)

識者は、“廃語になったと思う。あまり聞かない。”と、私の「ゴト」のカードに書いてくれた。今日は、だいたい、老人にまれにおこなわれる程度になっているのかと思われる。

長門の西部北部でも、「ゴト」がよくつかわれている。九州には「ゴタル」などがさかんである。当櫛生方言の「ゴト」も、おそらく、九州・長門のものに関連するものであろう。

「**ミタイナ**」（のような）も、当方言におこなわれている。

タイ　（願望の助動詞）

○ジブンラギリデ　キアンキニ　スミタイ。

自分らだけで、のんきに住みたい。

「**タイ**」が頻繁につかわれるようではなかった。

ツロー、ロー、、マイ　（推量の助動詞）

「**ツロー**」一形の、推量の助動詞がある。

○ヨーケ　アッツロー。

たくさんあったでしょう。

「行ったろう」相当の時は、「イツロー」と、促音のない形になるのが通常のようである。

○カゴ　トリニ　イツロー　ガ。

かごをとりに行っただろう。<と、相手に言いかける。>

「ツロー」が「ツロ」になる時もある。

「**ロー**」一形の、推量の助動詞もある。（P.40参照）

○デキマスロー　カ。

できますでしょうか。

「ロー」が一個の助動詞としてできあがっているさまは、上例に明らかであろう。

○ダレゾ　ミヨ　センロ　カ　と思って、……。

だれか見ていやしないだろうかと思って、……。

などと、「ロー」が「ロ」であることもある。

「**マイ**」は、

○クツモ　サンゾクタ　ユーマイ。

靴も三足よりは多いだろう。

などのようにつかう。（P.114参照）

述部の、動詞のもとに、助動詞とされているものではなくて動詞が、出てきてもいる。表現上では、述部の表現のために、このようなことも自由になされるわけである。

従属動詞には、何がとられてもよいことである。その場の表現しだいで、自由に動詞複合がなされてよい。が、しぜんに、第二動詞としてとり用いられる動詞が、かたまってきているか。ここに、「マール」（まわる）「ソメル」（染める）「ナオス」（直す）「スギル」（過ぎる）「アガル」などが注目される。

○犬が　わんわん　ホエマール。

○イキソメトル。

“いきなれている。”

○イシカケオ　マキナオスノ　トー。

石垣を築きなおすんだってよ。

○コリャ　フトリスギルヤラ　シレン。

これはふとりすぎるかもしれない。

○タチャガッテ　コガン　ナットル。

立ちあがってこんなになってる。　＜できている野菜など＞

従属動詞にささえられて、述部の表現は、土地風の生活感情に富むものになる。

6².　述部とその機能……（待遇表現用特定助動詞）

マス

丁寧の意の表現に役だつ「**マス**」は、

○ナンゾリカンゾリ　ナニ　ユー　コター　アリマセン。

しごとは、なにやらかにやらやりまして、これということはありません。

○ワタシノ　ホーイ　セワヤキオ　モライマシテ、ヨロシュー　オネガイシマス。　<あるいは後部アクセント失？>

私の方へこのたびせわやき（よめ）をもらいまして、、よろしくお願いします。

のようにつかう。

「マセ」「マシ」「マス」の三形がよくつかわれる。「マセ」に関しては、「マセナイ」の用法が目だたしく（P.154参照）、「マセン」は「マヘン」ともなっている。(「シマヘナンダ」もある。)「マス」に関しては、「マスライ」の言いかたが注目される。（P.155参照）

○オンナワ　イーマセナイ。

女は言いませんわ。

は、「マセナイ」の一例である。

活用形「マスレ」も、時に用いられる。

○この笠の値が、二十五円モ　スルヨーニ　アリマスレバ　いいんですが。

など。

○ドレグライ　ミエマスリャー。

としは、どのくらいに見えますか。

では、「マスリャー」の形が見られる。

「マス　ライ」の内部には「マスル」がある。

デス

同じく丁寧の意の表現に役だつ「**デス**」は、

○トッタンデス　ライ。

とったんですのよ。

○ヒマガ　イリマスデス　ライ。

時間がかかりますよ。

などと、「デス」の形でよくおこなわれている。他には「デショー」がややよくつかわれていようか。

「デス　ライ」のことはP.155で述べた。この内部には「デスル」形がう

かがわれる。

○コノ　センセイワ　ナニダイガクデスリャー。

この先生はなに大学の人ですか。

には、「デスリャー」が見られる。

ナサル、ナハル、ナル

おもな尊敬法助動詞にこの一類がある。待遇表現上、人は、述部にこれらの助動詞をよくつかう。

「**ナサル**」はややあらたまった気もちでつかわれる。おとながつかい、女性が比較的よくつかう。

○オアガンナサイ　ヤ。

おあがりなさいよ。

などとなると、「ヤ」のせいで、表現は、さほどあらたまらないものになる。

「**ナハル**」が、当方言では、日常のものとして、よくつかわれている。待遇上の敬意一般は、これによってあらわされることが多い。

「ナハル」は、述部で、「ナハラ」「ナハッ」「ナハル」「ナハリャ」「ナハイ」「ナハンナ」「ナハロー」の形をあらわす。終止形としての「ナハル」の出た例をあげるなら、

○ヨンデ　キヨンナハル。

呼んできてらっしゃる。

などがある。「ヨー　イーナハライ。」（P.155）などの「ナハライ」の中にも、終止形「ナハル」がある。

「ナサル」「ナハル」の略化されたものに「**ナル**」がある。「ナル」をつかった述部の表現は、「ナサル」「ナハル」をつかったものよりも、待遇敬意のあらわしかたが簡略である。ただし子どもたちは、

○オトノサマガ　オンナラナンダラ、……。

お殿さまがいらっしゃらなかったら、……。　（小五男）

のように、「ナル」をかまわず「お殿さま」にもつかっている。一般には、「ナル」は、気安く、軽いしたしみもこめて、つかわれているようである。

“お父さんはおられますか。” との問いに、その家のものが、“「オンナラン。」と、敬語であやまり答える。” こともあるという。

「ナル」は、述部で、「ナラ」「ナッ」「ナル」「ナイ」「ナンナ」の形をあらわしている。「ナンナ」は、「言いナンナ」（P.124）などと言う時の禁止形である。

未然形「ナラ」をつかった「やりナラン　カ」が、なまって「ヤンナンカ」になっている。（「くれませんか」の意である。）

「ヤンナイ」（やりナイ）などは、ほとんど、特定の謙譲法動詞とも言えるものになっている。

ラルル

○広島や大阪から来た人は　タマゲラルル

と、一人の人が言ったらしくて、私はこれをこう書きつけている。「**ラルル**」と、二段活用の形式を見せているところは南伊予的である。私はこの所に「敬」と記してもいるのであるが、はたしてこれが当方言に生きているものなのかどうか、今はうたがわしく思う。

一般には、尊敬法助動詞「レル・ラレル」はおこなわれていない。

述部の表現に用いられる、待遇表現用特定助動詞は、種別がすくない。尊敬法助動詞の存立と活動も、単純で簡明である。——この方面の表現法の複雑さが見られないのが注目される。

6[3]．　述部とその機能……（敬語法動詞について）

述部の表現にあずかる敬語法動詞に次下のものがあり、これらが、上の待遇表現用の特定助動詞とともに、櫛生の人たちの待遇敬意表現の生活を、中心的にささえている。

オイデル、オクレル

一語の尊敬法動詞と見てよい「**オイデル**」がある。

○だれそれが　オイデルケン　ナー。

だれそれが来なさるからね。

など、「来る」に関して用いられるのが、用法の大勢のようである。おとな用のことばである。

「オイデル」「オイデタ」「オイデナ」（禁止＝制止）の言いかたがなされている。

「オイデル」は、

○オーケナ　センコ　ツケテ、ミナ　ナシヨイデル　トコを　写していました。

大きな線香をつけて、みなおがんでいられるところを、ニュース映画がうつしていました。

のように、助動詞的にもつかわれている。（この時は、「来る」の意ではない。）

「**オクレル**」も、尊敬法動詞になっている。（P.123参照）

［オイキル類］

伊予路に多い「オ行キル」「オ行キタ」「オ行キン」式の言いかたは、「行く」動詞にかぎらず、「読む」「書く」「出す」「あがる」など、五段活用動詞の多くのうえで、自在におこなわれている。この事態に関しては、端的に、尊敬表現法の、五段活用動詞に関する、「オ……ル」形式を認めるのもよかろうかと、私は考えている。

ところで、櫛生方言では、これ式の言いかたが、さほどさかんでない。（――人は、「オ行きタ」「オ読みタ」が長浜でおこなわれていると言ってもいて、これをよそのことばとするふうでもある。）あるのは、「**オイキル**」「オイリル」その他かに思われる。すくなければ、「オ……ル」尊敬表現法形式を一般的に認めるよりも、「オイキル」などを、二・三の特定尊敬法動詞としておく方がよいかとも思うのである。

○ドッコモ　オイキン。

どこへもお行きにならない。

○オイリン　カイ。

風呂へおはいりになりません？

など、この種の述部表現は、女性になされがちである。しかも年長の。

イタス、モース

謙譲法動詞「**イタス**」が、まれにつかわれる。

○オナゴノ　コワ　スネクッタリ　イタシマスケン　ナー。

女の子はすねたりいたしますからね。

「**モース**」も、まれにつかわれる。

○アサズケ　ジャノ　モーシマス。

あさづけなんて申します。

両動詞いずれも、だいたい老年層者に見られるものである。

ツカーサイ、クダサイ

当方言の重要な敬語法動詞に「**ツカーサル**」がある。「ツカーサラ」形は、

○サキー　ユートイテ　ツカーサランケン。

先に言っておいて下さらないからよ。

のようにつかわれ、「ツカーサッ」形は、

○エー　アイダ　ツコーテ　ツカーサッテ。

そちらのつごうのいいあいだ、使って下さって。

のようにつかわれている。「ツカーサル」は、もともと、尊敬法の言いかたをしたものであろう。が、今、ものは、謙譲意識を呼びおこすものとなっている。命令形「ツカーサイ」(時に「ツカサイ」)がおこなわれているが、これは、「下さい」を類推させて、ほとんど、謙譲表現用特殊動詞とも言いうるものになっている。「ツカーサル」の活用諸形の中で、命令形が頻用されて、そこに、用法の一習慣を生じたようである。

さきの「ヤンナイ」(P.171)、および「ヤンナハイ」も、ここにあわせならべることができる。人も、「ツカーサイ」「ヤンナハイ」を、同一視したりしている。

「**クダサイ**」は、——やはりこの一形が主としておこなわれていて、したがってこれが、謙譲法動詞風になっている。

○センセ　ドーゾ　オツカミクダサイマセ。

先生、どうぞ、もちをおとり下さいませ。

などと言う「クダサイマセ」には、多少の“標準語”意識もにじんでいようか。

ともあれ、土地人は、待遇表現の述部を形成するために、「ツカーサイ」「ヤンナハイ」などを、特定的につかっており、そうすることによって、へりくだる気もちのつよい待遇心理を表現している。

イタダク

昭和47年の再調査時に、老男から、

○……、オイタダキシマス。

……、頂戴いたします。

というのが聞かれた。かなり特別なものかもしれない。

ゴザイマス、ゴザンス

丁寧表現法動詞「**ゴザイマス**」「**ゴザンス**」が、よくおこなわれている。おとなの、どちらかといえば年うえの人に、これらがよくつかわれており、男性によりも女性によくつかわれている。「ゴザンス」の方が、いくらかはくだけた言いかたをみちびくのかとも思われるけれど、実情では、「ゴザイマス」の活用諸形と、「ゴザンス」の活用諸形とが、待遇敬意表現上、大差なくおこなわれている。

○オメデトー　ゴザンス。

おめでとうございます。

○ゴザンヘン　ノヨ。

ございませんのよ。

など、みな、ていねいな、よい言いかた――述部表現――になっている。

「ゴザンス」の一変形「ゴアンス」も聞かれたが、これはほとんど特説するにはおよばないもののようである。

さて、「ツカーサイ（ツカサイ）」「ヤンナハイ、ヤンナイ」と「ゴザイマス、ゴザンス」とは、当方言で人々に頻用されていて、まさに重要な生活用

語になっている。土地人は、これらを活用し愛用することによって、他に対する敦厚な心意を表現している。尊敬表現法の言いかたによるよりも、むしろ謙譲・丁寧の言いかたに多くよりつつ、広義の「ていねい」の心意、待遇上の敬意をあらわしていくのが、当方言の、待遇敬卑表現生活の特色かと思われる。

待遇表現用特定助動詞のすくないわりには、敬語法動詞としうるものが多い。

双方のものが、あい補って、当方言界の待遇敬意表現の生活を引き立てている。

ものの存立の種別はともかくとして、当方言の人々の日常では、その述部表現の形成に、敬虔な心意がよくうちこめられている。純情の気風、礼譲の挙措は、しばしば他郷人のむねをうつ。

6[4]. 述部とその機能……（動詞連用形尊敬法）

当方言の述部表現の生活に、敬語法（待遇敬意表現法）上、いま一つ、注意すべきものがある。それは、動詞の連用形をそのままつかって、相手に“命令”（勧奨）する言いかたである。

○アガリー　ヤ。　（P.122参照）

おあがりよ。

このようなものである。この種の述部形式は、ほとんど女性にだけとり用いられており、人も、多くがこれを「女ことば」と言っている。老女にもこれがあるけれども、女子青年や学童女子たちに、とりわけこの言いかたがよくおこなわれている。

これは、

○ヨーコチャン、オロシー　ヤ。

陽子ちゃん、せなかの子をおおろしよ。

○アッチー　マワリー　ヤー。

あっちへおまわりよ。

などなどと、「命令」表現形式としてだけ言うものなので、尊敬法・敬意表現法とは言っても――（それは一般表現論的見地ではゆるされることと思うが）――、じつはしたしみ・やさしみの表現とも言いうるものである。女性に常用されるものであることと、このこととが関係している。

女性がわにいちじるしいものではあるけれども、この種の述部表現が、当方言のいわゆる敬語法の生活を、一色、くっきりといろどるものであることは言うまでもない。

この形式はよくおこなわれていて、五段活用動詞のほかのものまでもが、

○ハヨー　アケリー　ヤ。　　（P.122参照）

早くおあけよ。

○コレ　タベリー　ヤ。

これをおあがりよ。

○オカーサン、コレタベリー。

○ミセリ　ヤー。

お見せよ。

などとされている。「明ける」を「アケ」<連用形>と言ったのでは、敬意表現法にならないのである。（――どころか、ぞんざいな命令法になる。）「アケリ」と、五段活用動詞連用形風のものにすることが必要であった。要は「――リ」がほしいのである。「アケリ」「タベリ」「ミセリ」は、「上がり」「おろし」などに該当する。けっきょくは、〔i〕音（五段活用動詞連用形の末尾母音）がだいじなのである。この〔i〕音が、待遇表現上で、相手に対するやさしみの効果を発揮する。（「下され」に対する「下サイ」、「なされ」に対する「ナサイ」を思えばよかろう。）

動詞連用形尊敬法は、「イ」〔i〕音効果の待遇表現法と言うことができる。

「オアガリ　ヤー。」「ハヨー　オシ　ヤ。」（早くおしよ。）など、「オ＋動詞連用形」のものもある。（「オ行キナ　ヤ。」などの制止の言いかたもあ

る。）同じく女性一般におこなわれるものであるが、今は、「オ」のつくものよりも、「オ」のつかない動詞連用形尊敬法が、特に注目される。

「オ」のつかないものでの、制止の特定禁止形の出る例としては、一つ、

○キナ　ヤー。

来なさんなよ。

をあげることができる。「キナ」は「クナ」（来るな）に対応する。後者が“男ことば”でぞんざいな言いかたで、前者が女ことばでやさしい言いかたである。「アソビナ」（遊びなさんな）「シナ」（しなさんな）などの禁止形もつかわれている。これらの場合、文表現は、「ヤ」なり「ヨ」なりのむすびになる。ただし、

○シナ　トー。

しなさんなってば。

のように、「ト」を、相手がなかなかこちらの言うことを聞かない時に、つかうこともあるという。

制止表現の場合は、上記のような文末詞をむすびに用いるのがつねとなっている。制止でない、通常の勧奨の場合には、さきに明らかにしたように、時に、動詞連用形のままで文を終止させることもある。

さて、動詞連用形を述部につかう用法で、

○オッポシテ　ヤ。

おんぶしてちょうだい。

○アケテ　ヤー。

明けてよ。

のようなのがある。これらは、「動詞連用形＋て」形式をとるものである。ものは上述のとは大いにちがうが、この形式のものが、その中止的表現のゆえに、やはり一種のやわらかみ、ないしはやさしみを表出しがちなのは注意される。「ヤ」でむすぶこともまた、この形式に、きまっていることのようである。

6[5]. 述部とその機能……（述部の存在態）

動詞中心の述部が、「本動詞＋て＋第二動詞」の複合形で、存在態の意をあらわすことがある。たとえば、

○イキニクー　ナットル。

行きにくくなってる。

など、「ナッ＋て＋オル」の「ナットル」が、成っている状態をあらわしている。——当の状態が、存在することを言いあらわしている。

存在態の表現にかかわる第二動詞は「オル」である。

述部の存在態が人々のことばに出てくることは多い。この言いかたは、方言の中で、生活表現のだいじな一手法となっている。

○マケテ　キノ　クシャンドル　時に、……。

まけて気がめいりこんでる時に、……。

など、大きい文構造の中の一部分上での述部にも、存在態の言いかたが、よく出ている。

「〜トル」の言いかたが、文の上品な表現をさそうことはまずない。

「〜てオル」が「〜チョル」になることはない。西南隣方言では「チョル」を言うけれども。

第二動詞に「置く」がきても、

○ナマジ　ニゲトコ。

いっそのこと逃げておこう。

など、述部は存在態の表現になる。が、当方言で慣用のいちじるしいのは、第二動詞「オル」を用いる言いかたである。

6[6]. 述部とその機能……（述部の進行態）

上のとともに注意されるのがこの進行態の言いかたである。かれこれ両者は、あい寄って、土地人の、気どらぬ、時にはやや品位の低い言いかたを成り立たせている。

述部の進行態は、「本動詞＋オル」の形式でつくられる。「泣き＋オル」＞「泣キヨル」、「笑い＋オル」＞「笑イヨル」、「去に＋オル」＞「去ニヨル」など。「オル」は語頭音を変えている。

○映画会が　ハジマリヨリマス。

映画会が今はじまるところです。

など、「〜ヨル」はまさに進行態をあらわす。

○イワシノ　ホーワ　ヤスミヨル。

いわしとりの方は、今、休んでる。

「休んでいる」と言えば、休業の状態の「存在」が受けとられもするけれども、「ヤスミヨル」は、じじつ「休ミオル」であって、休むという動作を進行させつつあるのである。上の「ヤスミヨル」のかわりに、「トリヨル」をおいてみてもいただきたい。

述部進行態の言いかたは、述部存在態の言いかたと同律にさかんである。

「行き＋オル」は「行キヨル」、「待ち＋オル」は「待チヨル」というようになって、「行キョール」「待チョル」などとはならない。このように、拗音形の言いかたをおこさないのは、近畿四国一般での傾向である。そのことは、アクセントの性質と関係があろうと、私は考えている。

6[7]. 述部とその機能……（余説）

以上のように、述部を見てきて、以下、いくらかのことを補う。

一つに、述部とされるものだけが文表現になることは多い。

○ウズメー。

かかえろ。

など。

二つに、述部は、動詞本位にのほかに、形容動詞本位にも形成されている。

○イヨイヨ　シンボーナ。

とってもよくはたらく。

と、形容動詞単独の場合は、「——ナ」終止形がはたらく。

○バーヤン、ゲンキナカッタ　カナー。

ばあさん、元気でしたかね。

と、「――ナカッ」形の形容動詞連用形もおこなわれている。

「ナカラ」「ナカレば」の形容動詞活用形もある。

○ソレモ　コヨミデ　ナカラニャ　ワカラン。

それも、暦でなくてはわからない。

三つに、述部は、形容詞本位にも形成されている。

○タマリガ　ワルイ。

収量がすくない。

○コワイ　カイナ。

ほねがおれるよ。

形容詞に助動詞のつくことでは、今、言うべきほどのものがない。

四つに、述部は、体言本位にも形成されている。

○イフーナ　ヤツデ　ノン。

異風なやつでねえ。

○オリヤキナ　ヤツジャ。

“やんちゃな”やつだ。

○シミッタレジャ　ネヤ。

しみったれ（“はきはきしていないこと”）だねえ。

○マダ　ヤリヨラン　グライジャー。

まだやっていないくらいだ。

○アヒタデス　ライ。

あしたですわ。

○モッタイナイ　コト　ゾイ。

もったいないことだよ。

○ウケンカッタダケ　ヨー。

受けなかっただけよ。

体言または体言相当とされるものが、自由にとり用いられる。その文表現末

には、特定文末部のとられることも多い。「ヨ」などは、よく用いられる。

やはり体言本位の述部とされるものに、

○ツルチャンガ　トーフワ、コーテ　モラワレンガジャ　ワイ。

つるちゃんの豆腐は、買ってもらわれないんだわ。　（つるちゃんが、冗談に、すねて言う。）

○ソガイナ　コトー　ユータテ　イケンガジャ　モン。

そんなことを言ったっていけないんだもの。

の類のものがある。「ジャ」助動詞の前に「ガ」があり、それは「の」の意のもの、つまり準体助詞で、「イケンガ」などが、体言相当のものになっている。

7.　主部とその機能

文表現に主部のあらわれないことは多い。

主部のあらわれる場合、今、体言と助詞とでではなく、体言だけで主部が形成されることもあるのが、当方言の一傾向として注意される。

体言・（無助詞）

○ナーンチャ　カカリカンケイ　ナイ。

なんにも係り関係はない。

○ニューガクシキ　イツ　ゾ。オマイ。

入学式はいつだい。ねえ。

○コレ　ドコマリ　デケマセン　ゼ。

これはそうどこででもはできませんよね。

○アワ　スンダ。ヨーヨー。

“粟のとりいれがようやくすんだ。”

これらでは、「は」助詞を想定することができよう。ただし、最後の一例は、土地の識者に、上のとおり、「が」と説明された。

○ソガイナ　コト　アリマス　カヤ。

そんなことがあるものですか。

○コガイナ　キ　アル　カー。

こんな木があるか。

○アメ　フリヨル　カイ。

雨が降ってるかい。

○カミサマ　モドンナハッタ。

神さまがお帰りになった。

○ワシ、モータンデス　ライ。

わたしが村うちをまわってふれたんですよ。

これらでは、「が」助詞を想定することができよう。

○デンキ　フトカッタラ　ヨル　ネブト　ナイ　ガノー。

電灯が大きかったら、夜、ねむたくないもんだねえ。

○ツーチ　アルノワ、ドコイ　クル　ンカイ。

通知がある場合、それはどこへ来るんだい。

○カゼ　フク　トコ　カナ。

風がよく吹く所ですか。

など、センテンス中の副文（従属節）の中の主部に「が」の想定されるものが、ややよく見いだされる。

主部形成の助詞そのものはおもてに出ていなくても、当の一つの生きた話部には、主部助詞のはたらきに該当する機能が内在している。土地の人々は、そのような内在方式の発言に、かなりなれているようである。この種の言いかたによって、人々は、手がるな気分を表現している。

さて、主部形成に助詞の参画するものは、以下のように見いだされる。

［体言＋ガ］

体言または体言相当のものの、「ガ」にささえられた主部がある。

○ボーガ　ウマレナッタ。

男の子がうまれなさった。

○イガセキマスンデス　ライ。

胃がいたみますんですよ。

○ススマサニャ　ナラン　アタマガ　ススマン。

進ませなくちゃならないあたまが進まない。

○ツブノ　ミイリガ　ワリカタ　エー。

つぶのみいりがわりあいいい。　（きびの穂）

○ワシャ　アカイガ　スキナ　ノヨー。

わたしは明るいのがすきなんですよ。

○チョード　イジノワルイ　トキニ　アメガ　フルケン。

ちょうどつごうのわるい時に雨が降るから。

「ガ」はよくおこなわれている。センテンス中の副文の中にも、「ガ」格の主部がよく出る。

時に、「ガ」格の主部だけで、――それに対応する述部はないままで、センテンスが成り立っていることがある。

○ヤー、ソレガ　ノー。

やあ、それがねえ。

○ソイ、キモノ　ホーガ　ナー。

そうですよ、きものの方がねえ。

など。

体言＋ン

「ガ」主部助詞と対立して存在しているかに見られる「ン」主部助詞がある。

○ヒン　ナイ。

火がない。

○タコン　オッタ。

たこがいた。

○ヤリカタン　チガウ。

やりかたがちがう。

など、「〜ン」例はみな、「〜が」と言いなおすことのできるものである。「〜ン」主部は、副文中にも出る。

○ゼニン　ナイニ、……。

ぜにのないのに、……。

○フロン　ワイタケン　イリン　キナイ　ヤー。

ふろがわいたから、いりにきなさいよお。

この「ン」について「ノ」（「の」格助詞）を考えることは、前に述べた。（P. 42参照）

土地の人たちは、ごくしぜんに「〜ン」主部の発言をしている。いったい、どんな時に「〜ン」を言っているのであろうか。全部の実例を整理してみたが、これということがまだ言えない。土地の識者は、“ガをンということがくせである。”と、私のカードに注してくれている。ともかく「〜ン」主部は、“一般”の人々に発言されており、子どもたちもこれを言う。このことばづかいの品位は“中”とのことである。

「ガ」と「ノ」とが、主部助詞として、敬意表現上でつかいわけられるようなことはさらにない。

［体言＋ノ］

主部助詞「ノ」がはっきりとあらわれるのは、つぎのような場合にかぎる。

○マケテ　キノ　クシャンドル　時に、……。

まけて気がめいりこんでる時に、……。

○コレ　ヒトノ　ワロウ　ジブンニ　ウエタンジャガ　ノー。

これは人の笑う時分に植えたんだけどねえ。

すなわち、副文（従属節）の中に「ノ」はあらわれる。

単純な主述文の時に、主部が「〜ノ」になることはない。

［体言＋は（「ワ」その他）］

体言または体言相当のものが「は」助詞にささえられた主部の出ることは多い。

○ドーロワ　ベンリナモノノ、イノチトリジャ。

道路は、便利なものの、命とりだ。

○イマノ　ヒトワ　イマハルカラ　キナハッタ　のか。

今の人は今治から来なさったのかね。

○イレジョーネト　ユー　モノワ　ナガモチせん。<末部アクセント失>

入れ性根というものは、長もちしない。

○アカイノワ　キモチエー　ノー。

電灯の明るいのは気もちがいいね。

上の最後の例では、体言相当のものの「は」にささえられた主部が見られる。

○ワシャ　アシ　ワズローテ、草もよう刈らん。

わたしは足をわずらって、草も刈ることができない。

など、「〜は」は拗音形にもなっている。(「コレは」などのこと、P.25参照)「アイツは」は「アイツァ」となり（P.22)、「コトは」は「コタ」、「コンナは」は「コンナー」になり、「ウチラは」「オマイラは」は「ウチラ」「オマイラ」になっている。(P.216参照)

時には、述部はないままでセンテンスが成り立っている。

○スベテ　ドーブツワ　ネヤ。

すべて動物はねえ。

○オドレラー！

おのれらは！　　(怒罵)

など。

[体言＋モ]

体言または体言相当のものが「モ」にささえられた主部も出る。

○ワタシモ　ダイブ　マイマシタケン　ナー。

わたしもだいぶん方々をあるきましたからね。

○カワモ　ヨー　イタム　ゾー。

川もよくいたむぞ。

など。

なお、「ゾ」その他の、主部形成にあずかっている助詞があるが、それらの場合は、当方言での日常の主部形成として、特筆すべきほどのものではないので、ここでは記述を省略する。

8.　修飾部（その一、動作修飾部）のはたらき

動作<一般的に言って>を修飾する修飾部が、以下のように、さまざまに見られる。――修飾生活の動向がここに明らかであり、修飾の、日常生活での重要さが、ここによく見とられる。

はじめに、助詞のささえで成り立っている動作修飾部の諸相を、次下のように整頓することができる。この種の修飾部は、動作の表現をもっとも端的に修飾する。

まず、**格助詞**のささえる動作修飾部がある。

「体言＋を」

格助詞「を」は、つぎのようにはたらいている。

○コレノ　トギッタノオ　ウッタテマス　ノヨ。

これのとがったのを載せますのよ。

「を」が、「トギッタノ」（とぎったノ）という体言相当のものについており、この「を」格の修飾部全体が、端的に、「ウッタテマス」という表現（――その動作）を修飾している。

「を」は「オ」の形であらわれる。（P. 21参照）ところで、

○ナニ　スラー。

何をしようかね。

○ウネ　コシマシテ　ナー。

うねを越しましてね。

○センセー、マ、ココ　フカヒテ　ツカサイ　ヤ。

先生、まあ、ここを拭かせて下さいよ。

などのように、「を」が無形になってしまうことも多い。（格性はむろん内在している。）

「体言＋と」

この類の動作修飾部の場合も、「と」の没することがある。

○カラシ　イーマス。

からしと言います。

など、「言う」にかかる場合には、「〜と」動作修飾部の「と」が、姿をひそめがちである。いわゆる「と」抜けが見られる。

○エー　コジャ　ユワイ　ネヤ。

いい娘だって言ってるねえ。

○ナンボ　フサクジャ　ユタテ、……。

いくら不作だといったって、……。

○クシューコトバ　ユーテ　ナー。

櫛生ことばと言ってね。

みな、「と」が出ていない。

○ワタシラ　ノビスギル　オモータラ　切るんです　ワイ。

わたしどもは伸びすぎると思ったら切るんですよ。

この場合にも「と」は出ていない。やはり「と」抜けを、当方言の一特色と見ることができる。「と」が抜けている場合には、表現に気さくさが出るように思われる。

○柳の木は　イガタカイト　ユーテ、ウイェル　モンジャ　ナイ　イーマス。

柳の木は威が高いといって、植えるものじゃないと言います。

これでは、「言う」にかかわる二例の、前者修飾部は「ト」を見せ、後者修飾部は「ト」を見せていない。「イガタカイト　ユーテ」では、ややあらたまった言いかたなので、しぜんに、「ト」形がとられているのであろうか。「ナイ　イーマス」では、なんとなく、気らくそうな感じが受けとられる。

○オラント　ミエル　ノー。

いないと見えるね。

この場合も「ト」形が出ている。

○コトンナル　モンジャ　ナイト　ワシャー　オモートル。

役にたつものじゃないとわたしは思ってる。

この場合も、「ワシャー」が中にはいるので、「ト」形は当然とられやすか

ったであろう。

○オナゴノコト　オトコノコト　マゼー　ヤー。

女の子と男の子とをまぜろよ。

○サケオ　ノムガト　タバコオ　ノムガトワ　たしかにふえた。

酒を飲むのとたばこをのむのとはたしかにふえた。

こんな場合、「ト」形はむろん出ている。

［体言＋に］

「〜に」の用法はさまざまである。「に」の外形もいろいろになる。

○ナンカ　コトバニ　チゴータ　トコン　ナイジャロー　カ。

何かことばにちがったところがないだろうか。

「ことばニ」は、ところをあらわして「チゴータ」にかかる。

○ソノ　シゴトニ　シュミオ　モツ。

そのしごとに趣味を持つ。

○カミニ　ニマイ　アリマス　ト。

紙に二枚ありますのよ。

それぞれ、「〜ニ」の一用法を見せたものであろう。

○ツバエゴトラニ　スルンデス　ライ。

つばえごとはんぶんにするんですよ。　（ある若い夫婦の喧嘩）

このような「〜ニ」もある。

○オツーニ　ウイェテ、……。

おそくに植えて、……。

○ハヨーニ　コシラエトカント、……。

早くこしらえておかないと、……。

このような「〜ニ」もここに列挙しておいてよかろうか。

「に」の外形としては、明らかに「ニ」のとらえられる場合と、

○モー　ゴジン　ナッツロー　ガイ。

もう五時になっただろうねえ。

のように「ン」のとらえられる場合と、

○サキー　ユートイテ　ツカーサランケン。

先に言っておいて下さらないからよ。

のように長音の見られる場合とがある。長音の見られる場合、

○ニンゲンワ　アカリオ　ミー　キトルンジャケン。

人間はあかりを見に来てるんだから。　（この世に）

の「ミー」などの言いかたは、ことに当方言風の言いかたとされる。

［体言＋へ］

「へ」助詞のつかわれた動作修飾部は、つぎの例でのように、「〜イ」の形になっている。

○ナガハマノ　ホーイ　アソビー　イキマシタ。

長浜の方へ遊びに行きました。

○ツーチ　アルノワ、ドコイ　クル　ンカイ。

通知がある場合、それはどこへ来るんだい。

［体言＋デ］

○ソコラヘンデ　ヤッタ　ント。

そこらへんでやったんだって。

「〜デ」は、こうして、場所を示して下の動作表現にかかっている。

○テデ　コガイニ　……。

手でこんなに……。

「〜デ」は、こうして、方法を示して下にかかってもいる。

○ダテヤホーラクデ　……しはせん。

だてやほうらくで……しはしない。

「〜デ」は、こうして、原由を示して下にかかってもいる。

○ツズデ　デテ　イケマセナイ。

粒で（粒のままで）出て（排泄されて）いけませんよ。　（牛）

この「〜デ」は結果を示している。

○イソチャンガ　ガイナ　タイビョーデ、ミマイニ　イキナハッタ　カ。

いそちゃんがひどい大病なんで、あなた、見まいにお行きでしたか。

「〜デ」が、このように、中止表現的にはたらく場合もある。

○センセガ　ソレ　シンナハランヨーナ　コッテ　イケル　カイ。

先生がそれを知ってらっしゃらないようなことでどうしますか。

では、「コッテ」（ことデ）の受けになるまでに、主述関係の言いかたができていて、「コッテ」までが、「イケル」にかかる大きな動作修飾部になっている。

つぎのような場合も、「体言＋デ」の動作修飾部を認めてよいのであろうか。

○ドナタモ　ゴクローサンデ　ゴザイマス。

どなたもごくろうさまでございます。

「体言＋カラ、マデ」

格助詞「カラ」や「マデ」も、ふつうにつかわれている。

○ヤネカラ　ボッタノガ　ひどかった。

屋根から漏ったのがひどかった。

○イチカラ　シジューマデ、……。

一から四十まで……。　（「一から五十まで」とあってよいところだった。話者の諧謔。）

など。

「〜カラ」や「〜マデ」の動作修飾部には、かくべつの特色が見られない。

さて、つぎには、**副助詞**のささえる動作修飾部がある。私の調査では、およそ、下にかかげる種類のものが見られた。

「体言＋ギリ」（「ダケ」もある。）

○ネバイ　コトギリ　ユー。

ねばっこいことばかり言う。　（“アクセントをひっぱって、伸ばして伸ばして言う。”）

つぎの例は、「〜ギリデ」になっている。

○ジブンラギリデ　キアンキニ　スミタイ。

自分らだけで、のんきに住みたい。

体言＋バカリ、バッカリ、バーイ

○イケズバカリ　ヒテ、……。

いたずらばかりして、……。

○ヘッチバーイ　ヒトル。

まちがいばかりしてる。

「〜バーイ」「〜バイ」は、中国にはなくて四国にあるものである。

体言＋ホド

○ズボンホド　ヤブッタだけ　……。

ずぼん“だけ”破っただけ……。

体言＋グライ　（「ズツ」もある。）

○ドレグライ　ミエマスリャー。

としは、どのくらいに見えますか。

○ソノ　ハタデ　オラレングライ　オラビチラカス。

そのそばでいられないくらいにどなりちらす。

「オラレングライ」では、「オラレン」が体言相当のものになっている。

下例には、「〜グライワ」が見られる。やはりこれが動作修飾部になっている。

○ニネングライワ　カンマイ　ゼー。

二年くらいはかまうまいよ。

「グライ」とあって、「クライ」とは言っていない。

体言＋アタシ

○協同組合の　工業部アタシデモ　ソーデス　ワイ。

協同組合の工業部あたりでもそうなんですよ。

「〜アタシデモ」が見られる。

体言＋マリ

○コレ　ドコマリ　デケマセン　ゼ。

これはそうどこででもはできませんよね。

○ダレマリ　ヤラナンダ。

　　そうそうだれもはしなかった。

「マリ」は疑問詞につき、否定の言いかたをさそう。

［体言＋ジャノ］

○アサズケ　ジャノ　モーシマス。

　　あさづけなんて申します。

［動詞＋タリ］

○ノンダリ　キータリ　……。

　　飲んだり着たり……。

○ヤイタリ　ヒテタリヤ　スルンデス　ライ。

　　焼いたりすてたりなんかするんですよ。

「〜タリヤ」とあるところが当地弁である。(「ヤ」は係助詞とされる。)

○道に　迷って　アッチ　イタリヤ　コッチ　イタリヤ　シマシタ。

とも言うよし、識者が、私の「……しタリヤ　……。」のカードに書きつけてくれた。

［体言＋ゾリ］

○ナンゾリ　カンゾリ　ナニ　ユー　コター　アリマセン。

　　なにやらかにやらやりまして、これということはありません。

「ゾリ」が広くおこなわれるのかどうか、私にはわからない。「ナンゾリカンゾリ」は、一語の副詞になっているようでもある。

さて、つぎには、**係助詞**のささえる動作修飾部がある。

［体言＋サヤ(サエ)、サエド］

○長浜の　橋サヤ　渡らニャ　……。

　　長浜の橋さえ渡らなければ……。

「〜サヤ」とあるところが当地弁である。

○ワヤクサエ　シマセナンダラ、……。

　　いたずらさえしませんでしたら、……。

など、「〜サエ」の言いかたもしている。「サエ」を「サイ」とも言う。

「〜サエド」もある。

○ウタニサエド　歌われて　います。

歌にさえ歌われています。

「サヤ」は「サエド」に当たるほどのものか。「〜サヤ」に、「〜サエド」ほどの力づよさがあるかと思う。

「体言＋は」

○ヨルホドワ　ツレテ　ネルガ、……。

夜だけはつれてねるが、……。

これで明らかなように、「は」（ワ）が、体言または体言相当のものにそい、その全体が動作修飾部になる。

○イマワ　ヨー　カワントデス。

今は“よう買いません”。

「イマワ」が動作修飾部になっている。

○デンキト　ユー　モノワ　イロワレン　ノー。

電灯というものは、さわられないものだね。　（老男→）

○イワシノ　ホーワ　ヤスミヨル。

いわしとりの方は、今、休んでる。

○アオビトワ　カエラレマセン。

ほかの何がおいしいといっても、あわびとはかえられません。

など、みな、「〜ワ」が、動作修飾部として立っている。

「は」が「ワ」の外形を見せないこともある。

○イッカンメタ　イワン。

一貫めよりは多い。

○トーチャンノ　オビワ　コレター　チガウ　ワイ。

父ちゃんのおびはこれとはちがうよ。

など、「〜とは」は「タ」「ター」ともなっている。「タ」と、短呼になることの方が多いか。ただし、その場合は、「言ワン」とか「ユーマイ」とかにかかるのがつねである。

「〜よりは」は「〜ヨリャー」ともなる。

「〜には」は「〜ニャ」となっている。

○ソーリョーニャ　オヤン　オル。

総領にはおやがいる。

○カネ　タタクニャ　ヨバン　ト。

かねをたたくにはおよばないよ。

など。後者例では、「タタク」が体言相当のものになっている。

「〜では」は「〜ジャ」となる。

○タイシタ　モンジャ　ナイ。

大したものじゃない。

○ソレドコロジャ　アリマセン。

それどころじゃありません。

これらの「〜ジャ」は、「ない」「ありません」の状態を修飾している。こんな点では、動作修飾部という名は穏当でない。ただ、私は、連用修飾部という呼名に代えて、動作修飾部という名を用いることにしている。（連用と言うと、「用言に連なる」とすることになるので、「部」の論の術語ではもはや語論レベルの名称はつかわない方がよいと考える私は、連用修飾部の名を避けた。一般的には、連用修飾部は、まさに動作修飾部ではないか。）

「〜ては」は、「〜チャ」にもなっている。

○サケモ　ノマズニ　ナンギヒテワ　カイガナイ。

酒も飲まないで難儀しては生きがいがない。

○モンチャ　ノミ　モンチャ　ノミ、……。

帰っては飲み帰っては飲み、……。

ただし、この場合は、「動詞＋ては」である。

動詞の活用形の中に「は」が内在して（すなわち「ワ」の形は見えなくて）、その一体のもの<話部>が、動作修飾部になっているものがある。

○タベリャ　シマスガ　ノー。

たべはしますがね。

○キナハリャ　ヘン　カイ。

来なさりはしないかい。

後者例は、「動詞＋助動詞」の活用形の場合である。

［体言＋モ］

○ドッコモ　オイキン。

どこへもお行きにならない。

これで明らかなように、「〜モ」も動作修飾部に立つ。

○ドッコイモ　イキナハラ　ヘン　ガトー。

どこへも行きなさりはしないんだってよ。

など、「〜ヘモ」とも言っている。

○イツマデモ　ワライヨラー。

いつまでも笑ってらあ。

「〜マデモ」も、動作修飾部としてはたらいている。

○キナイヨーナノモ　ウイェマシタガ、……。

黄いろいようなのも植えましたが、……。

「〜ノモ」も、動作修飾部になっている。

○ハチジューネンモ　ナリマスケン、チガイマス　ナー。

八十年にもなりますから、ちがいますね。

○オマイカタノ　ササモ　トッタ。

おまえさんのうちのささも取った。

○この　笠の　値が　二十五円モ　スルヨーニ　アリマセバ　いいんです。

○シャゲル　モノワ　ヒトリモ　ナイデス　ワイ。

“かがみこむ（つぶれる）”者はひとりもないですよ。

これらでも、「〜モ」の動作修飾部が明らかであろう。

［体言＋デモ］

「デモ」は熟して一係助詞になっており、これの、体言または体言相当のものをささえたものが、動作修飾部になっている。

○イモデモ　アゲトケ　ヤ。

いもでもあげておけよ。

これは、「まあ……でも」――一部許容――の「〜デモ」である。

○ドガイデモ　エー　ワイ。

どんなでもいいさ。

○ダレンガデモ　ノミナハルガ、……。

自分のたばこを忘れてきては、だれのでものみなさるが、……。

これらは全許容・万事流通の「〜デモ」である。

○キリモノデモ　イッテニ　キメテ、……。

きものでも一手にきめて、……。

○シャエンデモ　シュンドキデ　ナイト、……。　<アクセント失>

菜園でもしゅんどきでないと、……。

これらは、「〜にしても」、「たとえば……でも」の「〜デモ」と見られる。

○クサデモ　カルーテ　モドリヨッタ　ゾヨ。

草でも背おってもどってたよ。

これは、「〜でさえも」「〜までも」の「〜デモ」である。

○「ヒトナミノ　キンチャクワ　コーテデモ　サゲー。」ということがあります。

人なみのきんちゃく（金いれ）は買ってでもさげろ（持て）ということがあります。

この「〜デモ」は、「たとえ……でも」との意になるもので、下にきわめてつよくかかる。

［動詞＋カモ］

外形上、動詞に「カモ」のついた形のものが、動作修飾部になっている。

○ドッチー　ハイッタラ　ヒクー　ナルカモ　シラン　ノカ。

どっちへはいったら低くなるのかも知らないのか。

「ナルカモ」は、「ナルのカモ」に近いとも見ることができる。

［体言＋カ］

○ナンカ　コトバニ　チゴータ　トコン　ナイジャロー　カ。

何かことばにちがったところがないだろうか。

○ドコノ　ブラクノ　ウケモチカ　シランガ、……。

どこの部落の受けもちか知らないが、……。

「〜カ」が、動作修飾部になっている。

動詞＋タリ＋ヤ　　（P.192参照）

体言＋ゾ

○ダレゾ　ミヨ　センロ　カ。

だれか見ていやしないだろうか。

○ナンゾ　オモシライ　コト　ヒテ　アソボー　ヤー。

何かおもしろいことをして遊ぼうよお。

○ドガイゾ　ワケニャ　イカン。

どのようにか分けなくちゃいけない。

このように、体言または体言相当のものを「ゾ」のささえたものが、動作修飾部になり、下にかかっている。

「ゾ」の前には疑問詞がくる。

○ソイツオ　ドコゾイ　トバクラカヒテ　シモータ。

そいつをどこかへすててしまった。

の場合も同様である。

さて、つぎには、**接続助詞**のささえる動作修飾部がある。私の調査では、次下の種類のものがとらえられた。

〜ジャ＋ニ

○ナヘ　ゼ。キョー　オショーガツジャニー。

なぜなの？　きょうはお正月だのに。

「ニ」に関しては、この一例を得ているばかりである。「〜ニ」が動作修飾部となる。ただし、上例では、修飾される述部表現が見えない。「ノニ」でない「ニ」は、「〜ジャ」をささえて、動作修飾部での文終止をおこすのがつねか。「ニ」接続助詞<逆接>を動詞助動詞の下に自由につかうふう

はないようである。――「〜ノニ」は別に自由につかわれている。

「イク　ガニー。」などの「ガニ」は、もともと、「の」に当たる「ガ」と「ニ」との結合である。「ノニ」は接続助詞になっている。「ガニ」にも接続助詞の用法があるかと見るのに、ない。「ガニ」は文末詞化している。

動詞＋ケンド

動詞または動詞相当のものの、「ケンド」にささえられたものが、動作修飾部になっている。

○シタガジャケンド、……。

したのだけれども、……。

動詞＋ガ

○タコワ　モテカイデモ　エーガ、……。

たこは持っていかなくてもいいが、……。

○ドコイ　イキナハローガ　キナハローガ、……。

どこへ行きなさろうが来なさろうが、……。

動詞＋助動詞「タ」＋トコロガ

○イタトコロガ、ナンジャッタワイ、……。

行ったところが、あれだったよ、……。

用言＋モノノ

○ドーロワ　ベンリナモノノ、イノチトリジャ。

道路は、便利なものの、命とりだ。

用言＋タテ

○ミタテ　シランノデス。

見たって知らないんです。

○コイ　ユータテ　ヨー　イカン。

来いと言ったってよう行かない。

○ヤッタテ　……。

やったって……。

動詞連用形に「タテ」がつく。「〜タテ」は当方言の一つの目だたしい動

作修飾部である。(「〜テモ」はつかわれないようである。)

○カトータテ　カマンノジャ　ガノー。

かたくったってかまわないんだがね。

などとも言っている。(P.30参照)

用言連用形＋テ　(「〜テモ」もある。)

この動作修飾部のおこなわれることはさかんである。——どこの方言ででも、通常、そうであるが。

○カンナンキグローシテ　スルノオ、……。

艱難気苦労してするのを、……。　(仲買いがわるいことをするんです。)

これでは、「〜テ」の動作修飾部のありさまが、ことに明白であろう。

○バカシテ　トショリワ　イケン　モンジャ　ワイ。

ばかなことをして、年寄りはどうもつまらないものですよ。

「バカシテ」が下の「イケン」にかかっている。

○イップクリューニ　ナッテ　シモータ。

“変人になってしまった。”　(“何かすぐれているような感じも多少する。”)

○ヘイキヘーザデ　カタイデ　アガッタ。

平気のへいざでかついであがった。

これらでは、「〜テ(デ)」の下へのかかりかたが急迫的である。

○オシューテ　ヤスム　キニ　ナラン。

おしくて、休む気にならない。

このように、「形容詞連用形＋テ」も動作修飾部になっている。

動詞＋シ

○サイサイ　ヨバレテモ　イコーシ、……。

たびたびごちそうになっても行こうし、……。

「〜シ」で言いとめになることもある。

動詞＋ケン(ケネ)、キン

動詞（「動詞＋助動詞」も）、動詞相当のものに、「ケン」のついた動作修飾部が、さかんにつかわれる。

○スグ　イクケン　マチョレ　ヤー。

すぐ行くから待ってろよ。

○マケタノデ　ゴザイマスケン、シカタガ　アリマセン。

負けたのでございますから、しかたがありません。

○チンカシタガジャケン、アンマリ　アンシンシテ　オラレナイ。

沈下したのだから、あんまり安心してはいられないよ。

○オナゴノ　コワ　スネクッタリ　イタシマスケン　ナー。

女の子はすねたりいたしますからね。

上の最後の例では、「〜ケン」の動作修飾部に対応する述部が出ていない。

「ケン」は、時に、たぶんまれに、「ケネ」とも言う。——識者は、私の調査カード上に、「老　稀」と注記してくれた。“上品かとも思うがわからない。”ともある。——（例文、「先生が来るケネ今晩は行かニャナラン。」も出してくれている。）

櫛生内の一部でだけ、

○イケン　キン、……。

いけないから、……。

などと、「キン」を言っているという。

［用言＋ノデ］

○キルイガ　タカイノデ　……。

衣類の値が高いので……。

［動詞＋打消助動詞＋ト］

動詞に打消助動詞がついたと見られる形に「ト」のそわった動作修飾部がある。下へ、順接のさまでかかっていく。一用法例はP.188に出した。なお、

○ノマント　ヨージョースルガ　ホント　ヨ。

酒を飲まないで養生するのがほんとうだよ。

○ネキ　イカズト　ナー。

そばへ行かないでねえ。

のように言う。後者例は、「イカズト」に承応する述部がない。

［動詞＋ズ＋ニ］

上の「〜ズト」に似た「〜ズニ」がある。（P.164参照）

○イチネン　ハナ　サカズニ、……。

一年、花が咲かないで、……。

○方向も　見ンズニ、

「〜ズニ」が下方に順接している。

「ズニ」の一体化が認められないではない。

［動詞＋打消助動詞＋デモ］

上の「〜ント」「〜ズト」「〜ズニ」と、組成を等しくすると今は見うるものに、この「〜・ン・デモ」がある。

○カドガマシー　コトー　ユワンデモ、オランダラ　エー。

角がましいことを言わなくても、大きい声で呼んだらいいですよ。

「ユワンデモ」では、「言わンデモ」の分析が可能である。

「ユワンデモ」などの「ンデモ」に当たるものに「イデモ」がある。

○タコワ　モテカイデモ　エーガ、……。　（P.163）

これの「モテカイデモ」に、「持って　行かイデモ」を見ることができる。ところで「〜イデモ」では、「イデ」が打消の意をあらわしている。だから、「イデモ」は「イデ＋モ」である。「ンデモ」は、「ン＋デモ」と、現在では、見わけることができる。もとは、たとえば「言わイデモ」「言わーデモ」「言わンデモ」と、「イデ」「ーデ」「ンデ」が、同じものだったのではないか。それが、やがて、わかれわかれになって、「〜ンデモ」の場合は、ことに、「デモ」の一体感をひきおこすことになったのかと思う。現在形からは、「ン」「デモ」を受けとらざるを得ない。

それにしても、「〜ンデモ」は、「〜イデモ」とまさに同律同調の動作修飾部である。

［動詞＋ニャ］

動詞に「ニャ」のついた動作修飾部がある。

○先生、アッチエ　イテ　モラワニャ　ザン　キマリマセン。

先生、あちらへ行っていただかなくては座がきまりません。

○ユーテ　モラワニャー　ワカラン。

言ってもらわなくちゃわからない。

など。（P.163参照）「ニャ」に内在する「ば」に着目すれば、この類の修飾部は、「動詞＋ね＋ば」の、順接の動作修飾部とされる。

ナケリャ

○ヌケカクレシテデ　ナケリャ　モッテ　カエレン。

ぬけかくれしてでなくちゃ持って帰れない。

この「ナケリャ」も、「なけれ＋ば」の、順接の動作修飾部と見ることができる。

さて、つぎに、接続助詞などの助詞類がくるのではないが、**助動詞の活用形**がきて、そこの一話部が、「動詞＋接続助詞」などに似た動作修飾部になっているものがある。

○ミヤウチノ　マツリニ　フラナンダラ、クシューモ　フラン。　<後部アクセント失>

宮内の祭りに雨が降らなかったら、櫛生の祭りの時も降らない。

では、「降ラナンダラ」の、「動詞＋接続助詞」に似た動作修飾部が見られる。

○アノグライナ　ゴッツォーデ　テオ　キッタラ、テガ　オシーデス　ライ。

あのくらいのごちそうづくりで手を切ったのでは、手がおしいですよ。

では、「切ッタラ」の、同上類修飾部が見られる。

○イイェ　タテルナラ、ワシガ　セッケイグンデ　アギョー　ワイ。

家を建てるのなら、わたしが設計してあげようよ。

では、「建テルナラ」が注意される。

○サブシューテ　シヨー　ナイヨーニ　ナル。

さびしくてしようがないようになる。

では、「ナイヨーニ」が注意される。

○イヌノゴト　アル。

犬のようだ。

では、「犬ノゴト」が注意される。

○行こうと　思っても、ヨー　イキャー　セズ、……。　（P.164）

では、「セズ」が注意される。

さて、つぎには、――助詞類には関係なく――、**形容詞・形容動詞の連用形**から成っている動作修飾部が見られる。

○ハヨー　アケリー　ヤ。

早くおあけよ。

○ヨロシュー　オネガイシマス。　<アクセント失>

よろしくお願いします。

○ナルー　ナッテ、……。

平らになって、……。

これらは形容詞連用形の例である。

○アメカゼニ　キレーニ　ヤクタタンヨーニ　ナリマシタ。

雨風で、すっかり役にたたないようになりました。

○ドガイニ　シナハル　カ、わかりません。

どんなにしなさるかわかりません。

「ドガイニ」は、「ドガイナ」「ドガイニ」二形を有する特殊形容動詞の使用されたものと見る。

さて、つぎには、**体言**そのままのものの、動作修飾部になっているものがある。

○コンバン　ノミナラント、……。

今晩お飲みにならないで、……。

「コンバン」が動作修飾部に立っている。

○ハンブン　アヤツッタ　イーカタ……。

半分ほどお調子にのせた言いかた……。

○ダレジャッツロー。ヒトリ　テオ　アゲタ。

だれだったろう。一人、手をあげた。

○イッポン　アリマスロー。

一本あるでしょう？

○ニジューイェン　オツリ　ツカーサル　カイ。

二十円、おつりを下さる？

など、例は多い。

すぐ上の例の「オツリ」は、「オツリを」の意であるけれども、外形は、体言、名詞そのままのものになっている。「を」格の動作修飾部の場合、このようなことが多い。

○ニバンメ　イコ　ヤ。

二番めに行こうよ。

にしても、動作修飾部「ニバンメ」の外形は、体言そのままになっている。

さて、つぎに、すべての**主部**が、一方ではまた、動作修飾部と見られる。

○デンキガ　インダ。

電気が去んだ。　（停電）

「デンキガ」も、「インダ」を修飾している。

○アノ　ヒトワ　ヨー　シットンナハル　ナー。

あの人はよく知ってらっしゃるねえ。

「ヒトワ」は「シットンナハル」を修飾している。

○ドーモ　コイツワ　コタワン。

どうもこいつはやりきれない。

「コイツワ」も「コタワン」を修飾している。

さて、つぎには、もとよりのことながら、語としての**副詞**が、文表現上で、動作修飾部に立っている。きわめて的確な動作修飾の役わりを発揮するのが、この、副詞から成る動作修飾部である。

○ザット　サンジューネンジャ。

ざっと三十年だ。

○マタ　オハナシニ　キテ　ツカーサイ。

またお話しに来て下さい。

○ヨケ　アゲタラ　ヨロコビナハル。

たくさんあげたらお喜びになる。

上の「ザット」「マタ」「ヨケ」――語としては副詞――が、文表現上、動作修飾部になって、下への的確な修飾の効果を発揮している。

○ナンチャ　ナリャ　セン。

なんにもなりはしない。

○タイガイデ　モンタラ　ヨカッタノニ、……。

たいていで帰ったらよかったのに、……。

○ヒューカタタンヒューカタタント　いうて、獅子がおどる。

こうして、副詞から成る動作修飾部が、広く見わたされる。

つきつめて言えば、多種の副詞の存立と活動とが、ここに注意されるのである。

最後に、動作修飾部で文表現の終止することもあるのを、あらためて指摘しておきたい。（さきにP.197、198、200で、すでに一部の実例が出た。――その修飾部の下に、特定文末部のくることもある。）

○イーイェ　ソレドコロデスカイ。

いいえ、それどころですか。

○シゴト　センドコロカイ。アンタ。

しごとをしないどころか。あなた。

このように、動作修飾部が文終止にあずかっている。

「センドコロカイ」では、「〜どころか」のはたらきの話部が見られ、「ドコロカイ」の係助詞が認められる。ところで「〜ドコロカイ」の言いかたは、この「カイ」の形のできるのとともに、――「カイ」がかねて文末詞でもあるので、「〜ドコロカイ」どまりの文表現をよく定着させること

になった。それゆえ、また、「カイ」をうごかして、「〜ドコロデスカイ。」との言いかたをも成り立たせることになったのである。（そのようではあっても、これらが、なお下方に、関連の、被修飾の言いかたを——述部表現を——予定したいきおい・形態にあることは言うまでもない。）このように、「〜ドコロカイ」「〜ドコロデスカイ」は、文終止用につかわれるのにきまった、特別特定のものになっているので、「ドコロカイ」などは、単純に係助詞のあつかいをなしうるものと、同列にはおきがたくなっていると考えられるのである。

9.　修飾部（その二、状態修飾部）のはたらき

状態<一般的に言って>を修飾する（——状態を言う）修飾部が、以下のように、さまざまに見られる。この種の修飾も、生活上、もちろん重要である。

はじめに、**格助詞**のささえで成り立っている状態修飾部が見られる。

体言＋の

格助詞「の」の用いられるのはつねのことである。

○ヒトノ　キオ　メンテイスルのは、どうしてかなあ。

酒が人の気を酔わせるのは、どうしてかなあ。

「ヒトノ」が、つぎの「キオ」の「キ」（気）を修飾している。（話部のまとまりについて言えば、「ヒトノ」という話部が、「キオ」という話部にかかっていると言ってよい。）「ヒトノ」は、「キ」（気）という状態を修飾している。——「キ」の状態を言っている。「イヨノ　ツレショーベン」（伊予の連れ小便）「イヨノ　サンニンバリ」（伊予の三人ばり<放尿>）と、当方言で言うのでも、「イヨノ」という状態修飾部が見られ、「イヨノ」の、つぎの体言にかかるさま、体言の状態を限定するさまが明らかである。

（状態修飾部の名は、連体修飾部の名にかえて用いるものである。——被修飾部を、「体言」という語を避けて言いあらわそうとして、「状態」と言っている。）

格助詞「の」は、体言相当のものを受けてもよい。

○コイナノ　フカイノノガ、……。

こんな深いのが、……。　（笠についての説明）

これでは、「ノ」が「コイナ」（こんな）についている。ただし、土地の識者は、「コガイニ　フカイノノガ」と言うのがふつうであると教示してくれた。

ついでながら、「フカイノノガ」では、準体助詞「ノ」の重複が見られる。

○牛の口に網をやっているのは、ものを　クーガノ　ヨボーです。

この「クーガノ　ヨボー」では、状態修飾部「クーガノ」が見られ、これは、「クーガ（食うの）＋ノ」で、「ノ」が、体言相当の「クーガ」を受けている。

格助詞「の」は、「ン」になってもいる。

○シヤクション　ネキジャケン。

市役所のそばだから。

など。

格助詞の「の」が、かげをひそめることもある。

○オトドシ　ホーガ、ダイブ、……。

おととしの方がだいぶん、……。

○ソイ、キモノ　ホーガ　ナー。

そうですよ、きものの方がねえ。

などのように。「方が」の前でこうなるのが土地の通有の言いかたのようである。

「ちょうどノ　日ニ」とあってもよさそうなところが、

○チョードナ　ヒニ　雨が　降りましたケン、……。

ちょうどの日に雨が降りましたから、……。

となっている。形容動詞連体形への類推で、「――ナ」形がとられているのであろう。

［体言＋ガ］

「の」格助詞に比定されるべき「ガ」もおこなわれており、したがって、

「体言＋ガ」の状態修飾部が成り立っている。

○今の人間は、ワガ　ジンマイの　ことを　するだけだ。カガドコロジャナイ。

今の人間は、“じぶんのしごと（人前・本分）を”するだけだ。よめどころじゃない。

「ワガ」とある。

○ツルチャンガ　トーフワ、……。

つるちゃんの豆腐は、……。　（P.181参照）

などとも言っている。

○アッタガ　ホーガ　エー。

あった方がいい。

では、体言相当とすべき「アッタ」に「ガ」がついていて、これが状態修飾部になっている。

格助詞「ガ」には、「ソーノガジャケン」（そうだから）のような用法もある。

さて、つぎには、**用言の連体形**のはたらく状態修飾部が見られる。

動詞例はつぎのとおりである。

○カク　ヒトガ　アラクレバッカリ　おれば、……。

舁く人が荒くればかりいれば、……。

○カフーニ　ツレン　トキワ、……。

家風に合わない時は、……。

○ナンニモ　タローダ　クニジャケネ。

何もみなたりた国だから。

○……ト　ユーヨーナ　キモ　スル　カイ。

……というような気もするよ。

動詞に助動詞のそったものが状態修飾部になることも多い。

形容詞のはたらく例はつぎのとおりである。

○エライ　ヒトモ　ヨワイ　ヒトモ　ナシニ、……。

えらい人もえらくない人もなしに、……。

○モチトラシー　カンガエノ　人が　……。

もうすこしましな考えの人が……。

○コンマイ　トキホド　ラクイ　コトワ　ナイ　ノー。

小さい時ほどにらくなことはないねえ。　（子そだて）

○コレワ　エー　ヤイトジャッタ　ワイ。

これはいいお灸だったな。

「エー」は、この一形で成り立っている形容詞である。これで、終止形か連体形かになる。（P.219参照）

形容動詞のはたらく例はつぎのとおりである。

○シンボーナ　コ　ヨ。

よくはたらく子ですよ。

○アノ　コワ　ミジオナ　コジャ　ノー。

あの娘は気だてのやさしい、かわいらしい娘だね。

○テンプナ　コトー　して、……。

あぶないことをして、……。

（「テンプナ」は、「テンポーナ」とも言う。）

ちなみに、形容動詞終止形もまた「――ナ」形である。

○コガイナ　キ　アル　カー。

こんな木があるか。

○ソガイナ　コトー　カンベンシテ、……。

そんなことを考えて、……。

○ドガイナ　モンジャロー。

どんなものだろう。

（「ドガイナ」は、時に「ドガナ」とも言われる。）

これら、「コガイナ」類も、特殊形容動詞とされるものの連体形であって、状態修飾部に立っている。（この種の特殊形容動詞に、終止形はない。この種のものに、「コガイニ」式の連用形がなかったら、この種のものは、品詞上、連体詞とされるところである。）

○ガイナ　コトー　ユーナ　ヤ。

ひどいことを言うなよ。

などという「ガイナ」は、特色はあるけれども、なみの形容動詞である。（――もっとも、終止形での表現はまれのようである。）人はよく「ガイナ」をつかい、強調しては「ガーイナ」などと言う。

○ガーイナ　ビョーキワ　シマヘナンダ　ゼー。

ひどい病気はしませんでしたよ。

さて、つぎには、もとよりのこと、**連体詞**の、状態修飾部としてはたらくのが見られる。

「コノ」「ソノ」「アノ」類のことは言うまでもなかろう。

○ヤマノ　サクモ　オナシ　コト　カイナー。

山畑の作物も同じことかねえ。

「オナシ」は連体詞とされるものになっており、それが、つねに状態修飾部に立っている。

○ソリャ　ドーユー　ホーホーデ　ヤッタラ。

それはどんな方法でやったんだい。

この「ドーユー」も、今は、品詞上では、連体詞とされよう。

○ナヒタ　モン　ナラ。

どうしたことなんだ！

○タイシタ　モンジャ　ナイ。

大したものじゃない。

「ナヒタ」「タイシタ」も連体詞とされる。

○だれが　ヤクダラン　モノー　ウイェタ　カ。

だれがくだらないものを植えたか。

○コモタラン　コトー　ユーナ。　<主として、おとなの男性>

くだらないことを言うな。

「ヤクダラン」「コモタラン」も連体詞とされる。複雑形・長形の連体詞が、かなり自在につかわれており、このようなものによって、状態修飾の方法は

ゆたかにされている。――そのような連体詞をつくり出し、定着せしめるところに、すでに土地人の（方言の）生活特色があるはずである。「ヨシレモセン」（とんでもない）という連体詞も作っている。ただしこれは、年長者により多くつかわれるもののようである。

○ナンチャ　ゴター　アリマセン　ワイ。

これといったことはありませんよ。　（恩典のこと）

この実例では、状態修飾部の「ナンチャ」がとらえられる。「ナンチャ」は、通常、「なんにも」「なんたって」などの意の副詞としてはたらいていると見られる。が、一例、上のようなものも得られた。これからは、「ナンチャ」の連体詞を認めざるを得ない。

さて、さきの動作修飾部でも、一文中に、副文の形（従属節）の、いわば文形式の動作修飾部のできることがすくなくない。同様に、状態修飾部にも、「主―述」文の形式のものがある。

○オコメモ　アジノ　ワルイ　コメ　アルー。

お米も、味のわるい米がある。

これでは、文表現の構造成分――話部――の分割把握という点では、上のように分析することができるが、分析の見地をかえれば、「オコメモ　アジノワルイ　コメ　アルー。」とも分別することができ、ここで、状態修飾の「主―述」文形式「アジノワルイ」を見ることができる。

d）品　詞

1.　諸品詞

以上の記述で、当方言の文法上の諸品詞は、そのほとんどすべてを明らかにすることができた。――文のはたらきを見、文の成文の機能を検討するなかで、しぜんに、語の役わり・はたらきが追求され、諸品詞が把握された。

文構造の成分を、文表現次元を破ってあえて分析するならば、成分は、表現前の次元で、語に見わけられる。（一成分がじつは一語でしかない

こともある。）その語の、文構造成分に生かされる――文表現に利用活用される――されかたに注目して、語を類別すれば、すべての語は、いずれも、なんらかの品詞として位置づけられる。

当方言上では、文表現最低限要素としての諸品詞が、下記のように得られる。＜このことは、諸方言によって異なるものではなかろう。＞

名　詞
数　詞
代名詞
　以上 体言
動　詞
形容詞
形容動詞
　以上 用言
助　詞（格助詞・副助詞・係助詞・接続助詞）
助動詞
　以上 助辞
連体詞
副　詞
接続詞
感動詞
間投詞
文末詞
　以上 独立詞

2.　名詞・数詞・代名詞――体言――について

名　詞

名詞は、これまでの記述の随所に出てきた。

名詞使用に関しての一特記事項は、「名詞＋は」が、たとえば「そんな

コトは」＞「そんな　コタ」と、きれいな助詞融合をおこしもする事実である。じつは、代名詞に関して、このことがよりさかんである。

名詞での接辞が以下のように見られ、そのおのおのごとに、名詞のはたらきの特性がとらえられる。

まず、「ジブンラギリデ」（自分らだけで）（P.190参照）などと言う時の「ラ」がある。この接尾辞「ラ」は、漠然と、名詞の複数を示す。

○ツバエゴトラニ　　（P.188参照）

などという「ラ」は、「なんか」というのにも近いものである。こういう「ラ」にささえられた名詞の方が、より土地風である。

敬卑に関する接辞があり、接頭辞「オ」のついたものでは、「オカマ」（お釜、“いわしを煮る釜など”）「オハチ」（おひつ）「オイレマンマ」（雑炊）などがある。「オ――」は上品語となっている。けれども、「オ」での敬語意識などはうすれていると思う。

○オジャマシマス　ライ。

おじゃましますわね。

の場合にしても同様である。（ゆるい「ていねい」感情があろう。）「オジョーズモン」（“半分アヤツッタ言いかたと、ほめての言いかたと、両方がある。”）の一語では、土地人の解説に明らかなように、「オ」の効果がやや複雑である。それだけに、この語が、文表現上、微妙な役わりをはたす。

「さん」に当たる当方言の接尾辞は「ハン」である。たいていは「ハン」を言い、まれに「サン」を言う。他の人について「田中ハン」などと言うのには、親愛感がこもっていると思う。「三月びな」の「デコサン」など、特別のものについては、しぜんに「サン」がつかわれている。「お人よし」を、「ノンノサン」とも言うという。「神さま」を「ノンノ」と言うので、「ノンノ」にはしぜんに「サン」をつけているしだいか。「ノンノサン」の一語は、“人の、ごくスグイ、よい人のことを言い、真からほめる”ものであるという。

「サン」「ハン」でなく、「チャン」を、相手に呼びかけるのにつかうのは、

当方言での一つのいちじるしい習慣である。（――当方言だけにはかぎらない。櫛生の所属する当喜多郡域で、この習慣がおこなわれている。）名まえに「チャン」をつける。たとえば、五十七歳の女性にも、「イソチャン」と言っていた。“年うえ・年がさの人にでも、したしい間では「チャン」を言う。”とのことである。“相互の間が二十歳もひらくと、「チャン」とは言わぬ。”ともあった。男性が男性に対しても、おとなが、「チャン」を言う。識者の言によるのに、「キサオハン」とか「トクサン」とか、人のその名によっては、人々が、「チャン」とは言っていないこともあるらしい。ともあれ、年の多い女性たちが、「チャン」づけで呼ばれているのは、見ていてほほえましい。「――チャン」は親愛表現用のものと見られる。

「オ――サマ」形式は「オコーシンサマ」（お庚申さま）「オエブッサマ」（おえびすさま）「オトノサマ」（お殿さま）と、特別の場合につかわれている。

卑態名詞をつくる接尾辞が、二つ三つ見られた。

○イヨイヨ　コトクソン　ナラン。

まったくおまえはつまらないやつだ。

「コトクソ」とある。「クソ」が「こと」につくのは、特定の習慣とされるものであろう。「クレ」のついた「スネクレ」、これは“女のはらたて”＜人＞を言う。“「クレ」がつけば強意”ともあった。ただに「スネ」とも言い、また「ネス」とも言う。そして「ネスクレ」とも言う。「イフードレ」というのがある。気むずかしやのことだという。「ドレ」を接尾辞と見ることができようか。

数　詞

数詞は、動作修飾部の、体言から成るものの記述の条などに出てきた。（P.204参照）　（P.195参照）

数詞の使用で異色と見られたのは、つぎの二例であった。

○イチカラ　シジューマデ　……。

一から四十まで……。　（P.190参照）

これは、五十歳台の男性の発言であった。個人的なものかもしれないと思っ

たが、この記録カードへの識者の注記は、「老人一般　多し　中品」となっている。

○ジューイチブンノ　ジシンガ　アル。　<後半アクセント失>

十一分の自信がある。　(「十二分の」に対して言ったもの)

これには識者の注記がない。いずれにしても、この種のことは、男性がわにあることか。村には、どこでも、器用なこと、おもしろいことを、したり、言ったりする男の人がいる。こういう人が、しばしば、村の素朴な娯楽の中心になっている。

助数詞は、当然、注意される問題である。

自然傍受をたてまえとした、日常ふつうの言語生活の調査では、生活上、日常必要とされる、いわば基本的な助数詞がおもにとらえられがちで、ふうがわりな助数詞などはあまりとらえられない。

酒などについては「一パイ」を言う。「二」になれば、酒にはかぎらないが、「二ハイ」である。つぎは「三バイ」と言う。船も「イッパイ」「二ハイ」「サンバイ」と数える。

「ヨンソーバイ」は四倍のことを言う。「ニゴハン」(二合半)は、これでよく熟していて、「ゴハン」が助数詞然としている。

「ヨツダイコ」というのがある。これはやや特殊なもので、祭りの行事での太鼓を四人の男の子がたたくのに言う。　(P.270参照)

「ヒトイキ」というのでは、「ヒトイキワ」となったものが、副詞なみに用いられている。「一時は」の意である。

「イットキ」はすでに副詞化している。「イッテニ」が副詞であることは言うまでもない。

代名詞

代名詞も、これまでの記述の、諸所に出てきた。

人代名詞に「は」がつくと、「ワシ＋は」は「ワシャ」になる。(P.25参照)卑罵称「アイツ」の場合は「アイツァ」になる。(P.21参照)

事物指示代名詞に「は」がつくと、「コレ＋は」は「コリャ」、「ソレ＋は」

は「ソリャ」、「アレ＋は」は「アリャ」になる。（P.25参照）卑称「コイツ」の場合は「コイツァ」になる。（P.21参照）

人代名詞「コンナ」<対称>、「オドレラ」<卑罵の対称の複数、相手一人を指すこともある。>などに「は」がつくと、「――ナー」「――ラー」のようになる。

代名詞では、助詞と関係した場合の、複合・融合がよくおこっている。

代名詞使用での、「は」助詞略とも言えば言える用法も、かなりよく見られる。たとえば、

○コレ　ヒトツモ　ワカラン　ガー。

これは何のことかちっともわからないじゃないか。

など、「コレは」を「コレ」と言っている。

人代名詞の待遇価の問題では、ここに一つ、「オマイ」がとりあげられる。

○スナ　スナ。オマイ。センセガ　ホコルケン。

するなするな。おまえ。先生がほこりにまみれるから。

「そんなことを　するな　するな。」と言い、「オマイ」と言っている。この会話文章は、若い人から年長者へのものであった。

○オマイカタノ　ササモ　トッタ。

おまえさんのうちのささも取った。

これは老女が村出身の男教員に言ったものである。両例を見るのに、「オマイ」の職能は、やや複雑なようである。

接尾辞「ラ」では、まず複数指示の機能が認められる。

○アンタラガ　オンナハル　ノカナ。

あなたたちがいらしたの。

の場合など。

○ワタシラ　ノビスギル　オモータラ　切るんです　ワイ。

わたしどもは伸びすぎると思ったら切るんですよ。

○ウチラ　ネキデ　ヨー　ユワン。

わたしなんかは、近くで言うことができない。

などの場合は、「――ラ」とあっても、じつは単数のことを言っている。「ラ」をつかい、いわば複数風にものを言うことで、主体の立場がぼかされている。（――事実上の複数であってもかまわない言いかたである。）

○オンラワ　エー　コト　ミツケヨー　ヤ。

ぼくらはいいことを見つけようよ。

これでは、「ミツケヨー　ヤ」とあるので、「オンラ」の複数が明らかである。しかし、この「オンラ」で、単数のことを言うこともできるはずである。「ラ」は、漠然と複数を示すかのようであって、じつは単数をあらわしていることが多い。

○ソコラヘンデ　ヤッタ　ント。

そこらへんでやったんだって。

この「ソコラヘン」の場合になると、「ラ」は、体言内容を漠然とさせるためにつかわれていることが明らかである。

3.　動詞・形容詞・形容動詞――用言――について

［動　詞］

動詞も、これまでの記述の随所に出てきた。動作修飾部に関する記述のところなど、参照されたい。（P.186）

はじめに活用の問題がある。

二段活用は、まず、おこなわれない所としてよい。一例も聞くことができなかった。旧知の当地方人のだれからも、かねて聞き得ていない。

五段活用動詞連用形でのウ音便・イ音便は、よくおこなわれている。

ナ行変格活用の痕跡がある。

○イノロー　ヤ。

帰ろうよ。

この「イノロー」からは、「イヌル」（往ぬる）をくみとることができる。識者は、“「イノー　ヤ」の方を多くつかう。”と言う。

上一段活用では、「オ行キル」などの、特定新動詞を認めてもよいかと思

う。（P.172参照）

下一段活用動詞では、「デケル」（できる）がある。「できる」との単純な意で、「デケル」を言っていると思う。下一段の「タベル」の活用で、「たべはするが」などの時、「たべは」を、「タビャー」でなくて「タベリャ」と言っている。（P.26参照）

サ変動詞では、音訛かもしれないが、「スニャ」（せにゃあ）の言いかたがある。

○ナニ　スラー。

何をしようかね。

では、「スリャー」<すれば>相当の「スラー」形が見える。

動詞の、従属動詞になってはたらくことは、P.168 で述べた。「述部の進行態」（P.178）の「本動詞＋オル」の場合も、「オル」が従属動詞である。

「動詞＋て＋オル」<存在態>（P.178参照）の場合も、

○カザアテワ　サワットリマス　ナー。

風あての所は、作物が、“すこしやられてい”ますねえ。

など、「本動詞＋トル」とも見うけられる外形ができていて、「トル」は従属動詞然としている。

「モッテテ」（持って行って）などでは、はじめの「て」の下の動詞が、つぎの「て」との間で、姿を没することになった。第二の動詞の従属・消去が言える。動詞用法上の一事態にほかならず、このような特殊用法によって、人はまた特殊な表現をしはたす。

さて、動詞の連用形が、

○アガリー　ヤ。

おあがりよね。

などのように、女ことばで、やさしい言いかたに利用されているのは特筆される。（P.175参照）その連用形をもとにして、

○アソビナ　ヤ（ヨ）。　（P.141参照）

などの、「連用形＋ナ」の禁止形（ていねいな禁止の言いかた）を創作した

のは（P.125参照）、民衆の、一つの自由な文法活動と見られる。

最後に、動詞でも、接辞が問題とされるが、さして特別のことはない。一つ、「死ぬ」動詞を運用して、

○オシニタンデス。

死なれたんです。

との言いかたをしているのが注目される。

「ウッタテル」（P.123、186）の「ウッ」という接頭辞は、九州方言の「ウッ」接頭辞を思わせないでもない。

「スネクル」（P.200）では、「ク」という接中辞が指摘されようか。

形容詞

形容詞は、形容詞の連用形から成っている動作修飾部の記述のところ（P.203）、状態修飾部の記述のうち（P.208）、その他に出てきた。

「よい」の一語は、一方で「エー」の無活用形容詞を生じ、他方で「ヨー」の副詞を生じている。

形容詞連用形でのウ音便は、ふつうのことである。「大きい」の連用形では、「オーキュー」の形ができている。

「わるい」の連用形は、

○アシモトン　ワルテ　ノー。

足もとがわるくてねえ。

のように、ウ音便が短呼される。

「サブ　ヤ。」（やれさむや。）「コレワ　オイシ　ヤー。」（これはおいしいわ。）など、「ヤ」文末詞による特定文末部のむすびがくる場合は、直前の形容詞は、上のような外形になる。

形容詞仮定形に「ば」がついた場合は、たとえば、「ナケレば」>「ナケリャ」のように、つねに「――リャ」形ができる。

形容詞接尾辞の変わったものとしては、一つ、「――ガマシー」が指摘される。「フリガマシー」は、雨がよく降ることを言う。

○コトシワ　フリガマシー。　<アクセント失>

など。

形容動詞

形容動詞も、形容動詞の連用形から成っている動作修飾部の記述のところ（P.203)、状態修飾部の記述のうち（P.209)、その他に出てきた。

「無い」ことに関する「ナカラニャ」(なくては)「ナカレバ」(なければ)（P.180参照）「ナカリャー」のことばづかいからすれば、ここに、「無い」ことに関して言う形容動詞が認められることになろう。

○バーヤン、ゲンキナカッタ　カナー。

ばあさん、元気でしたかね。

の「ゲンキナカッタ」からは、「ゲンキナカッ」という形容動詞連用形がとり立てられる。

○ジテンシャワ　マダ　ヨーチナカッタンデス　ワイ。

自転車は当時まだ幼稚だったんですよ。

では、「ヨーチナカッ」の連用形が見られる。この種のものは、関西内でも、近畿の人たちなどに、「なになに無かった」ととられたりして、変なことばづかいと見られがちである。（――一方で、「軽イ」<形容詞>などに関しては、「カルカッタ」のような言いかたがなされている。）

「オリヤキナ」(“げさくな”) に関しては、「ヤ」でむすぶ文表現の時、

○オリヤケ（キ）　ヤ。

“いやらしや。”　　(友だち同士)

の形がとられている。

前にもふれたように（P.179、209)、「――ナ」形のものが終止形になる。

終止形・連体形で存在する「――ナ」形形容動詞はすくなくない。

実用上、ほとんど「――ナ」連体形のみで存するものもある。「ヤンチャナ」(“雨でいやな感じのすること”、“めんどい”)、「ゲサクナ」（下品な）など。――これらが、形容詞のはたらきを補うことになっている。

特殊形容動詞としてよいものがある。（すでにこれにふれてきた。P.203、209参照）二態があって、一態は、

コガイナ（こんな）　コガイニ（こんなに）

などと、四音節になっているものである。他の一態は、

ドガナ（どんな）　ドガイ（どんなに）

などと、三音節になっているものである。後者よりも前者の方が、よくおこなわれている。後者では、「――ニ」とあるべきところが、用法上からして、「――イ」となっている。（四音節語では、あり得ないことである。）三音節語のでは、私の資料に、「ソ――」の用例がなくて、「ド――」の用例が多い。それも「ドガイ」の例が多い。四音節語のでは、「ソガイナ」の用例が多い。

4.　助詞・助動詞――助辞――について

助　詞

助詞は、動作修飾部の記述のところ（P.186）、状態修飾部の記述のところ（P.206）に出た。

当方言中、もっとも特異で、土地人もそのことを言うのは、「の」相当の「ガ」助詞である。これは、今までに、たびたびとりあげられた。（たとえばP.208参照）この「ガ」助詞のはいった「ガゾ」「ガニ」などの文末詞もできている。

助詞の使用では、いちおう省略などとも言いうる、陰微な用法が注目される。

○アミ　イキヨッタ……。

網に行ってた……。

での「アミ」のところでは、「アミに」が考えられ、いちおう、「ニ」の省略が言われる。（「に」格が明らかに内在していることは言うまでもない。――「を」格の場合は、内在の傾向が顕著である。）

「アミ〔i〕」など、〔i〕母音でおわるものの場合は、それが「に」格に立っても、しぜんに、「に」を内在させがちか。

つぎに、「は」が内在せしめられる。

○オトーフ　ウレンノンデショー。

お豆腐は売れないんでしょう？

など。

「が」もまた内在せしめられる。

○ツーチ　アルノワ、ドコイ　クル　ンカイ。

通知がある場合、それはどこへ来るんだい。

「の」も同様である。

○オトドシ　ホーガ、ダイブ、……。　（P.207）

など。これらで、外見上の助詞省略が言われる。この種のことは、やはり、方言上の特性的事実とされる。

○ワレ　ドヤス　ゾー！

“おまえ、なぐるぞ！”

この「ワレ」の場合は、助詞が考えられるのであろうかどうであろうか。

さて、

○コタワイジャ。　（P.99）

○デライジャ。　（P.113）

では、「ジャ」に、「デは」が認められるか？　そうだとすると、ここには、「イデ」（打消助動詞）の「デ」と助詞「は」との、特定用法下での熟合が見られることになる。

助動詞

助動詞は、「述部とその機能」の条（P.160、168）で記述された。

指定断定助動詞としては、当方言では、「ジャ」がはたらいており、「ヤ」はない。（伊予北部などになると、「ヤ」がかなりおこなわれるようになってもいるが。）

打消助動詞の「ンカッタ」は、当方言でも、新しく、「〜ナンダ」の打消の言いかたの中へ、はいってきつつあるか。（P.163参照）それにしても、一般に「ナンダ」をよくつかうのは、当地方が、中国へよりも近畿に通じることを示すものである。

断定の「ジャ」助動詞では、仮定形「ナラ」の文末詞化しているのが注意される。（P.161参照）

「ナハル」は、尊敬待遇用の助動詞として、土地人に常用されている。諸活用形が自由に用いられ、当方言のいわゆる敬語生活は、「ナハル」一派にささえられているありさまである。略形「ナル」も、諸活用形みな、よくおこなわれている。

丁寧助動詞「デス」の活用では、一つ、「……デスリャー。」と、言いむすびにする「デスリャ」形が注目される。（P.170参照）

5¹.　連体詞・副詞・接続詞・感動詞について

（これらを、独立詞の第一類のものとする。）

連体詞は、状態修飾部の記述のうちに出た。（P.210参照）

副詞は、動作修飾部の記述のうち（P.204）、その他に出た。

接続詞は、「接続部のはたらき」の条（P.159）、二文連文の記述の中（P.131）などでとりあげられた。

感動詞は、「感声部のはたらき」の条下で記述された。（P.157参照）

以上の諸品詞は、文中つねに独自にはたらき、直接に、文表現の機能に参与する。

5².　間投詞・文末詞について<以上六者、独立詞>

（これらを、独立詞の第二類のものとする。）

間投詞は、「間投部のはたらき」の条下で記述された。（P.156参照）

文末詞は、「特定文末部とその機能」の条で記述された。（P.134参照）

上二者もまた、文表現中、独立体としてはたらき、自身ただちに、文表現の直接成素――話部――となる。

間投詞は間投助詞ではなく、文末詞は、文末の感動助詞ではない。

間投詞については、一つ、「オマイ」などの、対称代名詞の間投詞化の傾向が注意される。（P.157参照）ほかならぬ対称の代名詞は、間投的強調表

現にも、つかわれて当然のものであろうか。

文末詞についても、転成文末詞と称してよいものが種々にできているのが重視される。（そのうちにまた、人代名詞系のものもあった。）方言人たちは、ことにのびのびと文末詞を新たに制定して、その日常生活の言語表現を、自在で、情感ゆたかなものとしている。おのずから、そこで、敬卑の待遇表現の区別もしているのである。

Ⅲ　語　彙

櫛生方言の人たちは、毎日のくらしの中で、どのような語彙生活をいとなんでいるか。

ことばのくらしも、つまりは一語一語をつかう生活である。（日々の方言生活での文表現のためには、一々の「語」がとり用いられている。）その語また語は、言語社会の中で、たがいに群れあっていて、全体が、一つの大きなまとまりを成している。これが語彙である。

一定言語社会の人々は、その社会語彙によって生活する。それは語彙生活と言うことができる。生活のための語彙は、まさに生活語彙と言える。

方言社会はみな、それぞれに、共有財としての生活語彙を所有する。

当櫛生方言は、どのように、その生活語彙を保有しているか。以下には、当方言の生活の実態に即応しつつ、当方言生活語彙の分野を見さだめ、分野語彙のありさまを検討していって、当方言生活語彙の実情と動向とを明らかにすることにしたい。

ところで、方言生活者たちは、その語彙生活の中で、たえず、語の改廃・制定にもしたがっている。そうすることによって、語彙生活の推進をはかっている。櫛生方言には、どのような造語がおこなわれているか。以下、各分野語彙の中で、造語法の観察をもしていきたい。

私のほどこした当方言調査は、限られた短期間のものである。語彙生活の解明という点では、及ばぬことが多い。が、日常のふつうの語彙生活は、おおよそ写しとっているかと思われるのである。生活語彙の日常面あるいは中核部分は、とらえ得ていよう。造語法も、そのおもなものは、みなとらえ得ているかと思うのである。

ここに、当方言の語彙相を約述して、この方言社会に生きる人々の生活・生活感情・生活志向を見ることにする。

a） 生活一般語彙

はじめに、方言社会での生活の、特定部面にかかわるものではないもの、いわばきわめて一般的な役わりを演じているものを、生活一般語彙としてとり立てる。――これも、こういう一大分野語彙と見られる。

1. 助辞語彙

助詞・助動詞の類は、生活一般語彙に属するものとして、最初にとり立てることができる。いわば、もっとも抽象的なものだからである。

助辞語彙をここに列記することは省略する。（P. 221参照）

2. 独立詞語彙

当方言の連体詞は、みな、生活一般語彙に属するものと見られる。（連体詞については、P. 223参照）

副詞も、生活一般語彙に属するものが多い。

接続詞・感動詞、間投詞・文末詞も、おのおのの語彙が、みな、生活一般語彙に属すると見られる。（ここの四者に関しては、P. 223参照）

2′. 副詞語彙

当方言、生活一般語彙としての副詞語彙の状況は、以下のとおりである。

一般的でないものは、b以下の分類の中に出る。　＜以下には、語アクセントを確認し得ないものがある。＞

[分量表現に関するもの]

チート（すこし）　用途は広い。「チート　ハヨーニ」（すこし早く）

「チート　ハデナガ　ヨー。」（すこしはでだがねえ。）などのようにも用いられる。

「チョビット」「チビット」は、まさに分量用のものらしい。

チッタ（すこしは）　この形が一語の副詞になっていると見られる。

モチート（もうすこし）

モチト（もすこし）

モット（もっと多く）

ヨーケ（たくさん）

ヨケ（たくさん、多く）　この方をふつうにつかう。

ギョーサン（たいへん多く）

ダイブ（そうとうにたくさん、かなりたくさん）

ミナ（みんな）　この副詞ができている。

スベテ（すべて）　おとなの男性のつかいがちのもの。

ネコンザイ（全部）

ネコソギ　上の「ネコンザイ」についで、これが出された。

ナニモカモ（なにもかも）

ヨザンニ（余残に）

程度表現に関するもの

タッタ（ただの）　「タッタ　イッペンデ」のような用法になる。

ザット（およそ、そまつに）

チョット（すこし）

マーチョット（もうすこし）

ワリカタ（わりあい）

ソノワリアイニ（そのわりあいに）

カレコレ（そうとう）

ナカナカ（なかなか）　○ナカナカ　リコーナケン　ノー。（P.75）

ダイブン（だいぶん）

ダイブ（だいぶ）

ヨッポド（よほど）

イヨイヨ（とても、まったく）　最上級だと、土地人は言う。下に、肯定の言いかたも否定の言いかたもくる。

ヨイヨ（ほんとに、まったく）　上の「イヨイヨ」の略形か。下に、肯

定の言いかたも否定の言いかたもくる。

ムテツ（ちっとも）　打消の言いかたにかかる。この副詞は、中年以上の男性に多く用いられている。

ヒトツモ（ちっとも）

ナンボーニモ（どんなことがあったって）　下に打消の言いかたがくる。

タイガイデ（たいていで、いいかげんで）

ナンボ（どんなに、いくら）

ナオ（なお）

情態表現に関するもの

ベツベツニ（別々に）

ジュンジュンニ（順々に）

ホドヨー（ほどよく）

ヨーヨー（ようやく、やっと）

タイテイ（たいてい）　「タイテー」とは言わない。（P.39参照）

イチバン（いちばん）

イットキ（いっとき）　「イットキ　オイテ」が副詞に近い。（P.143）

イッテニ（一手に）

ナンニモ（なにもなにも）

コー（こう、このように）

ソー（そう、そのように）

ドー（どう、どのように）

ドヒテモ（どうしても）

コナニ（こんなに）　「する」動詞の表現にかかる。

時の表現に関するもの

イマゴロ（今ごろ）

イマユーヨーニ（今言うように）

コナイダ（このあいだ、このあいだは）

オリカニ（まれに）

ヒョカット（ひょこっと）　「ヒョカーット」（P.50参照）

サイサイ（たびたび）

ミッカニアゲズ（“連日のごとく”）　「アゲズ」と言っている。

アトデ（あとで）

ジキ（すぐ）

ジキニ（すぐに）

チョード（そのおりもおり、ちょうど）

マタ（また）

マダ（まだ）

モー（もう）

理由の表現に関するもの

ナセ（なぜ）　おもに老人におこなわれ、頻度は低いという。

ナヘ（なぜ）　この方が一般におこなわれて、頻度が高いという。品位は、前後者ともに、中等品位のものらしい。

ナンデ（なぜで）

ドヒテ（どうして）　「ドーヒテ」とも言う。

能力の表現に関するもの

ヨー（よう）　下に打消の言いかたがくる。（P.198、164参照）

心緒表現に関するもの

ヘイキヘーザデ（平気のへえざで）

ドノコノナー（むりやりに、おしきって）

シャッテ（しいて）　（P.46参照）

ウンヤッサウンヤッサ（“どうじゃこうじゃ”）　「言う」にかかる。

カンナラズヤ（かならずや）

トテモ（とても）　○トテモ　祝いヤナンカ　デキマス　カイ。（P.113）

ナニサマ（なにしろ）　これは、当地方の特色副詞の一つである。（P.110参照）愛媛県下も南予にはいってはじめて、これが聞かれる。当地方の人々は、若い男性もこれを言っている。他地方人には、この

用語は、一種のしかつめらしい言いかたに聞こえるが、当人たちは、ごくふつうの気もちでこれをつかっているようである。この語の品位は「中の上」であるという。

ヤッパ（やはり）　時に「ヤッパー」となる。

ツヅマリ（つづまるところ）

アンヌジュー（あんのじょう）“「アンノジョー」をよく聞く。”と、識者は言う。

ナンチャ（なんにも）　強調の時は、「ナーンチャ」ともなる。下には打消の言いかたがくるのがつねである。

「なんでもないこと」と、「ナンチャ」で一いき入れる言いかたもある。（P.129参照）これでは、「ナンチャ、」で、すでに否定の表現が完了していると見られる。

イカナコトー（どんなことがあっても、こんりんざい）　これが一語の副詞になっていると見られる。（P.65参照）「イカナコト　動かん。」のようにも言っているという。この副詞も、やはり、当地方特有のものである。主として男性がこれをつかっている。

タダ（ただ）

タダソノ（ただその）　識者が、“「ソノ」に深い意味なし。”と説明してくれている。

タトエ（たとえ）

ユーワユーモンノ（言うは言うものの）

ナマジ（いっそのこと）　当時、小男もこれを言っていた。

マコト（ほんとに）

ドーゾ（どうぞ）　「ドーカ」とは言わない。

以上、七類の副詞語彙状況に、私どもは、当方言の副詞特性を見ることができる。

× × × × ×

副詞の造語法

私のしごととした調査の範囲では、擬声・擬態の副詞の出ることがすくなかった。

あがった副詞には、わりに、和語系のものが多い。漢語系のものでは、P.228の「タイガイデ」が、「大概＋で」の形式ゆえに注意される。

3.　名詞語彙

名詞に関しては、その生活一般語彙に属するものの記述を省略する。たいていは、b以下の分類の中にはいる。

生活一般語彙に属する名詞の造語法では、一つに、「あげく」の意の「アガリ」など、動詞連用形の名詞化が注目される。「むちゃ」の意の「ワヤ」など、固有の発想のままの、未形成的名詞は、あまりとらえられなかった。「マコト」の類もすくない。

4.　数詞（→助数詞）語彙

私の目的の日常生活語調査では、とり立てて言うにたる、興味ぶかい助数詞は出てこなかった。いわば、ありきたりのものが得られたのである。（なお、P.215参照）

「ヒ下イキ」（一いき）という言いかたはあっても、「フタイキ」というのはない。「イットキ」（一とき）があっても「二トキ」はない。

5.　代名詞語彙　　＜以下に、語アクセントを確認し得ないものがある。＞

指示代名詞語彙については、言うほどのことがない。

ただ一つ、「イズレ」に言及すれば、これが、

○カマイマセナイ。イズレデスケン。　　（P.60）

のようにつかわれていた。他に、「イズレ」のつかわれるのは聞かなかった。古風な一代名詞が、特定用法の中に退存している。

その娘さんに聞かせてもかまいませんよ。いずれ結婚するんですから。

このように言いあらわしてしまえば、「イズレ」はもはや副詞ととられる。

人代名詞は、つぎのようである。

自　称

ワタシ（わたし）　老年層で「ワタシ」のよくおこなわれているのが、ひとつ、注目された。

ワシ（わたし）「ワタシ」の次の位に「ワシ」がある。これが各階層によくおこなわれている。かなりくだけた言いかたの時も、「ワシ」がつかわれる。日常生活上での、便利な代名詞である。

ウチ（わたし）　女性ことばである。大人小人ともにこれをつかう。

ボク（ぼく）　やはり小学生男子にこれが多い。

オンラ（ぼくら）　この形のものが聞かれる。男子に一般的なものであるという。品位に関して、識者は、「中」としてくれている。

対　称

アンタ（あなた）　これがまず、よい方の代表的なものか。妻が夫を呼ぶのにも、「アンタ」を言う。（また、人と場合とによっては、「アナタ」も言う。）

対称代名詞としての「アナタ」は、慣用されていない。

オマエ、オマイ（おまえ）　通例、これは下品とされている。目下の者に「オマイラ」などと言う。ただし老人は、「オマイ」をやや古風にも、――つまりそんなにわるいことばとしてではなく、つかってもいるらしかった。（P.216参照）

コンナー（おまえは）　この熟した言いかたは、わるい言いかたの「オマエ（イ）」につらなるものである。

オドレ（おのれ）　これは悪罵の対称である。

ワレ（おまえ）　この対称代名詞があるが、めったにつかわれない。

＜ヨイ＞　呼びかけて相手に「ヨイ。」と言う。「ねえきみ！」というほどの意になる。「ヨイが（きみが）　……。」というような言いかたはできていない。「ヨイ」代名詞は認めることができない。

が、代名詞に近いものがここにあるとは、言うことができる。

ドナタモ（どなたも、みなさん）　特別なものに、この、相手がたに呼びかける言いかたがある。「――モ」が慣用形になっている。（例文は、P.97参照）「ドナタ」は不定称の代名詞であるけれども、これを第三者につかうことはほとんどないらしい。雅語「ドナタ」は、対称の特殊用法にあずかるものになっており、挨拶表現用のものとなっている。「ドナタモ　……。」の挨拶が、もっともていねいな気分をあらわすことは言うまでもない。

他　称

アイツ（あいつ）

コンナラ（あいつら）　「ラ」のついた形が慣用形である。

アレ（あの人）　時につかわれる。「アノ　ヒトワ」（あの人は）の言いかたもする。

不定称

ダレ（だれ）

当方言の人称代名詞語彙では、以上のものが注意される。日常生活では、これらが、生活語彙として、よく利用されている。

×　×　×　×　×

代名詞の造語法

人称代名詞で、「ラ」をつけて蔑称を製するのは、一つ、注意される。

もと人代名詞の「ワ」が、「ワガ　ジンマイ」（P.208）など、「ワガ」（“じぶんの”）とつかわれている。自称または対称に「ワ」がつかわれることはない。「ワ」は名詞化している。ところで、「ヒトー　バカニ　ヒトル と思った。」（人をばかにしてると思った。）などは、「わたしを」のつもりで「ヒトー」（人を）と言っている。ここだけで言うなら、名詞の代名詞化である。（こうも言える表現になっているということである。）

6.　動詞語彙

生活一般語彙に属する動詞語彙の記述は、省略する。（P.217参照）動詞も、多くは、b以下の分類の中に出る。

――ただここに、二・三の特別な動詞だけをとりあげておきたい。

「ハマル」という動詞がある。「ハマッテ　コイ　ヤ。」は「はいって来いよ。」である。（家にでもへやにでも）「ハマレ　ヤ。」などとも言う。つぎに、“この区域にはなに集落もなに集落もはいっていた。”などと言う時の「はいって」も「ハマッテ」と言う。“物が物の間にはいること”も「ハマル」と言う。まことに、「ハマル」は、当地方の独特のことばである。日常生活を特色ゆたかにささえているのがこの動詞であるとも言える。松山市中心の地方の人々も、「ハマル」を聞くと、南予だなと思う。（「ハマル」をつかう人々は、「入れる」の意で、「ハメル」もつかっている。）

老人層でまれに用いられる、品のよい一動詞に、「ナス」（する）がある。ほとんど、「ナシヨイデル」（P.172）の用法があるだけであろう。

「コタワン」（できない、やれない）は男女に用いられている。

「ヤクタタん」（役にたたない）という、否定専用の動詞がある。

7.　形容詞語彙

生活一般語彙に属する、「ワルイ」「オソイ」「スケナイ」（すくない）などの、まったく通常の形容詞語彙がある。それらは、そんなに多くの数にはならない。

ひとかどの形容詞は、みな、b以下の分野語彙のどれかに属している。

ここでの通常の形容詞で、造語法上、注意されるものをあげれば、つぎのものがある。　＜語アクセントを確認し得ていないものが多い。＞

ヒドコイ（ひどい）　接中辞「コ」が見える。

キナイ（黄いろい）　「イ」化形容詞である。

クツイ、グツイ（くつい、きつい）　これが「屈」をもとにしたものなら、漢語からの「イ」形形容詞製作である。

ヤヤコシー（めんどうな）　これは「シー」の定式にものを載せている。

〜ニクイ、〜ヌクイ（〜にくい）　「行きニクイ」「しヌクイ」など、新形容詞と見られないことはない。

カイガナイ（かいがない）　これも複合形の形容詞と見られる。

ホッテモナイ（掘ってもない、絶対にない）　この語もできているらしい。

8.　形容動詞語彙

生活一般語彙に属する、「ベンリナ」「シズカナ」などの、ありきたりの形容動詞のことは、いま、記述を省略する。

この方面の造語法のことにふれるなら、「便利ナ」など、漢語に「ナ」をつけて、形容語本位に形容動詞を新作しているのは（——形容動詞語彙の、生活一般語彙にはかぎらない、全般について言えることであるが）、形容詞による形容表現の生活を大いに増幅するものとして注意される。

なお、生活一般語彙として認められる特殊形容動詞類の「コガイナ」「ソガイナ」「ドガイナ」「ドガナ」なども、要素複合のあとを認めしめる、製作巧妙とされる語類である。実用上、これらがたいせつな役わりを演じていることは言うまでもない。

b）　生業語彙

1.　農業語彙

つぎのようなものが注目される。　＜以下には、語アクセントを確認し得ないものがある。＞

農　夫

アシナカ〔名〕（“山ばきのぞうり”）　農夫の身ごしらえに関するものである。山とはおもに山畑を言う。

トンボスゲ〔名〕（ぞうりの鼻緒の先にとんぼの形のかざりをつけて“とんぼぞうり”にすること、また、そのようにしたぞうりのこと）

労　働

ガセイナ〔形動〕（精が出る、よくはたらく）

シンボーナ〔形動〕（よくはたらく）

シュミ〔名〕（趣味）　○ソノ　シゴトニ　シュミオ　モツ。（P.188）

コトンナル〔動〕（役にたつ）「コトンナル　モンジャ　ナイ」（P.187）のように、下に否定の言いかたがくる。――若い者のはたらきのよわいことなどを言う。

イソガシー〔形〕（忙しい）

テブソク〔名〕（手不足）

テマガイ〔名〕（労働交換）

テマガイモドシ〔名〕（同前）　「テマガイ」の方をよく言うという。

コワイ〔形〕（ほねおりなこと、きついこと）　山の上なので、あがるのにコワイなど。荷物が重くてコワイなど。

「シンドイ」「エライ」とあい似たものである。

なお、「コワイ」は、「苦しい」「おそろしい」「さびしい」「“経済逼迫で苦しい”」の意にもつかわれる。（P.75参照）

シンドイ〔形〕（辛労であること）“坂道などをのぼるのに、つかれて、「シンドイ」「コワイ」と言う。”

シンキナ〔形動〕（辛気な）　○コレ、シンキ　ゴザイマスケン。（このしごとは、しんきでございますから。）

ボツボツ〔副〕（ぼつぼつ）　○ボツボツ　ヤレ。（ゆっくりやれ。）

シマウ〔動〕（そこねてしまう）　からだのことなど。（P.153参照）

ヤレル〔動〕（やれる、できる）　「ヤレナイ」（やれぬワイ）の言いかたになるのが特色である。（P.154参照）

―――

カタグ〔動〕（かつぐ）

カルウ、カロウ〔動〕（せおう）

ウズム〔動〕（だきかかえる）　農にはかぎらないが。

モシャクル、モシャグル〔動〕（もみくちゃにする）　農業上のことだけ

にはかぎらないけれど。

ホデリダス〔動〕(ほじくり出す)

ハシカイー〔形〕(麦の穂をたたいてみにする時のほこりでむずがゆくなるのを言う。)

耕　作

マタガハル〔動〕(稲の株が張る)　○マタガハランノジャケン。(株が張らないんだから。)

アメスギル〔動〕(雨が多すぎる)

フサク〔名〕(不作)

イモダネ〔名〕(さつまいものたね)

シャエン〔名〕(菜園)　「ヤマノ　シャエン」などとも言う。山畑の菜園のことである。ここは、海づらではあっても、谷状の地にできた村落なので、谷あいのおかに、家もあれば菜園もある。

シュンドキ〔名〕(しゅんどき)　耕作・播種に関しても言う。

ヒトノ　ワロウ　ジブンニ〔成句〕(人の笑う時分に)　農事での時期おくれのことを、こう言って卑下する。ややこっけいみも。

カイコンスル〔動〕(開墾する)

ヤマノ　サク〔成句〕山畑の作物

カリツケ〔名〕("山の木をきったあと、雑草などを刈りとる。それらを焼く。そこへもの<多くは、夏作にそば・いも、冬作に麦>を栽培する。その栽培することが「カリツケ」。" "草を刈ることが「カリツケ」ではない。")　○オッサン、ドコイ　イキナハッタラ。(おじさん、どこへお行きでしたか。)←→カリツケ　イトッタ　ノヨ。(カリツケへ行ってたのよ。)　○オッサン、カリツケ　ヨカッタカナン。(P.116)←→シシニ　ヤラレテ　シモータ　ワイ。(いのししにやられてしまったよ。<いもの場合>)

農　具

カリサオ〔名〕(麦の穂、豆のさやなどを、かどさきでたたいて、みに

する時のたたき道具。長柄の竹の先に、細長い鉄棒の二・三本などがついており、この部分をふりおろしてたたく。)

ダイガラ〔名〕(米つきうす)

トオシ〔名〕(おお荒らめのふるい)

カマギ〔名〕(かます)

オイコ〔名〕(おいこ、背におう運搬具)

クサカリガマ〔名〕(草刈りがま)　刃がうすい。

キキリガマ〔名〕(木切りがま)　刃がぶ厚い。

キンマ〔名〕(木馬、"「ヂスリ」です。"、地をすってひっぱるもの)

肥　料

ダルゴエ〔名〕(下肥)

ダル〔名〕(同前)

コゴエ〔名〕(堆肥)　○ウシニ　シカセマス。<牛ごやで、わらや草を牛にふませて堆肥をつくる。>

カリボシ〔名〕("山の草を刈って干したもの——肥料にする")

家　畜

オナメ〔名〕(牝牛)

オナメウシ〔名〕(同前)

メンウシ〔名〕(同前)

オンウシ〔名〕(牡牛)

ボイナ〔形動〕(牛のおとなしいこと)　おもに老人が言う。

ボイ　ヨ　ボイ　ヨ。〔慣用文〕(小さい牛を、こう言ってなでてやる。)「ボイボイノコ」(牛の子)との言いかたもあるらしい。

オルケ。〔慣用文〕(左に行け。)　うしろから、つなを利かせつつ、牛に言う。

ヒヨセ。〔慣用文〕(右に行け。)　これも「ウシオイ」のための独特のことばである。

農作物

タチャガル〔成句〕(立ちあがる)　野菜などの高く伸びていることに言う。

サワットル〔成句〕(作物が“すこしやられている”)「カザアテ」(風の当たる所)でのことである。

コシクレトル〔成句〕(作物のできの、変じてまずくなっていること)　調子の狂うことに、「コシクレル」をつかう。

ヤクタタン〔成句〕(役にたたない)　作物についても言う。

キレーニ〔形動〕(すっかり)　この形容動詞連用形を、作物の様子の表現に用いる習慣がある。「キレーニ」は副詞なみにつかわれている。

○アメカゼニ　キレーニ　ヤクタタンヨーニ　ナリマシタ。

(P.203)

メオオコス〔動〕(芽を出す)　「ハタケデ　メオオコシテ」(畑で、“立った穂のまま芽を出して”)　――立った穂のまま芽を出すことに限って「メオオコス」(芽をおこす)と言うか。老年層のことば。

―――

オコメ〔名〕(お米)　これには、蚕に世の人が「カイコサン」「オカイコサン」と言う心理に似たものもあろう。

なになにタ(とは)〔成句〕(よりは)　「ジッピョータ　イワン」(十俵よりは多い)など、作物の収量について、よく、「〜タ　イワン」の特殊な表現法が用いられている。

アワ〔名〕(粟)

スム〔動〕(済む、おわる、かたづく)　農作物のとりいれに関して、よく「スンダ」と言う。　○アワ　スンダ。ヨーヨー。(粟のとりいれはすんだ。やっとのこと。)

ネビレル〔動〕(“「チューガワキ」<中程度のかわき>だと、あわつぶがくっついてとれなくなる、それを「ネビレル」と言う。”)

ツズ〔名〕(粒)

ツブ〔名〕(同前)　「ツブノ　ミイリ」(つぶのみいり)などと言う。

タマリガワルイ〔形〕(収量がすくない)「ミモノ」(みもの)について言う。

ホシモノ〔名〕(かどさきに、むしろなどで干すもの) 多く、みものについて言うか。

ミシロ〔名〕(むしろ)

トーキビ〔名〕(とうもろこし) これをなまのままで牛にたべさせると、"粒のままで排泄される"という。 ○ツズデ デテ イケマセナイ。(P.189)

イモ〔名〕(さつまいも)

イモツベ〔名〕(いものしり) 「イモノツベ」とも。

ハブサ〔名〕("いものつけねのくき")

リューキイモ〔名〕(さつまいも)

サトイモ〔名〕(里芋)

タダイモ〔名〕(同前) おもにこれを言っている。

メナガ〔名〕("あずきの、やせてすこし長いもの") "土地のわるい所へは、あずきでなくてこれを植える。"という。

ネブカ〔名〕(ねぎ)

× × × × ×

農業語彙の造語法

名詞の製作では、一つに、「いものしり」を言う「イモツベ」が注目される。「イモダネ」などと同じように、「ノ」を入れないで一語を作っている。「リューキイモ」や「イモダネ」は、二名詞のつなぎめに音の変化をおこしているが、「イモツベ」は、二名詞を寄せたままのものである。

二つには、「シュン・ドキ」や「オナメ・ウシ」の、名詞重複のような形式が注意される。「テマガイ」に対する「テマガイモドシ」も注意すべきものである。これでは、「テマガイ」と言っただけではすまされなかった心理がよくうかがわれる。

三つには、やはり、「トンボスゲ」など、「名詞＋動詞連用形」の方式による、新名詞製作の自由さが指摘される。上の「テマガイ」もそれであった。そして、「テマガイ＋モドシ」もそれであった。

四つには、上項のとの対比において、「メナガ」「ネブカ」などの、「名詞＋形容詞語幹」の造語法が注目される。

五つに、「動詞連用形＋動詞連用形」の「カリボシ」「カリツケ」などが注意される。

六つ、「動詞連用形＋名詞」の、「ホシモノ」などというのには、独特の安定感が認められる。

七つ、「名詞＋動詞連用形＋名詞」の「草刈リガマ」があるのに対しては、「木切リガマ」もあってよいわけである。

名詞製作では、動詞連用形が、大きな役わりを演じている。

動詞の製作になると、「メオオコス」「マタガハル」「コ下ンナル」などと、複合形式が自由にとられているのが注目される。

形容詞にしても、「タマリガワルイ」などがある。

形容動詞では、「――ナ」形本位かと言えるものの新作が注意される。

要するに、当農業語彙の分野でも、当地でのいわゆる生活語彙の拡充のために、種々の造語法がとられている。民間自然の、自在な造語法によって、語彙生活は推進せしめられているのである。

2.　漁業語彙

農村と言える当村落のことである。漁業語彙の記述は省筆にしたがいたい。以下のようなものが、当地での海のしごとを知らせる、注目すべきものである。

イヲ〔名〕(魚)　これでは、〔wo〕の発音が聞かれる。

オバチ〔名〕(尾、しっぽ)　けものについてもこう言う。

ヘーサク〔名〕(魚の名)「えい」のことか。

ホータレイワシ〔名〕(いわしの一種)

ホータレ〔名〕(同前)

チンチンブクト〔名〕(ふぐ)「フクト」と言うことが多いと。

ジュンツベ〔名〕(いそぎんちゃく)“いそぎんちゃくの水がチューと出るのを、涙のシュンシュン出るのにくらべて、シュンシュンとよく泣く人のことも「ジュンツベ」と言う。”

コンゲツバラ〔名〕(今月腹、臨月) たこについて言う。

———

アミーイク〔動〕(網漁に行く)

ヒトアマ〔名〕(一あま)“一回、ドボンとはいること。このへんは男がやる。ドブンと。”

× × × × ×

漁業語彙の造語法

「尾」を「オバチ」と多音節語化している。

「ヘーサク」の名を作り、「ホータレ」と言いあらわし、「コンゲツバラ」などと表現しているところには、方言人たちの、やや卑俗でもあるがたのしげな造語感情をうかがうことができる。

かれらは、語にこっけいみをうち出す名手でもある。

3. 副業商業語彙

村に店屋があり豆腐屋があっても、その商業は、当農村の農業生活の中のものである。仲買いにしても同様である。それゆえ、商業関係の語彙も、副業関係の語彙と一つづきにとりあつかうことができる。

ここでは、以下の二・三のものをとりあげておきたい。

オンモリト〔副〕(当地の副業の笠<タコロバチ>つくりでのこと、その笠のてっぺんのまろやかなのを言う。)「オンモリト ナッテ」などという。この副詞は、“老人だけの間で”つかわれる。

ナカゴーセン〔名〕(中口銭)

ツキサゲサス〔動〕(つき下げる) 仲買いが、工作して、値段を安くさ

せることに言う。　○この笠の値が、二十五円モ　スルヨーニ　アリマスレバ　いいんですが。＜「スルヨーニ　アル」の言いかたが注目される。＞

c）　衣食住語彙

1.　住の語彙　　＜以下には、語アクセントを確認し得ないものがある。＞

カタカタノイイェ〔名〕(小さい家)　　「カタカタ」はかたつむり。

“デンデンムシは家をカローてあるく。そのように小さい家ということ。”

ザシキ〔名〕(客間)

トコマエ〔名〕(とこのま)

ヨマ〔名〕(居間)

ナンド〔名〕(納戸)

ヌア、ヌワ〔名〕(家の中の土間)　○ヌア　ハケ。(P.47)

ハワク〔動〕(掃く)

ホコル〔動〕(ほこりがする)

イカノシタ〔名〕(床の下)

イタド〔名〕(雨戸)

クラスマ〔名〕(暗い所、くらがり、灯の消えたくらがり)

———

キサナイ〔形〕(キタナイ)　自家につき、謙遜して、「キサナイ所ですが」と挨拶する。

———

ヤスイレ〔名〕(灰ざら)　“きざみたばこが、きせるで灰になったものを「ヤス」と言う。”

ダス〔名〕(石油の一斗罐)　「ブリキダス」と言うこともあるという。

×　×　×　×　×

造語法

「カタカタノイイェ」などと表現する機智が、人々にある。

「クラスマ」の造語が、名詞製作の自由さを見せている。むぞうさな、さっそくのこの新語作りで、生活のだいじなことが、手がるに表現されるようになった。

「ホコリ」（ほこり）に対する動詞「ホコル」、こういう類の動詞は、あまり聞くことができなかった。

2. 食の語彙　＜以下に、語アクセントを確認し得ないものがある。＞

マンマ〔名〕（ごはん）　童詞だけれども一般に言う。

シャギムギ〔名〕（平たくつぶした麦）（「シャグ」という動詞がある。）

「シャゲムギ」と言う人もあるという。動詞「シャゲル」もある。

チンチマンマ〔名〕（米のごはん）　童詞で、子どもが言う。

オコメ〔名〕（お米）

バチガアタル〔動〕（ばちが当たる）　「オコメオ　クータラ　バチガアタル」（P.157）など。

オイレマンマ〔名〕（雑炊）　一般にこれを言う。

バッポ〔名〕（もち）　子どもがよく言い、一般にも言う。

チンチバッポ〔名〕（米のもち）　以下三者、子どもがよく言う。

アワバッポ〔名〕（粟のもち）

ヨモギバッポ〔名〕（よもぎもち）

ハガタメ〔名〕（“もちをうすく切って、焼いてたべる。”）

タワラモチ〔名〕（もち米とただ米とのまぜあわせでつくったもち）

ツブラモチ〔名〕（同前）　前者の方が上品な言いかたであるという。

トリツケ〔名〕（ついたもちを小さくちぎってあんをまぶしたもの）

オハギ〔名〕（おはぎ）

ダンゴモチ、ヒキゴモチ〔名〕（さつまいもをまぜてつくっただんご）

イモダンゴ〔名〕（さつまいもの粉でつくっただんご）

オマキ〔名〕(かしわもち)

チラシ〔名〕("はったいこ""とうもろこしのちらし""ムギのはったいこはあまりやらぬ。")

オチラシ〔名〕(同前)　これが上品語で「チラシ」が中品語、なお下品語に「コンコ」があるという。

マメイリ〔名〕(みものをはじかせてあめで固めたもの――おやつ)

コッパ〔名〕(切り干しいも<甘藷>)

テンポラ〔名〕(てんぷら)

オカラ〔名〕(豆腐かす)

アサズケ〔名〕(あさづけ)

コーコ〔名〕(たくあん)

アマボシ〔名〕(つるし柿)

―――

シュン〔名〕(たべごろ)

シュンドキ〔名〕(同前)　○シュンドキ　タベテ　ミナイ　ヤ。(P.139)

―――

ノム〔動〕(酒を飲む)　おとなのことばである。

ノンダリ　キータリ　〔慣用句〕(酒を飲んだりきものを作って着たり)

メンテイスル〔動〕(酔う)　「酔わせる」の意につかったのを聞いた。(P.206参照)

カライモノ〔名〕(焼酎)　密造酒のことを、隠してこう言うと。識者はこの語に、"最近、言いだしたかと思う。"と注してくれた。

ヌケゴト〔名〕(抜けことば、"抜けて逃げていくことば"、"かくしことば")

タボコ、タブコ、タバコ〔名〕(たばこ)

クワエル〔動〕(くわえる)　「たばこをくわえる」と言えば、たばこをすうことである。もともと、きせるをくわえたことからきていよう。

識者は、“こんな言いかたはなくなったように思う。”と注してくれている。

———

タベル〔動〕(たべる)　これが常用されて、「クウ」のつかわれることはすくない。

ヒダルイ〔形〕(ひもじい)　“「上のことば」としては「ヒモジー」。”

イデラシー〔形〕(長くもつこと)　持久的なのを言う。(○このアメダマはイデラシー。)きものにも言う。おとなのことばである。

アジモスッポモナイ〔形〕(てんで味がない)　とうもろこしのしんのことも「スッポ」と言うという。

ウマイ〔形〕(うまい)　男子一般がこれをよく言うという。

オイシー〔形〕(おいしい)　これは“主として女子青年に多い。”と識者は言う。

ゴッツォー、ゴッツォ〔名〕(ごちそう)

ユーハン〔名〕(夕飯)　三度食の名に、変わったものはなかったようである。

———

タキモノ〔名〕(たきぎ)

スルビ、スリビ〔名〕(まっち)　老人に多くつかわれる。

ヒューキダケ〔名〕(火吹き竹)

オカマ〔名〕(“いわしを煮る釜など”)

マイラセ〔名〕(いわしの煮たのをすくいあげる、大きいざる)“釜の中へまいらせる”という。

カンナベ〔名〕(“小さなニュームのなべ”)

セイロ〔名〕(せいろ、むし器)

キノ〔名〕(きね)　老人が言う。

ハンボ〔名〕(めしおけ、浅くて広いもの)　おすしつくり専用のものとも言う。

オハチ〔名〕(おひつ)「オヒツ」と言う場合も多いという。

イカキ〔名〕(竹を編んで作った、ごはん入れ専用のうつわ)　半円形に柄がついている。

スズマシ〔名〕(同じく竹製で、これは角形の、底の浅い入れもの)　底の編み目が荒く、物を涼ませるのに適当である。

ソーキ〔名〕(竹を編んで作った食物入れ)　柄がない。

トゾーキ〔名〕(一斗入りのソーキ)

トジョーケ〔名〕(同前)

コマゾーキ〔名〕(小形のソーキ)

デバ〔名〕(出刃)

モドラ〔名〕(たわし)

×　×　×　×　×

造語法

雑炊を「お入れマンマ」と言う。「ぞうすい」などという、濁音の語頭にきた言いかたとは大いにちがったものである。「オ入れ」の「オ」にまた注意したい。民間の、穀物やたべものに対する敬重の思いが、こういうところによく出ている。

「ツブラモチ」、これに「ツブラ」の語を用いているのは妙である。「ただ米」のところがつぶつぶとするのを、こう言いあらわしている。このような念入りの造語があるかとおもうと、一方では、「トリツケ」などと言ってのけているものがある。

「スズマシ」が「涼まし」であるならば、風とおしをよくする目的のこの容器への命名は、いかにも端的であったと言うことができる。「チラシ」も同種の命名である。

3.　衣の語彙　　＜以下に、語アクセントを確認し得ないものがある。＞

キルイ〔名〕(衣類)　老人が言う。

キリモノ〔名〕(きもの)　これも老人がよく言う。

ベベ〔名〕(きもの)　童詞。

エンコバンテン〔名〕(綿いれ、つつそでのはんてん)

ハンチャ〔名〕(はんてん)

シロショージョク〔名〕(白装束)

フー〔名〕(ふう、身なりかっこう)　○「エー　フー　ヒトリマスケン。」(P.104) など、「エー フー」(いいかっこう) と言って、"へんなかっこう" のことを言いあらわす。

ヘチコチ〔名〕(反対)　衣類の着かたにもこれを言う。

シャッポ〔名〕(帽子)

カクリボンチャ〔名〕(笠の一種、ハチクの皮で作る。)

ジョーリ〔名〕(ぞうり)

アサブラ〔名〕(麻うらのぞうり)　むかしはこれが最上のひよりばきであった。

クツ〔名〕(靴)　○クツモ　サンゾクタ　ユーマイ。(P.167)

キンチャク〔名〕(きんちゃく)　財布のことを言う。老人のことば。

ネドコ〔名〕(ねどこ)　とこをとることを「カマエル」と言う。　○ソコイ　ネドコオ　カマエテ　アゲテ　クレ。(P.120)

ウッタテル〔動〕(上へ載せる)　○これでは軽すぎるから、マーチョット　ウッタテテ。(……、もうすこし夜具を重ねてよ。)

ネブタイ〔形〕(ねむたい)　「ねむたくない」ことは、「ネブトナイ」と言う。

オハリ〔名〕(女性の裁縫しごと)　針の穴は「ミミ」と言う。

ユビヌキ〔名〕(ゆびわ)

× × × × ×

造語法

「アサブラ」の造語法が、「名詞＋名詞」の簡略なものであることはそれとして、この二部分の複合のさいに、〔asa〕と〔uɾa〕との接点に、〔b〕のできているのは注目される。（P.53参照）

d）家庭族縁語彙

1.　家庭語彙　＜以下には、語アクセントを確認し得ないものがある。＞

オトッツァン〔名〕（お父さん）“むかしはこればかり”だった。

トッツァン〔名〕（父さん）“このごろはこれ。”

トッチャン〔名〕（父ちゃん）

オヤジサン〔名〕（おやじさん＜父おやのことを＞）○「アリャー　オヤジサンガ　ヤンナッタンデス。（あれはおやじさんがやりなさったんです。）」などと、人まえでも、自分の父おやのことを「オヤジサン」と言う。

オカハン〔名〕（お母さん）“むかしはこれがおもだった。”

カーチャン〔名〕（母ちゃん）

カカチャン〔名〕（母ちゃん）

カッカ〔名〕（母ちゃん）　童詞（“もの言いはじめから就学までの幼児語”）。おこなわれることがすくないという。

ジーヤン〔名〕（祖父さん）“いちばん古い言いかた。”

ジーサン〔名〕（同前）

オジーサン〔名〕（お祖父さん）“今ごろ言いはじめたことば。”

ジーチャン〔名〕（祖父ちゃん）　一般にこれが多くつかわれるという。

＊祖父を言う語が、また、老男を言う語にもなっている。

ジンジ〔名〕（じいさん）

ジサマ〔名〕（じい）「サマ」はついていても、よいことばではない。

クソジンジ〔名〕（くそじじい）　卑罵称。祖父についても言わぬではない。

バーサン〔名〕(祖母さん) “むかしはこれがよいことば。”

バーハン〔名〕(同前) 老人が言い、あまりつかわないと。

オバーサン〔名〕(お祖母さん)

バーチャン〔名〕(お祖母ちゃん) 子どもはふつうこれを言う。

ババチャン〔名〕(祖母ちゃん) “最近のことば。”

ババハン〔名〕(同前) “最近のことば。”

＊祖母を言う語が、また、老女を言う語にもなっている。

バンバ〔名〕(ばあさん)

バサマ〔名〕(ばあ)

クソバンバ〔名〕(くそばばあ)

オトドイ〔名〕<P.22参照>(きょうだい) おとなにこの語がよく用いられている。

キョーダイ〔名〕(同前)

ソーリョー〔名〕(総領)

シリゴ〔名〕(末っ子) 識者は“「シリコ」がふつう。”としている。

オヤ〔名〕(おや)

コドモラ〔名〕(子どもら) おやが人まえで自分の子らのことをこう言う。多少とも、謙遜の感情があるか。

キアンキナ、キアンキニ〔形動〕(のんきに、気がねなしに) 老夫婦の家庭のことなどに、よくこのことばがつかわれた。今は、七十歳もすぎた老男などが、「ジブンラギリデ キアンキニ スミタイ。」との、若い娘たちの希望を、感慨をもって語りぐさにする。

妻⟶夫

アンタ この言いかたが多い。

アナタ

オマエ これは下品だという。

チョット これは呼びかけ専用のものである。

トーチャン

ウチノヒト　これは、人に向かって夫のことを言う時のもの。

ダンナハン　“面と向かっては言わぬ。”

夫→妻

だれそれヨ。　名を呼び、「ヨ」とむすぶ。（――これほどに、当方言では、「ヨ」も、よくおこなわれている。）

コレ

コレコレ

カーチャン

オカハン

――――

カナイ〔名〕（よめ）

ヨメ〔名〕（同前）

ヨメサン〔名〕（よめさん）

ヨメハン〔名〕（同前）

カカー、カカ〔名〕（よめ）　夫のつかう卑称。また一般の卑称。

×　×　×　×　×

造語法

「キアンキナ」という形容動詞は、「気・安気な」という作りになっている。――「キアンキナ」造語ぶりである。

「クソ――」の製作は、民間心理としては、一つの急所をつくものと言える。「クソ」の、もとのきたなさは、もはや問題でなくなっている。

家の人を言う「――サン」「――ハン」「――ヤン」などは、表現価値の分化を目ざして、軽妙に造成しわけたものとすることができる。

「シリゴ」の卑近さは注目にあたいする。このような卑近法によって、土地人たちは、平素の思考の生活を、伸びのゆたかなものにしている。

2.　族縁語彙

イッケ〔名〕(親類)　“むかしのことば。老人におこなわれ、廃止に近い。”という。

オマイカタ〔名〕(おまえさんのうち)

e) 村落社会語彙

1. 人間語彙　<以下には、語アクセントを確認し得ないものがある。>

身体

チンチン〔副〕(きれいきれいに、きれいに)　童詞。

イコシー〔形〕(みにくい)　容貌など、からだに関して言う。

テンカンボシ〔名〕(天日の直射にさらすこと、さらされること)

タブサ〔名〕(たぶさ)　まれに「カタジン」(堅人)がゆっていたと。

ミミ〔名〕(耳)　「耳を寄せて見たら」に当たる言いかたは「ミミスケテ　ミタラ」である。「スケル」は元来「載せる」か。

アギト〔名〕(あご)

ベロ〔名〕(舌)

ヒジコ〔名〕(ひじ)

コソバカス〔動〕(くすぐる)

イガセク〔動〕(胃がいたむ)

ハラガセク〔動〕(腹がいたむ)

ムネンセク〔動〕(胸がいたむ)

ツベ〔名〕(尻)

ポン〔名〕(大便)　本来、童詞である。

ヘーヒル〔動〕(屁をひる)　幼童「プーヒル」。

シー〔名〕(小便)　本来、童詞である。

バル〔動〕(小便をする)　むかしは「ヒル」、今は「バル」、と。

タレナガシ〔名〕(たれ流し)「ショーカチ　ションベノ　タレナガシ」というのがある。「タレナガシ」は、一般の液体についても言う。

ヨバレタレ〔名〕(寝小便をした者)

イヨノ　ツレショーベン　〔成句〕(伊予の連れ小便)

イヨノ　サンニンバリ　〔成句〕(伊予の三人ばり<放尿>)

タッシャナ〔形動〕(達者な)

ガイナ〔形動〕(力持ちであること)　○アイツは　ガイナ　ヤツだ。

ミがカルイ〔形〕(身が軽い)　「ミン　カルカッタ」など。

テンプナ、テンポーナ〔形動〕(あぶない、あぶなっかしい)　やること
が大胆で、人をひやひやさせるのを言うことが多い。

スンヤリ〔副〕(すんなり)　「してる」の意の「ヒトル」にかかる。

ヤッシャリ、ヤッシャラ〔副〕(同前)　「ヒトル」にかかる。

スンヤリガタ〔名〕(細がた)　からだについてだけ言う。

トーロヒメ〔名〕("女のヤッシャリとしてスンヤリしたもの")　わる口
に言うことば。

トーロヒメノカワ〔名〕(上の悪口のひどいもの)(P.150参照)

ビョーキ〔名〕(病気)　そのひどいことを「ガイナ」と言う。「ガイナ
タイビョー」との言いかたもある。

ヨージョースル〔動〕(養生する)

ゾンゾン〔副〕(ぞくぞく)　熱がするのに言う。

ワズラウ〔動〕(病む)　「アシ　ワズローテ」(足をわずらって)など
と言う。

アワヨー〔名〕("粟瘍")　"粟をかんでつけたら治る。"

ヒネル〔動〕(あんまする)

ハリ〔名〕(注射)

ヤイト〔名〕(灸)

ミソヤイト〔名〕(みそをつけてその上にする灸)

キク〔動〕(きく、灸の効がある)

ナオル〔動〕(なおる、治癒する)

× × × × ×

造語法

「ヒジコ」と、「コ」をつけて、名詞の形を一新している。——これで、独特の安定感と独特のやわらいだ気分とが出る。

からだのそこそこがいたむことを「セク」と言い、この簡潔動詞を自由に転用して、複合語をつぎつぎに作りだしている。

「ミがカルイ」とは、有益な形容詞を、複合法で、よくかろやかに作りだしたものである。

「ヤッシャリ」の一副詞も、「やせる」ということばの利用の巧妙さをよく見せている。

「トーロヒメ」には、蟷螂というむずかしい漢語の内在が認められる。文字にさほど深い縁のなさそうなところででも、いつしか、こうして、民間漢語とも言ってよいものが利用されている。

かとおもうと一方では、「ゾンゾン」など、情念そのままが、知識ぬきに、感応的に、「語」化されてもいるのである。

精　神

セイシン〔名〕(精神)(P.59参照)

アタマ〔名〕(頭脳、あたま)　「ススム・ススマン」と言う。

カンガエ〔名〕(考え)　「モチトラシー」(もうすこしましな)という修飾をつけることもある。

ガイナ〔形動〕(偉い)　○あの　人は　ガイナ　人ジャ　ネヤ。

エライ←→ヨワイ〔形〕(えらい←→ばかな)　○エライ　ヒトモ　ヨワイ　ヒトモ　ナシニ、……。(P.208)

イレジョーネ〔名〕(入れ性根)(P.185参照)

イロクイヨク〔名〕(色・食・欲)　これらは“人間の道具だ。”と。「ヒタラン。」(すたらない)という。

———

クシャム〔動〕(めいりこむ)　「キフ　クシャンドル　時に」(P.184)
などと言う。

オドロク〔動〕(おどろく)

タマゲル〔動〕(同前)

ハラタテル〔動〕(はらをたてる)

感　情

ムゴイ〔形〕(むごい)

ムシンナ〔形動〕(同前)

ミジメナ〔形動〕(残酷な、かわいそうな)

オゾガマシー、オドガマシー〔形〕(ひじょうにぞっとする)

カドガマシー〔形〕(角がましい)

オレ　サブ　ヤ。〔慣用文〕(こしゃくな！)　ひやかしことば。

サブ　ヤ。　〔慣用文〕(さむや！)　ひやかしのことば。(P.126参照)

オリヤケ(キ)　ヤ。　〔慣用文〕(いやらしや！)

シジマシ　ヤ。　〔慣用文〕(「オリヤケ(キ)　ヤ。」とだいたい同じようにもつかわれるらしい。)(P.126参照)

オリヤキナ、オリャーキナ〔形動〕("居って飽きのくる"、いやらしい、いやみな、えらそうぶってる、はなもちならぬ)「ヲリアキナ」と書いてくれた人(初老の女性)もあった。この語は主として女性がつかうという。——小・女も、おとなのまねでつかうと。

オリヤケヤ、オリャーキヤ〔名〕("オリヤキナ人のこと")

ヤンチャナ〔形動〕(「オリヤキナ」の意としてもこの語をつかう。)
(P.220、58参照)

ゲサクナ〔形動〕(「オリヤキナ」の意で、これもつかわれることがある。
○おまえはゲサクナ("あきのくる")人間だね。

イジラシー〔形〕(いやらしい)　主としておとなの女がこれをつかって、その頻度は低いという。

ヤヤコシー〔形〕(めんどうな)

メンドシー〔形〕(みっともない) "「ゲサクナ」のよそいきのことば" だという。ぼたんをはずしていたりするのにも言うと。

エゲツナイ〔形〕(ひどい)

バカラシー〔形〕(ばからしい)

ヒョンゲタ〔成句〕(こっけいな) おとなの男のことば。「ヒョーゲル」という動詞のこのままおこなわれるのは聞き得なかった。

ジューリジューリ〔副〕(子どもがあまえて泣くのに、この副詞をつかう。"じれったい" 気分でつかう副詞らしい。) 識者は、この語について、「稀、下品」と注してくれている。

オットロシ ヤ。〔慣用文〕(まあまあ、これはおどろいた。)(P.34参照)

サムシー〔形〕(さびしい) 「サブシューテ」とも言う。

ハズカシー〔形〕(はずかしい) 「ナニサマ」(なにしろ) という修飾をとりがちのようである。

オシー〔形〕(おしい)

オモシロイ〔形〕(おもしろい)

モッタイナイ〔形〕(もったいない)

× × × × ×

造語法

形容詞「カドガマシー」は、「ガマシー」の上に「カド」を載せて一挙に作ったものである。

「オリヤキナ」が「居り飽きナ」であるならば、これはまた自由な造語と言わなくてはならない。「オリヤケヤ」で人をあらわしているのも自由である。

[人 物]

オセ〔名〕(おとな)

ワカイシ〔名〕(若い衆)

ワカイモノ〔名〕(若い者)

ワカゾー〔名〕(若ぞう)

アオニサイ〔名〕(青二才)

ムスメ〔名〕(娘)

オムスメ〔名〕(お娘)

エー　コ〔成句〕(いい娘)

ワカイ　コー〔成句〕(若いこ<女>)

トッショリ、トショリ、トシヨリ〔名〕(年寄り)

イナカノ　モノ〔成句〕(いなかの者)

ハエヌキ〔名〕(はえぬき)(P.25参照)

リコーナ〔形動〕(利口な)

リコーバカ〔名〕(利口ばか)

モノシリ〔名〕(ものをよく知っている人)

セワズキ〔名〕(せわのすきな人)

セワヤキ〔名〕(せわをやく人)　"「あの人はセワヤキジャケン。」(あの人はセワヤキだから。)など、なにもしなくてもよいことをする人につかう。"という。

コトクソンナラン〔慣用句〕(役にたたない、つまらない)人について言うものである。

カタジン〔名〕(堅人・堅造)

イップクリュー〔名〕(変人)(P.199参照)

イフードレ〔名〕(気むずかしや)

イフージン〔名〕(同前)

イフーナ〔形動〕(すねくれた、異風な)

ムッツリヤ〔名〕(無口な人)

スネ〔名〕(すねる人)　女のはらたてに言う。「とりがスネた。」とも言う。

スネクレ〔名〕(女のはらたて)

スネクル〔動〕(すねる)(P.200参照)

ネス〔名〕(「スネ」に同じ)

ネスクレ〔名〕(「スネクレ」に同じ)　(「スネ」以下の類語、四名詞については、P.214参照)

ヤブコーシ〔名〕(反対者、非協力者、破壊主義者)“ある意味でそれを肯定しつつもなお反対する人”だという。

モゲ〔名〕(同前)

ノンノサン〔名〕(お人よし)(P.213参照)

キヨシバッポ〔名〕(“気はよいけれど足らん人”)

ウスノロ〔名〕(上に同じという。)

タランキョー〔名〕(足らず者)

ボケサク〔名〕(同前という。また「ばか」とも。)

ハチモン〔名〕(足らず者)

トロクサイ〔形〕(とろくさい、とろい)

アメサク〔名〕(“ばかげた人をののしって言う。”)

アンポンタン〔名〕(ちえがない者)

ハナタレ〔名〕(男のかいしょなしに言う。)

クソタレ〔名〕(ばかすけ)

ビンダレ、ブショータレ〔名〕(不精者)

ゴクドーサレ〔名〕(ぼんくら)

オジョーズモン〔名〕(お上手者)(P.213参照)

キンダマガキ〔名〕(おへつ言い)

マタクラゴーヤク〔名〕(あっちへついたりこっちへついたりして不節

操な者）

イヤシンボ〔名〕（“たべものにヒロヒロする者”）

イヤシー〔形〕（いやしい）　これはたべものについてのことに限らないで言う。

シミッタレ〔名〕（はきはきしていない者）（P.180参照）　○アイツはシミッタレジャ　ネヤ。（あいつはしみったれだねえ。）

ゲサゲサ〔名〕（ゲサクナ<下品な>人）

———

グズ〔名〕（ぐずぐずや、ぐずぐずさん）

———

シリガル〔名〕（“いそいそとよくうごく人”）　女に対して言うという。男について「シリガル」と言えば、職業をよくかえるなどの、わるい方について言うと。

シリガカルイ〔形〕（“①女の身のこなしの軽い人、②女の浮気する人”）「シリガル」を、女の性について言いもするか。

シリガルーニ〔副〕（しりがるく、たいぎがらずに）　よく行動することに言う。

シリガオモタイ〔形〕（しりが重い）　すわったらなかなかうごかぬ。おもに女の、うごくことのたいぎな人に言う。

カルスケ〔名〕（かる助）　これは女の性について言う。

ヒメタラシ〔名〕（女たらし）　“美男子で、女のすきなやつのこと。”「美男」の意にもつかうと。この語は、おもに男の老人が言うものらしい。

チョーチンモチ〔名〕（女の、“仲持ち”や）女をせわしても男をせわしても。

サワカツギ〔名〕（“男が男の方をせわする者”）　上のに対することば。「あの人のサワカツギをして」などとも言う。

ゴザカツギ〔名〕（浮気おんな）　今は言わぬ、むかしはよく言ったと。

＊“くさすことば80％、ほめることば20％。ほめる時でも、七・八合はおだて半分だ。”

× × × × ×

造語法

じつに、あしざまに言うことば、こだわって言うことば、見さげて言うことばが多い。ほめあげることばはとんと用意していない。民間の、「人」を見ての造語は、下方へ下方へと展開している。関心のありか、批評の方向に注目すべきである。――村の生活の心的動態、倫理感などが、ここでよく見てとられる。

名詞の造語では、一つに、動詞連用形利用の俊敏さが指摘される。「スネ」と言い、「モゲ」（←モゲル）と言う。できたものは警抜である。「グズ」というのも、結果的には、似たものである。

二つに、「動詞連用形＋動詞連用形」での妙味が見られる。「ハエヌキ」の一語は、人をあらわすものとしては、じつに彫りの深いできである。「形容詞語幹＋形容詞語幹」の「ウスノロ」が、ついで注意される。

三つに、「名詞＋動詞連用形」方式での連用形のはたらきが、大はばに認められる。「モノシリ」、これはまず優雅の部類にも入れておきたいものである。「セワズキ」「セワヤキ」、「ハナタレ」「ヒメタラシ」、「キンダマガキ」、「チョーチンモチ」と、造語はさかんに下卑の方向に展開する。みな、動詞連用形がかるがると運用されてのことである。形容詞の場合では、その語幹がとり用いられて、「シリガル」などとされている。

四つに、「名詞＋名詞」の造語法も、むぞうさに「人」を描くのに、しきりに利用されている。「リコーバカ」のできはどうか。くだけて「マタクラゴーヤク」とも言う。股の膏薬のことを思われよ。「スネ」を「ネス」とし、これと「クレ」とを合わせて「ネスクレ」とする。また自在である。「ボケサク」は「ボケ」と「サク」（作）とを組みあわせたものであろうか。ここで――こんな造語感情の時に――「作」が登場する。つぎは「スケ」（助）である。（両者は、咄しの「八さん」と「熊さん」である。）「カルスケ」な

どと言う。――「カルサク」などにはなりようがなかったであろう。

五つに、漢語利用が目だつ。「カタジン」では、「ジン」（人）の音効果が大である。（かたくなな不動性といったものも、この「ジン」が、感得させはしないか。）「イフージン」もよい。「イフーナ」は、作られるべくして作られたものであろう。「イップクリュー」という巧者なものもある。「タランキョー」は、「らっきょう」と「足らん」とを結合したものか。足りない人を見さげての揶揄がここによく出ている。

以上、名詞の製作は、いよいよもって、「人物」語彙の独自の展開、いわゆる下方への展開を見とらせることになっている。性の方面にとりどりの語のできていることも、このさい、しぜんのなりゆきとされる。

形容詞の製作では、「シリガカルイ」「シリガオモタイ」の二語に、大ぐくりの複合法が認められる。

副詞の「シリガルーニ」も注目すべきものである。

性　向

ハデナ〔形動〕（はでな）　これは性向のややそうぞうしいのに言う。酒を飲むとすぐにワーワーと言うのなど。

アンキナ〔形動〕（のんきな）

キムツカシー〔形〕（気むずかしい、短気な、イフーナ）

ネバイ〔形〕（ねばい）　性向の、ねちねちとしていることについても言う。

ヒツコイ〔形〕（“くどいこと”）

ガイナ〔形動〕（強情な）

ガマンヒク〔動〕（強情をはる）　○オトコノコワ　ガマンヒク。

――

ギスイ〔形〕（“きつい”）“よめが姑にアテガイがわるい時など。ことばの荒い時など。”

ミジオナ〔形動〕（かわいらしい、気だてのやさしい）“器量はあまりよくないが、心だてのやさしい、よい娘をほめることば。”などとい

う。

ツマシー〔形〕(勤勉な)

ツツマシー〔形〕("「ツマシー」に同じ" という。)

× × × × ×

造語法

ここで、「――ナ」形本位の形容動詞の製作が注意される。「ミジオナ」などは、形容語「――ナ」としてしか存しないのではないか。ともあれ、「――ナ」形容動詞の製作によって、状態修飾――形容――の方法は、大いに増幅されている。「――ナ」形は今後もよく製作されていくであろう。

[行 為]

コトガ ハヤイ 〔成句〕(ことが早い) さっそくに行動ができることに言う。

ホゾホゾ〔副〕(「来る」にかかる。まごまごと、でもないけれど、年寄りが、うるさがられるのに、何かをてつだおうとして、のこのこ、ごそりごそりと出て来ることなどを言う。) 昭和47年の今日は、もはやこの語をつかっていないという。

―――

オシエムキ〔名〕(教えかた)(P.108参照)

ヤサシー〔形〕(やさしい) ○ヨイヨ ヤサシューニ ……。(ほんとにやさしく……。)

シンセツブリ〔名〕(親切ぶり、親切なはからい・アテガイ)

アマエル〔動〕(あまえる)

ユカイスル〔動〕(愉快する、たのしむ) ごくまれなことばと。

ゼニヒテル〔動〕(かねをつかう) ばかばかしさをいうことば。

イマシメル〔動〕(利をかすめる) ○ヤッパ ムカシカラ イマシメヨーッタンジャロー カー。(やはりむかしから、あの人は、利をかすめてたんだろうか。)

カンナンキグロースル〔動〕(艱難気苦労する)

———

タカブル〔動〕(高ぶる)

ムネハル〔動〕(胸を張る)

ヒトー　バカニ　スル　〔成句〕(人をばかにする)(P.233参照)

オラビチラカス〔動〕(どなりちらす、放埒に大ごえを出す)

アラベル〔動〕(荒びる)

ケンカ(クヮ)スル〔動〕(けんかする)

———

クチツク〔動〕(意見を言う、口をつく、介入する)　老人のことば。

ハラニイル〔動〕(なっとくする)

アヤツッタ〔慣用句〕(ばかにした、お調子にのせた)「言いかた」にかかる。

オチョクッタ〔慣用句〕(同前)

ヤリクチ〔名〕(やりかた、おこない)

ホーラクニスル〔動〕(放埒にする、そまつにする)

ダテヤホーラク(ロク)デ〔副〕(だてやほうらく<放埒>で)「する」にかかる。あとに打消がくる。

ホーラク〔名〕("先のことを考えず、ただぼさっとしてことをはこぶこと")

ワヤク〔名〕(いたずら、むちゃ)

ワヤクスル〔動〕(いたずらをする、むちゃをする)

ヘッチ〔名〕(まちがい)

———

マウ〔動〕(方々をあるく、あちこちする、世間する)

シラネオロス〔動〕(おみこしをすえる)

ヨザレコク〔動〕(夜おそくまで起きていて、あそんだりすること)

———

イチャツク〔動〕("いちゃいちゃする")

ヨバイ〔名〕(夜ばい)

× × × × ×

造語法

「イマシメル」は、変わった用法を見せている。

「行為」に関する上の諸語では、「名詞＋を＋動詞」の形式をとる造語法のよくおこなわれているのが注意される。「ゼニヒテル」「ムネハル」「クチツク」「シラネオロス」「ヨザレコク」などとあり、これらでは、「を」はこなされている。結果として、内容のゆたかな新動詞ができている。——生活感情も横溢している。「クチツク」の一語にしても、なんと妙味の深いことか。ぴりりとしたところもある。

上の造語形式の場合、動詞が「スル」であれば、「ワヤクスル」などとなる。「ユカイスル」なども、ここにならべおかれる。

「名詞＋に＋動詞」となれば、「ハラニイル」がある。「スル」がくれば「ホーラクニスル」となる。

副詞の、「ダテヤホーラク（ロク）デ」のような作りも、長さをかまわぬ、のびのびとしたやりかたで、どの品詞の長形のものの場合にもそうであるが、こういうところに、語の製作の文表現的発想がよく認められる。

［悪　態］

オドレラー！　（おのれらは！）

クソコナ！　（くそこいつ！）　ひと奮発する時にも言う。

クソバカー！　（くそばか！）

クソバカスケー！　（くそばかすけ！）

ポンタレー！　（ぽんたれめ！）

———

ヌカスナ！　（「言うな！」の卑罵態）　○コゴト　ヌカスナ　ワレ。

（こごとを言やがるな！）

ハナクソ　ヌカスナ！　（“つまらんことを言うな！”）

ワレ　ドヤス　ゾー！　（“おまえ、なぐるぞ！”）

ヘオ　タレナ！　（ばかすけめ！）（P.95参照）

以上はみな慣用文になっている。たいていは男子の世界のものであり、多くは、年輩のものに言われがちである。

2.　交際語彙

交際上の一般的な語彙は、この位置で見ておくのがよかろうか。

「挨拶の表現」（P.96）「応答の表現」（P.98）の二条に、交際語彙の一まとまりを見ることができる。

ナアテ〔名〕（あて名）　○ナアテはどこだったか？

ウワガキ〔名〕（上がき）　はがき・てがみの所がき。

———

クル〔動〕（来る）　「先へ行ットリャ　クル　カ？」への返事⟶「クル　ト。」（“行きます。”）

———

タカアガリ〔名〕（高あがり）　座席の高座につくことにも言う。（P.73の「ツメル」、P.202の「ザ」「キマル」を参照）　○タカアガリデ、……。（こんなに高い所にきて、……。）——謙遜の表現。

———

モライブロ〔名〕（もらいぶろ——近所・となりへ）　この風習は、いちじるしいものがあった。きまった挨拶もとりかわされた。家人は来た人を先に入らせようともした。今日は、この風習がすくなくなっていよう。

上には、そちこちの部面のもの、すこしをあげてみた。

×　×　×　×　×

造語法

上の諸語は、「クル」を除いて、みな、動詞連用形利用の日常ぶりを見せた、聞いてわかりやすいものである。

3. 冠婚葬祭語彙　<以下に、語アクセントを確認し得ないものがある。>

ウマレル〔動〕(うまれる)

トリヤゲバーサン〔名〕(産婆さん)

ボー〔名〕(男の子)　うまれた子について言う。

ビー〔名〕(女の子)　○ナニガ　デキタ　カイナ。←→ビージャ　ビージャ。

シメシ〔名〕(おむつ)

ヤヤモリ〔名〕(子もり)　あかちゃんについて言う。

モリ〔名〕(守り)　○モリ三　ヤ下ワレテ。(P.70)

オッポ(パ)〔名〕(おんぶ)

オッポ(パ)スル〔動〕(おんぶする)

オロス〔動〕(おろす)　せおった子をおろすのに言う場合がここに注意される。(P.175参照)

ラクイ〔形〕(らくな)　コンマイ　トキホド　ラクイ　コトワ　ナイノー。(P.209)

コンマイ〔形〕(小さい)　子どもの年次について言うのがここに注意される。

———

オトコノコ〔名〕(男児、男の子)　かなり長じた子どもにも言う。

オナゴノコ〔名〕(女児、女の子)　同前。

セキヒツイレ〔名〕(筆記具入れ)　もともと、小学校低学年生は石筆を入れた。

コズカ〔名〕(小刀)

タケンポ〔名〕(竹づつ)

ツバエゴト〔名〕(じゃれごと、あそびごと)

アタマツツキ〔名〕(頭つつき<あそびの名>)　一人が鬼になる。ぐるりに他の連中が輪になる。この人たちが、指先で、鬼の頭をつつく。鬼は、最初につついた人の名をあてる。——子どもも、青年男女も

するあそびである。

スッガリコ〔名〕(ぶらんこ)

テンゴノカワ〔名〕(あぶなっかしいこと、危険なこと)　大胆に、また冒険的に、あるいはむこうみずにしでかすことに言う。

イケズ〔名〕(いたずら、いじわる)　○イケズバカリ　ヒテ、……。(いたずらばかりして、……。)

ヌケル〔動〕(学校を卒業する)

ヨメサン　など(P.251参照)

トル〔動〕(よめをとる)

オセワヤキ〔名〕(よめさんのこと)　結婚式宴に招かれての挨拶に言うことば。　○マー　キョーワ　オセワヤキオ　モライナサル。オメデトー　ゴザイマス。<後文アクセント失>(まあきょうは、およめさんをもらいなさるそうで。おめでとうございます。)

セワヤキ〔名〕(よめのこと)　○ワタシノ　ホーイ　セワヤキオ　モライマシテ、ヨロシュー　オネガイシマス。<後部アクセント失>(わたしの方へ「せわやき」をもらいましたので、どうかよろしくお願いします。)

ハツムコ〔名〕(初むこ)　結婚式直後にむかえたむこ、というようなことである。

シャガレル〔成句〕("しりにしかれる")(P.165参照)

カフーニ　ツレン〔成句〕(家風に合わない)

ヌケカクレスル〔動〕(ぬけかくれする)　○ヌケカクレシテデ　ナケリャ　モッテ　カエレン。(P.202)——よめが不縁になって、道具類を持って帰る時のこと。

カラダンス〔名〕(からっぽのたんす)　○カラダンスオ　ドノコノナー持って　行く。(からだんすを、むりやりに持って行く。)

アトガエ〔名〕(あとがえ)　○アトガエオ　コシラエテ、……。("男

が、妻君があるのに、女をこしらえて、……。”）

———

イタワシー〔形〕（いたわしい） 死亡に対して言う。

ムシンナ〔形動〕（“むごい”、お気のどくな） 同前。 ○ムシンナ コトー シマシタ ナー。（むごいことをしましたねえ。）（P.111参照）

——この言いかたは、主として男子がするという。

センコ〔名〕（線香）

センコツケル〔動〕（線香をつける）

———

フシモゲ〔名〕（歌って調子のくるうこと） 老年層のことば。

フシモゲガスル〔動〕（節もげがする）（P.101参照） 宴会での歌唱についてなど、こう言う。

ネブカブシ〔名〕（「フシモゲ」のこと）

× × × × ×

造語法

名詞「オッポ」は擬態の作りか。ぬくもりの感じが味わわれる。「タケンポ」というのもある。「ポ」の効果が見られよう。

「ネブカ」と「フシ」とを結合して「ネブカブシ」の一語を作ったのは、まことにむぞうさである。観察と意匠とがまた卓抜ではないか。「ヌケカクレ」の言いかたもまたここに思いよそえられる。

動詞連用形を直に名詞化したものでは「モリ」がある。今では、とりわけ美しいことばとされる。「シメシ」も、同類のことばか。これなど、よく考えたものだとも思われる。

「動詞連用形＋名詞」のものでは「ツバエゴト」がある。「こと」でむすぶので、傑作の感が深い。

「ヤヤモリ」「アトガエ」など、「名詞＋動詞連用形」の作りの注目すべきものが多い。この製作方式が、どの方面どの領野でも、しぜんによくとり用いられている。語彙生活は、この方式によって、つよくささえられている

とも言うことができよう。今後とも、この方式は栄えていくことと思われる。「フシモゲ」(「ふし」が「モゲル」) にも明らかなように、この造語方式は、じつに庶民の座右にある。

形容詞では、「ラクイ」が、漢語「楽」を「イ」の台に載せる方法で作られている。

動詞で、卒業を「ヌケル」とするのは、また庶民の感覚である。

4.　年中行事語彙　　<以下に、語アクセントを確認し得ないものがある。>

オショーガツ〔名〕(お正月)

デコ〔名〕("ひなさん")

デコサン〔名〕(同前、"三月びな")

オエブッサマ〔名〕(おえびすさま)

オシャンニチ〔名〕(お社日)　"オエベッサマが今まで作物の番をして下さって、オシャンニチに神だなにモドンナハル。"

ウス　ナデル　〔成句〕(臼をなでる)　もちをついたかどうかなどと。

オコーシンサマ〔名〕(お庚申さま)

———

ミシマサマ〔名〕(三島さま)　原保(ワラボ)<小字名>にある。"伊予大三島神社のミタマを川之石の宮内に移しに行く時に、櫛生に寄りたいとおっしゃって、ここへ分けた(分祀した)。"

ゴシンタイ〔名〕(御神体)

オマツリ〔名〕(お祭り)　○ミヤウチノ　マツリニ　フラナンダラ　クシューモ　フラン。<後部アクセント失>(P. 202)

ヨミヤ〔名〕(宵まつり——十月二十二日)　○ヨミヤニ　イカン　カー。(宵まつりに行かないか。)

スモ〔名〕(すもう)　「ヨミヤ」の行事にすもうをやる。

オナリ〔名〕(お成り——二十三日)　みこし以下の行列。——お旅所へ。

ネリ〔名〕("渡御——二十三日")

オタビ〔名〕(“渡御所”)　「オタビショ」の語もある。

フリガマシー〔形〕(“雨がたびたび降る”)　かんじんの時に降ったりする。

モトマツリ〔名〕(元祭り)　“九カ町村の祭りを一つにしたら、かならず「モトマツリ」というのができる。”

ヨツダイコ〔名〕(秋祭りの催しものの一つ。太鼓を中心に四人の男の子が、きれいに飾られた台に乗る。それを、長い二本棒で男青年たちがかつぐ。)

ヨイセヤンコ〔名〕(上の、乗り子たちのはやしのことば。)

カク〔動〕(舁く)　輿など、「カク」と言う。

アラクレ〔名〕(荒くれ)　カク　ヒトガ　アラクレバッカリ　おれば、……。(P.208)

ウショーニン〔名〕(牛鬼)　秋祭りの催しものの一つ。　○ウショーニンガ　デタ。(牛鬼が出た。)

ヒューカタタンヒューカタタント〔副〕(秋祭りの「獅子舞い」について言う。)(P.205参照)

ヨバレシ〔名〕(招かれ客)　○マツリワ、ヨバレシデス　ワイ。(P.48)

———

カミサマ〔名〕(神さま)

タユーサン〔名〕(大夫さん)

イサメル〔動〕(“おなぐさめする”)　○カミサマノ　シンタイオ　イサメル。(神さまの神体？をおなぐさめする。)

イノレ。クスレ。　〔慣用連文〕(祈れ。くすれ。——病気をしたら。)　“神さまを信仰せよ。お医者にもかかれ。”

———

オワン〔名〕(お庵、庵寺)　しぜんに、小字地域の集会所にもなっている。

× × × × ×

造語法

「オタビ」「オワン」の「オ」の使用が注目される。人は、神仏への随順の心情を、「オ――」と表白している。

「ヨバレシ」という新名詞にはユーモアがある。「ヨバレル」という受身動詞と「衆」という漢語名詞との結合である。

特殊なものとして、わずかに用に立っているのにすぎないものであるが、「クスレ」という、命令形専用の動詞がある。「クスリ」との関連でできている。

5.　公的生活語彙　　<以下に、語アクセントを確認し得ないものがある。>

ヤクバ〔名〕(役場)　○町村では、ソガイナ　コトー　カンペンシテ、……。(町村では、そんなこと考えて、……。)

カンペン〔名〕(考え)　○町村では　ソガイナ　カンペン　シテ　もらいたくない。

ツーチ〔名〕(通知)

ブラク〔名〕(部落、小集落、小字)　ドコノ　ブラクノ　ウケモチカシランガ、……。(P.197)

マウ〔動〕(まわってふれる、知らせてまわる)

ヨル〔動〕(集会する)

―――

センセイ、センセ〔名〕(先生)

コーチョセンセ〔名〕(校長先生)

テオアゲル〔動〕(手をあげる、挙手する)　学校での子どもたちのことに言うことが多い。

× × × × ×

造語法

公的生活の中でも、「カンペン」の漢語もあれば、「マウ」「ヨル」の卑

近、手がるな日常語も利用されているのが注目される。二種のものは、どんな場合にもよくおれあっている。おれあいよく諸語を造出し活用しているのが、民間造語の世界である。

f） 生活環境語彙

1. 自然環境語彙　＜以下には、語アクセントを確認し得ないものがある。＞

チズ〔名〕(地図)

イナカ〔名〕(いなか)

トコ〔名〕(所)

ニキ〔名〕(そば、近く)

———

ウネ〔名〕(山の高い所、峠)

タネゴ〔名〕(谷川)

ヒノラ〔名〕("家のおもて") "物を干すような所を言う。"

ナルイ〔形〕(土地の平らかなのを言う。)

———

ヘイカサ〔名〕(塀)

ガンギ〔名〕(石段)

ダン〔名〕(同前)

ガンギダン〔名〕(同前)

イシカケ〔名〕(石垣)

ヤハズズキ〔名〕(矢筈築き)　石垣の築きかたの一種。この語はおもに老男に存する。

カサネズキ〔名〕(重ね築き) "水を巻きこまぬように、水にさからわぬように築く。これは「ヤハズズキ」の倍も石がいる。"

グリ〔名〕(小石)

マキナオス〔動〕(石垣を築きなおす)　「マク」に相当することは、た

いてい「ツク」と言っていよう。

クエル〔動〕(崩れる)　「石垣がクエタ。」「鼻がクエタ。」などと言う。山地の崩壊にも言う。

クエット〔名〕(くえた所)　山地・がけについて言う。「クエット」という固有地名もできているという。

ツエル〔動〕(山地の崩壊すること)　"柿など、熟したものがつぶれて汁などが出る"のにも言う。この動詞は、老人におこなわれて、"廃に近い"という。

ツエヌケ〔名〕(つえのぬけた所)　この固有地名を生じているという。

カゴヌケ〔名〕(つえがぬけること)

チンカスル〔動〕(沈下する)

カワ〔名〕(川)　○カワモ　ヨー　イタム　ゾー。(P.185)

カワスジ〔名〕(川すじ)　「コノ　カワスジキンペンデ　ヤルノワ、……。(P.61)

ホドヨー〔副〕(ほどよく)　○水害を　ホドヨー　とめました。

フケ〔名〕("年中じくじくして足が深くおちこむ田")

フケタ〔名〕(同前)

イデゴ〔名〕(田に水を引く小溝)

ミゾゴ〔名〕(溝)　"田と畑の間にミゾゴがある。"

×　×　×　×　×

造語法

名詞を形成するために「ト」の結辞を用い、これで自由に動詞を承けて、「クエット」の一語を創作する。「ト」〔to〕とあって、その場所を言う名詞としての安定感も十分である。

「ところ」の「ろ」をはぶいて、「トコ」という、大小の場所・地域を指す語を創作するかとおもうと、「ガンギダン」と、同義の二要素語を複合し

て、印象明瞭な一語を創作している。

「タネゴ」「ヒノラ」には、音数上の安定が認められよう。

2. 天文気象暦時語彙　<以下に、語アクセントを確認し得ないものがある。>

アメ〔名〕(雨)

アメガラ〔名〕(雨がら、"その年の雨かげん")

ヒガラ〔名〕("日かげん")

アマドシ〔名〕(雨どし)

フリガマシー〔形〕("雨がよく降る" ことに言う。) この形容詞は、おとなの女がよくつかうという。　○コトシワ　フリガマシー。

チョードナ〔形動〕(ちょうどの)　日・時・おりについて言う。　○チョードナ　日に　雨が　降りましたケン、……。(P.207)

アシモト〔名〕(足もと)　○アシモトン　ワルテ　ノー。(P.219)

ジブジブ〔副〕(雨ふりで足もとのわるいのに言う。)「する」にかかる。　○ジブジブ　シテ　イカン。(じぶじぶしていけない。)

ヤゲロシー〔形〕(雨が降ってきたならしくうるさい)　道がぬかるんでいることにも言う。老人におこなわれがちの形容詞か。

キサナラシー〔形〕(きたならしい)

ヤンチャナ〔形動〕(上の「ヤゲロシー」と同義にもつかう。)(P.255参照)　たんにきたならしいことにも、これを言っている。いずれにしても、この形容動詞は、年の多い人たちにおこなわれがちか。

ボロデ　ネジタ　ネヤ。〔慣用文〕("朝、ボロボロト降って晴れることを言う。")　男は「ネヤ」と、人に話しかける。女は「ノン」と、人に話しかける。ともに老年層にありがちのことである。

ネジル〔動〕(天候の好転することにも言う。)　○ネジル　カナー。(もち直すかなあ。)　○ネジタ　ゾヨ。(どうやらもち直したぞ。)

コユミ〔名〕(こよみ)

ヒグリ〔名〕（日ぐりごよみ）

ヒメクリ〔名〕（同前）

ヒナチ〔名〕（日にち）

アヒタ〔名〕（あした）

オトドシ〔名〕（一昨年）

ムカシ〔名〕（むかし）

× × × × ×

造語法

「アメガラ」に対応させて「ヒガラ」を作れば、これは、“日かげん”の意のものとされてよいわけである。

「チョードナ」は、形容動詞製作の自由さをよく見せているものである。「ナ」さえつければよいのだ、といったような気分がこの語にあろう。こうして即座に形容語が生産されていく。民間に形容のことばは貧弱でない。

3.　動植物語彙　＜以下に、語アクセントを確認し得ないものがある。＞

ドーブツ〔名〕（動物）　識者は、この語が、おとなの男子に一般的であるという。

ホエマール〔成句〕（ほえまわる）　犬について言う。

ドバ〔名〕（かえる）　幼時は「ドバ」と言うが、だんだん「カエル」と言うようになるという。

ガニ（ネ）〔名〕（かに）　老にこの称呼が多いという。

オンゴロ〔名〕（もぐらもち）

クロンボ〔名〕（こおろぎ）

タカ〔名〕（ばった）

イナダカ〔名〕（いなご）

エベスダカ〔名〕（きりぎりす）

エンブツ〔名〕（あぶら虫）「演説」の「エンブツ」もあるという。

ヘビ〔名〕（蛇）　「クチナワ」とも言う。「ハメ」はその一種。

———

イガタカイ〔形〕(威が高い)　柳の木について言う。(P.187参照)

ダイダイ〔名〕(夏みかん)　樹名であって果名。

ミシラズ〔名〕(しぶ柿の一種のこと)　"おのれの身を知らぬほどによく生るというので"この名があると。

サルモモ〔名〕(山もも)

ナルテン、ナンテン〔名〕(南天)

モーソチク〔名〕(孟宗竹)

シラチク〔名〕(ま竹)

シノベダケ〔名〕(竹の一種で、節と節との間が短く、葉は"扁平形"であるという。)　笠つくりの時、ほねにつかうものであるという。

ヨシ〔名〕(葦)

ヨシノカワ〔名〕("笠つくりにつかうもの"という。)

シロ〔名〕(しゅろ)

× × × × ×

造語法

「イガタカイ」という一形容詞はめずらしい。複合形式をとるならば、形容詞も、こうして、いよいよ自在に造出することができる。人が、語彙生活上の欲求を持てば、生活語彙のための語詞は、どの品詞の場合にも、難なく作り出していくことができるわけである。

名詞製作では、ひとつ、「モーソチク」「シラチク」などと、「タケ」ではなくて「チク」を持ってきているのが注目される。こういうところにも、造語上の、民衆の一意匠が存していよう。「——チク」の音感への好みもしぜんにうごいていることが察せられる。

□　造語法総収

造語法の事実全体は、まとめて、語彙生活を支持する根本の力と見ること

ができる。生活語彙を、生活の目的に応じて推進させていくのにだいじなのは、当の方言社会の造語心理であって造語法である。

語彙生活推進の動力が、当の方言社会の協同生活意志――社会意志――であることは言うまでもない。その社会意志に密着して、造語法がある。

ここに櫛生方言についても、私どもは、まず、造語法の外形的手法を種々に見さだめることができた。それに即応して、造語にうごく民衆心意をいろいろに追跡することができた。

当方言の生活者たちも、総じて自在な造語手段を発展させてきており、そこに、当方言社会の欲求や意向を見せている。好みの素朴と繊細とが、ともに注目された。発想にも、直接さもあればまろやかさもあった。

造語法の所産としての各語には、その音声相の末微にまでも、表現心理の注目すべきものがある。

結　語

本稿は、もっぱら櫛生方言を記述したものである。――一個特定の方言の記述である。

この記述にしたがうことによって、私は、同時に、「昭和日本語の方言」記述の体系を見さだめようとした。

櫛生方言の記述をおえて、今、思う。昭和日本語の一具体相を記述し得たかと。

ここには、日本語の、昭和の一歴史的現実の把握と解明とがある。生きてうごいている日本語の今日についての、一個の体系的叙述、ないし動的な把握がある。

上来、実践してきた記述の次第は、「昭和日本語の方言」（⟶「昭和日本語」）の記述のための大綱として、定着するものかと思う。

ここに私は、「全国五十余地点方言」記述作業の定礎をなし得たと考えたい。本叢書第二巻以降では、本巻の記述体系により、かつはこれの伸展にもつとめつつ、旨として、資料本位の記述をしていく。

資料本位の記述の続行完結が、昭和日本語の客観的記録の成就となる。生きた資料のみずから語る記録は、まさに昭和日本語の歴史的な記録である。

巻を追うての記述の進行は、また、どのような言語理論の開発を可能ならしめるか。前途に、日本語による言語学の光明があると言える。

（作業は私の進めるものであっても、これによる発展的な研究は、すでに協同作業化の必然性を持っているとされよう。）

付　録　　関係文献目録

ここには、愛媛県下の方言に関してなされた研究の文献を、年次順に、やや多くあげることにする。東予などのものはとらない。
（見る便宜にとぼしいものは、掲載を省略する。）

愛媛県に於ける「ひがん花」の異称（杉山正世）『いよのことば』一　昭6・11
愛媛県に於ける「燕」と「蟷螂」の異称（杉山正世）『いよのことば』二　昭6・12
愛媛県の蝸牛方言（杉山正世）『方言』二ノ二　昭7・2
松山方言のアクセント研究（山内千万太郎）『方言』二ノ三　昭7・3
続南伊予の方言（江湖山恒明）『方言』二ノ四　昭7・4
愛媛県に於ける「つくし」の異称（杉山正世）『いよのことば』三　昭7・4
広島愛媛両方言の境界線（藤原与一）『方言』二ノ六　昭7・6
宇和島語法大略（国村三郎）＜宇和島初等教育会＞昭7・11
愛媛県語法大略（南条孝国）『国学院雑誌』昭7・11
愛媛県における梟の異称（杉山正世）『方言と国文学』二　昭7
甘藷の称呼（愛媛県）（杉山正世）『方言と土俗』昭8・2
馬鈴薯の称呼（愛媛県）（杉山正世）『方言と土俗』昭8・3
幼な言葉の調査――主として宇和島市近傍の――（杉山正世）『いよのことば』五　昭9・2
伊予方言の分布対立（杉山正世）『方言』四ノ二　昭9・2
南予の大島（後藤興善）『島』昭和九年前期
南伊予方言の一断相（杉山正世）『文字と言語』昭10・7
「坊ちゃん」と伊予方言（橘正一）『旅と伝説』昭11・11

南伊予の産育習俗語彙稿（杉山正世）『方言』七ノ五　昭12・6
愛媛県温泉郡神和村語彙（武田明）『方言』八ノ一　昭13・1
伊予松山方言集――昭和の浜荻――（岡野久胤）＜春陽堂＞　昭13・3
方言「文アクセント」の研究 ――愛媛県喜多郡櫛生村の方言生活のアクセントについて――（藤原与一）『国語アクセント論叢』＜法政大学出版局＞　昭26・12
ことば風土記（愛媛）（杉山正世）『言語生活』9　昭27・6
愛媛県方言に於ける音韻現象の概観（大西久枝）『愛媛国文研究』2　昭28・3
県下小・中学校児童生徒の方言経験調査（江戸昌弘）『愛媛県教育研究所紀要』10　昭28・3
「なはる・なはらん」考――愛媛方言の文法的研究――（高辻義胤）『愛媛教育時報』　昭28・6
伊予路の方言（ことば風土記）（梶原　勝）『言語生活』24　昭28・9
伊予のいよいよ（ことば風土記）（中井　義）『言語生活』26　昭28・11
伊予の「ナモシ」と「ネヤ」（ことば風土記）（高橋正敏）『言語生活』32　昭29・5
愛媛県方言の甲種系統アクセント（杉山正世）『愛媛国文研究』4　昭30・3
生活言語としての方言（武智雅一）『国語研究』18　昭30・3
アシコ先生――北宇和郡の方言――（梶原　勝）『言語生活』50　昭30・11
愛媛県方言の分布に関する研究状況（杉山正世）『愛媛国文研究』5　昭31・5
愛媛（杉山正世）『ＮＨＫ国語講座　方言の旅』　昭31・9
改訂宇和島語法大略（国村三郎）＜宇和島市立図書館＞昭31・10
敬語法をたずねて（岡野信子）『北九州国文』6　昭31・11
方言の旅　文学に現われた方言（愛媛）（杉山正世）『ＮＨＫ国語講座』昭32・5

南宇和方言の性格（増田実）＜私版＞　昭32・10
愛媛の方言——語法と語彙——（武智正人）＜愛媛大学地域社会総合研究所＞　昭32・12
松山市郊外古川部落の生活語における断定法 ——断定の助動詞について——（神鳥武彦・愛宕八郎康隆・神部宏泰）『方言研究年報』二　昭34・3
愛媛県宇和島市（杉山正世）『日本方言の記述的研究』＜明治書院＞　昭34・11
宇和島市沿海地区のアクセントについて（杉山正世）『愛媛国文研究』9　昭35・3
宇和島ことば（国村三郎）＜宇和島市国語主任会＞　昭35・7
方言の実態と共通語化の問題点　愛媛（杉山正世）『方言学講座』3　昭36・4
愛媛県肱川流域綜合調査報告　大洲コトバ（武智正人）『愛媛国文研究』12　昭38・2
愛媛県松山市鷹子方面のあいさつことば（柳田征司）『方言研究年報』六　昭38・12
愛媛県西宇和郡三崎町正野方言のあいさつことば（岡田統夫）『方言研究年報』六　昭38・12
肱川流域の方言アクセントについて（武智正人）『愛媛国文研究』18　昭43・12
佐田岬三崎町方言の言語地理学的研究（尾道短大国語学ゼミナール）『国語学の世界』2　昭47・3
話しことばの文アクセント傾向——愛媛県喜多郡長浜町における——（安井節子）『国語学の世界』2
「アタシガ　ヤッタ　ガヨ」の『ガ』の用法について（林みどり）『国語学の世界』2
佐田岬三崎町言語地図（尾道短大方言研究会）＜私版＞　昭47・3

宇和島方言語彙（森田虎雄）＜私版＞　昭47・7

×　×　×

四国の方言（奥里将建）＜三省堂＞　昭18・8

全国方言資料　第5巻　中国・四国編＜日本放送出版協会＞　昭42・1

索　　引

＜記述体系索引＞

Ⅰ　発　　音　19

a）「音声生活」上に見られる特色音節　〃
音声生活　音声表現の生活　〃
文表現の音声相　〃
語音　〃
音節（拍）　〃
特色音節　20

b）「音声生活」上のおもな音変化　24
語音　〃
音変化　〃
音節（拍）　〃
特色音節　〃
1　連語音上の音変化　〃
拗音　25
拗音感覚　〃
連音節融合同化　〃
拗音節　26
音節融合　27
文末詞　〃
2　一語音上での音節融合　28
3　語音上での音節省略　29
促音節　〃
4　語音上での音節添加　33
「長音」節添加　〃
長呼　〃
促音節添加　34
「イ」音節添加　34
5　語音上での音節交替　35
転倒　〃
音変化　〃
「ン」転化　36
格助詞　〃
文末の訴えことば　（文末詞）　37
「ン」音化　38
音節交替　〃

b′）「音声生活」上のおもな音変化
—音節の母音の注目されるもの—　〃
音変化　〃
音声生活　〃
音節（ＣＶ）　〃
母音　〃
母音変化　39
1　語音の連音節上での母音の同化融合　〃
連母音　〃
連母音上の同化融合　〃
連母音相互同化　40
2　語音上での母音音節省略　41
3　語音上のナ行音音節での母音省略　〃
4　語音上の音節での母音交替　44
尾母音　〃
母音変化　〃
転化語　45

異化 45,50
同化 45
母音転化 47
民間語源 〃
逆行同化 〃
狭母音 〃
広母音 48
拗音効果 〃
直音効果 〃
母音変化 49
母音交替 52

b″) 「音声生活」上のおもな音変化
—音節の子音の注目されるもの— 〃
音節 〃
子音 〃
音変化　子音変化 〃
音節変化 〃
1　語音上の音節での子音省略 〃
2　語音上の音節での子音添加 53
3　語音上の音節での子音交替 〃
子音交替 53,55
母音交替 53
濁音化 55

c)　文アクセント　文のイントネーション 56
音声言語の表現生活 〃
「文表現」音声 〃
イントネーション(抑揚) 57
連文(文章) 〃
アクセント 〃
文の音声表現 〃
文アクセント 〃
方言生活 〃
生活感情曲線ともいうべき文アクセント 57
1　高音連続の文アクセント傾向 〃
文末詞 61
高音連続の傾向 64
2　きょくたんなあと上げの文アクセント傾向 〃
高音連続 64,66
高音特立 64,66
方言文アクセント生活 64
特立高音 66
2′ 文の末尾だけを特立させる文アクセント傾向 67
3　文の部分でその末尾をきょくたんに上げる文アクセント傾向68
高音隆起 70
少音節高音隆起 〃
4　文の部分でその末尾と頭部とを特立させる文アクセント傾向 71
5　文の部分できょくたんなあと下がりを見せる文アクセント傾向72
6　中国山陽式の文アクセント傾向74

c′)　語アクセント 76,77,80 81,84,89
語アクセント調査 76
音の高低相 〃
「低」「高」の二段観 〃
調査用語 〃
調査の速度 〃
語観念 〃
語アクセント教示者(女性、男性) 〃
三音節語動詞 80
三音節語形容詞 〃
下降調 88
一音節語名詞 〃
二音節語 〃

三音節語 88
四音節語 〃
4 語アクセントと文アクセント 92
語アクセント 〃
下降調 〃
下降調をとる傾向 〃
語アクセント傾向 〃
文アクセント傾向 92,93
語アクセント類型 〃
文アクセントの生活 〃
語アクセントの整理 〃
音声表現の頂面 〃
文アクセント上の特質傾向 〃

Ⅱ 文 法 94

ことばづかい 〃
日々の方言の生活 〃
文の形 〃
文の要素(成素) 部分(成分) 〃
語 〃
造語法 〃

a) **日々の表現の生活**
—文表現の諸相とその表現法— 〃
方言人 〃
方言社会 〃
文表現 〃
文形式 〃
連文形式 〃
文の構造 〃
表現の法(表現法——文法) 〃
文表現相 〃
文表現は意味作用体 〃
意味作用→訴え 〃
文表現の訴え性 94
文表現の類型 95
表現意図 〃
1 呼びかけの表現 〃
特定化している呼びかけの訴え 〃
悪態の呼びかけ 〃
通常の呼びかけ 96
2 挨拶の表現 〃
習慣化している挨拶ことば 〃
3 応答の表現〈応答の挨拶である。〉 98
4 説明の表現 100
表現意図 〃
意味作用 〃
訴え 〃
表現類型 〃
説明の訴え 〃
訴えことば 102
文表現→諧謔味 104
説明の表現→敬卑の待遇の表現 〃
対人的な文表現 待遇文
待遇敬卑表現の文 〃
5 判断の表現 〃
判断の訴えの表現類型 〃
敬意表現法 105
敬意表現形式 〃
訴えことば 106
訴え性 〃
6 所懐の表現 109
7 意志の表現 111
意志表現の訴え 112
8 抗弁の表現 〃
9 想像の表現 113
文末の声調 〃
文末詞 114
10 問尋の表現 115

文末詞 116
11 勧誘の表現 119
12 命令の表現 120
禁示命令 〃
13 勧奨の表現 121
敬語法 〃
命令 〃
連用形敬語法 122
14 依頼の表現 〃
15 制止の表現 124
禁止 〃
敬態→制止 〃
禁止形 125
敬態禁止形 〃
16 感嘆の表現 〃
自己への訴え 〃
感声的 〃
待遇敬卑の表現 126
表現が対人的 〃
待遇敬卑の効果 〃
訴えの実質 〃

b） **連文表現とその構造** 〃
二文の連文 〃
二文に必然的連関 〃
直流性の連文（＝展叙の方向） 127
反転性の連文（＝補充の方向） 〃
A まず，「反転性の連文」について。〃
1 反転性の連文で、第二文が、語としては副詞であるもの 〃
2 第二文が，「体言＋助詞」でできているもの 〃
3 第二文が2の場合と同様で、しかもこれが、第一文に対して、主部的な役わりを演じるもの 128
4 第二文の形の比較的複雑なもの128
B 次下に，「直流性の連文」を見る。129
5 直流性の連文で、第一文が、「呼びかけ文」という特殊文であるもの 〃
6 第一文が、語としては感動詞またはそれに近いものであるもの 130
感動詞 〃
7 第一文は複雑で、第二文が特殊文であるもの 〃
連文上での抑揚 〃
8 第一文第二文、ともに複雑であるもの 〃
列叙の連文 131
細叙の連文 〃
接続詞 〃
接続詞のある連文 〃
順接 132
逆接 〃
文末詞 〃
文末部の呼応→必然的連関の二文 〃
呼応連関 〃
文末詞相互の呼応 〃
連文表現の品位品格 〃
二文連文上の抑揚→二文呼応の必然 〃
文アクセント 〃
二文呼応のポイント 133
連文表現の表現性と表現味 〃

c） **文構造の成分とその機能** 〃
文表現の意味作用 〃
文→文構造体 〃
文構造 〃
成分 〃

文表現 133
文の成分　話部 〃
直接的要素（＝直接要素） 〃
成素 〃
文構造の成文(話部) 134
文表現の活動・生態 〃
1　特定文末部とその機能 〃
特定文末部→文末詞 〃
訴えことばの文末詞 〃
文表現の意味作用 〃
原生的文末詞のナ行音文末詞 〃
原生的文末詞のヤ行音文末詞 138
原生的文末詞のザ行音文末詞 142
原生的非感声文末詞の「カ」類 144
転成文末詞の助詞系文末詞 146
転成文末詞の助動詞系文末詞 151
転成文末詞の名詞系文末詞 152
転成文末詞の人代名詞系文末詞 〃
敬態↔常態 〃
転成文末詞の感動詞系文末詞 156
2　間投部のはたらき 〃
間投部と称すべき話部→間投詞その他 〃
文表現の敬卑度・品等 157
3　感声部のはたらき 〃
感声部→感動詞 157～158
応答詞 〃
4　提示部のはたらき 159
提示部→おおかた体言 〃
5　接続部のはたらき 〃
接続部→接続詞 〃
6[1]　述部とその機能……(助動詞一般について) 160
文表現の述部→動詞→助動詞 〃
助動詞の存立と活動 〃
待遇表現用の特定助動詞 160
一般の助動詞 〃
完了の助動詞 〃
打消の助動詞 162
未来の助動詞 164
可能の助動詞 165
受身の助動詞 〃
使役の助動詞 〃
比況の助動詞 166
願望の助動詞 167
推量の助動詞 〃
述部の表現 168
動詞複合 〃
6[2]　述部とその機能……(待遇表現用特定助動詞) 〃
丁寧の意の表現 168,169
尊敬法助動詞 170,171
謙譲法動詞 〃
述部の表現 〃
待遇表現用特定助動詞 〃
尊敬法助動詞の存立と活動 〃
6[3]　述部とその機能……(敬語法動詞について) 〃
述部の表現 〃
敬語法動詞 171,173,175
待遇敬意表現 171,174
尊敬法動詞 171,172
尊敬表現法→「オ……ル」形式 〃
「オ……ル」尊敬表現法形式 〃
特定尊敬法動詞 〃
謙譲法動詞 173
謙譲表現用特殊動詞 〃
待遇心理 174
丁寧表現法動詞 〃
尊敬表現法の言いかた 175

謙譲・丁寧の言いかた 175
広義の「ていねい」の心意 〃
待遇敬卑表現生活 〃
待遇表現用特定助動詞 〃
述部表現の形成 〃
6[4] 述部とその機能……(動詞連用形尊敬法) 〃
述部表現の生活 〃
敬語法(待遇敬意表現法) 〃
述部表現 176
敬語法 〃
敬意表現法 〃
〔i〕音(五段活用動詞連用形の末尾母音) 〃
待遇表現 〃
動詞連用形尊敬法 「イ」〔i〕音効果の待遇表現法 〃
制止表現 177
文末詞 〃
中止的表現 〃
6[5] 述部とその機能……(述部の存在態) 178
述部 〃
存在態 〃
生活表現のだいじな一手法 〃
6[6] 述部とその機能……(述部の進行態) 〃
進行態 〃
6[7] 述部とその機能……(余説) 179
文表現 〃
述部 179,180
動詞本位 179
形容動詞本位 〃
形容詞本位 180
体言本位 〃
準体助詞 181
体言相当のもの 〃
7 主部とその機能 〃
主部 〃
副文(従属節) 182,184
主部形成の助詞 182
主部助詞 〃
助詞 〃
副文 183
敬意表現 184
主部形成にあずかっている助詞 185
8 修飾部(その一、動作修飾部)のはたらき 186
修飾部 〃
修飾生活の動向 〃
格助詞のささえる動作修飾部 〃
副助詞のささえる動作修飾部 190
係助詞のささえる動作修飾部 192
動作修飾部 連用修飾部 194
接続助詞のささえる動作修飾部 197
助動詞の活用形のささえる動作修飾部 202
形容詞・形容動詞の連用形から成っている動作修飾部 203
特殊形容動詞 〃
体言そのままのものの、動作修飾部 〃
主部から成る動作修飾部 204
副詞から成る動作修飾部 〃
動作修飾部 205
9 修飾部(その二、状態修飾部)のはたらき 206
格助詞のささえで成り立っている状態修飾部 〃
状態修飾部 連体修飾部 〃
用言の連体形のはたらく状態

修飾部 208
特殊形容動詞 209
連体詞→状態修飾部 210
動作修飾部 211
副文の形(従属節) 〃
文形式の動作修飾部 〃
状態修飾部 〃

d) 品詞 211,212
1 諸品詞 211
文の成分の機能 〃
文構造の成分 〃
文表現次元 〃
表現前の次元 〃
語 〃
名詞 212
数詞 〃
代名詞 〃
体言 〃
動詞 〃
形容詞 〃
形容動詞 〃
用言 〃
助詞 〃
格助詞 〃
副助詞 〃
係助詞 〃
接続助詞 〃
助動詞 〃
助辞 〃
連体詞 〃
副詞 〃
接続詞 〃
感動詞 〃
間投詞 212
文末詞 〃
独立詞 〃
2 名詞・数詞・代名詞——体言——について 〃
名詞 〃
助詞融合 213
名詞での接辞 〃
接辞 〃
接尾辞 〃
敬卑に関する接辞 〃
接頭辞 〃
卑態名詞をつくる接尾辞 214
数詞 〃
助数詞 215
代名詞 〃
人代名詞 〃
事物指示代名詞 〃
人代名詞の待遇価 216
接尾辞「ラ」 〃
3 動詞・形容詞・形容動詞——用言——について 217
動詞 〃
活用 〃
二段活用 〃
ナ行変格活用 〃
上一段活用 〃
下一段活用動詞 218
サ変動詞 〃
従属動詞 〃
動詞の連用形 〃
接辞 219
接頭辞 〃
接中辞 〃
形容詞 〃

形容詞連用形でのウ音便 219
接尾辞 〃
形容動詞 220
特殊形容動詞 〃
4 助詞・助動詞——助辞——について 221
助詞 〃
助動詞 222
指定断定助動詞 〃
打消助動詞 〃
尊敬待遇用の助動詞 223
丁寧助動詞 〃
5¹ 連体詞・副詞・接続詞・感動詞について 〃
独立詞の第一類 〃
連体詞 〃
副詞 〃
接続詞 〃
感動詞 〃
5² 間投詞・文末詞について 〃
独立詞の第二類 〃
間投詞 〃
文末詞 〃
間投助詞 〃
感動助詞 〃
対称代名詞の間投詞化 〃
転成文末詞 224
敬卑の待遇表現 〃

Ⅲ 語 彙 225

語彙生活 〃
ことばのくらし 一語一語をつかう生活 〃
語 〃
言語社会 225
語彙 〃
社会語彙 〃
生活語彙 〃
方言社会 〃
方言生活語彙の分野 〃
分野語彙 〃
方言生活語彙の実情と動向 〃
方言生活者 〃
語の改廃・制定 〃
語彙生活の推進 〃
造語 〃
造語法 〃
日常のふつうの語彙生活 〃
生活語彙の日常面あるいは中核部分 〃
語彙相 〃
生活・生活感情・生活志向 〃

a） 生活一般語彙 226
1 助辞語彙 〃
助詞・助動詞の類 〃
2 独立詞語彙 〃
連体詞 〃
副詞 〃
接続詞 〃
感動詞 〃
間投詞 〃
文末詞 〃
2′ 副詞語彙 〃
分量表現に関するもの 〃
程度表現に関するもの 227
情態表現に関するもの 228
時の表現に関するもの 〃

理由の表現に関するもの 229
能力の表現に関するもの 〃
心緒表現に関するもの 〃
七類の副詞語彙状況→副詞特性 230
副詞の造語法 〃
和語系 231
漢語系 〃
3 名詞語彙 〃
名詞の造語法 〃
動詞連用形の名詞化 〃
4 数詞(→助数詞)語彙 〃
助数詞 〃
5 代名詞語彙 〃
指示代名詞語彙 〃
人代名詞 232
自称 〃
称対 〃
他称 233
不定称 〃
人称代名詞語彙 〃
生活語彙 〃
代名詞の造語法 〃
人称代名詞 〃
6 動詞語彙 〃
7 形容詞語彙 234
通常の形容詞 〃
造語法 〃
接中辞 〃
漢語 〃
「シー」の定式 〃
8 形容動詞語彙 235
造語法 〃
漢語 〃
特定形容動詞類 〃

b） **生業語彙** 235
1 農業語彙 〃
農夫 〃
労働 〃
耕作 237
農具 〃
肥料 238
家畜 〃
農作物 〃
農業語彙の造語法 240
名詞の製作 〃
二名詞つなぎ 〃
名詞重複 〃
「名詞＋動詞連用形」 241
「名詞＋形容詞語幹」 〃
「動詞連用形＋動詞連用形」 〃
「動詞連用形＋名詞」 〃
「名詞＋動詞連用形＋名詞」 〃
動詞連用形 〃
動詞の製作 〃
形容詞 〃
形容動詞 〃
生活語彙の拡充 〃
民間自然の自在な造語法 〃
語彙生活の推進 〃
2 漁業語彙 〃
漁業語彙の造語法 242
造語感情 〃
3 副業商業語彙 〃

c） **衣食住語彙** 243
1 住の語彙 〃
造語法 244

2　食の語彙　244
造語法　247
3　衣の語彙　〃
造語法　248

d）　家庭族縁語彙　249
1　家庭語彙　〃
造語法　251
2　族縁語彙　〃

e）　村落社会語彙　252
1　人間語彙　〃
身体　〃
造語法　254
民間漢語　〃
精神　〃
感情　255
造語法　256
人物　〃
造語法　260
村の生活の心的動態、倫理感　〃
名詞の造語　〃
動詞連用形利用　〃
「動詞連用形＋動詞連用形」　〃
「形容詞語幹＋形容詞語幹」　〃
「名詞＋動詞連用形」　〃
動詞連用形　〃
形容詞語幹　〃
「名詞＋名詞」　〃
造語感情　〃
漢語利用　261
形容詞の製作　〃
副詞　〃
性向　〃
造語法　262
形容動詞の製作　〃
形容語　〃
状態修飾――形容　〃
行為　〃
造語法　264
「名詞＋を＋動詞」　〃
「名詞＋に＋動詞」　〃
副詞　〃
語の製作の文表現的発想　〃
悪態　〃
2　交際語彙　265
造語法　〃
動詞連用形利用　〃
3　冠婚葬祭語彙　266
造語法　268
擬態　〃
動詞連用形　〃
「動詞連用形＋名詞」　〃
「名詞＋動詞連用形」　〃
語彙生活　〃
漢語　269
庶民の感覚　〃
4　年中行事語彙　〃
造語法　271
5　公的生活語彙　〃
造語法　〃
民間造語の世界　272

f）　生活環境語彙　〃
1　自然環境語彙　〃
造語法　273
結辞　〃
2　天文気象暦時語彙　274

造語法 275
形容語 〃
3 動植物語彙 〃
造語法 276
複合形式 〃
語彙生活上の欲求 〃
生活語彙のための語詞 〃
造語上の、民衆の意匠 〃
音感への好み 〃

□ 造語法総収 〃
造語法の事実全体→語彙生活を支持する根本の力 〃
生活語彙 277
方言社会の造語心理 〃
造語法 〃
語彙生活推進の動力→方言社会の協同生活意志<社会意志> 〃
社会意志→造語法 〃
造語法の外形的手法 〃
造語にうごく民衆心意 〃
好み 〃
発想 〃
音声相 〃
表現心理 〃

結　語 278

記述の体系　記述体系 〃
昭和日本語の一具体相 〃
日本語の、昭和の一歴史的現実 〃
体系的叙述　動的な把握 〃
昭和日本語の客観的記録 〃
言語理論の開発 〃

日本語による言語学 278

著者紹介

藤原与一

略歴

明治42年1月　愛媛県にうまれる
昭和12年3月　広島文理科大学卒業

主要著書

昭和37年　『方言学』（三省堂）
昭和39年　『方言研究法』（東京堂出版）
昭和44年　『日本語方言文法の世界』（塙書房）
昭和47年　『方言研究の回顧と展望』<方言研究叢書1>（三弥井書店）

昭和日本語の方言　第一巻

定価　一六〇〇円

昭和四十八年四月十日　印刷
昭和四十八年四月十六日　初版発行

著者　藤原与一
発行者　吉田栄治

発行所　株式会社　三弥井書店
東京都港区三田三―二―六
電話東京〇三（四五一）九五四〇
振替口座　東京二一一二五番

印刷　大文社